

高校でも暗殺教室

紅音 葵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カルマは登場時なぜあんなに荒れていたのか…。そこには、小学校時代の「ある事件」があった！

そして中3からの殺せんせーの授業、高校での委員会活動を経て徐々に「本来の自分」を取り戻していく…。

最初は全く同じなので、155話以降を書いていきます。

あと、高校入学まではかなりご都合展開があります。

正直すごいので、苦手な人は回れ右をしてください。

目次

茶番の時間

作者誕生日の時間 | 1

お茶会の時間 | 5

お茶会の時間 2時間目 | 13

1周年の時間 | 20

お茶会の時間 3時間目 | 26

作者帰還の時間 | 31

設定の時間

設定の時間 | 34

設定の時間 2時間目 | 38

設定の時間 3時間目 | 40

人物紹介の時間（ネタバレあり 経過更新） | 44

番外編

コラボの時間ー欠けた月の満ちる頃 | 52

入寮の時間 | 65

部屋会の時間 | 71

本編

第1話 始まりの時間 | 75

第2話 始まりの時間 二時間 | 78

第3話 始まりの時間 三時間目 | 81

第4話 始まりの時間 四時間目 | 84

第5話 バレンタインの時間 | 87

第6話 バレンタインの時間 二時間 | 90

第7話 バレンタインの時間 三時間 | 93

第8話	バレンタインの時間	四時間	97
第9話	バレンタインの時間	五時間	100
第10話	バレンタインの時間	六時間目	104
第11話	バレンタインの時間	放課後	108
第12話	バレンタイン	大人の時間	112
第13話	プライドの時間		115
第14話	思い出の時間		120
第15話	確定の時間		126
第16話	実行の時間		130
第17話	正論の時間		135
第18話	困惑の時間		140
第19話	信頼の時間		145
第20話	開花の時間		150
第21話	登校の時間		155
第22話	次世代の時間		159
第23話	二代目の時間		165
第24話	生徒の時間		168
第25話	私の生徒の時間		172
第26話	私の生徒の時間	二時間目	176
第27話	卒業の時間		182
高1の時間			
第28話	新しい時間		188
第29話	新しい時間	二時間目	194
第30話	驚きの時間		201
第31話	質問の時間		206

第32話	登校日の時間	214
第33話	ケイドロの時間	222
第34話	入学の時間	230
第35話	体育の時間	235
第36話	調理実習の時間	242
第37話	バイトの時間	248
第38話	ビッチの時間	253
第39話	野外活動の時間	258
第40話	野外活動の時間	263
第41話	肝試しの時間	266
第42話	肝試しの時間	271
第43話	女子の時間	276
第44話	男子の時間	286
第45話	初恋の時間	294
第46話	野外活動の時間	301
第47話	入部の時間	310
第48話	入部の時間	315
第49話	入部の時間	322
第50話	入部の時間	327
第51話	親戚の時間	338
第52話	テスト前の時間	346
第53話	テストの時間	351
第54話	犬の時間	355
第55話	球技大会の時間	362
第56話	球技大会の時間	366

茶番の時間 作者誕生日の時間

寮：カルマの部屋にて

カルマ「：ねえ、KJK駄作者さん。まだ俺ら寮に入ってないよ？」

KJK「細かいことは気にしない。気にしない。」

カルマ「：で、何で俺の部屋に集まるの？」

KJK「君の部屋が一番寮の出入り口から近かったからだよ。」

カルマ「別に大部屋でもいいじゃん。入り口の近くのさ。」

KJK「あそこは使用料が取られるので。」

中村「全く知らない知識をたくさんありがとー。」

KJK「わかんないよ。いるかもよ？」

カルマ・中村「いや、いらないでしょ。」

KJK「いい加減にしないと泣くぞ!!？」

カルマ・中村「はいはい。」

KJK「：たまには私の話も聞きますか？」

渚「それで：何で僕らを集めたの？」

KJK「：今日6月22日だよ。」

終「そうだね。」

KJK「：今日が何の日かわかる☒」

一同「さあ？」

KJK「みんなひどい：(泣)」

不破「ふふふ：私はわかるわ。今日が何の日か：。」

KJK「本当に!?!？」

不破「ええ。今日は：」

こち亀40周年記念よ!!?」

一同「あー!!?なるほど!!?」

K J K 「いや違う!!?」

正確には違うくはないけど、私が求めていた答えじゃない!!?」

カルマ「え、うそ。俺はそれで納得したんだけど。」

茅野「で、何の日なの?」

K J K 「私の誕生日だよ!!?」

一同「へー。」

カルマ「で?」

K J K 「だからみんなひどいって!!?」

中村「で、どうして欲しいの?」

K J K 「祝って。」

一同「却下。」

K J K 「何で!?!?」

終「めんどくさい。」

中村「それに友達に祝って貰えばいいじゃん。」

K J K 「祝ってくれるような友達はみんなクラス違うんだよ!!?」
し
かも推薦クラスだから会うことすらない!!?」

カルマ「あーはいはい。推薦もらえなかったバカなのね。」

中村「カワイソウニ、カワイソウニ。」

KJK「どうせね!!?後中村さん棒読み!!?」

カルマ「更新遅れるような駄作者にそんな義理ありませーん。」

渚「GWには卒業させるとか言っておいて、結局終わったの6月入ってからだよね。」

KJK「まだそれ恨んでんの、みんな!!?」

カルマ「後、小1の時学校内で一番怖い先生と謳われた当時の担任に、ちよーとと気に入くわなないところがあつたつてだけでその先生を蹴つたつて本ト?」

KJK「本当だよ!!?10年くらいたつた今でも私の家の伝せ……武勇伝だよ!!?」

中村「あつそれからそれから……中1までクラスの中でも問題児レベルの自己中だったんだつて?」

KJK「今は違うからいいだろ!!?」

終「あと……一時期某無料通信アプリのグループの中で流行つた心理テストの『あなたの才能』みたいなので『女子力』つて出て、男友達全員から『ないだろ、そんなもん。』つて言われたとか……」

KJK「言われたよ!!?自覚はあるんだよ!!?その辺は!!?」

つていうか、本当に誕生日祝つて……」

一同「だから却下。」

KJK「そんなこと言わないでとにかく祝つてよ!!?何でもするから!!?」

中村「じゃあ今後の展開教えて。後、私たちの質問にも答えて。」

KJK「おっし。来い。」

一同（本当に友達いないんだな、こいつ……。）

Q1：なぜ小説を書き始めたの？

ハーメルンの別の小説をみて、「私の空想を書いてみたい」と思ったからだよ。

Q 2 : 今後の展開を少し…

高1は基本平和だね。高2から少し本腰入れて、高3にこの話のコンセプトを書くつもりだよ。

Q 3 : 今の所どれだけ完成してる？

高3は完璧(↑最後から決めるやつ。)で、高1高2ともに二学期まではできてる。今は三学期を考えてるかな…。

Q 4 : フラグ的な何かは入れる？
そりゃまあ。

Q 5 : 原作のやつは散々折ってたのに？

うろう…うるさい!!?

Q 6 : ケータイはどうなった？

奇跡的に没収回避。

多分母親への説得が成功したな〜と。

Q 7 : よかったね〜。

はいはい。

Q 8 : ラスト、これからの更新スピードは？

週一で頑張ります。

ただ、期末まではさすがに勉強しないと今度こそ没収になるんで…

(本当は現実逃避したいけど) 頑張ります。

一同「お誕生日オメデトー。」

K J K 「アリガトー。」

お茶会の時間

【INカルマの部屋】

カルマ「…だからなんで俺の部屋なの？いつも。」

紅音「前にその理由は言ったでしょ？」

カルマ「別に紅音駄作者ん家でもいいじゃん？」

紅音「私の家は母親のおかげで近年稀に見る部屋の汚さなのよ。我慢して。」

柊「まあまあ…で、なんで私たちを集めたの？」

紅音「究極に暇だから。」

一同「じゃあ続き書け！」

紅音「君たち知らないでしょ？学生というものがいかに暇で、いかにすることなくて、いかにダラダラするものなのかを。」

将暉「言ってることが大体一緒だよな？」

カルマ「まあ、紅音バカだから」

紅音「あのね？自覚はあるんですよ？でもさ…」

君たちにそれ言われたらなんか腹立つ。」

カルマ「バカなのが悪い。」

紅音「特にお前だよ！カルマア!!？この天才野郎め！

『天は二物を与えず』っていうけどな！お前は一体何個持ってる？『性格』って要素除いたら全てにおいて完璧じゃねえか！コンチクシヨウ!!？」

柊「褒めてるね。」

将暉「褒めてるな。」

カルマ「ん？ありがと。」

紅音「本当にうるさい…グスン…。」

柊「まあ、高校って大変だしね。」

将暉「まあ頑張れ。」

紅音「将暉は中学受験が最初で最後の受験だもんね。いいよね。気楽で。次の受験はどーせ就職活動でしょ？いや、お家の喫茶店継ぐのか。」

将暉「そういう設定にしたのあんただろ…。」

紅音「どーせね！私の願望ですよ！君たちの設定は!!？」

特に将暉とかは正直最初の設定ではいなかったし！君の設定考えたの君が出てくる一週間前くらいだし！」

将暉「まじかよ…。」

柊「でも『いる』って判断したから作ったんでしょ？」

紅音「いるっていうより…いた方が自然？」

だから正直いなくてもこの話成り立ったりする。」

将暉「おい、こら。」

紅音「ちなみに君がリア充って設定、それは私の願望じゃない。君の必要価値ってそれくらいだし。」

将暉「おい！」

紅音「あー、いや。もう一個あつたつけな。今は言わないけど。」

将暉「言わないのかよ。」

紅音「今はね。そのうちわかるよ。…っていうか高一の途中でわかるよ。」

将暉「あつそつ。」

カルマ「で、結局のところ、なんで俺らを集めたの？」

紅音「たまあにこんなコーナー作ります。近況報告やこの後のストーリー、そして質問回答コーナーです。」

柊「ふーん。」

紅音「そんなわけで、今回は前半は今後のストーリー展開、後半は質問コーナーです！」

将暉「にしては前振り長い。」

カルマ「この時点で1000字弱だよ？」

紅音「やかましいわ！」

柊「で、どうなるの？今の時点で女子部屋の会話が終わったことろだよね？」

紅音「まず、野外活動恒例行事の続きです。男部屋でのやましい会話ですね。」

将暉「お前ら、んなことしてたのかよ…」

カルマ「やましい会話？少なくとも俺はしてないよね？」

将暉「それは『してた』って解釈でいいのかな？」

紅音「とりあえず、それで野外活動1日目は終了です。そして2日目は完璧ネタ回になります。(そして1話で終わります)」

カルマ「まあ…2日目は…ね？」

将暉「ネタ回って…佳奈、何したんだよ…」

柊「なんで私だって前提なの!?!」

紅音「そしてそのあと、とうとう学園イベントスタートです。2.

3話書く予定です。」

カルマ「そんないうほどの学園イベントだっけ？」

紅音「細かいところを気にしたら負けです。」

柊「断じて細かくないと思うなあ…」

紅音「そのあとに1話挟んで6月に移行するつもりです。ちなみに6月はとうとう学生全てから嫌われてるある行事です！」

将暉「ほぼほぼ言ってるし…」

柊「私は別に嫌いでは…」

カルマ「俺も。」

紅音「天才どもは黙れい！どーせコンビニ行く感覚でテストなんて受けてんだろ!!?」

一同「それはない。」

将暉「つうか、今言ったよな？」

紅音「…:きつ…:気のせい…:だよ!きつと!」

一同(言ったな。)

紅音「まあそれ終わったら、ちよつと岡島に…:あとはちよつと割愛。」

柊「岡島がどうしたの?」

カルマ「どーせまた何かするんじゃない?」

将暉「まあ…:だいたいどんな奴かは磯貝から聞いてるし…」

紅音「皆さんが言ってるのは完璧想像含め正解は半分くらいなので忘れてください。」

将暉「そろそろ怒っていいよな?」

紅音「やめて。君怒ったら怖いのが一番知ってるから。」

とりあえず、今完成してるエピソードはこれくらいですね。運が良かったら年末まで普通にもちます。」

カルマ「本トかなあ?」

紅音「本トです。多分。」

さて、次は…質問コーナーです!!?」

一同「あつ、用事思い出した。(ゾロゾロ)」

紅音「待て!君たち!待ちなさい!作者命れ…いや、待って!マジで帰らないで!お願い!帰らないでください!!?」

〜数分後〜

カルマ↓イチゴ煮オレ

終↓チョコ

将暉↓モ〇のハンバーガー

一同「ありがとーございます! (ニコニコ)」

紅音「私ただでさえ金欠なのに…」

将暉「もう一個くれ。」

紅音「ぎげんな、マジで。」

将暉「は? いいじゃん、別に。」

紅音「あんたのが一番お金かかってんだよ!」

カルマ「まあ、それはさて置き、質問なに?」

紅音「…とりあえずカルマはフォローサンキュ。じゃあ、一つ目の質問は…」

佳奈はカルマのこと好kフガア!」(↑殴られた)

柊「それついこの間本編でやっただろうが、コンニアロウ！
マジでふざけんな！いつペン天に召されてこい!!？」

将暉（↑ものすごい腹抱えて笑ってる）

カルマ「え？紅音なんて？佳奈のせいで聞こえなかったんだけど…」

柊「聞かなくていい!!？」

将暉「まっ…腹痛った…プ…いやあ…今…クツ…初めて紅音スゲエって思…待って、マジで…クツ…腹…」

柊「笑うか喋るかどっちかにしろ!!？」

紅音「紅音復活ー!」

柊「…ウツザ」

紅音「待って！今ものすごい殺意がこもってたよね!!？」

柊「…次の質問によったら、このコーナー永久にないから。」

紅音「怖いわ！

じゃあ次の質問は〜？

将暉「って、彼女さんといつくらいから付き合いあるの？」

カルマ「確か物心つく前からじゃなかったっけ？」

柊「そーだね。確か家近いからとかいう理由で。」

紅音「へー、そうなのね。（カキカキ）」

将暉「俺への質問だよな!!？これ!!？」

紅音「ようは幼馴染とお付き合いしてるってことでしょ？いいね〜。」

柊「すごいいい子だよ。優しいし、明るいし、可愛いし、でも芯が通った。将暉じゃなくて私の彼女にほしい…!」↑

カルマ「ぶっちゃけ将暉の彼女にはもったいないよね〜。」

柊「うんうん!」

将暉「キレるぞ、マジで…」

カルマ・柊「ごめんなさい。」

紅音「…やっぱ将暉怖いわ…。」

じゃあ最後の質問です！カルマの初恋のエピソード教えて〜」

カルマ「ごめんね〜。無理だよ。それは。」

紅音「ん？なんで？」

カルマ「そもそもなんで俺が初恋の経験あるって前提なの？ない可能性もあるし、むしろない可能性の方が高いんじゃない？」

将暉「…もうやめといたら？紅音。こうなったらめんどうくさいぞ？」

紅音「でしようね。知ってた。

ではこの辺で…」

柊「いや、ちよい待ち、紅音？」

紅音「ん？どーしたの？」

柊「人にはなんか意味わからん質問してて、なんで自分は無傷で帰れると思ってるの？」

紅音「ん？私に質問したいの？」

いいよ。どんとこい。」

柊「じゃあね〜：紅音、この作品のキャラ（原作含む）で好きなキャラだれ？」

紅音「うーん：E組でいったらカルマが一番好きだけど、もし私がそっちの世界いったら絶対に恋愛対象外だね。」

で、個人的な『現実にといたら好きになるであろうランキング』でトップを争ってるのが磯貝と杉野。二人ともキャラ的に好き。純粹に仲良くなりたいのが渚とE組女子面々。

この小説で梓広げるんだったら将暉も結構好きね。『出てくる』って決めたの将暉が登場する一週間くらい前だけど（二回目）

もちろん佳奈も好きよ？個人的に『頑張っ！』って気持ちもある。将暉と同じくらい好きかな？

でもやっぱ一番この小説のオリキャラで好きなのは、将暉の彼女さん。これから登場予定だけど、何よりいい子なのよ〜みんなの仲間になりたいレベルの可愛さなの！加入させる予定はないけど。（今のところ）

以上！」

一同「なっが!!?」

紅音「本当はもつと語りたいたんだよ?でもこれ以上いったらただの自己満足になりそうで…」

カルマ「あっそっ…」

柊「…つまんな…」

紅音「佳奈サン?何言ってるのかな?」

柊「だって!私たちを散々いじり倒したんだよ!!?」

なんでそんなやつほど無傷なの!!?」

紅音「それは私が兄貴と弟と父親のおかげで、男に幻想を抱いてないからだよ?」

将暉「ちなみに紅音の兄ちゃんと弟何年生?」

紅音「兄ちゃんは大学一年、弟は中一です。」

柊「3歳ずつか…。いいなあ…」

紅音「よくないよ?兄ちゃんはバカだし、弟は生意気だし。」

カルマ「年頃年頃。」

紅音「黙りなさい。」

じゃあ、今度こそ終わりにしますね。

不定期でこんな感じで書いていきます。日曜には書かないと思いますが。」

将暉「んー、じゃあ帰り」ちよつと待ちなさい。将暉。「…なに、紅音。」

紅音「君と佳奈はいつもこのコーナー来てください。オリキャラとしての使命です。」

将暉・柊「はあ!!?」

紅音「今回カルマを出したのは、部屋を借りたからです。」

カルマ「あっ、それだけなんだ。」

紅音「次これするときには将暉の彼女さんもいるかな。もしそうなら将暉の部屋か将暉の店でしますね。」

将暉「自分の部屋でやれよ!」

紅音「無理です。理由はこれの冒頭見てください。」
柗「まあまあ、将暉。」

紅音「よし！じゃあみんな行くよ！これからも『高校でも暗殺教室』をく!??」「えっ!??」「ちよっ…まっ!」

「!」よろしくお願いします!!?」「!」

将暉「先に言えよ!??これ合わせんの大変なんだぞ!??」

お茶会の時間 2時間目

とあるお部屋にて

柊「ふうー…」

カルマ「はあ…いいねえ」

??「…おい」

紅音「おこたはいいねえ。私の家には存在すらないんだよ…」

柊「まじでか」

紅音「マジで」

カルマ「それ、絶対に人生損してるって」

紅音「私もなんとなくそんな気がする」

??「…おい！」

紅音「しつかし…広いねえ！私の部屋の3倍はあるんじゃないやね？」

柊「私もここ来るの小三以来だからなあ…」

カルマ「同じく」

??「聞けよ…」

柊「で、今日はなんで私たちを集めたの？」

紅音「新たな質問が来たって言うのと、佳奈の誕生日だね」

柊「あ、やった」

??「…：俺なんかしたっけ？」

紅音「そんなわけで、こちらのケーキをどーぞー！」

柊「わあ！ありがとう！今初めて紅音のこと尊敬した！」

紅音「一言余計よ？佳奈ちゃん？」

カルマ「でもそれ作ったの、紅音じゃないよね？」

??「…俺だな…」

柊「えー…なあんだ」

紅音『なあんだ』じゃないの。常識的に考えて、私が作れるわけないでしょ。料理能力皆無なんだから」

カルマ「佳奈よりはあるでしょ」

紅音「そりやね」

??「…それはな」

柊「ちよつと？あなた達？」

紅音「まあ、いいじゃんいいじゃん。企画者私だし」

??「……いい加減に反応しろよ……」

紅音「んーじゃあ、定番のあれいく？」

カルマ「最後にしない？どーせ締め決めてないでしょ？」

紅音「……何も言えないですね。はい」

柊「りよーかい！だったらこれはまた後でだそうか」

紅音「そーだね！んーじゃあ……」

将暉「お願いー！」

??(将暉)「いるってわかってんだったら反応しやがれえええ!!!」

紅音「ちよつとお、将暉い。どーしたの？急に大声出して？」

将暉「どうもこうもねえよ!!俺の部屋でお前らがくつろいでんのも驚きなのに、なんで全員が無視してくんの!!俺なんかやった!!?」

柊「まあ……いいじゃんいいじゃん。たまには」

カルマ「そーだよ。減るもんじゃないし」

将暉「減るわ！精神的に！」

紅音「…将暉はうさぎなのかな？」

将暉「地味にわかりにくい例えはやめろ！第一寂しがりじゃねえ!!!あと……カルマあ!!なんでいるんだよ!!次からは出てこない予定だったんじゃないのかよ!!」

カルマ「俺は紅音に呼ばれたからきた」

将暉「だったら……紅音え！なんでカルマ呼んだんだよ!!?」

紅音「私の執筆状態です。」

将暉の彼女さん出す予定だったけど……まだ本編で出てきてないし、だからと言ってゲスト2人じゃ寂しいもん」

将暉「なあにが『寂しいもん』だよ！

それになんでカルマなんだ!?渚でいいじゃんえか!!」

カルマ「まあいいじゃんか。これ多分最後だろーし。」

紅音「わたしもあくまでその予定だね」

柊「…ねえ。将暉のことはほつといて本題いかない？」

紅音「よし。佳奈ナイス」

将暉「…本題って何？」

カルマ「質問回答コーナーでしょ？」

紅音「そーだよ。」

じゃ、まず最初の質問。

『同じ中学の同じクラスのメンバーの入学を許したんだ!?理事長!』

柊「あー…それ私も思ってた。」

紅音「この質問に関しては、理事長にお手紙を書きました。ちなみに返信はこちらに」

柊「お!読んで!読んで!」

紅音「んー、じゃあ読みまーす。」

『お手紙ありがとう。』

ん?あの27人をうちの学校に入れた理由?

そんなの決まっているよ。

面白そうだからだよ!』

一同「おいおいおいおいおい!!」

紅音「続きはあるから待ちなさい、君たち。」

『つて言うのは冗談で、みんなフツーに頭よかったからね。』

少なくともA組（1番下のクラス）に入れるレベルにはいたよ。もちろん寺坂君もね。』

将暉「本人いないところで、散々なデイスられ様…」

柊「つていうか…あの人言ったらシャレにならないって…」

紅音「『で、いざみんなが入学したら防衛省の人が来てね。』

正直びっくりしたけど、面白そうだったからみんなをC組にしたんだよね〜』

だつてさ」

柊「…結局面白そうだからだよね?」

紅音「細かいところを気にしたら負けです」

将暉「断じて細かいはないよな…」

紅音「将暉、とりあえず黙りなさい。

続いての質問は『肝試しの時に、懐中電灯の電池抜いたのってわざとですか?』」

柊「あれはガチで怖かった……」

将暉「……何があつたんだ?」

紅音「『肝試しの時間』を読んでください。

それはさておき、この質問は1―Bの委員長、海野に聞きました」

柊「へ?海野に?」

将暉「へえ。なんで?」

紅音「懐中電灯の管理をしていたのが海野だからです。

それはさておき、海野が懐中電灯の電池抜いたのは、電池がもつた
いないからみたいです」

一同「ん?」

紅音「なんか懐中電灯に限らずに、電池つて入れてたら使つてなく
ても勝手に消耗されるみたいね。

ちなみに海野つて、備考ドケチだから……」

柊「はいはいはいはい。つまりは『電池もつたいないから、使う時
まで電池抜いとこう』つてこと?」

紅音「ま、そーだね」

柊「なにそれ!?私それだけであんな思いついたの!!?」

カルマ「気持ちはわかるから……落ち着こう。佳奈」

紅音「最後の質問は……つて、私宛だ」

将暉「ん?なんて?」

紅音「『この小説を書くこうと思つた理由、高校でもつづかせようと
思つた理由は?』……だつて」

柊「なんで他人事……」

カルマ「で、なんでなの?」

紅音「まともに話したら余裕で字数制限超えるので、超要約すると、
連載終わる前の私の希望と、私自身がカルマのこと好きだからです。
もちろんキャラ的に」

カルマ「へえ、そーなんだ」

将暉「いや、要約しすぎな！もっとわかりやすく掘り下げて!!」

紅音「えー…元々言う気だったのに、そんなこと言われたら喋りたくなるなあ…」

将暉「お前は『宿題する気だったのに、お母さんが注意するからやる気がなくなつた』って言ってる小学生か!!」

カルマ「ちよつと将暉、そういうのいいから…」

柊「ごめんねえ。うちの将暉が!」

紅音「うん。いいよ」

将暉「扱いの差!」

紅音「あれっ?気づいてないの?

今回将暉はいじられポジだよ?」

将暉「マジでウゼエ…」

柊「…ちよつと茶番続きそうだし…」

将暉の家の台所借りていい?」

柊以外「茶番なら今終わったから、やめなさい」

柊「いや、なんでよ!」

紅音「まあ要は、元々カルマのことは好きだったから、カルマが目立つ話を想像(つてか妄想)してたりしてたんですよね。

その時の話に登場したのが佳奈。

当時私は中二だったと思う。

当初は他の二次小説と同じく、オリキャラとして佳奈を登場させて、3―Eで1年過ぎさせる予定だったので、カルマとは全く赤の他人でした」

柊「えっ?そうなの?」

紅音「そうそう。」

で、原作が秋に突入してからは佳奈が出てくる話はほとんど出てなかつたりします。今後出てくる予定のキャラの話が主だった記憶が…」

将暉「……あいつかな?」

柊「あれだね……うん」

カルマ「……うん…俺も察した」

紅音「今から言っておくと、その人物は高2で登場予定です。ご覧の通りみんなの知り合いですね。

ちなみに紅音のいところがモデルです」

カルマ「あっそっ」

紅音「で、当時 p i x i v の夢小説を愛読していた私は、中3になってからある作品に出会います。それがこの作品を書くきっかけになった作品ですね」

将暉「へー。どんな話？」

紅音「言ったら思つきしネタバレになるから絶対言わない。

でもその時点でも書くつもりはなかった。頭の中に止めようとしたわけ。

ケータイ持ってなかったし、何より p i x i v 向きじゃないって思ってたしね」

カルマ「あっ。紅音ってケータイ高校から？」

紅音「そーだよ。

で、私がハーメルンと出会ったのが中3の秋。

ちょうど文化祭の1週間前くらい」

柊「…鮮明に覚えてんのね…」

紅音「出会った作品が作品だったからね。

何しろ『ハーメルンの暗殺教室二次小説といえどこれ！』って作品だったし。

それを読んだ瞬間に決めました。

『ケータイゲットしたら、絶対にここで書きたい！』みたいに」

将暉「なるほどなく。要は『元々妄想してた話を、先輩ハーメルン作者さんに習って書きたかったから？』ってところ？」

紅音「そうそう。

まあ、そんなことから話のオチ…っていうか向かってる所は変更する予定は全くありません。

『カルマの過去』って観点から見たら中二の時から変化0だし」

柊「あっ、そう」

カルマ「ん？ってことは、佳奈がまだただのクラスメイトの時から

俺の過去は決定してた…ってこと？」

紅音「そうそう。」

…なんか後半制作秘話みたいになってしまってますみません…。

以上で質問は終わりです」

将暉「…誰に言ってるの？」

紅音「質問して下さった方」

柊「意外と律儀」

紅音「うるさいな。」

じゃあ将暉。さっきのケーキ出してきて〜」

将暉「あつたなあ。そんなの。」

はい、ドーズ」

柊「ありがとう」

紅音「じゃあみんな！サンツハイ！」

一同「ハッピーバースデートゥーユー。ハッピーバースデートゥー

ユー。ハッピーバースデーディア佳奈〜。ハッピーバースデートゥー

ユー」

紅音「おめでと〜」

柊「ありがとう〜！」

紅音「んーじゃあみんな行くよ〜！」

将暉「あーはい。あれね」

紅音「これからも『高校でも暗殺教室』をお〜」

カルマ「よろしく〜」

柊「よろしくね〜」

将暉「よろしく〜」

紅音「よろしくお願いしま〜す！」

1周年の時間

将暉の部屋にて

柘「Happy Birthday!」

将暉「誰に言つてんだそれ」

柘「無論この小説だよ？」

なんと今日3月26日はこの小説の誕生日なのだ!」

将暉「メタいなおい」

柘「そんな重要な日に作者はいない!理由は簡単!最近ゲーセン行くのにハマってるからだ!」

将暉「呼んだら来るんじゃない?……めんどくせえしウゼエから呼ばないけど」

紅音「呼ばれて飛び出てジャツジャジャーン♪」

将暉「ウゼエ」

柘「そして呼んでない」

紅音「2人とも冷た!!」

柘「今日も自宅近くのゲーセン行っていいよ」

紅音「近くないわ!いつも電車使つて30分くらいかかるトコ行つてるし!!何なら学校行く方が近いわ!」

将暉「おつ」

紅音「るっせえ!!!」

柘「で、今日は何すんの?」

紅音「君たちに質問いくつかと今後の展開について」

柘「ふーん…」

紅音「そして今日からこちらのコーナーに来る子が!」

将暉「優かな?」

柘「ソラだね」

紅音「つてちよつとおおおおお!?!びっくりさせようとしたのにい!?!」

将暉「んなもん予想出来んだろ」

紅音「はあ:じゃあ今から出てきて頂きましょう:ソラー」

ソラ「はい」

柊「天使ちゃん。ここにいらつしやーい、チョコあげる」

ソラ「やった〜」

柊「やーもうほんとに可愛い〜。将暉この子貰っていい?」(。――▽
――▽(〇▽)*) ナデナデ

将暉「いいわけねえだろ。返せって」

柊「やだ将暉君コワイ。シットだ〜」

将暉「佳奈お前なあ…」

紅音「いつこのコント終わります?おいてけぼりで悲しいんです
が」

柊「紅音は黙ってて」

紅音「なんでよ!?!」

将暉「ほんとに紅音は一旦黙って」

紅音「将暉に近々嫌がらせの小説書こう。今決めた」

将暉「なんで俺だけ!?!」

紅音「男だから」

将暉「理不尽!」

ソラ「将暉に嫌がさせて…ねえまさか…」

柊「まさか…ね…?」

紅音「将暉には二通りの嫌がらせがあるんだ。ストックしてんの
で。一つは将暉が嫌いなもので攻める。もう一つは文字通り放送事
故を作る。どっちがいい?」

将暉「どっちも嫌だわ!」

紅音「OK、嫌いなもので攻めるね〜」

将暉「良くねえ!!」

紅音「じゃあ代わりに夏休み位にかっこいいトコ見せる方向で。こ
れで良いよね?」

将暉「有無を言わさぬ物言い!」

柊「将暉は一旦落ち着いて。私も当事者じゃ無ければ全然…」

紅音「放送事故の方は割と当事者」

柊「…はい?」

紅音「ソラちゃんは個人的に好きだから目立たせたいけど…しばらく時間かかるかも…」

ソラ「ん？大丈夫だよ」

柊「ソラはいいなあ…作者にいられないから…」

紅音「ソラにいじる要素ゼロでしょ」

将暉「確かに」

柊「うっ…耳が…」

紅音「ちなみにソラのイメージとしては、倉橋さんと片岡さんのイトコ掛け合わせたような子ね。顔とか髪の毛の長さはイメージ雪村先生」

柊「めちやくちやいい子。これは私が証言する」

紅音「さて、じゃあそろそろみんなに質問を「あつ用事ができた」つておうい!!みんな待って!ソラも空気読んで帰らないで!ちよつ君たち作者命れ…いやほんとに帰って来てえええ…」

——10分後——

柊↓チョコ

将暉↓Mのマークのハンバーガー

ソラ↓スコーン

一同「ありがとーごぎいまーす」ニコニコ

紅音「ほんとデジャブだわこの展開…」

将暉「紅音…前より安上がりじゃね？」

紅音「悪かったな金欠なんだよ!!」

柊「ゲーセンの行き過ぎ」

紅音「事実だけど!今年はお年玉1人からしか貰えなかったの!」

将暉「そんなの知らん。ゲーセン行くの我慢すればって話」

紅音「悪かったな!じゃあ質問コーナー!行くよ!!」

柊「わぁ強引」

紅音「黙れい!まず将暉い、お前らどこまで行ってr」それ以上言ったらお前のバラ色の高校生活ぶつ潰す…:すんません。大して素晴らしい高校生活では無いけどやめて」

将暉「新しいクラスで『こいつラブライバーでゲーオタだ』って言いまくるぞ」

紅音「そういう物理的なぶっ潰し方言うのまじでやめて!?!それからゲーオタ宣言できるほどすごくくない!」

柊「無謀に太鼓で『夏祭り』の鬼やって、物の見事に敗れたしね」

紅音「待って、なんで知ってるの!?!」

将暉「その後の復活のやつも失敗したんだっけ?」

紅音「やめてまじで…」

ソラ「まあ…それくらいにして…次行く?」

紅音「ソラちゃんまじで天使…」

将暉「…とりあえずその質問は死んでも答えねえから。じゃ次は?」

紅音「はい。じゃあ佳奈、スリーサイズ教えて「潰すよ?」何を!!?」

柊「なんでよりによってその質問?」

紅音「べ…別にいいじゃない?…ほらあ…同じ女として…?」

柊「悪意持ってやってるでしょ!!それか人の地雷踏むの得意か!?!」

紅音「あ、そうかも shouldn't」

ソラ「そこあつさり認めるんだ…」

紅音「あー!将暉いるからか!なるh「違う!」ってそうなの!!?」

柊「その話題次出したら、さっきの将暉の案採用で」

紅音「私がゲーオタって本物のゲーオタさんに失礼かと…」

将暉「紅音は分かっているとと思うけど…その流れで優に変な質問したりしないよな?」

紅音「えーと…いや…うん…一応あつたけど将暉に殺られる気しかないから…」

次のコーナーいきまーす!!!」

将暉・柊「よろし」

ソラ「次のコーナーって?」

紅音「今後の流れです。夏休みくらいまでの。

次回やるのは将暉への嫌がらせ回ですね」

将暉「その案結局採用かよ!!!」

紅音「ふはははは！我慢しなさい！」

将暉「ぎげんな！」

紅音「だからさつき言ったじゃない？夏休み位にカッコいいとこ見せてあげるから」

将暉「全力で意味わかんねえ！」

紅音「で、それ終わったら梅雨明けまーす。ここでイベント入れるんで」

柊「ほうほう」

紅音「イベント終わったらテストかな？もしかしたらもう1個イベントか日常回入れるけど」

ソラ「それで夏休み？」

紅音「そうそう。夏休みもイベント企画中です！」

将暉「将暉のカッコいいとこは夏休みの最後の方かな？」

紅音「ここまで言って大丈夫なのか…？」

将暉「変更あるかもだから。元々将暉の嫌がらせ回は岡島がやらかす回だったし」

将暉「そっちでいいだろ！」

紅音「そっちで書いたら書いてる。それに考えてみたら全力で必要ない話だったから。将暉の嫌がらせ回はそっから派生した話」

将暉「なんでそこまで俺に嫌がらせしたいんだよ!？」

紅音「え、キヤラ」

柊「キヤラだね」

将暉「よしお前ら後で話し合おう」

柊「やだコワイ、ソラ助けて」

将暉「それで俺への嫌がらせ回の必要性は!？」

紅音「今のところない」

将暉「その話作る意味!!」

紅音「やー…そのうち出来るかなあ…と。佳奈が料理下手って設定も今のところ要らないし？」

将暉「いやだからって「ちよつと待つて2人とも」…何？佳奈」
柗「私は料理下手じゃない」

将暉「そこ今割とどうでもいい！」

柗「どうしても良くない！っていうかなんで将暉の基準に合わせんの！？」

将暉「佳奈それブーメラン!!!」

紅音「…ソラ、今のうちに終わらせよっか」

ソラ「う…うん」

紅音「じゃあ…」

この1年間、こんな作品を読んで下さりありがとうございます。ごさいました。次の1年もこんな調子でやって行きます。

これからも『高校でも暗殺教室』を…」

ソラ「よろしくお願いします！」

お茶会の時間 3時間目

紅音「あぢい……」

柗「暑い……」

ソラ「すんごいジメジメする……」

将暉「……うん。気持ちは分かるが我慢しろ」

紅音「嫌だあああああああ！なんでせつかく室内にいんのに暑さ我慢しなあかんわけ!!？」

柗「お、関西弁」

将暉「だって……クーラーつけたら乾燥するし……」

紅音「女子か！私より女子か！

第1そんな乾燥気になるんなら、クーラーつけつつ加湿器かけろ

！」(暑がりN.O. 1)

将暉「……なんだその状況……」

柗「そうだそうだ！クーラーつける！家に来た客には紳士に振舞え

！」(暑がりN.O. 2)

将暉「心の底からうぜえ！」

紅音「そうだ！自分でつけよう！リモコンは……と」

将暉「……おい。人の部屋あさんな」

柗「ついでにそういう本も探そう」

将暉「ねえよ!!!用ないなら帰れ！」

紅音「リモコン発見！ポチツとな」

将暉「ほんとに何しに来たんだよお前ら……」

柗「ん？ソラが『今日将暉の部屋行く』って行ってたから？それで

将暉のバースデーって思い出した」

紅音「そんな訳で、将暉タンジヨウビオメデトー。ケーキちよーだ
い」

将暉「なんで俺の誕生ケーキ自分で用意しなきゃダメなんだよ！」

紅音「盛大かつわざとボケただけじゃんか。気にしない気にしない
♪」

将暉「紅音のボケってわざとっぽく聞こえねんだよ……」

ソラ「あ、あとケーキならここにあるけどどーする？食べる？」
将暉「あ、ありがとう」

柊「……夫婦みたい」

紅音「ヒューヒュー」

将暉「お前ら帰れよ！」

紅音「失礼だなあ。そのケーキ私たちが3人＋カルマ含む有志の割り勘なんだけど……」

将暉「(ヤベエ無闇に帰れって言えなくなった)」

紅音「じゃあ佳奈の時と同様、誕生日定番のあれは最後で！
とりあえずケーキ食べよう！」

《5分後》

紅音「じゃあ恒例の質問タイム「さーて店番するかあ!!」待って！
無視やめて！今回マジなやつだから！」

柊「ケーキ食べたことだし、私も帰ろー。ソラ一緒に行きこ！」

ソラ「あー……えーと……うん」

紅音「ソラああ！空気読んで帰ろうとしないで！ほんとにマジな質問だから！変なこと聞かないから!!」

将暉「念書書け」

紅音「書くよ！今回は！」

将暉「よし。じゃあ何？」

紅音「まあ具体的には質問って言うよりも、この小説についての豆知識的なものんだけど……『カルマと磯貝以外に、バイトしてる人いるの?』」

柊「あ、私一応してる」

ソラ「へえ初耳。何してるの?」

将暉「まさか……飲食店じゃねえよな……?」

紅音「怖いこと言うなよ……」

柊「なにが怖いのかは分かんないけど……コンビニバイトしてるよ。あかりも一緒」

ソラ「あ、コンビニか……。よかった(小声)」

将暉「優、忘れるな。コンビニにはレジ販売の食いもん作る作業あ

る」

柘「あー、あのコンビニのレジに売ってるあれ？なんか私がやろうとしたらあかりがやってくれるの。優しいよね〜」

一同（あかりちゃん（茅野）ナイス!!!）

ソラ「他は？バイトしてる人いるの？」

紅音「いちおー狭間さん、不破さん、前原はしてるみたいだね。

前者2人は本屋、前原は飲食店」

将暉「てことは…今のところ7人？」

紅音「将暉入れたら8人だね。まあまだ1年の夏前だから増えたり減ったりあるかもだけど」

将暉「……俺のはバイトじゃねえけどな」

柘「バイトでしょ」

紅音「将暉の学校バイト禁止だからねえ。ま、バイトだけど。

じゃあ次の質問！『オリキャラの皆さん！兄弟姉妹いますか？』

ソラ「いない」（キツパリ）

柘「いない」（キツパリ）

将暉「いない」（キツパリ）

紅音「将暉嘘つけやああああ！姉ちゃんいるだろ！」

将暉「え？……いないって多分」

ソラ「思い出したくもないのは分かるから……現実見ようね？」

柘「まあ…私も正直好きでは……だけど」

紅音「私も好きではないけど……出したいなあ……」

将暉「それ需要は？」

紅音「全くない」

将暉「じゃあやめろ」

紅音「あくまで『出したい』だから……出すとしても番外編になるんじゃない？」

将暉「心の底から2度と家に帰って来て欲しくないからな」

紅音「前向きに検討させて頂きます。

じゃあ最後は…『将暉の家の喫茶店って週休0日？ブラック？』

将暉「木曜日曜の週休2日だよ……って綺麗に話すり替えたな!!!」

紅音「ん？なんの話？（ドヤア）」

将暉「ドヤ顔しながら言うセリフではないのは確かだな」

柊「ていうかふと思ったんだけど……将暉はちゃんと部活してんの？」

将暉「というど？」

柊「将暉の店出てくる回、いつも将暉出てきてるからさ。ウチと違って学校も近くはないし……」

将暉「してるよ……一応……」（ボソツ）

紅音「一応つつたなあんだ」

柊「しかも小声で」

紅音「まあ将暉の店だし、出てこなかったら落ち着かない上に将暉の出番が少なくなるからね。バイト……もとい店番してない日もあるっちゃあるよ？」

将暉「今バイト言いかけたろ」

紅音「じゃあ質問終わったし、誕生日恒例のあれしよっか」

柊「いつもやってる『今後の予定』は？」

紅音「ぶつちやけ今年入って進歩してないから書きようがない。前回と一緒にする」

将暉「話進めようなあ？紅音」

紅音「いやもうほんとに申し訳気持ちでいっぱいです。マジでガチで」

ソラ「次はいつ更新？」

紅音「七月中になります……多分」

将暉「多分って」

紅音「でも今回の話書けたら書ける気がする！」

柊「その言葉に嘘はない？」

紅音「あ、待って怖い」

ソラ「……誕生日定番のあれは？」

紅音「ソラ、ナイスううう！」

柊「じゃあみんなくせーの」

一同「二ハッピーバースデートウユー♪ハッピーバースデー」

トウユーユー♪ハッピーバースデーア将暉♪ハッピーバース
デートウユー♪」

紅音「おめでと〜」

将暉「ありがとう〜」

紅音「じゃあ今回はこれで……こんな話が全然進まない作者ですが
見捨てず見守っていて頂ければ幸いです。

では、これからも高校でも暗殺教室を」

一同「」「よろしくお願いします！」「」

作者帰還の時間

将暉「……なんかすげえ久しぶりな気がするな」

柊「奇遇だね。私も思った」

ソラ「いつぶりだっけ？」

将暉「一年半くらい？」

紅音「更新は1年6ヶ月10日ぶりですね」

将暉「あ、作者」

柊「生きてたんだ」

紅音「生きてるよ!? 佳奈ちよつと失礼じゃない!？」

柊「今まで更新してなかったんだもん。何してたのよ今まで」

紅音「受験」

将暉「……おつかれ」

紅音「お前はしなくていいから言えんだよコノヤロウ!!」

ソラ「まあまあ……」

将暉「……で? 何しにきたんだ作者は」

紅音「今後の更新及び展開について」

柊「質問コーナーは?」

紅音「ずっと更新してなかったのにあるわけないでしょ」

柊「確かに」

紅音「……そろそろ怒りたい……」

ソラ「作者さん落ち着いて……」

紅音「私が理性保ってるの100%ソラのおかげだからな。分かっているとは思うけど」

将暉「俺なんにも言っていないけどな」

紅音「将暉はキャラで巻き込んで。異論は認めない」

将暉「なんでだよ!？」

紅音「え? キャラ」

柊「キャラでしょ。作者さんも言ってたじゃん」

将暉「相も変わらずひでえな!!」

ソラ「とりあえず…作者さんも多分話あるからそれ聞かない?」

紅音「ありがとうソラ」

将暉「そこだよ。そのために来て俺らを呼んだんだろ?」

紅音「そうだね」

柊「出来るだけ簡潔に教えて」

紅音「んじやあはつきり言います。この1年半くらいで設定割と変わったので高校入ってからの話少し改変してます」

ソラ「……つまり?」

紅音「もし本当にこの話楽しみたい方がいれば高校入ってからの話読み返した方がいいかもです……」

柊「なるほどねえ…例えば?」

紅音「そうだねえ、将暉」

将暉「なんだよ?」

紅音「前に『将暉のお姉ちゃん本編で出す予定ない』的なこと言っただよ?」

将暉「言ってたな」

紅音「出すことになった」

将暉「はあ!!!?なんでだよ!!!?」

紅音「マジな話で彼女必要になったの。正直な話自分でもビックリしてる」

将暉「出さないようには出来ねえのかよ!?!」

紅音「出来るっちゃ出来るけど…色々改変した結果彼女にするのが一番いいなって」

将暉「うわ…ちよ…マジかあ……」

紅音「いつ登場かはまだ未定だけど、多分1年のうちには出てくると思うよ」

将暉「もはや『マジか』以外の言葉出てこないからもういいわ」

紅音「あと高2の初めに出すって言ってたオリキャラは1年の夏休み明けに正式に出すことになった。これは単純にそっちの方がいいからだけど…」

柊「そうか…そんなに早くなったのね」

紅音「なったよ」

ソラ「他に変更は？」

紅音「思いつく限りはないかな」

将暉「本当だろうな」

紅音「ほんとだよ。強いて言うならオリキャラの数がえぐい事になってる」

柊「例えば？」

紅音「ここで全部書くとか鬼かよ」

将暉「そんなにいるのかよ……」

紅音「まあ元々少なくともはなかったし……その所は今後の楽しみにしていただければなあ……って感じかな」

柊「なるほどね、私も楽しみにしてるよ」

紅音「ありがとう。ちなみにこれを伝えたかったからこの話書きました。そんな訳で今回はこれで終わりだね」

ソラ「あれっ？もう？」

紅音「うん。そんなわけでいつものやりまーす」

将暉「はいはい」

紅音「これからも『高校でも暗殺教室』をお……」

紅音「よろしくお願いします！」

ソラ「よろしくお願いします！」

将暉「よろしくお願いします！」

柊「よろしくお願いします！」

設定の時間

この作品の設定について書きます！
まず、梅宮高校についてです。

本編でも書きますが（書きましたが？）この高校のクラス分けは基本入試の順位に関わります。

良かった者からC組、B組、A組です。

バイトOKで、全寮制です。

そして寮の部屋番号はクラス別です。

また特待生の特権として、学費の免除・学食での1000円定食の購入があります。

部活は全員入部が義務です。

ある部活は…

【運動部】（○がないのは男女別）

野球部（基本男子のみ）

サッカー部

陸上競技部（男女合同）

バスケットボール部

バレーボール部

卓球部

テニス部

柔道部（基本男子のみ）

水泳部

新体操部（基本女子のみ）

体操部（基本女子のみ）

ダンス部（基本女子のみ）

【文化部】（全て男女合同）

吹奏楽部

美術部

化学部
コンピュータ部
E S S
放送部
写真部
演劇部
合唱部
弦楽部
軽音楽部
文芸部
華道部
茶道部
料理部
電子工作部

【く研究部・く委員会】（全て男女合同）

マンガ研究部
映画研究部
鉄道研究部
新聞委員会
生物委員会

みたいな感じですね。

細かいところは本編で書きます。

そして次に、高校入学時点でのE組のスキヤンダル状況です。

この作品でくつつける予定のカップルは

カルマー奥田

磯貝片岡

渚茅野

杉野神崎

千葉速水

前原岡野

です。

書いていくうちに必要があれば他にも書いていきますが、とりあえず今はこの6組についてです。

カルマー奥田は後で書きます。この話の中で一番力を入れたので。

【磯貝―片岡】

両方とも相手のことを意識しています。

そして両方が自分の気持ちを理解しています。

しかし、お互いがお互いとても謙虚なので、

「片岡には俺よりいい奴が…。」

「私なんかより、磯貝君にはもっとうい子か…。」

みたいな感じですね。

……早よ付き合え。

【渚―茅野】

茅野の渚への気持ちはご覧の通りです。

そしてまた、渚も茅野のことが好きです。

でも渚って原作でもこの作品でも書きましたが、自己評価低いんですよね。付き合うのはもうちょい先になるかな…。

【杉野―神崎】

杉野の神崎さんへの気持ちはご覧の通りです。

一方神崎さんの方と言うと、「友達として」杉野のことが好きです。

杉野ってヘタレだからなく。(↑イメージ)よっぽどの事がない限り告白とか絶対しない(つていうかできない)気がする…。でもこの二人のエピソードは実はもう完成しているのです、出来はします。(でもこのエピソード、結構後半なんですよね…。)

【千葉―速水】

双方共に相手のことを意識しています。

「名簿の時間」と同じく、二人きりで2・3回遊びにも行っています。でもまあ会話が続かない!!?

今はこの二人のエピソードを考え中です。

【前原―岡野】

岡野さんの前原への気持ちご覧の通りです。ただ原作の違い、完全に無自覚です。

前原は…どうなんでしょね。非常にビミョーなんですよ。個人的にはカルマー奥田の次の本命です。

この二人のエピソードは早い段階に出てきます。

そして多分一番最初にくつつくと思います。

フラグは高1の五月からの予定です!!?

【カルマー奥田】

「名簿の時間」に書いていた「お互いに最も話しやすい異性」…。全くもってその通りです!!?

ですがはつきり言います。

「現時点で」それ以上の感情はありません。両方。

一時、「カルマの片思い」って設定も考えはしました。

でもそしたらびっくりするほど話が繋がらなくなつて…。

ただここは私自身かなり力を入れる予定です。

もうエピソードも完成していますし。

でも…この作品の中でしっかりと付き合うようになるかはまだ未定です。多分番外編として書くことになるかな…。

以上です。現時点でのことなので、また次が出るかもしれないですが…。

設定の時間 2時間目

今回は梅宮高校の決まり（みたいなの）を書きます!!？

今の所こんな感じです。（付け足すかも…。可能な限りしなくてもいいように頑張りますが!!？）

《寮での生活編》

1：寮の部屋は学年及びクラスで分けられるものとする。

2：門限を19：00とし、それ以降の外出は受付で正式な届け出が必要である。ただし、バイトを行っている生徒は20：30までは認めるものとする。

3：家庭の事情などの例外を除き、23：00以降の外出の届け出は受理されない。

4：寮内での食堂は、平日は5：30～8：00及び18：00～22：00、土日祝は5：00～22：00まで開いている。この間いつ寮内で食事を取ってもいい。

5：入浴時間については、各学年各クラスで決められた時間に入る。なお、原則20分である。

6：必要時に回される回覧板は1―A～3―Cまで出席番号順に回されるものとする。

7：回覧板は教職員及び生徒会のメンバーが管理するものとし、その他の生徒が使用する際には正式な届け出が必要である。

8：男子生徒は女子寮に、女子生徒は男子寮に立ち入ることを固く禁じる。

9：同性の場合の部屋の行き来は特に規制しない。

10：これ以外にも、他の生徒の風紀を乱さないように自ら気を配る。

《学校生活編》

1：制服は、学校指定のものを着るものとする。なお、普段は制服の組み合わせ及び多少の着崩しは生徒の判断に任せる。

2：入学式や卒業式などの式典においての制服は、冬は指定のブレザーとズボンまたはスカート、夏は指定のシャツとズボンまたはス

カートを着用する。

3：部活は基本全員入部が義務である。

4：委員会及び研究部に入部または参加する生徒は、他の運動部または文化部と兼部を行うこと。

5：男女交際は咎めないが、不純異性交際は固く禁じる。

6：学校内の食堂は昼休みのみ開いている。

7：生徒会指定の委員会は、風紀委員・美化委員・保健委員・体育委員・文化委員・図書委員の6つであり、委員会及び副委員長はそれらをまとめる役割を持つ。

《委員会編》

1：風紀委員は学校内の風紀を正すとともに、委員長及び副委員長の補佐に努める。

2：美化委員は学校内の美化を徹底すること。

3：保健委員はクラス内での怪我人や体調が優れない者への配慮を行い、球技大会及び体育祭などの行事では救護に回る。

4：体育委員は体育の授業において他の生徒の先頭に立ち、球技大会及び体育祭では全員をまとめる。

5：文化委員は11月の初めに行われる創立記念祭において、クラスはもちろん学校全体で結束し、まとめられるように努める。

6：図書委員は週一度の図書室当番を行い、月一度の街の図書館での手伝いに貢献すること。

7：なお、委員長及び副委員長を除く委員は任期を原則1年とし、委員長と副委員長は任期を原則3年とする。

設定の時間 3時間目

今更ですが：

1—Cの出席番号です！

- 1：赤羽 業（あかばね カルマ）
- 2：磯貝 悠馬（いそがい ゆうま）
- 3：岡島 大河（おかじま たいが）
- 4：岡野 ひなた（おかの ひなた）
- 5：奥田 愛美（おくだ まなみ）
- 6：白 律（おのず りつ）
- 7：片岡 メグ（かたおか メグ）
- 8：神崎 有希子（かんぎき ゆきこ）
- 9：木村 正義（きむら ジャスティス）
- 10：倉橋 陽菜乃（くらはし ひなの）
- 11：潮田 渚（しおた なぎさ）
- 12：菅谷 創介（すがや そうすけ）
- 13：杉野 友人（すぎの ともひと）
- 14：竹林 孝太郎（たけばやし こうたろう）
- 15：寺坂 竜馬（てらさか りょうま）
- 16：千葉 龍之介（ちば りゅうのすけ）
- 17：中村 莉桜（なかむら りお）
- 18：狭間 綺羅々（はざま きらら）
- 19：速水 凜香（はやみ りんか）
- 20：原 寿美鈴（はら すみれ）
- 21：柊 佳奈（ひいらぎ かな）
- 22：不破 優月（ふわ ゆづき）
- 23：堀部 糸成（ほりべ イトナ）
- 24：前原 陽斗（まえはら ひろと）
- 25：三村 航輝（みむら こうき）
- 26：村松 拓哉（むらまつ たくや）
- 27：矢田 桃花（やだ とうか）

28：雪村 あかり（ゆきむら あかり）

29：吉田 大成（よしだ たいせい）

次に所属している部活です！

カルマ↓サツカー部

（入部理由↓本編に掲載）

磯貝↓テニス部

（入部理由↓中学の時に入部していたため）

岡島↓写真部

（入部理由↓中学の時に入部していたため）

岡野↓体操部

（入部理由↓体を動かすことが好きだから）

奥田↓化学部

（入部理由↓理科、特に化学が好きだから）

律↓コンピュータ部（名前だけ）

（入部理由↓AIだから）

片岡↓水泳部

（入部理由↓中学の時に入部していたため）

神崎↓華道部

（入部理由↓中学の時に入部していたため）

木村↓陸上競技部

（入部理由↓走ることが好きだから）

倉橋↓美術部&生物委員会

（入部理由↓生き物みんな好きだから。美術部は部活見学で1番楽し

そうだったから）

渚↓ESS

（入部理由↓英語が得意だから）

菅谷↓美術部

（入部理由↓絵を描くことが好きだから）

杉野↓野球部

（入部理由↓野球が好きだから）

竹林↓コンピュータ部

(入部理由↓中学の時に入部していたのと、律がいるから)

千葉↓軽音楽部

(入部理由↓中学の時入部していたため)

寺坂↓柔道部

(入部理由↓「体格がいい」という理由で先輩らに拉致され、先輩方に持ち上げられて入部した口)

中村↓ESS

(入部理由↓英語が好きだから)

狭間↓文芸部

(入部理由↓中学の時に入部していたのと、単純に本を読むのが好きだから)

速水↓ダンス部

(入部理由↓ダンス経験があり、興味を持ったから)

原↓料理部

(入部理由↓料理をするのが好きだから)

柊↓演劇部

(入部理由↓中学時代も演劇部と卓球部を迷っていた節があり、高校入学後に演劇部のレベルの高さを見て惹かれたから)

不破↓美術部&漫画研究部

(入部理由↓漫研はマンガが好きだから。美術部はマンガの模写のために絵の技術を上げるため)

イトナ↓電子工作部

(入部理由↓中学の時に入部していたため)

前原↓サッカー部

(入部理由↓サッカーが好きだから)

三村↓放送部&映画研究部

(入部理由↓映画研究部は映画が好きだから。放送は活動内容の一つである『映像編集』に興味を持ったから)

村松↓料理部

(入部理由↓料理をするのが好きだから)

矢田↓ダンス部

(入部理由↓ダンス経験があり、興味を持ったから)

雪村↓演劇部

(入部理由↓比較的にレベルの高い部活である上裏方も募集中心のことで、将来女優を行う上で参考にしようと思ったから)

吉田↓電子工作部&鉄道研究部

(入部理由↓鉄道研究部は乗り物自体に興味があるから。電子工作部はイトナに連れられて見学に行くと、将来実家を次ぐ上で必要なことが学べると実感したから)

人物紹介の時間（ネタバレあり 経過更新）

【終 佳奈（ひいらぎ かな）】

誕生日：11月21日

身長：172cm

体重：5じ「黙れ。」…はい…。

血液型：AB型

好きな科目：数学・英語・国語

嫌いな科目：理科（苦手ではない）

得意科目：国語

苦手科目：家庭科（自覚なし）

趣味：TV（主にドラマ）観戦・卓球

特技：卓球

部活（中学）：卓球

弁当or学食：学食派（特待生限定定食）

好きな食べ物：基本的に甘いもの。特にチョコとか。

嫌いな食べ物：言ったら全員に変な顔をされるが、焼肉やステーキの類が本気で嫌い。

見た目：黒髪のハーフアップヘア。

身長割に顔が小さいので、スタイルが良い。

そして綺麗な顔が揃っている元E組の生徒に引けを取らないほどの美人。

カルマと保育園時代からの幼馴染。

小学生の頃全て同じクラス。

地元でも「仲良いねえ〜。」と言われるほどの仲だったが、不思議と「そういう」噂が立ったことはない。

極度の暗所恐怖症。

小4頃からカルマのことが好きだが、本人は全く気付いていない様子で、事情を知っている女子たちはみんな不憫に思っている。

将暉とは（書類上では）いとこ。

母親がバツイチで、その後将暉の叔父である『Holy』の次期社長候補と結婚したらしい。

【元E組メンバー↓柊の印象】

カルマ↓副委員長として信頼してる。本人には絶対に言わないけど、「幼馴染」ってひいき目なしに、割と完璧な方だと思う。ただ：佳奈の料理は絶対に食べたたくない…。

磯貝↓ケイドロの時思ったけど、カルマの次に敵にしたくない。

岡島↓片岡みたいだ：いろんな意味で。そしてケイドロの時、正直ガチで恐怖を覚えた。

岡野↓：思ったより機動力が抜群で、びっくりした。

奥田↓頭いいし、優しいです！

律↓柊さんのおかげで、「恋愛感情」についての理解を深められました。

片岡↓カルマが委員長つてすごく不安だったけど、佳奈が支えるなら問題ないかな…とってる。

神崎↓本好きという共通点から、よく一緒に学校帰りに本屋に立ち寄る。近くにゲームセンターがあることから、そこに立ち寄り、対戦ゲームをするまでがいつもの流れ。（そして大抵私が勝つ）

木村↓なんか片岡に結構似てる気がする。ただ、料理の下手さとい、女子力の低さは否めないような…。

倉橋↓すっごい優しい！カルマ君への気持ちは純粹に届いてほしい。

渚↓正直美人だし、スタイルもいい。…なんでカルマは他人の気持ちには気づいて、自分が関わったらあんなにも鈍くなるんだろう…。

菅谷↓スタイルいいし、絵のモデルにしたい。

杉野↓一度野球について話したことがあるが、なんかサッカー派だったみたいで相槌打った後色々用語説明求められて少し困った。

竹林↓彼女の頭の良さや暗殺能力の高さには尊敬している。でも僕は三次元には興味がないもので。

千葉↓ケイドロでタッチされた時は真面目にびっくりした。なんか：（色んな意味で）E組でやった初めてのケイドロを思い出した。

寺坂↓もう二度とあいつの料理は食べたくない！（切実）

中村↓基本的に話に乗ってくれる。でも下ネタを言うと、「莉桜女子なんだから…」と言われる。

狭間↓一度私が読んでいた本で話したことがあるが、それ以来全然本の話題をしないようになった。

速水↓射撃能力が高くて、正直びっくりしている。それにこだわらず、初心者なのに全ての暗殺能力の高いことを純粋に尊敬している。

原↓料理教えたい。そしてカルマ君に対する思いを純粋に応援している。

不破↓ジャンプ勧めたい。少女漫画派らしいので…。

イトナ↓村松以上に飯が不味い。今やあそこまで不味い料理が作れることに逆に尊敬の意を感じている。

前原↓声かけたら割とすぐに、そしてガチめに振られた。

三村↓すぐに名前は出てこないけど、似てる人テレビで見たことがある。それくらい美人。

村松↓料理教えたい。個人的には絶対に親父と会ってはいけなと思う。そんなわけで、絶対に実家に来て欲しくない。

矢田↓メグみたいにスタイルいいし、本当に優しいし、絶対にモテると思う！

茅野↓すつごく信頼できる！前の中学の時、「芸能人」って目で見なかった唯一の友達。

吉田↓カルマと違い、危なっかしいところはない…という印象だったが、柊の料理を見て完全にその印象が逆転した。あの時初めて寺坂を

不憫に思った。

【柊↓元E組メンバーの印象】

カルマ↓…自分のことになると、結構鈍感。でも初めてクラスに入った時、いるってわかってたけどほとととした。いろんな意味で。

磯貝↓クラスのリーダー的な存在。そしてイケメン。全てが。

岡島↓もう取り返しがつかないくらいの変態。

岡野↓体柔らかいなあ。元体操部って聞いて、すごい納得した。

奥田↓化学が好きって聞いてびっくりした。すごくいい子だし、あかりが仲良くなったのが分かる気がする。

律↓なんか…うん。チートだね。

片岡↓女子なのにイケメン。彼女の謙虚さを、たまにいじらしく感じる。磯貝とくつついてほしい。

神崎↓すごい美人。杉野の気持ちに早く気づいてほしい…。

木村↓名前聞いてびっくりした。このクラスで上位に位置する機動力に尊敬している。

倉橋↓天真爛漫で、話しててすごく楽しい。生き物への愛情はすごいと思う。

渚↓一回腕相撲で勝って、すごい罪悪感を感じた。そして本人には絶対に言えないが、最初顔見た時に一瞬女子かと思った。

菅谷↓絵、うますぎるから習いたい。

杉野↓あそこまで一途だと、なんか応援したい…。

竹林↓なぜか寺坂とよく帰ってんのを見る。尾行しようとしたら、あかりに「…後悔するよ?」って言われて止められた。

千葉↓射撃がすごい。目が隠れてるのに、あそこまで当てられるんだ…。

寺坂↓最初見たとき、『うっわ。悪そー。』って思った。今は『なんだかんだ言ってるいいやつだ。』とおもっていて、カルマやイトナとのやりとりを微笑ましく眺めてる。

中村↓なんか気があう。ただ、下ネタを振るのはやめてほしい。

狭間↓自分も本を読むのは好きだけど…感性が真逆すぎて話が合わない。だから一回してからもうしてない…。

速水↓射撃がすごい。同じ女子でもこんなに違うのか…。

原↓お母さん。最近はなんか…本当のお母さんよりお母さんな気すらしてくる。基本恋愛相談は回り回って最後はここに行き着く。

不破↓ジャ○プとかサン○ーとかの話をよくふってくる。聞いている分にはすごく楽しいのだが、同意を求められると返事に困る。

イトナ↓寺坂によく毒を吐いてる。歴代のイトナ号を見たとき、そのスペックの高さにびっくりした。

前原↓たらし。文句なしの女つたらし。そしてカルマ同様自分のことになるとすごい鈍感。…いつひなたの気持ちに気づくんだろう…。

三村↓初めてテレビの知識で負けた、本物のテレビっ子。

村松↓男子なのに料理が上手い。…なんでだろ。なんか腹立つ。

矢田↓女子力の高さが羨ましい。あとは…うん。今は割愛。

茅野↓なんか一緒にいたらすごい安心する。渚のことは純粹に応援しているし、くっついてほしい。

吉田↓バイクへの情熱がすごい。イトナと仲がいいのか、よく二人で出かけてるのを見る。

【呼び方】

男子はカルマ、渚、イトナ以外は全員苗字呼び捨て。

女子は今の所岡野・律・片岡・中村・速水・矢田・茅野は名前の呼び捨て、倉橋はちゃん付け、奥田・神崎・狭間・原・不破がさん付けである。

【加藤 将暉（かとう まさき）】

誕生日：6月28日

身長：173cm

体重：58kg

血液型：A型

好きな科目：数学・物理

嫌いな科目：歴史・生物

得意科目：数学・体育・家庭科

苦手な科目：歴史・生物

趣味：サッカー

特技：料理・サッカー

好きな食べ物：特にまずくなければ、なんでも食べる。意外にも大食いである。

嫌いな食べ物：特にない

見た目目：比較的に整った顔立ち。

茶髪（地毛）で、顔（というか雰囲気）は杉野みたいな感じ。

学校：蛍雪大学付属高校（中学からのエスカレーター）

部活：中高ともにサッカー

カルマ、佳奈とは幼馴染。

だが、小1でクラスが分かれてから、「放課後一緒に遊ぶ、仲のいい」友人に。

カルマと佳奈とは、小5、小6で同じクラスである。

父親はただのサラリーマンだが、母親の実家が大商社『H o l l y』の社長令嬢。

逆玉の輿婚である。

喫茶店「K A T O」は、まだ将暉が生まれる前に始まった。

最初は母親の趣味本位だったが、意外と売り上げが高く、今まで続いている。

9歳年の離れた姉がいる。

万年反抗期のため高校時代から家出まがいの行動が多く、社会人になった今でもほとんど家に帰ってこない。

先述した通り、柊とは（書類上では）いとこという関係。

同じ高校に、彼女（ソラ）がいる。

つまりリア充。

リア充である。（二回目）

料理だが、村松並みに上手い。

喫茶店「K A T O」に出される料理の中には、彼考案のメニューもある。

【曾良野 優（そらの ゆう）】

誕生日：10月16日

身長：161cm

体重：内緒だそうです

血液型：B型

好きな科目：英語・音楽

嫌いな科目：数学・理科

得意な科目：英語・体育・音楽

苦手な科目：数字・理科（特に物理）・美術

趣味：ピアノ

特技：ピアノ

好きな食べ物：スコーン

嫌いな食べ物：パクチー

見た目：ショートカット（イメージ雪村先生）

可愛い。美人というより可愛い感じ。

学校：蛍雪大学付属高校（高校から）

部活（中学）：無所属

部活（高校）：バドミントン

カルマ・柊・将暉と幼馴染。

将暉とは小学時代6年間ずっと同じクラスで、小四の半ばまではよ

く一緒に行動していた。

カルマ・柊は小五・小六で同じクラス。

父親が大学病院の外科医部長。

母親譲りの文系脳を持つ。

将暉には気づいたら好意を持っており、晴れて付き合い始めたのは

中2になってから。

中学は公立組だったが、その後将暉の通う蛍雪大学付属高校に進学。

『ソラ』は保育園時代からの愛着あるあだ名であり、自己紹介でも積極的に取り入れている。

彼女の「人と壁を作らない」性格のためか、家族と将暉を除く全ての知り合いから「ソラ」または「ソラちゃん」という風には呼ばれている。

なお将暉は付き合い始めてから「優」呼びである。（それまでは「ソ

番外編

コラボの時間ー欠けた月の満ちる頃

今日はー高校の文化祭。

中2の柊は、その文化祭にいた。

「もお…真由美ちゃんどこ？」

そう…柊は、従姉妹である林 真由美（高一）の文化祭に来ていたのだ。

会社勤めの両親は、本来休みのはずの日なのに、

「ごめん！急に仕事入った！」

というわけで…

結果、1人である。

で、そのお誘いの日に入ったLIEでは、

『10:00に正門前に来てね。迎えに行くから』（O）／とあった。

そしてただいまの時間

10:20

はつきり言って、真由美は遅刻常習犯である。

しかしいくらなんでもこの遅刻はひどい。

そして先ほどLIEで

『ちよつと真由美ちゃん！今どこ？私正門前にいるんだけど（*）へ*』

と送ったところだった。

すると、すぐに既読がつき、返ってきたのこんな返事。

『あつーごめんm』（m

うち今ちよつと忙しいから、今から友達そっちに派遣します）

（）／~~~~』

…そろそろ怒っていいと思う…。
ていうか忙しいって言う割に早く既読ついたね…。

(ま、いつか…)

そんなことを考えながら、柊はそのまま――高校の正門前で待っていた。

…と、そこに

「ねえねえ、その君。いま一人？」

「ちよつと俺らとあつちでお茶でもどお？」

な――んかガラの悪そうな高校生に声をかけられた。

(やだなあ…)

と思いつつ柊はこう答えた。

「ごめんなさい。私今ちよつと人待ってるんですよ」

しかしそんな柊の言葉虚しく、その高校生たちは、

「イヤイヤ、さつきからずーつとここにたってるじゃん？」

「待ってるのって男？やめちまいなよ。そんな女のコ待たす男なんてさ。」

「そんな奴より俺らと遊ぼうぜ」

見てたのかよ…。

これはまた、ややこしい…。

しかし、昔から人を怒らせないように済ますのはまあまあ得意な方である。

そんなわけで、柊はこう切り返した。

「いや？彼は悪くないですよ？私が待ち合わせの時間間違えちゃって
す。早く来ちゃったんですよ」

だが…

「いや、そんなこと言って、本トは彼氏待ちでしょ？」

「わざわざそんな奴庇わなくていいからさ〜」

「ほら、来なつて」

そう言つて、手を掴まれた。

「ちよ…やめてください！」

相手は、

「大丈夫だつて〜」

とか

「そんな悪いことしないからさ〜」

とか言つてたけど…

そんな言葉は、柊の耳に入つてこなかった。

ただ彼女の頭の中にあつたのは…

(誰か…助けて!!?)

「ちよつと！その子嫌がつてるでしょー！」

その瞬間、大きな声がかげられた。

その方向を見ると、――高校の制服を着た女子生徒。

すると、柊の手を掴んだ高校生たちは

「あア？誰だお前？」

「別に関係ねえだろ」

「…あー、わかつた！自分がナンパされないからシットしてんだ〜」

そんな高校生たちに、その女子生徒は反論した。

「そういうことじゃなくて！嫌がつてるのに無理やり連れて行くこと
することがおかしいって言ってるの！」

その言葉に激昂したのか、高校生たちは掴んだ手を放し、その女子
生徒の方へと歩いていった。

「なんだ、お前？女だからって調子のんなよ？」

そう言つて、その高校生たちは女子生徒に手を出そうとした。

すると、

ウーウー…

どこからか、パトカーのサイレンが聞こえてきた。

途端に、高校生たちは焦りの色を見せる。

「お前…警察呼んだのか!?!?」

「え…ええー!よびましたよ!!?」

その女子生徒の答えに、高校生たちは

「チツ…お前ら、逃げるぞ!」

そう言つて逃げていった。

その後ろ姿をみながら、柗はホツとした表情を浮かべた。

と、突如聞こえたのが…

「こ…怖かったあ…」

…薄々感じてはいたが…

「警察、呼んでないんですね…」

「うっ…」

でも、と柗は言葉を続ける。

「本当に助かりました…。なんかしつこかったんで…」

その言葉を聞き、女子生徒はホツとした表情を浮かべた。

そして…

「ちなみに…あなたって、柗佳奈さん?」

「ん?」

*

『ごめん響！うち、学校で従姉妹のゴ待たせちゃってるんだ。地下鉄が結構遅れてるみたいだから、代わりに行ってくれないかな？佳奈ちゃんっていう子なんだけど』

友達のまゆみんからそう連絡が来たのは、ついさっきの事だった。従姉妹？まゆみん従姉妹いたんだ。

私も結構忙しかったので断ろうかと思ったが、結局行くことにした。

理由のひとつとしては、忙しい理由が「テストで赤点を取ったので再試の為の勉強」だったからだ。

…こんなかつこ悪い理由をまゆみんに言いたくない。

それと、もう一つは――

その子に、何となく興味があったのだ。

「――ええと…初めまして。まゆみんの友達の今村響です。まゆみんは地下鉄がちよつと遅れちゃって、少し遅れるみたい。あの、佳奈ちゃんって呼んでも…」

「あ、いえ！全然良いですよ」

恐る恐る聞いてみると、榕さん――佳奈ちゃんは、ぱたぱたと手を降って笑ってくれた。

いや、私の方が年上なのは分かってるんだよ？

でも…なんかこの子、私より大人びてるんだよなあ。

黒髪のハーフアップヘアに、スタイルの良い身体。

中学生なので幼さはあるが、すつきりとした美人顔。

声も落ち着いていて、彼女のどこをとっても優等生！な感じの子だ。

うっかりこつちが敬語を使ってしまいそうになる。

…この子、絶対赤点で再試なんてならないだろうな。

そんな事を考えつつ、私はおもむろに口火を切る。

「まゆみんは結構遅れちゃうみたいだから、代わりに私が来たんだけ

ど…あの、私と文化祭回ることになっちゃうけど、一人で回ったほうが良い？」

「一人で回ると色々と不安なので、2人だと心強いですよ。あと、何て呼べば…」

「あつ、えーと…先輩って言うのは堅苦しいから、響ちゃんがいいよ。うん、敬語もやめてお友達になろう」

「敬語なし…こ、これでいい…かな？」

おお、普通の子だと敬語なしって言われると戸惑っちゃうのに、素直に敬語をやめてくれた。

この子絶対いい子だなと確信する。

せっかくこれっきりの出会いなんだし、仲良くなっておきたいよね。

それに、楽しく回って沢山思い出作って欲しいし。

「じゃあ回ろうか、佳奈ちゃん！」

「あ、うん。響、ちゃん」

これは、今から少し前——私が高校一年生の頃の話である。

*

響ちゃんは真由美ちゃんと同じクラスの友達らしい。

最初こそ「響ちゃん」呼びに慣れずに戸惑っていたものの、人に馴染みやすいという元々の性格も幸いして、5分も経つと敬語なしで普通に話せるようになった。

「そういうえば、佳奈ちゃん1人できたの？」

「あー…ちよつと親が急に仕事入っちゃって…」

同じ学校の友達も用事あったみたいだし…。」

「そうなんだ。どんな子？」

「え…と…。芸能人でいえば、摩瀬榛名みたいなの？」

「へえー！かわいい子なんだね!!？」

…似てるというより本人なんだけどね…という言葉は胸の中にとどめた。

ーそれにしても響ちゃんって、あかりに似てる…。顔とかじゃなくて雰囲気？みたいなのが。

あと、話しやすくってとつつきやすいところとか。

(素がいい人なんだろうなあ…)

そんなことをかんがえていると、響ちゃんが口を開いた。

「そうだ！佳奈ちゃんってお化け屋敷とかつていける？」

「ええと…正直苦手かな…。そもそも暗いトコが怖くて…」

「そっかあ…」

残念…とつぶやいた響ちゃんを見て、ん？と思った。

これって…

「もしかして…響ちゃんのクラスの出し物ってお化け屋敷？」

「あはは…。まあね」

……。

「そうなんだ!!？じやあ今から響ちゃんのクラス行こ!!？」

「いや、いいよ!?!?無理しなくて!!？あれは怖いから!!？」

「いや…怖さを楽しむのがお化け屋敷じゃ？」

「本当に怖いから！あれは仕掛けを知ってた私たちも怖かったくらいだし！」

…ん？どういうこと？

そんな私の気持ちが顔にも出ていたんだろう。

響ちゃんはそのまま説明を続けてくれた。

「いや…私たちのクラスの男子たちの中で『初めての文化祭だから盛り上ろう!』みたいな雰囲気になって…そしたらある男子が『お化け屋敷するんだったら、せつかくだし怖い作るぞく!!?』って言うって…」

「結果、すごい怖くなった…」

その私の言葉に、響ちゃんは無言で頷いた。

…っていうか、どこの学校にもいるよね。

こういう行事ではしゃぐ人って…。

「あつ、そうだ！ちよつと部活の先輩に『私たちのクラスの出し物に来て』って誘われてた！一緒に行こ!!?」

そう言って、響ちゃんは私の手を引いてまた歩き始めた。

*

結局、お化け屋敷には行かない事にした。

まゆみんの従姉妹を怖がらせちゃうのは嫌だし、何より…私もそんなに行きたくなかったからだ。

いや、本当に怖いんだって。

「恐怖感を味わいつつ楽しむ」の「楽しむ」の部分が、皆の頭から完璧に抜け落ちてたんだって。

気づいたら本気で泣かせるスタイルになってたんだって。

完成したお化け屋敷にテストで入ってもらった新任の先生が半泣きになって出てきたのを見て、ようやく私達はとんでもないものを作ってしまったと悟ったのだ。

だから…正直、仕掛けが分かっても行きたくない。

「…お化け屋敷より、ずっと楽しいのがあるからそこ行こー！うん！」

「う…うん」

佳奈ちゃんを引っ張って、部活の先輩に「来てね」と言われていた所へ行く。

先輩のクラスの出し物、「メイド喫茶」へ入ると、いらっしやいませと揃った声に出迎えられた。

メイド喫茶って、女子も行っているもんなんだ。ずっと男専用だと思ってた。

「あー響じゃん、来てくれたの？ありがと〜」

出迎えたメイド役のうちの人1人が、私に向かって手を振ってくれる。

「いえいえ、先輩のお誘いですから。…あ、この子は私の友達の従姉妹ちゃんです」

笑顔でそう返しながら、佳奈ちゃんを紹介する。

「初めまして、終佳奈と言います。中2です」

「佳奈ちゃんって言うの？よろしくね」

先輩がそう言って、佳奈ちゃんに向かって笑いかける。

心温まる光景だ。

ニコニコしながらそれを眺めていると、先輩が「あ、ごめんごめん」と言っただけでメニユー表を取ってきた。

「ごめんねー、立ち話しちゃった」

「大丈夫ですよ。じゃあ、私達はそのテーブルに——え？」

佳奈ちゃんと奥のテーブルに行きかけた所で、先輩にガシツと肩をつかまれる。

振り返ると、先輩は先程と変わらない笑顔でこちらを見ていた。

「え？あの、先輩？」

「事前に話さなかった私が悪いんだけどね。ていうかわざと話さなかったんだけど——」

響ちゃん働く側だからね」

……………え？ 働く側って、つまり…。

驚いている私に、先輩が猫耳カチューシャとメイド服を押し付けてくる。

「一回こういうの、響ちゃんに着せてみたかったんだよね。絶対似合うって」

「いや待ってくださいよ！働くなんて聞いてないし、猫耳カチューシャってこれ私だけですよね！」

突然の展開に、佳奈ちゃんがぼかんとしている。ごめん、私も知らなかったんだ。

断ろうとして、気づく。

なるほど、わざと話さなかったのは私が逃げるからか。

メイド服に猫耳カチューシャなんて、私絶対嫌がるし。

さっすが先輩！さあ、逃げる口実を探そうじゃないか！

「えー…えーと…あつ！」

必死で考えていると、不意に頭に名案が浮かんだ。

これなら切り抜けられる！

「あのー！」

笑顔でメイド服を押し付けてくる先輩を、私は引きつった笑顔で押し返す。

「やっぱ無理ですよ、私は。嫌だっというのもありますけど…何よ
り、」

そこまで言ってから、私は佳奈ちゃんを先輩の前に突き出した。

「え？」

「ほ…ほら、この通り連れがいますし！」

急に出された佳奈ちゃんは、驚いて目を白黒させている。

佳奈ちゃん、口実に使っちゃってごめん。

でも、これしかもう策がない！

「佳奈ちゃんひとりで回らせるのは危険の一言に限ります。さつき
だつて、彼女ナンパされてたんですよ？」

これは本音だ。

佳奈ちゃんは可愛いし、しかも中2だよ？

危険だし、心配すぎる。

「——そうね。仕方ないね」

ずっと話を聞いていた先輩が、そう言ってニコツと笑った。

お。分かってくれた？

私が期待に満ちた目を向けると、先輩はその笑顔のまま、私のもの
より少し小さいメイド服を出してきた。

「まだメイド服の余りあるし、佳奈ちゃんもやってみたら？」

…佳奈ちゃんを巻き込んだだけだった。

数分後。

私達は先輩の絶対の笑顔に圧され、結局メイド服を来てコーヒーや
らケーキやらを運んでいた。

「はい、こちらカフェオレです」

そう言いながらテーブルにカフェオレを置く私の頭には、可愛らし
い猫耳がついている。

しかも服までフリフリのメイド服だ。

うわあー！一生で一番着たくなかった服のセットだ。

先輩は似合う〜とか言ってたけど、絶対うそだ！こんな恥ずかし過ぎる。

「げ、元気だして、響ちゃん」

落ち込む私に、佳奈ちゃんが慰めの声をかけてくれる。

そんな佳奈ちゃんの頭にも、色違いの猫耳がついていた。

正直言っただけで似合ってる。すごい似合ってる。

完璧に美少女メイドなだけで！罪悪感がハンパない。

「あの…何ていうか、ごめん。巻き込んだじゃって」

「いやいや、大丈夫。むしろ貴重な体験だよ」

手をばたばた振りながら、そんな事を言ってくれる佳奈ちゃん。

天使かな。天使なのかな。

「休憩時間になったら、私達解放してくれるんだって。もうちよいで

休憩時間だから、頑張ろうね」

「解放って…！了解、頑張ろうね」

私の言い返しに、佳奈ちゃんがおかしそうにくすくす笑った。

そこから更に20分ほど経ち、休憩時間まで残り2分となった時。

「もうちよつとで休憩だし、2人とももう終わって帰ってていいよ。

疲れたでしょ、お疲れ様」

先輩からそう言われ、私達は休憩時間より少し早く解放される事と

なった。

ああー！やっと自由だー！

先輩に会釈をして、着替えようと思った時。

「お、メイド喫茶なんてやってんじやん！」

教室の戸が開いて、ガラの悪そうな男子高校生が2人入ってきた。

私達の高校…ではなさそうだ。凄く不良って感じがする。

「い…らっしやいませー」

危なそうな2人に一瞬空気が凍ったものの、すぐに持ち直して先輩

たちが挨拶をする。

「なあ、ここ座ろーぜ。で、メイドさん、メニューはどんなんがあんの？」

2人はテーブルにつくと、やってきた先輩に馴れ馴れしく話しかけ始める。

…うーん。なんかあの2人、危ないなあ。

何かやらかしそう——私の勘がそう言っている。

心配だから、もう少し見ていよう。そう思つて佳奈ちゃんを見てみると、不良のうちの1人が不意にこちらを見た。

「…おーなんだよその子、すげえ可愛いじゃん！」

と、ガタツと席を立ちこちらに歩いてくる。

これつて…佳奈ちゃんを狙つてるよね。

さつきナンパされてたくらいだし。

「響ちゃん…」

「大丈夫だよ、佳奈ちゃん」

「え？——響ちゃん？待つて、違う…これは」

私は何か言っている佳奈ちゃんの前に立ち、こちらに来る不良を緊張した面持ちで見つめる。

佳奈ちゃんは絶対守る。怖い目になんか遭わせない。

「なあなあ、俺らとどっか行かない？ヒマなんですよ？」

絶対、ぜつ——え？

次の瞬間、予想外の事が起きて私は驚いて目を丸くする。

そう、なんと不良は私・の・腕・を・引つ張つてきたのだ。

え、私なの？佳奈ちゃんじゃなくて？

予想外の事だったために、私はされるがままに引つ張られてしまう。

「俺らと違うところで遊ぼうぜ？」

「——響ちゃん!!」

佳奈ちゃんの声に我に返った頃には、もう廊下に連れ出されていた。

…あれ、これヤバくない？

「これで3人つきりになったな」

振り返った不良の顔を見て、私は気がついた。

そうだ。この顔、校門で佳奈ちゃんをナンパしてた…。

じゃあ私を連れてきたのは、あの時警察を呼んだ（ように見せかけた）だけだ（私への復讐で）？

ああ、だから佳奈ちゃんは違うって言ったのか。

佳奈ちゃんはターゲットが私だと気づいてたんだ。

でも、私は話を聞かなかったから…。

そんな事を考えている間に、私は暗い教室に入れられる。…って、ん？

なにこれ、電気を消してたとしても暗すぎる。

ここってひよつとして…

私のクラス——お化け屋敷のゴール地点だ。

入り口から入ると受付の子に怪しまれるから、出口から入ったんだ。

ゴール地点は終わりの場所なので、驚かす仕掛けなんて何も無い。

ましてや今はおそらく休憩時間、新たに入ってくるお客さんも居ないわけで——。

…まずい。これホントに絶体絶命だ。

佳奈ちゃんや先輩あたりが、私のいる所を突き止めてくれれば良いんだけど…。

…To be continued

入寮の時間

4月5日。

今日は梅宮高校の入寮の日だ。

渚は男子寮（女子寮と入り口は一緒なので、実質男子棟だが）の305号室だ。

荷物はもうすでに運ばれていたもので、入学までその整理である。

荷物と言ってもそんなに大した量じゃない。

私服と勉強道具、その他必要最低限のもの。そして…暗殺用の道具一式。

私服や勉強道具はこっちでも買えるから、実質一番多かった荷物は暗殺用の道具だった。

渚は、ダンボール3つか4つの荷物の整理に勤しんだ。

荷物の整理が一息ついたので、渚はスマホの電源を入れた。するとL10Eに、おびただしい量の通知が届いていた。

元3-EのグループPLONEである。

そのグループチャットを開いて、一番最初に見えたのは…

「鳥間先生からの伝言です！」

殺せんせーの過去やE組であったシリアスな話は、柊さんを含め、これからC組に入ってくる人には伝えないように…とのことです！」律である。

そんな話には、みんなは

「そりやそうだろうな」

「佳奈ちゃんも気負っちゃったら大変だし…」

「鳥間先生も手厚いね〜」

…といった反応だ。

そんなみんなのチャットを見て、渚は思わず笑みをこぼした。

そして、この28人でまた暗殺教室ができることをとてもうれしく

感じた。

荷物の整理も終わり、渚は寮の中を歩くことにした。

寮は学校と違い、全く複雑じゃない。

寮の構造を説明すると…

3階：高1部屋

2階：高2部屋

1階：高3部屋・共同入浴場・食堂（男女共有）

であり、男子寮女子寮変わりはない。

…なるほど。すごく単純である。

今は2時。

少し遅いが、お昼時である。

そんなわけで、渚は食堂に向かった。

で、食堂へと向かった渚は…

今日の前の光景にびっくりしていた。

カルマと磯貝が一緒にご飯を食べているのである。

ぶつちやけこの二人が寮入りしていたことにも驚きだが…

「…何の組み合わせだろ…？」

なんか話をしているのでこちらからは話しかけづらいし（相手が磯貝だから真面目な話だろう）、だからといってこのまま突っ立っているのも目立つ。

…とりあえず、どこか座ろう…

そう思った。

その時。

「あれっ。渚？どうしたの？ここで突っ立って」

「ちよー茅野!!？」

渚はシーつと合図を出したが、時すでに遅し。

カルマと磯貝が気づき、渚の方に視線を送った。

「あれ？渚じゃん。どうしたの？そんなトコに立って」

「…いや…僕今来たところだし…」

「こっち来ればよかったのに」

「いや…何か二人話してたから…」

「ん？…ああ！大した話してないよ」

「…え？」

「ほらこっち」

そう言っつて、カルマは渚に手招きをした。

…うん。これはもう行かざるを得ない。

そんなわけで、渚と茅野は二人がいるところへと行った。

「二人って今何の話してたの？」

「ん？…バイトの話」

「…ああ！そういうこと」

そういう磯貝君がこの学校来たのって、それが理由だったっけ。

「ちよつといい物件あったから、磯貝にそれ教えてたの」

「…なるほど。何か納得した」

だからこの組み合わせか…と思ったとき、

「カルマありがとな。この学校教えてくれただけじゃなくて、わざわざバイトまでさ」

「いいって。うちの親、いつも旅行行って送金とか絶対にしないし」

「でもカルマって基本こんな面倒ごと嫌いだろ？昨日も『委員長やりたくない』みたいなこと言ってたし…」

「だからこれ、自分のためでもあるからさ。それにこれと委員長は別

物でしょ」

…ん？

「…え!?？」

「待って！カルマバイトするの!?？」

カルマも磯貝も、こんな渚たちの反応をあらかじめ予想していたように、大して驚かなかった。

そしてカルマは呆れたようにいう。

「…するけど？それが何？」

「いや…。カルマがバイトって…意外だな…と」

それを聞いたカルマはハア…とため息をついた。

…ていうかこれ絶対に磯貝君にも同じこと言われたな。

そしてカルマはさつきと同様、呆れたように言った。

「俺さ、言っとくけど自分で『やる』って決めたことはちゃんとやるから」

「…その勢いで委員長もやったら？」

「委員長は磯貝の方が適任だって」

渚の言葉に、カルマは瞬殺で返した。

…ていうか今さらだけど、かなり空気やばくない？

「あつ！そういうえば、カルマ君と磯貝君はLONE見た？」

「ん？LINO?今日はまだ見てないけど？」

「え…早く見た方がいいって！多分通知すごいことになってるよ!!」

「え?」

「なんで?」

「烏間先生からの連絡来てたの！結構大事なことだったから!!？」

えくうっそく…、と言いながらケータイの電源を入れたカルマは途端に動きが止まった。もちろん磯貝も同様である。

そして渚はというと…

「…茅野、ナイス」

その言葉に、茅野は渚同様ナイスポーズを返した。

「…たしかにグループが盛り上がってるな」

「一つのチャットでここまで通知たまったの初めてなんだけど…」
ていうか…と、カルマはつぶやいて、

「これ、どこまでセーフなの？」

「…と言うと？」

「だって俺らの副担『役』って…」

「二代目死神じゃん？」

「「あー…」」

そんなカルマの質問に、磯貝が答えた。

「うーん…とりあえず話題にしなきゃいいんじゃない？」

「聞かれたら？」

「…そこは知らないっていうか、適当にはぐらかすか…」

「佳奈って変なところすごい鋭いよ？」

「ちよつ…ふたりとも！」

カルマと磯貝が話していると、茅野が止めに入った。

「…とりあえず場所かえよ？ここだといつ佳奈が来ても文句言えないし…。」

「「いや、そつち？」」

「この話の当事者佳奈なんだからそこが第一優先でしょ？」

「うーん…まあいいや。でもさ…」

そしてカルマは続けて言った。

「佳奈の寮入り、明日だよ？」

「…え？」

どうやら茅野は聞いてなかったようで、カルマを今問い詰めている。
る。

「ちよつと待って？それ何情報？」

「佳奈からメールできた。『今日防衛省で暗殺道具もらうから明日寮

入りしまーす。』って」

「へえ。メールで………ってメール!?!?」

「…今度はなに?」

「いや…いまし連絡は○I N Eでするんじや…?」

「ID知らない」

「昨日一緒に帰ってたじゃん。聞かなかつたの?」

「素で忘れてた。…ていうかそんな話にならない限り絶対に思い出さないでしょ。そんなこと」

でさ…とカルマは言つて、

「結局どこまでセーフなの?これ?」

「…あつ…」

そこから4人で話し合つた結果、

『そういう話にならないように善処する。もしなつたら知らないふりをする』

となつた。

また磯貝がグループチャットにあげるそうだ。

入学式まであと6日。

またカルマと磯貝君のバイト先決まったらいつものメンバーで行こうかな…。

そう思いながら、渚は初めての寮生活を終え、ベットに入つていった。

部屋会の時間

梅宮高校は寮生活である。

しかし就寝時間に細かい規定はなく、夜更かしをする人も少なくない。

それでできた文化が、部屋会である。

仲いい子たちが集まってだべる。ただそれだけ。

規定上異性の寮には侵入禁止なので、それが不便だ、という人も……まあいなくもないが。

本当にそれ以外の縛りもないため……

この部屋会には、他校生が来ることもしばしばである。

男子寮の3301号室

カルマの部屋である。

そこには4班メンバーと1人のお客様——将暉がいる。

これと言った話をしてる訳ではなく、世間話をしている感じだ。

「やー、ここの部屋会って初めてだけど、意外と話せるな。」

お前ら結構してんの?」

「まあ……それなりにしてるよ。でもここまで話したのは僕らも初めてかな」

まあ……渚たちの場合、部屋会の大半は暗殺計画な訳だが……

渚の言葉に続いて、カルマが口を開く。

「将暉も今度はソラ連れてきたら?どーせ将暉って過保護だからソラが来る時は一緒に来るんでしょ?」

「お前はほんとに一言多いよな……。まあ、考えとくけど」
ところで、とつぶやき、

「将暉って、ソラになんて告ったの?」

そんなカルマのセリフに、渚と杉野は思わず吹いた。

一方の将暉はカルマの言葉に数秒フリーズし、

「……なんで？」

「ちよつとした好奇心？」

「おい」

「いいじゃん。ずっと気になってたしき。なんなら小学校の時から『2人っていつどーやってくつつくのかな』って思ってたし？」

「いつからっ!？」

「ずいぶん前」

しれっとそう言い放つカルマに、将暉は絶句する。

でもさ、とつぶやき

「将暉とソラって、小4の終わりくらいから仲違い？してたじゃん？そっからどうやって仲直りしたのかくらいは知りたいし？」

「……お前な」

しかしそんなカルマの言葉に、渚は「そうなの？」と尋ねる。

「そうそう。ま、どっちが悪いかって聞かれたら将暉が悪いんだけど」

「わかってるー！わかっててちゃんと反省してるし！」

「そりや反省してなかったら今付き合っていないでしょ。わかってるから怒らない怒らない」

そう言って完全に弄りモードに入っているカルマに、将暉は「うぜえ……」とぼやく。

見ている2人も止めるのかと思いきや……

「あー、でもそーゆーことなら俺も気にはなるけどな」

「僕も。やっぱりソラって結構可愛いし……」

「ここに……味方はいなかった。」

「さあさあ、みんな言ってるよ?」

「……ほんとにうるせえ……」

「だって気になるし? 『将暉・ソラを見守る会』の副会長として?」

「……なんだよその会!」

「将暉とソラのこと知ってる奴らの8割くらいが所属する会だけど?」

あつ、渚と杉野も入る?」

「おい!まじでやめろ!」

「会員増えないうちに言った方が賢明だと思うよ？…どうする？」
「でも言って困るのはお前の方だからな！俺は言ってもいいんだぞ！」

そんな将暉の言葉に、（何この会話）とひっそりと思う渚と杉野。

そんな将暉の言葉に、カルマは数秒考えるような動作をとり、
「んー…じゃあいいや。」

「えっいいの？」

あつさりと身を引いたカルマに、渚が思わず口を開く。
が、しかし…

「じゃ、代わりにソラとの進展具合教えて？」

その言葉に、将暉は片手を強く握りしめながら立ち上がる。
それを渚と杉野が必死になって止めた。

「あー…もうこんな時間か…」

俺そろそろ帰るわ」

「じゃあ俺玄関まで送るね。ちようど飲み物買ったし」
お開きかな、と感じて、渚と杉野は自分の部屋に戻った。

「あつ、ぐーぜん。佳奈も飲み物？」

「うん、そーだけど…部屋会、終わったところ？」

「まーね」

将暉を見送ったあと、カルマはロビーでぼったり柗と鉢合わせになった。

軽い話をし、会話が止まる。

と、柗が口を開いた。

「そうだ。将暉がソラになんて告ったか知ってる？」

「さつき部屋で聞いた」

「なあんだ」

そんな話をしながら、カルマはロビーに常備してある自動販売機にお金を入れる。

そして呟いた。

『ソラを守りたい』——か」

「しかも合ってるんだよなあ…」

「あ、やっぱり？」

そう言ってカルマはボタンを押す。

それを見た柊は、

「えー…まだ好きだったんだ、イチゴ煮^そオレ^れ」

「いいじゃん。美味しいし」

「よくそんな甘ったるいの飲めるよねえ…」

そこからは普通に世間話になった。

本編

第1話 始まりの時間

「ねえねえ磯貝、おまえこの学校どうよ。」

殺せんせーの話が終わり、みんなが自分の進路を決めようと悩んでいた休み時間、カルマが磯貝に話しかけていた。

…はつきり言って珍しい。

そもそも2人が話すことが滅多にないのに、カルマから話しかけるなんて…。

当然、クラスの目はその2人に集まった。

「…いや、ここ私立じゃ?」

その通り。カルマが持っていたパンフレットの表紙には「私立梅宮学園高校」と書いてあるのだ。しかし…

「いやいや、この学校特待生制度があるんだよ。しかもバイトもOKだし。磯貝のレベルだったら多分特待取れなくても公立受かるでしょ。」

「…マジで?」

「マジマジ。まあこっから少し遠いけど、全寮制だから交通費もかからないし。」

「全寮制か…。ここからどんくらい?」

「電車で30分くらい。」

「30分か。考えとく。」

以上会話終了である。が、その場にいた全員が同じことを思った。そしてその言葉を実際に口にした人がいた。

「ねえカルマ。その学校のこともっと教えてくんない?」

中村莉桜である。

「いいけど、何が知りたいの?」

「まず、何人特待取れんの?」

「トップ3人。」

「定員は何人？」

「100人くらい。」

「…少ない？」

「まあね。だから倍率は結構高いけど。」

「そ。で、どこにあるの？」

「…おまえ行きたいの？」

「何で？」

「だって定員とか…なんか受けるみたいな質問してくるし。」

「いいじゃんいいじゃん、気になったから。で、どこにあるの？」

「俺の家の近く。」

「いやそうじゃなくて…は？」

先ほどカルマは高校まで30分くらいかかると言った。

…て事は、

「あんたこの学校30分もかけて来てんの!!？」

「そおだねえ。悪い？」

「いや何でここ選んだの？」

「んく。知り合いがないから？」

「意味わかんないし。」

「質問終わった？じゃもうすぐ授業だから。」

「ちよ、まつ…。」

カルマが話しを終えようとした時、

「ヌルフフフ。先生もその話気になりますねえ。」

「…いつからいたんだよ、殺せんせー。」

「特待生制度の所からです。バイトもOKだとは優しい学校ですねえ。」

「最初っからいたんじゃない。」

「で、その学校について教えていただけませんかねえ。」

「…めんどくさい。これでも読めばあ？」

「ニューア！」

カルマは持っていたパンフレットを殺せんせーに向かって投げた。
対先生ナイフを挟んで。

「殺せんせー、後で私にもそれ見してー。」

「あ、私も！」「俺も！」

「分かりました。後で教卓の上に置いておくのでみんなで見てください。」

…そして次の休み時間、教卓に人が集まったのは言うまでもない。

第2話 始まりの時間 二時間

その日の放課後、暗殺の訓練を終えて、カルマに対して質問攻めがあった。

「なんかいっぱい部活あるけど、何部が強いん？」とか、

「この学校高い所にあるっぽいけど、行くのしんどかったりする？」とか、

「制服っていつも自由に着れんの？」とか…。

「…みんな楽しそうだね。」

遠くの方でそれを見ていた渚が思わず呟いた。

彼自身、母親との『成人までは一緒にいる。』という約束があるため、少し輪から離れた所にいた。

「そーだな。まああいつ普段中心にいるような奴じゃないから、結構新鮮だけどな！」

「杉野は気にならないの？あの学校。」

「確かに気にならなくはないけど。梅宮高校って前に選抜出てたし。

…ただ…

神奈川なんだよなあ。」

「ああ、なるほど。」

結構有名な話だが、神奈川県といえば甲子園へ行ける確率が全国で最も低い。というか高校の数が多いのだ。

それと…と渚は続ける。

「…カルマってわざわざ神奈川の方から学校来てんだね。」

「なんでだろうな。あいつの頭ならもつと近くて偏差値高い所行けただろうに。」

「だね。」

とその時、

「その学校みんなで行けたら嬉しくなーい？」

と言った人が出できた。

「しかも全員、同じクラスになったらさあ。」

「…中村、それどんぐらいの確率だ？」

「可能性は0ではないよ。それに『他の学校にはない特別制度』も気になるし。」

「ていうかその制度について教えろよ、カルマ。」

「だから知らないって。俺はその学校の生徒じゃないし。」

「でも楽しそうじゃん？」

「みんなだつて別に行きたいトコあんでしょ。」

「いや〜？私、やっぱりその学校に行きたーい。生物委員会つて気になるしー！」

「ほらあ、陽菜乃だつてそう言ってるじゃん。現に私も行きたいし。みんなもそうだよね〜？」

「」「」「うん。」「」「」

「なんでだよ！別にわざわざみんなが同じトコ受ける必要なんて…」

「はい、文句は言わなーい。」

それを遠くから見ていた渚と杉野は、

「…やっぱり楽しそうだね。」

「渚は行かねえの？櫛ヶ丘と遜色ないトコだと思うけど？」

「…母さんとの約束あるし…。」

「…別に良くね？渚の母ちゃん前ほどその辺固執してないと思うけどなく。」

「確かに興味はあるし、みんなが行くなら僕も行きたいけど…なんかなあと。」

「やっぱり俺も受けよっかな。野球も結構強そうだし、何よりみんなと同じクラスになったら中村じゃないけど楽しいだろうし。」

「杉野も受けるんだ…。じゃあ僕も考えとこっかな。」

「おう！じゃあ俺ちよつとカルマと話してくるわ！」

やっと全員がカルマの机から離れ、カルマが一息ついた時、

「カルマ、質問く。」

「…何、杉野。」

「ちよつと二つくらい聞いていいか？」

「…いいよ。」

「おまえあの学校受けんの？」

「みんなが受けんなら受けるけど、全員受からなかったら…多分辞退するかな。」

「なんで？」

「家から学校が近いの嫌だから。」

「なんだそれ。」

「もう一つは？」

「ああ。さつき中村も聞いてたけど…」

「なんでおまえこの学校来たんだ？」

「…さつき言ったの聞いたでしょ？」

「聞いたよ？で、なんで？」

「だから、知り合いがないからだって。」

「本当か？」

「うん。」

「…そ。」

（…なんか嘘ついてる気がすんだけどなく）

「悪かったな。じゃあまた明日な！」

「んー。」

第3話 始まりの時間 三時間目

「ほほう、皆さんの志望校は梅宮学園高校…と。」

翌日のHR、いつもの一斉射撃が終わり殺せんせーがそう呟いた。

…そう。あの後結局みんなが梅宮高校を受験することになったのだ。

渚も母親に梅宮高校を受験したいと伝えると、「渚の人生だから」と二つ返事で了承してくれた。

「しっかし、みんながみんな今までの志望校を変えるって…本トにいいの〜?」

「良くなって志望すつかよ。」

「これでみんな受かったらいいね〜。」

「みんな受かったらって…かなり不安な奴が一人いるけど?」

「…ちなみに誰だ?カルマ?」

「ん〜?寺坂以外に誰がいんの?」

「カルマ、テメエ!」

「まあそういう冗談は置いといて、」

「置くな!」

そういう寺坂をカルマは無視して続ける。

「…前にも言ったけど、倍率が高いんだよねえ。何しろ100人しか受かんないし。地元の頭いい奴全員受けるらしいし。仮に全員受かってても成績順にクラス分けするからさあ。」

「同じクラスになれることはまあないってことだな。」

「それに機員が特待とれなかったら入学しないんですよ。」

「…ああ」

そんな時、中村がカルマに尋ねた。

「薄々思ってたけど、倍率って何倍くらいなの?」

それはみんなも思ってたことだった。

が、予想をはるかに上回る数がカルマの口から飛び出してきた。

「うーん…3倍は軽〜く超えるくらい?」

「…はい?」

「だから言ってるじゃん。倍率高いって。だから俺的には寺坂に限らずみんな受かるか不安だよ?」

「いや、高すぎだろ!!?」

「なんか受かるか不安になってきた…。」

と、そこで殺せんせーが口を開いた。

「ヌルフフフ、皆さんずいぶん落ち込んでいますねえ。」

「…何自信ありげなんだよ、殺せんせー。」

「当然です。皆さんは前に本校舎の生徒にテストで勝ちました。いくら倍率が高くても勝つことは可能はずです。」

「うーん…。」

「先生に任せてください。全員合格を果たしてみせます。」

「…確かに殺せんせーならうまくいくかもしれないー
しかし…。」

「…そううまくいくかなあ。」

「なぜ?」

「さつきも言ったけど、地元の頭いい奴全員受けたよね。それこそ『中学に私立に行った』奴も。」

「…マジか。」

「うん。しかもそういう奴って自分に自信がある奴ばかりなんだよなあ。例えば中学ではトップだったとか。」

「そのくせしておまえはあんまり受けんの乗り気じゃなかったよな。」

「家から近い学校やだから。」

「…やっぱり意味分かんねー。」

「まあみんなが殺る気なら俺も別にいいけどねー。」

「ヌルフフフ、では決定ですねえ。今日からヌルヌル強化勉強会を開きますね。」

「…それからみんなは勉強した。期末テストの時のように。」

そして迎えた梅宮学園高校の入試の日…。

「みんな遅いつてー。」

「おまえが早いんだろ。」

「まあ遅刻魔のカルマにしたら珍しいっちゃ珍しいけどな。」

「家から近いって言っても一駅あるからね。それに入試の日に遅刻するほど俺も抜けてないし。」

「…まあな。」

という会話をするうちに学校に着いた。

が、なんか様子がおかしい。

やたらと人が集まっているのだ。

「なんだあれ?」

「受験者の親族か?」

「なんだろう。」

「さあ…。」

と言いつつ、見てみると、

「「「フレーフレーE組!」」」

「「「フレーフレーみんな!」」」

ー殺せんせーである。

((何やってんだ、あのタコ!!?))(

「何やってんだよ、殺せんせー!」

「ニユア!み、皆さんの応援をしようとしたのですが…。」

「……とりあえず、気持ちだけは受けとっておくよ。」

「てかさういうの結構プレッシャーになるからさあ…。」

「…分かりました。ですが応援したいのは本当なので…皆さん頑張っ

てくださいね。」

「「「はい。」」」

こうして、僕らの戦い^{テスト}が始まった!

第4話 始まりの時間 四時間目

テストから三日後、学校に結果が送られてきた。

「ヌルフフフ、それでは皆さん、結果を返却します。合格者は合格証が、特待生には特待生登録書が入っています。」

…では、見てください。」

その瞬間、ガサガサッと封筒を開ける音がクラス中に響いた。

最初に声を上げたのは、磯貝だった。

「っしやあ！特待とったー！」

「マジで！」「よかったじゃんか！」「おめでとーう！」

それを皮切りに次々と「俺も受かったー。」「良かったー。」「と、嬉しい声が上がった。

「で、一番心配だった寺坂はどーだったん？」

「ああ？俺か？」

と、封筒の中身を取り出した。そこには『合格証』の文字があった。

それを見たカルマは、

「お、寺坂が合格かー。じゃ、全員合格ってことでいいんだよな。」

「おいこら、どういう意味だ、それ。」

「さあ？」

「でも、とにかく全員同じ高校に受かったんだな！」

「これでクラスも同じだったら良いね。」

「そうだ！カルマはどーだったん？」

「んー、俺？」

とカルマが見せたのは『特待生登録書』だった。そしてその下には

「一位」とある。

「やっぱカルマ一位か。」

「磯貝はどうだったの？」

「あー：俺は三位だったんだよなあ。特待取れたは良いんだけど、よく考えたらギリギリなんだなと思って。」

「まあ、ギリギリでも取れただけいいじゃん。中には取れなかった奴もいる訳だし。」

「…そっか。」

「そうそう。」

とまあ、そういう会話をしていた中で、どんと「ある」疑問が大きくなった。

「じゃあさ…」

二位は誰？

「「「「「あ…。」」」」」」

確かに「自分が二位だ。」という人は出てきていない。

「ええと中村、おまえがその質問したってことは、おまえは違うんだな。」

「うん。」

「…じゃあ二位の奴は、このクラスにいないってことでいいんだよね。」

「良いでしょ、もう。」

「はあ…、マジかー。」

「なんか問題でもあるの？」

「…ないけどさあ。」

そんなカルマの言葉に、寺坂が

「じゃあ何だ、今の間は。」

「単純にあれだよ。知り合いじゃなかったらいーなーって。」

「ああ、そういうおまえがこの学校受けた理由、『知り合いがないから』だったっけ。」

「そうそう。」

「まあ知り合いだったら仕方ないって割り切りやいいじゃんか。」

「…知り合いの可能性が高いのが大問題なんだよな…。」

「ん？なんでだ？」

「まあちよつと。」

「あんだよ。もったいぶりやがって。」

ーそんなこんなで、僕らはすぐに暗殺に集中できるようになった。

もちろん、『もう一人の特待生』の存在も気になってはいたが、それ

をすぐに忘れるほどその日から暗殺に熱を入れた。

今日は二月十三日。

殺せんせーの暗殺期限まで、あと…29日

第5話 バレンタインの時間

全員合格の翌日、学校に着くと、岡島が（非常に分かりやすい）アピールをしていた。

「義理チョコでも余りでもいい！誰か俺にチョコをよこせえー！」

「ああ、今日バレンタインか。」

「なんともまあ分かりやすい…。」

…どうやら岡島は毎年一つ（もちろん母親から）しかチョコをもらえないらしい。

しかし…

「言っちゃ悪いが、当然じゃね？」

「前原あ。おまえだけは味方だと思ってたのにい〜。」

「失礼な。俺毎年結構もらうぞ。チャラ男のスキルをなめんな。」

「クツソ、いいか見とけおまえら。今年の俺はぜつつつたい学校でチョコもらうからなあ!!?」

「「「いや、無理だろ。」」」」

それを見ている女子たちはとうとうと…

「岡島にチョコって…」「ないね。」

一方、その様子を遠くから見ていたカルマ・渚・杉野は…

「バレンタインねえ。なんでみんなそんなに固執するんだろ。」

「カルマはどうなの、バレンタイン。」

「俺も毎年一つだよ。」

「あんまり変わんねーじゃん、岡島と。」

「いや？俺の家ちようどこの時期『絶賛両親旅行中』だけど？」「ん?」

「幼馴染がいんのよ。その子が毎年くれるの。」

「…何だその『this is 義理チョコ』は。」

「…ははっ、まあねえ。」

そんな中、杉野はやはり…

「ていうか、俺は神崎さんからもらいてえ…。」

「神崎さんはみんなにわたしそうだけどねー。…少なくともおまえに

はわたすだろ。」

「全く同感。」

「茅野とか奥田とかはどうなんだろ。」

そんな杉野の質問に、渚が答える。

「神崎さんと一緒じゃない？前に茅野、『神崎さんと一緒に作るんだ』みたいなこと言ってたし。」

「そっかー。まあもらえるんだったら別にいいか！」

そんな話をしているうちにHRの時間になったらしい。

殺せんせーが、教室の中に入ってきた。

「ヌルフフフ、皆さんバレンタインのことで盛り上がっていますねえ。」

…そうだ！皆さん今日は特別授業を行いますか？」

((((明らかにゲスイ顔してる!!??))))

「つつつつつて誰がするかあ！んなもん！」

「すんげえゲスイ顔で、ゲスイこと言ってんじゃねえ！」

「てか自分がしたいだけだろ！なんか学園モノっぽいイベントだから！」

「本音が見え見えなんだよ、このタコ!!？」

先生の提案から一秒も置かないうちに、クラス中ブーイングと銃声の嵐に包まれた。

「だ、だ、だ、だっていいじゃありませんか！それに、高校皆さん同じなんですよ？ほらっもしかしたら全員クラスが同じになるかもしれないですし、そのために皆さんの結束をより深くしようとか…」

「すでに、かなり深いわ！」

「第一全員同じクラスとかほぼ100%無理だし！」

「ニユア！そ、そんなこと言わずに…。」

そんな中、それを聞いていたビッチ先生が…

「あらっ面白そうじゃない、特別授業。なんなら私が教えようか？」

((((なんかビッチ(先生)も乗ってきたし!))))

ーこうなったらめんどくさい。

「ヌルフフフ、では決定ですねえ。あつ、ちなみに体育の授業はいつも通り行うということだ。」

た。
ーこのようにして、僕らのバレンタインデー特別授業が始まっ

第6話 バレンタインの時間 二時間

「特別授業」と言いつつ、その日は一時間・二時間と普通に授業を行った。

そして三時間の体育の授業が終わって、やっと殺せんせーが僕らに言った。

「ああ、男子の皆さんは着替えないでください。女子の皆さんは教室にいるビッチ先生の指示に従ってください。」

((何したいんだ、あのタコ!))

何が起きるんだ…とみんなが思う中、殺せんせーが、
「では皆さん…」

ケイドロをしましょう!

「「「「「「はあ!?!?」」」」」」

…一方女子はというと、

「じゃあみんな、チョコ作るわよ。」

((うん、だろうね。))

「作って言ってもさあ、『この人にわたす!』って決まっている人の分は持ってきてただけど?」

「そーそー。」

「あーじゃー友チョコでも作ればいいじゃない。」

「…それってこの企画の意味ないんじゃない?」

そう正論をいう女子たちに、ビッチ先生が…

「黙らっしやい、そこ!!?いいから作るわよ!!?」

「「「「「はい。」」」」」

裏山で、僕らは前回同様少し談笑しながら逃げていた。

「なあ、なんで俺らケイドロしてんの？」

「…さあ。」

「おい、そんなにしゃべってたらまた鳥間先生に殺られんぞー。」

時間は数分前にさかのぼる…。

「ケイドロって…なんでだよ、殺せんせー!!?」

「問答無用!!? ルールは以前と一緒。あ、でも追いかけるのは、鳥間先生のみです。」

「…殺せんせーは?」

「牢屋に待機しています。」

「要は見張りな。」

「あ、今度は絶対に逃さないの。」

「…てかよく鳥間先生乗ってくれたな。」

「訓練の一環だと言われたらな。」

「いや、明らかに違いますよね、これ。」

「なんですんのかの理由も見え見え。」

「まあまあいいじゃないですか。」

「仮にするにしても、ハンデくれよ。」

「そーだ。じゃないと勝てねーもん。」

…ここで前と同じくブーイングが起こる。

そんな男子たちを見た殺せんせーは、

「うーむ、分かりました。では牢屋に入った人を一人だけ見逃しましょう。あつ、ただしラスト1分になったらダメですよ。」

「…かなり気に入らないけど…まあいいか。」

「では、今から五分後に鳥間先生が追いかけるので、皆さん逃げてください。あと制限時間は一時間なので。」

…と、今に至る訳なんだが…。

「冷静になって考えたんだけど…あれハンデじゃなくね?」
「確かに。」

「ま、どーせこの間に女子がチョコ作ってんだろーけど。」

「なんともまあ、分かりやすい時間の稼ぎ方…。」

僕らは前と同じく四人一組に分かれて逃げていた。

…人数の関係で、僕の班は三人だが。

「でもさあ、女子だってチョコ持ってきてるだろ。」

この時間絶対意味ないと思うんだけど…。」

「全く同感。」

「僕も。」

杉野の言葉に、僕とカルマは同意する。

だが、今さら文句を言っても仕方ないので…

「ま、時間稼ぎとはいえやるか。」

「そーそー、これもあのタコを殺る『訓練』って思えばねえ。」

ーー同時刻、モミの木の近くにて。

他の班同様、談笑をしている班があった。…他の班と違ったのは周りに無警戒だったことだろうか。

殺せんせーがくれたハンデについて、岡島が切り出した。

「一人だけ見逃すって…誰にすんだよ。」

「まあ、機動力が高い奴になんたるな。」

「木村あたりか。」

「おい、俺を勝手に殺んな。」

「でもマジでそのあたりになんたるーな。」

そこにいたのは岡島・木村・菅谷・三村の四人である。
と、そこに…

文字通り『鬼』が来た。

「…岡島君、木村君、菅谷君、三村君、

逮捕だ。」

「「「…はい？」」」」

第7話 バレンタインの時間 三時間

男子がケイドロをしているところ、女子はというと…

「ねえ、あれ殺せんせーじゃない？」

「…なんか警官のコスプレしてるよね。」

「つてことは…。」

「…男子ドンマイ。」

何かを察知した女子たち全員は男子たちに激しく同情した。

一方その頃牢屋では…

「…何すぐに捕まってるの、岡島？」

「…マジで悪い。」

岡島がカルマから叱責を受けていた。

「ちやんと周り警戒してた？」

「…してないです。ふつーに話してました。」

「俺しろって何回も繰り返して言ったよね？」

「悪かったって!!?てか殺気込めて話すのまじめにやめて!!?おまえがやったらシヤレにならん！」

「まあ他にも言いたいことはあるけど、烏間先生が来たらヤバいからそろそろ切るわー。またあとでゆつつくり話そっか。」

「怖いわ！てかなんで俺だけなんだよ！他にも三人い…通信切りやがったああああ!!?」

「いや岡島、俺らを売るな。」

「…大変そうだね。男子も。」

「なんか早速捕まった人が四人もいるし。」

「四人一組で動いてるんじゃない？前みたいに。」

「だからって…すぐに捕まる？」

「まあ…ね。」

「ちよつとそこ！口動かさずに手を動かさない！」
「「「：はぁーい。」」」」

通信を切ったカルマは、杉野からチェックを入れられていた。

「カルマ、今のまままあ怖かったぞ。」

「ん？そう？気のせいじゃない？」

「絶対違う。」

「気のせいだつ：て。」

そのとき、急にカルマは木の上に飛び乗った。

「どうした？」

という杉野の質問に対し、カルマはただ一言、

「察して!!?」

その言葉にすぐに反応した渚はともかく、残された杉野は：

「杉野君

逮捕だ。」

一旦僕らは散ったけど、また別の場所で合流した。

「烏間先生マジで怖ええわ：。」

「：同感。」

「：コレ、作戦立てないと：間違いなく殺られる気がする。」

「でも作戦って：前はこれで撒けたのに：。」

「：もういつそ烏間先生捕まえるか？」

「はい？」

…きつと、いや間違いなくそのときの僕は（何言ってるの？）って顔をしてたと思う。それを見たカルマは、

「：ごめん、やっぱ無理。」

「：ていうか作戦以前に、二人で先生撒くのは無理でしょ？とりあえず他の班いかない？」

「：そーだね。あつ、それかどっかの班から一人引つ張り出すか。」

「：そつか。じゃあそうする？」

「俺、ちよつと欲しい奴一人いるから。」

と、カルマがある人物と通信を始めた。

「もしもし？」

寺坂？」

静かだ。

先程まではわずかな話し声が聞こえた。
だが今は…

物音は『ほとんど』しない。

と、遠くで「カサツ」と音がした。

「何か」が動いた音だ。

次の瞬間、『鬼』はその方向へ向かっていった。

カルマは

「ふー」と（音にならない程度に）息を吐いた。

そして、彼の前にいる人の肩を叩き、尋ねた。

『成果はどうだった？』

イトナ。』

『バッチリだ。鳥間は今ドローンの方に行った。』

『近くには誰もいないよね？』

『いない。全員の位置は把握している。』

『りよーかい。じゃあ続けて。』

そう。今カルマたちはチャットで会話をしている。

「もしかしたら鳥間先生は俺らの声で居場所の特定をしてんじゃない？」という懸念からだった。

時間は数分前にさかのぼる…。

「もしもし？寺坂？」

「：嫌な予感しかしないが、なんだ？」

「突然で悪いんだけど：イトナ貸して？」

「ああ？なんでだよ！」

「もう知ってると思うけど、俺の班の杉野が殺られてさあ、」

「おまえ見捨てたな？」

「見捨ててないよ。渚が証人。」

「ああそうか。でなんだ？」

「もともと三人しかいないのに一人殺られたからさ、結構ヤバいんだよね。で、ちやうど今思いついた作戦にイトナがいるからさ、貸してくんない？」

「ああ、はいはい。」

「あと、これからの会話は全部チャット使って。もしかしたら烏間先生、俺らの声で場所調べてるかもしれないし。」

「はいはい、りょーかい。」

で、今に至る訳である。

残り時間は40分。残りのメンバーはあと10人。

第8話 バレンタインの時間 四時間

あまりにもすんなりということが進んだため、カルマは不信感を抱いていた。

(…何かおかしい。烏間先生ってこんなにチョロかったつけ?)

ドローンに烏間先生をおびき寄せる。作戦が成功した…と思っていたが…。

何というか、静か『すぎる』のだ。この山が。

OKの指示は出したもの…普通はこんなにも静かだと警戒する。

烏間先生が相手ともなればなおさらだ。

それも踏まえて次の作戦も考えていたのだが…。

(…一応指示出しくくか…。)

『寺坂?』

一方牢屋の方は…

「なあ殺せんせー、俺見逃してくんね?」

「あつ、ズリイぞ、岡島。俺らも逃げてえよ。」

なんやかんや言って牢屋では脱走を志願する人が激増した。

そんな男子たちに殺せんせーは、

「黙らっしやい!!?さつきは言い忘れていましたが、復活の条件は『全

員一致でその人の復活を望む時』のみです!」

「」「…はあ!??」「」「」

「ふざけんじやねえ!」

「そんな条件クリアできる奴いねえよ!!?」

あまりの横暴とも取れる措置に、そこにいた5人はブーイングをしたが、

「いーえ!!?ていうかそもそも早くに捕まった君たちが悪いんですよ。バーカバーカ。」

「」「ガキか!!?」「」「」

「それに岡島君・木村君・菅谷君・三村君の四人はしゃべってたから捕まったんでしょう?そんなの自己責任ですよくだ。」

「…マジでウゼエ。」

「文句を言う暇あつたら職務計算ドリルをしなさい！」

「なんだかんだ言つて楽しそうだね、男子。」

「自分もやりたいかと言われたらやだけどね。」

そう言い、女子たちはチョコを作っていた。

一方その頃、カルマは寺坂に…

『寺坂？』

『次は何だ。』

『俺今から…』

渚をそつちに派遣する。』

『は？』

『はつきり言つて、渚殺られたら結構イタイからさ。』

『俺ら班よりおまえらの班の方がドローンから遠いだろ。だったらそつちの方が安全なんじゃねえか？』

『だからこそそつちの方が安全なんだよ。』

『は？意味わかんねえ。それに渚がこつち来たらおまえら二人になるだろ。』

『ああ、そこは大丈夫。そういうことだから。じゃ。』

そして磯貝の班はというと…

(あと30分か…。)

と、そこに

『磯貝、新情報。』

『何、前原？』

『さつき殺せんせーが言つてたハンデ、「全員一致」じゃねえとダメらしい。』

『どういう意味？』

『全員が「その人でいい」って言わないと見逃さないってことだと。』
『マジかよ…。』

その時、

(ん？カルマから？)

『磯貝？』

『どうした、カルマ。』

『あと30分の指示磯貝に任せるから。』

『は？何で？』

『多分俺ら今から烏間先生に捕まるから。』

『何で？』

『俺らが一番ドローンから遠いから。多分寺坂の班が最後まで残ると
思うけど。』

『そっか。了解。』

『じゃあよろしく。』

ちょうどその頃烏間先生はというと：

(やはりドローンか。前にイトナ君が作っていたからな。ということ
は少なくともイトナ君はこの近くにはいないな。)

…元に戻ってみるか。)

残り時間は30分。残りのメンバーは、あと10人。

第9話 バレンタインの時間 五時間

ドローンで烏間先生を観察していたイトナがカルマに変化を伝える。

『カルマ。烏間に動きがあった。』

『こつちに来てる感じ?』

『ああ。』

『OK。じゃ、磯貝に伝えるわ。』

その頃磯貝は、

(カルマは『寺坂の班が最後まで残る』っていったよな。…じゃあ寺坂の班は動かさない方がいいのか?)

残り時間の判断を任された磯貝は…正直迷っていた。どの班をどう動かすか…。

と、そこにカルマから連絡が入った。

『磯貝。烏間先生俺らの班の近くに来るみたいだから、それを踏まえて判断よろしく。』

…寺坂の班は動かさない方がいいな。

確か牢屋からドローンまで10分程度かかるはずだ。

そしてカルマの班からここまでは5分弱、俺らが足止めできたとして…3分がギリギリか。

あと、残り時間は25分…

(…あれ? いけるか?)

ちょうどそのとき、カルマの班では…

「イトナ、来たぞー!」

「ああ。わかった。」

牢屋の近くにいたカルマとイトナは烏間先生を見つけると、別々の方向に走っていった。が、当然烏間先生の手から逃れられる訳はなく…

「カルマ君、イトナ君。逮捕だ。」

烏間先生が去った後…

「烏間先生さあ、絶対『あのルール』忘れてるよね。」

「…可能性あるな。」

「磯貝は気づいたかなあ。」

同じ頃、磯貝の班では…

『カルマとイトナが殺られたって。』

『予定通りだ。問題ないよ。』

そういう磯貝に、前原は尋ねた。

『…問題ないのか?』

『ないよ。そろそろ寺坂の班に指示入れるからさ。烏間先生来たら言うて。』

(あと20分か…もし計算通りことが進めば、多分俺らは勝てるよな…。)

そして…

「烏間先生来たぞ!」

「了解!」

その声で、磯貝・竹林・千葉・前原は四方に散らばった。

…訓練の成果もあつたのか、烏間先生が全員をタツチするの殺に予想通り3分ほどかかった。

「あと10分強か…。」

「時間稼げたか?」

そう聞く磯貝に、千葉が答えた。

「…少しだけな。」

「…そろそろいくか?」

「そうだな。」

それから数分後、寺坂班にて。

「烏間先生来たよ!!?」

「おう!」

その渚の声で、寺坂班も磯貝班同様に四方に散らばった。ただ：磯貝班とは、機動力が大きく違っていた。

「渚君・寺坂君・村松君・吉田君逮捕だ。」

…これで全員か。」

そう。烏間先生は確かに全員をタッチした。…が、

「はあ？何言ってるんだよ？あと一人残ってるだろーが。」

「まあぜってー捕まんねーけどな。」

「…何？」

寺坂らに聞き返す烏間先生に、渚が解説した。

「だって烏間先生、あと5分くらい時間余ってますけど…」

それまでに牢屋に戻るのはいくら烏間先生でも不可能でしょう？

「!!?しまった!」

時間は15分ほど前にさかのぼる…。

そしてそれは磯貝が寺坂にチャットを交わした時だ。

『ああ、寺坂。』

『磯貝か。なんだよ。』

『おまえさ、殺せんせーが俺らに出したハンデが「全員一致」だって知ってるか?』

『おう。渚から聞いた。』

『じゃあさ、見逃す奴木村にしてくんないか?』

『わかった。』

『あと、可能な限り時間使って。俺らも使うけど、あとの時間がなくなった方がいいから。』

『はいはい。』

『じゃ、よろしくな!』

…そう。ちょうど磯貝の班が捕まった時に木村が牢屋から復活したのだ。

つまり、烏間先生は絶対に木村を捕まえることは出来ない。

「ヌルフフフ。一時間経ちました。終了です!!?」

「で、結局さあ殺せんせー…これなんのためにやったの?」

「?いえ?意味など特にありませんでしたか?」

「二二二…はあ?」

「なんだよそれ!!?俺らの頑張りを返せ!!?」

「本当にただの時間潰しだったんだな!」

「ニユア!!?で、でもクラスの親睦は深まったでしょう?結果オーライですよ。結果オーライ。」

「だからすでに深いんだよ!!?」

「四時間前と同じことを言わすな!!?」

「そんなことを言わずに。」

…こうして、3—Eとして最後のケイドロが終わった。

そして女子も準備が終わり、とうとう特別授業の本番となった!!?

第10話 バレンタインの時間 六時間目

「さあ皆さん、教室に戻りましょう。」

ケイドロが終わり、男子は全員教室に戻った。

女子はすでに着席しているようだ。

そして殺せんせーは、クラス全員が席に座ったのを確認すると、
「では…」

チョコを渡してください!!?」

「「「「はあ!?!?」「」」」」

「何それ、意味分かんない!!? 何で先生の前でわざわざ渡さなきゃダメなのよ!」

「渡すにしても先生出て行って!!?」

殺せんせーの言葉に、クラスみんな（主に女子）がブーイングをした。それを見た先生は、

「ニユア!!?!?!? 分かりましたよ!!?!? 出ればいいんですよ! 出れば!!?!?」

出て行ってくれる分は別にいいのだが…なんか素直だ。

なので一応片岡が、

「…先生は教員室で待機ね?」

「え?」

「当たり前でしょ? 盗み聞きされたらたまったもんじゃない。」

「ぬぬぬ…まあいいでしょう。」

「OK! じゃあ烏間先生、ビッチ先生、見張ってて。」

「ニユア!!?!?」

「よし! 殺せんせーも追い出したし、チョコ渡そっか!」

「うん!」

その声と同時にみんなが班に分かれてチョコを渡し始める。

まず一班…

「みんな、いつもありがとう。」

「陽菜乃もありがとう! また高校でも仲良くしてね!」

「もちろん!」

それを見た前原は、

「…女子同士でチョコ出回ってるけど、俺らにはないんかい。」
と、そこへ…

「磯貝君、木村、あげる。」

「あ、ども。」

「ちよつと岡野、ひどくね!?？」

「だって前原、毎年女子から結構もらうんでしょ？」

「いや確かにもらうけど！俺だけないって明らかにひどいだろ!!？」

「はあ…仕方ないからあげるよ。ほら。」

「なんだ、あつたのかよ。サンキューな。」

「…うん。」

((…)) (いい加減気づけよ、前原(君)!!?) ((…))

そのやりとりを見ていた一班のみんなは、前原に心の中で突っ込んだ。
だ。

一方では…

「あつ、磯貝君。」

「ん?どうした、片岡?」

「放課後ちよつと裏山に来てくれる?」

「?ああ、わかった。」

片岡が磯貝を呼び寄せていた。

次に二班…

「凜花、不破ちゃん、チョコあげる。」

「あつありがとう!」

「…ありがとう。」

それを見た岡島は、

「中村あ、俺のはねえの?」

と聞いたが、中村は

「うん。ない。」

「ひどくね!?？」

あまりにきつぱりと断られたので、岡島はかなり落ち込んだ。
「岡島にチョコはないよ。ねえ。」

「うん。」

「ないわね。」

「くつつつそお！おまえら数年後にチョコ渡さなかったの後悔しろ！！？」

そんな岡島を横目で見つつ、速水は千葉に話しかけていた。

「千葉、放課後裏山の射撃場で。」

「ん。わかった。」

三班では…

「はい。みんな、チョコレート。」

「おう。ありがとな、原。」

原が三班の全員にチョコを渡していた。

そしてその後、寺坂は狭間に尋ねた。

「で、狭間はねえのかよ。」

「しつこい男狭間嫌われるわよ、寺坂。あ、失礼。すでに嫌われてたわね。」

「るっせえ！！？ようはねえんだな！」

「…一応あるけど、今ちよつとタイミングが悪いから放課後まとめて渡すわ。」

「？おう。了解。」

寺坂は若干の違和感を感じつつも、それを承諾した。

四班では…

「渚、カルマ君、杉野、はい、チョコ。」

「ん。ありがと。」

茅野・奥田・神崎が、渚・カルマ・杉野にチョコを渡していた。

「へへん、今回私は神崎さんと奥田さんと一緒に作ったのだ。」

「ははは、前に茅野言ってたもんね。」

「はい！私初めてチョコレートを作ったので、とても楽しかったです！」

「それは良かったあ。」

そういう奥田に、茅野は安堵の表情を浮かべていた。

…みんな先生を追い出すことには成功したわけだが、クラスの目も

あるこの場で本命を渡す人はほとんどいない。

多分放課後にまとめて渡すのだろう。

そうこうしてるうちにみんな一通り渡し終えたようで、殺せんせーが教室に戻ってきた。

そして放課後。普段は訓練を受けている人たちも、その日は裏山に行った。

そして教室では…

(…どうしよう。渡そっかな…。)

その少女は机の中にあるチョコレートの箱を見て迷っていた。と、

「おやおやおや?..」

「それを一体どうしようというのかね?..」

二人のクラスメート悪魔がその少女…茅野の後ろに現れた。

第11話 バレンタインの時間 放課後

「え？何言ってるの、二人とも。余ったんだだよ。特別授業でチョコ作ったから。」

「へえ、なあんだ。私らはてつきりこの男にあげるもんかと。」

それと同時に中村が茅野に見せたのは…

渚とのキスの写真だった。

それを見た茅野は耳まで真っ赤にして、

「ゆるしてつかあさい…ゆるしてつかあさい…。」

とつぶやいていた。

茅野と渚。この二人をくつつければまとめていじれる…。

そう思ったカルマと中村は茅野を手伝うことにした。

茅野・カルマ・中村はその話をするために、体育倉庫に集まった。

「とはいえ、渚自己評価低いからねえ。自分が異性に好かれるとか思っちゃいけない。」

「そうそう。これにしても『茅野に悪いことした』って言ってる。ほぼ間違いないくちやんと口に出さないと伝えないよ?。」

順にそういう中村とカルマに、茅野は顔を赤くしながら言った。

「だって…お芝居でなら何回も演ったし、イメトレもしたけど…
リアル
本当に誰かを好きになったの初めてだから…。」

「どーやって渡せばいいかわからないって?。」

じゃ、裏山行こうよ。本命渡してる奴いっぱいいると思うし。いつもの訓練の活かしどころだよ。」

カルマはそう言っつて茅野を促した。

そんなわけで裏山に行くことになったのだが…

【千葉・速水】

パパパアン

「ほら。当たつたら。」

「すつご。粒チョコでも命中率変わんないんだ。約束だし全部あげる。尊敬してる。高校でもよろしく。」

「ん。サンキューな。」

「あの二人の射程距離はやっぱり独特だねえ。」

「：絶対マネできないし：あれって本命なの？」

【寺坂組】

「想いのこもった手作りチョコよ。手紙も添えとくから、近いうちに返事よろしくね。」

手紙を読んだ寺坂達は…

「こめたの思いじゃなくて呪いだろ!!？」

内容は…まあそういうことだ。

「てか、さつき言つてた『タイミング』って手紙これのことかよ!!？」

「チツ、しまった。奥田さんからもらったシアン化チョコ、寺坂の下駄箱に仕組もうとしたのに…先越された。」

そういうカルマに、茅野は…

「チョコをチョコと思わない人たちが暗躍してる!!？」

「…ていうか全つつ然参考になりそうなのがないよ。」

「んー…じゃ、あれはどう？」

【磯貝・片岡】

片岡が草むらから出してきたのは…

「え？こんなにもらつていいのか？」

「うん。ちょうど食べ盛りでしょ？弟さんと妹さん。家の近くにすつごく安い業務スーパーがあるからさ。」

「ほんとに悪いな。いつも。」

「うん。へーき。」

「ね。目的も渡し方も人それぞれでしょ？」

「茅野ちゃんもそれ渡す時に一言二言添えればいいんじゃない？」

「ん…ありがと。二人とも。」

「いいよ、全然。…ただ…」

中村が指さした先には…

「ヌルフフフ。くつついておる、くつついておる。」

「…あのゴシップタコに見られんのは氣にくわないよね。」

「ああ、それなら大丈夫。茅野ちゃん、『あれ』持ってきた？暗殺に使えそうだからって頼んでたやつ。」

「あつ、うん！」

教室にて…

「くつつつつそお!!?おれの分のチョコがねえ!!?さては裏山に隠したな!!?いいか渚!今年こそ俺は0個で終わらせないぞ!!?」

そんなことを言いながら裏山へと去った岡島を渚は少し笑いながら見送った。と、その時コートの袖を引っ張った人がいた。

無論、茅野である。

「茅野?」

「…渚。ちよつといいかな?」

教室に入ったはいいが、茅野は全然喋らない。…どうしたんだろう?

と、

「…渚は、将来どうするの?」

ああ、将来の話か。

少し悩んで、

「んー…なりたいたいものがやつと少しだけ見えてきた感じかなあ。」

僕はわかばパークでのさくらちゃんのことを思い出していた。

『先生以外に何があるの?』

純粹にそう聞かれて、初めて「先生」に憧れていた事に気がついた。その時、殺せんせーが一心不乱に何かを見ている姿が目に入ってきた。

「殺せんせー?何見てんだろ…。」

そして先生を打とうとしたが…射程圏外だったことを知り、少しがっかりしたり。

ちょうどその時、

「渚。」

「ん？」

「ありがとう。いつも隣にいてくれて。」

その手には…バレンタインのチョコ。

「…え？僕に？」

「うん。」

「そんな。ありがとうってこっちのセリフじゃ…」

「じゃあね、渚！また明日！」

「いざってときには自分を殺して他人のために…か。」

「ああいうところは雪村先生に似てんのかもね。」

で、殺せんせーに何仕掛けたの？」

「ああ、茅野ちゃんに一筆頼んで先生の机に置いたんだよ。…あんな効くんならちゃんと暗殺に使えば良かった。」

殺せんせーが見ていたのは…雪村先生の水着の写真だった。

第12話 バレンタイン 大人の時間

樽ヶ丘にある高級料理店：バレンタインデーのその日はいつもよりも、賑わいを見せていた。

事前に予約を入れれば、完全個室であることも有名である。

もちろんその日は、個室も満席になっていたが。

その部屋の一つに彼ら―烏間先生とビッチ先生―がいた。

始めはバレンタインの話をしていたが、間もなくビッチ先生が本題を切り出した。

「で、どうなのよ。そっちは。」

「…何がだ。」

「暗殺の話。『地球爆破の確率が1%以下になりました。バンザーイ。』…とはならないと思うけど。…それに『1%』って私自身はそんなに低い確率じゃないと思うし。」

いつになく真剣な表情をしているビッチ先生を見て、烏間先生は悟った。そして…

「俺自身詳しいことを聞いているわけじゃないから、細かいことは言えない。だが…世界中で合同暗殺計画が進められていることは知ってる。」

「…そう。」

その日の帰り道、ビッチ先生は烏間先生に打ち明けた。

「私ね、地球が爆破した方がいいと思うの。」

もし卒業までに殺せなかったとしてたら、どこかに必ず喪失感が残る。まして、国の暗殺であるタコが生徒達の目の前でなすすべもなく殺られたら？愛憎にまみれた暗殺者に残酷な恩師の死を見せつけられたら？

怖い。挫折・無力・トラウマ…どれもあの子たちの将来を歪めそう。純粹に暗殺を楽しんでたガキどもが醜い大人になるのを見たくないのよ。」

そう悲しそうに語るビッチ先生を見て、烏間先生も口を開いた。

「イリーナ。お前はこの仕事が終わったら暗殺者をやめろ。向いてな

い。」

それを聞いたビッチ先生は、烏間先生をにらみながら「なんですって?」

それに構わず烏間先生は続けた。

「お前は情が深すぎる。この一年で、致命的に深くなった。そんな状態で仕事を続ければ、余計苦しみが大きくなるだけだ。」

ビッチ先生はそれと同時に烏間先生に銃を構えた。

その瞬間、烏間先生が動きを封る。

「…堅気さんは、ずいぶん簡単に否定するのね。私が今まで積み上げてきた痕跡を。たくさん殺したのよ。そんな私を世間は絶対に認めない。」

その言葉を烏間先生は否定した。

「そんなことはない。『全ての経験は路みちを拓く道具ルーツになる。』そう教えてくれたのは生徒達だ。たとえ彼らは何があってもそのことを糧にして未来につなげるだろう。」

イリーナ。お前は防衛省ちで働け。その経験は、そこで必ず生きる。今まで殺した人は毎日神社に行って祈れ。それだけでいい。」

そして烏間先生はビッチ先生から銃を取り上げて、立ち去ろうとした。

「…神社って…私一応クリスチャンなんだけど。第一日本に身寄りもないし。」

すると、烏間先生は足を止めて言った。

「わからないか。」

俺の家の近くに教会はないぞ。」

その言葉の意味が初めは分からなかったビッチ先生も、しばらく考えているうちに…

(ええええええええええええええええええ!!?)

「ちよつとカラスマそれって…。」

「そういうことだ。」

「ちよつ、一つ屋根の下で男女が二人きりなんてふしだらな。」

「嫌なら一人で住め。」

「行くっ。行きます！」

夜の柵ヶ丘の街で、二人の声が響いていたという。

第13話 プライドの時間

場所は柵ヶ丘の住宅街。

カルマは駅までの道のりで不良に絡まれていた。

「はあ？」

「肩がぶつかっただって言ってんだろ。」

そう主張する不良たちに対し、カルマは煽りをかける。

「そつちが広がってるからじゃん。あつ、それか謝んなかったら何かあんの？」

「…このガキ…。」

不良たちが切れたのを確認すると、カルマは笑いながら…

「ははっ、やるんだ。」

そして殴る体制に入った。

が、

「申し訳ありませんでしたー!!?」

…殺せんせーである。

「どうか担任の私に免じてお許しを！この通り靴ならいくらでもなめますんで！」

不良たちは（な、何かキモい上に靴溶けてねえか？）と思い、

「ちっ、先公ならちゃんと生徒の態度ぐらい教育しとけ!!?」

と言い、立ち去った。

それを確認した殺せんせーは、

「カルマ君。この時期に暴力沙汰はダメでしょう。」

「フン。」

「この一年で、ずいぶん成長した君ですが、そのケンカっ早きはなかなか

か直りませんねえ。」

「…ある程度ケンカしてればバカもよってこないし。それに何で悪くないのに謝んなきゃダメなの？そんなことしたら…」

自分の中の大事な刃を失っちゃうよ。」

そう主張するカルマに対し、殺せんせーは顔を×にしてこう言った。

「それは違いますよ、カルマ君。本当に優れた殺し屋は、仕事中に通行人とぶつかれば…迷うことなく頭を下げるものですよ。ターゲットを狙う彼らからすれば、目の前のいざこざは無駄リスクでしかない。

また、君が目指す官僚の世界でも利益のために理不尽に頭を下げるといけない時もある。」

そしてカルマの頭にポン、と触手テをのせ、

「では…君に合った頭の下げ方を教えましょう。」

翌日、カルマは渚・杉野・寺坂・イトナと一緒に山を下りた。

いつもと違う表情を浮かべているカルマに対し、寺坂は、

「冴えねえ顔してんな、カルマ。またあのタコに鼻っ柱折られたか？」

その言葉に対し、イトナは、

「うらやましいか、寺坂。お前のだんごっ鼻じゃ折りようがない。」

「ああ!?？」

そのやりとりを聞いたカルマは、イトナの方を振り向いて尋ねた。

「イトナはさあ、最初会った時に言ってたじゃん？俺の方が強いとか弱いとか。そこらへんはもうこたわってないの〜？」

その質問にイトナは、

「あれは俺の言葉じゃなくて、触手の言葉だ。俺が本当に欲しかったのは…強ければ手に入るものではなかった。だからカルマ、お前の方

が強い。それでいい。」

その回答にカルマは「ふーん。」と、気のない返事をした。
その時、

「ちよつ…離してつたら!!?」

「あの声…矢田さんじゃない!?」

渚の声を皮切りに5人はその方向に走り出した。

そしてそこにいたのは6人の外国人だった。

「あーあ、やっぱ英語しゃべれねーか。日本の女は。」

「構わねーよ。体で会話できればな!ははははは。」

「おい、テメーら何やってんだ!!?手えどけろや!!?」

最初に口を開いた寺坂に、外国人達は

「つたく…頼むからヒトの言葉でしゃべってくれよ。」

すると…

「離せって言ってるの。うちの女子にあんたらの匂いがうつるんだよ。それが飼育係呼んでこようか、家畜共?」

外国人に対し挑発をしたカルマだったが…

「…なんだと?」

その外国人達はカルマに殺気を向けてきた。

そこでカルマは相手の実力に気がついた。

(…なんだこいつら。殺し屋か?どいつもこいつもめちやめちや強い。)

その時外国人の内の一人が、

「おい、赤いチビ。いいからおとなしく女を差し出せや。そしたら殺しやしねえよ。少し遊んだら返してやる。」

世界中動き回ったから飢えててよ。聞く話によると、日本の女は何されても従順に従うそうじゃねーか。」

「…このやろう!」

一方後ろでは渚と杉野が小声で、

「殺せんせーは?」

「カナダにメープルシロップ絞りに行ってる。」

「…てかこいつらそれも予定の内なんじゃ?」

その時、もう一人の外国人が

「いや。俺はこのガキも逃がさねえ。反抗的な目に侮辱の言葉。一つ社会のマナーを教え込まないと気がすまねえよ。」

カルマは外国人達を見て、

(…こいつ一人だけでも余裕で鷹岡より強い。そんなのが合わせて6人。こっちの戦力は5人。この路上で不意を突けば1人か2人なら倒せるかもしれない。…でもそれまでだ。絶対に矢田さんは助けられない。なぜって…奥の奴が別格でやばい。下手すれば…烏間先生より。こいつらを本気にさせてしまったら…どんな結末が待っているか…)

「…悪かったよ。」

「ああ!?!」

考えた末、カルマは謝る選択をした。

「謝るから、離してやってよ。みんな…卒業前の大事な時期なんだ。」
「日本語で謝罪の言葉が聞きてえなあ。ロツポンギで日本人ぶちのめした時に覚えたからよ。」

外国人にそう言われ、カルマは一瞬躊躇した。

が、昨日殺せんせーに言われた言葉を思い出す。

『カルマ君、プライドの刃は捨てなくていい。一度足元に置くだけです。』

カルマは胸に手を当てて、教え通りプライドの刃を足元に置いた。
そして、

「…すいませんでした。今日のところは勘弁してください。」

『置いた刃をまつすぐに見なさい。正しい志が宿った刃なら、地面でも煌々と輝いているはずです。』

「プ、ははははは！びびんなよ！ちよつとからかっただけだって！」

「はなからこんなガキに興味ねえよ。」

「ちよつと泣きそうな顔すんなよ。あつ本当に泣いた？ははは！」

外国人達は矢田を離して立ち去った。最後にリーダー格の男が、

「すまなかつたね。全員私の友人なんだが、少しクセのある奴が多くてね。」

外国人の全員いなくなったのを確認してからカルマは地面に手を伸ばし、プライドの刃を拾った。

そして胸に刃を戻した後、一息ついた。

「渚はすごいよね。鷹岡に平然とやってのけたんだからさ。」

「うん。こらえてくれて本当に助かったよ。」

「あのタコが言うにはさ、社会に出たらこういうことしなきゃいけないだって。…なんも得しなくね、これ？」

その質問に対して、矢田が答えた。

「十分だよ、カルマ君。おかげでこうやって無事に帰ってるんだから。」

「…無事が見返りねえ。」

そして下校していると、本校舎の近くで「イトナ」と呼ぶ声がした。

そこに立っていたのは…

「よかった。学校に行けば会えると思ってた。」

「え…」

「父さん？」

「」「えっ…？」「」

「お前が今どこで暮らしているのかわからなくてな。『無事』でいてくれて本当によかった。」

『無事』という言葉に渚と杉野がカルマを小突いた。

「無事だつてさ。」

「債務の整理がやつとついたらんだ。これからは一緒に暮らせる。」

声変わりしたな。背も伸びた。よく一人で頑張ったな、イトナ。」

「…うん。」

普段あまり表情を変えないイトナが嬉し涙を流していた。

それを見つつ、

(ま、今回はこれでよしとするか。)

第14話 思い出の時間

ここは防衛省。そこでは少しずつ、しかし確実に巨大暗殺計画がなされていた。

司令官を始め、各国首脳の目の前には巨大な機械が置いてあった。「…改めて見るとすごいサイズだな。これでまだ計画の一部だとは…。」

「やれるでしょうか？」

そのような部下の言葉に対し、司令官は、

「やれるやれないの問題ではない。その兵器は奴をいかにスムーズに、かつスマートに殺すためのものだ。そのシステムを理解してもらうために…ホウジョウ、君を呼んだ。」

ホウジョウと呼ばれた男は

「…おそれいります。」

と言った。

そしてその男は…

カルマが『烏間先生より強い』と評した男だった。

ここはE組。暗殺期限まであと二週間を切り、みんなが卒業に向け

での準備をしていた時、いつも通り殺せんせーが口を開いた。

「ではでは皆さん、あと卒業まで一週間ほどになりました！」

こんなめでたい時にすることといえばあ…」

クラスみんな（主に男子）が、

「おお〜？」

「宴だ、宴！」

と言っているさなか…

「編集作業です。」

「「「「いや、何でだよ!!?」」」」」

殺せんせーの言葉に、その場にいたほぼ全員が同時に突っ込んだ。

すると殺せんせーは、

「もちろん卒業アルバムを作るのです。E組だけの！」

「そっかあ。学校全体のは作っちゃったもんね。担任が鳥間先生つてことで。」

「そこに先生が一枚も写ってないのもかわいそうだよね。」

殺せんせーの言葉に対し、岡野と矢田が補足をした。

「いや…ばれない程度にちよくちよく写ってはいるんだけど…はつきり言ってこれじゃ心霊写真だな。」

「その通り!!?だからちゃんとその写真を使いたいです。皆さんのスキについて撮った秘蔵の自撮り写真は実に3万枚！」

そんなわけで、今日はこの中から皆でベストな写真を選定しましよ
う!!?」

「…いつの間にこんな撮ったんだよ…。」

「さすが覗き間先生。」

クラス全員がぞろぞろと教卓に集まっていったが…ただ一人、中村は向かおうとしなかった。

「私自分の写真見んの嫌なんだよね〜。」

「…なんで?」

「目え小っちゃいから。」

しかしそういう生徒の所にも行くのがあの先生タコである。

「心配ないですよ、中村さん！目を大きく加工したバージョンも用意しています。」

そう言いつつ、殺せんせーは中村に写真を渡した。

「…相も変わらず手厚いことで。」

「ね？だから皆と一緒に選びましょう!!？」

そこで杉野が

「でもさ…ベタな写真は正規のアルバムで十分使ったよな。」

「もう一冊作るのなら…意外性のある写真とか？」

でも常に用意周到な殺せんせーである。

「お任せあれ。」

と言いつつ、速水に一枚の写真を見せる。

それを見た速水は恥ずかしさのあまり顔を赤くして、震えていた。

「クールビューティー速水、ペットシヨップにて。」

それはペットシヨップで速水がネコに頬ずりしていた写真だった。

「あとこれ。エアギター三村、夜の校舎にて。」

それを見て、三村は顔を真っ赤にした。

そしてその瞬間、速水と三村は

(い…いたのか！後ろに!!?)

「まだまだありますよお〜。」

姫系の服を試着するだけのプリンセス片岡。

ゴキブリが出た瞬間の乙女村松。

理科室にてベタな失敗をするマッドサイエンティスト奥田。

ゲーセンで悪徳ゲーマーを成敗する神崎有鬼子。

真夜中の校舎を裸で走るネイキッド岡島。」

自分の写真を見た岡島は、

「おい…ちよつと待て…。」

ひよつとしてこんなかに…

俺のものすんげーヤバイ写真もあるんじゃないか？

「」「それ以上のがあんのか!?!」「」

「自分の探せ!!? 回収して捨てるんだ!!?」

一連の恥ずかしい写真を見た皆は走って写真の所へ向かった。

「おやおや、編集作業に熱がこもってきましたねえ。」

そして一同は自分の恥ずかしい写真を見つけると、破り捨てた。

(…こんなとこまで撮られていたとは!!?)(…)

「では次は学校行事です。このあたりはどうでしょう、渚君?」

それらの写真には、試験・夏休み・学園祭…全て殺る気で挑んだ皆の姿があった。

(…本当に二度とない特殊な一年を過ごしたなあ。)

でも殺せんせーは、

「ああ、でも撮りためた量じゃ全然足りない! 目標は一万ページのアルバムを作ることなのに!!?」

「俺らがどンドン破ってるしな。」

「てか広辞苑でも三千ページねえぞ。」

殺せんせーの言葉に対し、イトナと寺坂が答えた。

すると殺せんせーは例の犬の着ぐるみを着て、

「皆さん、外に出なさい! 服を変えて写真の幅を増やしましょう!」

それからみんなは生物史・日本史・世界史・宗教史など、色んなお題と衣装で写真を撮った。

「良いですよ、良いですよ! 皆さんどンドン着替えて撮るんです!」

そんな殺せんせーを遠目で見つっ、茅野は口を開いた。

「なんかさ、この2月の殺せんせー…もちろん受験とか手伝ってくれてたけど…全体的に好き放題やってたよね。」

「うん…。僕らも振り回されてた。」

そんな会話をしている渚と茅野に、烏間先生が、

「多分、君たちに甘えているんだらう。」

「烏間先生。」

「この一年で、君たちは十分成長した。一人前になった生徒たちに、今度は自分が甘えたい…そう思っているんだらうな。」

「…そっかあ。」

そして渚は烏間先生に、

「烏間先生にとっても：僕らはそういう生徒になれたでしょうか？」
「ああ。もし俺が困ったら、迷わず君らを信頼し、任せるだろうな。」

次の瞬間、烏間先生とビッチ先生も着替えさせられ、写真を撮られていた。

「!??なんだ、これは。」

「烏間先生もビッチ先生も生徒に合わせてコスプレしなきゃ。試着ともいうべきですかねえ。」

それを見た生徒一同は「ヒューヒュー」と二人を囁いていた。

そしてビッチ先生は…

「カラスマ、初夜は待ったなし。」

「やかましい!!?」

一通り写真を撮り終えた殺せんせーは、

「ふう、学校での撮影はこれで十分でしょう。」

と言いつつ、生徒全員を大きいカバンに入れた。

「ちよつと待て!!? 十分ならなんで俺らバッグに詰め込まれてんだ!!?」

「この校舎の中だけではとても足りない。世界中で皆さんと一緒に写真撮るんです。」

「今から世界回るとか、冗談だろ!??」

「ただの卒アルじゃ…」

そんなみんなの声をよそに殺せんせーはカバンに手をかけて、
「皆さん全員をゼロから持ち上げる力はありませんが…こうやってたっぷり反動をつければあ…」

「」「全く聞いてない!!?」「」「」

そして殺せんせーとE組全員は世界中に飛び立った。

その反動で、教室の写真が風に舞った。

そしてその中には…

E組全員で撮った写真もあった。

卒業の3月。

殺せんせーの暗殺期限まで…あと…

第15話 確定の時間

E組全員で世界中を回り、みんな帰ってきたときにはくたくたになっただけだ。

「い…一日で30カ国回るとか…。」

「しかも撮ってすぐにまた移動…。観光するヒマもなかった…。」

「なんでここまで…。」

そして肝心の言い出しっぺもかなり疲れていて、酸素ボンベを吸っていた。

その後みんなの質問に答えた。

「ムルッフ、楽しいからですよ。楽しいから手間暇かけて工夫して、力の限り取り組めるんです。」

まずは自分が楽しむことです。皆さんもそういう場所を見つけてください。」

その日、渚は帰り道でこの一年のことを考えていた。

(…この二月は殺せんせーを、ターゲットとしてじゃなくなっちゃって先生としてみえてきた。

少しずつ見えてきた。僕ら一人一人をちゃんと見て、自分の力が及ぶ範囲で頑張って…何より自分自身が楽しんでいた。超生物でも人間でもやることは一緒なんだ。)

次の日、渚はわかばパークへ行った。

さくらちゃんに勉強を教えるためだ。

そしてその日はさくらちゃんの前には5冊のテストが置いてあった。渚が用意したものである。

「…このテストが合格点なら…。」

「うん。自信を持って六年生に戻る学力だよ。」

それどころか一学期の間は勉強のことで悩まずに済む。余裕を持って新しいクラスに馴染めるよ。」

「…うん。」

そしてさくらちゃんは鉛筆を握り、テストを解き始めた。
それを見て、渚は

(僕の力は、暗殺の時に最も威力を発揮する。)

テストを解き進めるさくらちゃんは

(このテストが終わったら学校に戻る。このテストが終わったら学校に戻る。)

しかしそう考えているうちにいじめられていたときのことを思い出していった。

(このテストが終わったら…学…校…)

テストを解く手が止まり、意識の波長が乱れる。

それに気がついた渚は…

さくらちゃんの首元に手をやった。

そのおかげで波長が元に戻った。

それを確認し、渚が声をかけた。

「大丈夫。落ち着いて。やればできるから。」

「…やる!!?」

さくらちゃんは元の速さでテストを解き始めた。

その晴れやかな顔を見た渚は、

(これが正しい刃の使い方かはわからない。でも、こんな顔が見れるんなら、きつと僕も頑張れるし、楽しいだろうな。)

翌日、渚は進路指導のために教員室に入った。

そして殺せんせーは渚に尋ねた。

「さて、渚君。君は何か知りたいものを見つけましたか？」

その質問に、渚は答える。

「僕は先生になるよ、殺せんせー。」

先生みたいに速くないし、先生みたいに無敵じゃないし、先生みたいに頭も良くない。でも…殺せんせーみたいな先生に。」

それを聞いた殺せんせーは、顔を二重丸にして、
「うん。それがいい。君に合ってる。」

そして先生は続ける。

「君たちが必ず平等に授かり、いずれ平等に失う才能があります。」

それは、若さです。その才能が逃げないうちに何回も失敗して修正し、立ち止まらずに前に泳いでいってください。」

そう言っつて、いつものように渚の頭にぽん、と優しく手を乗せた。

「はい！殺せんせー、また明日!!？」

そう言っつと、渚は帰途についた。

(暗殺の才能は必ず教師の仕事に生きる。第二の刃にこれを背負っつて、これからは第一の刃を磨くんだ。)

一方教員室では、殺せんせーと鳥間先生が話していた。

「彼で最後か。進路相談は。」

「ええ、皆さん本当に私を感動させてくれた。」

残る大仕事はアルバム作りですねえ。しばらくは学校で寝泊まりになるでしょう。」

「…そうか。」

「あなたとイリーナ先生の関係の進展も記事にしなれば。これから五時間ほど取材をしますよお。」

「誰がするか!!？帰る！」

そして鳥間先生は帰り際にドアの前で立ち止まり、

「…教育にいいアルバムにしろよ。」

と言っつて、立ち去った。

帰り道で、鳥間先生は思いにふけていた。

(…素直に認めよう。お前の作っつたこの教室で、どれだけ多くのことを学んだか…生徒も、俺も。)

そして教室からある程度離れた場所で、鳥間生徒は誰かに電話をかけた。

「…鳥間です。」

電話の相手は

「報告を。」

と言いつ、烏間を促した。

「奴は今単体で教室にいます。この後しばらく動くことはないでしょう。」

そして相手は、

「ご苦労。」

と言いつ、電話を切った。

そして…

「聞いつの通りだ。よつて、予定通り今夜…巨大暗殺を実行する。」

その男…巨大暗殺計画の司令官は、手元のボタンを押した。

(このボタンを押した時点で…

奴の死が、確定した。)

そして…宇宙から校舎へ…まっすぐに光が放たれた。

第16話 実行の時間

E組のみんなが異変に気がついたのは、光が放たれた直後だった。

その頃、防衛省の中は大騒ぎだった。

「第一射、校舎全域に命中!!?」

「奴は?」

「今確認中です!!?」

校舎の映像を確認している部下たちをよそに、司令官はその光の正体について話した。

「どうだ。校舎や山に傷一つ付いていないだろう。」

これが：対超生物透過レーザー衛星。通称、『天の矛』だ。

中性子の周波数をもとにして、リクガメベースの反物質生物をエネルギー源とし、さらにそれらを巨大な粒子加速器で増幅した後、高度400キロから巨大なレーザーを発射する。

このレーザーは様々な障害物を透過して、触手のみを破壊する。一切の前触れもなく学校全てを撃ち抜いた。いくら奴でも…。」

しかし：殺せんせーはすんでの所で脱出し、外にあった木に掴まっていた。

が、無傷なわけではなく、片手と触手が一本破壊されていた。

(校舎も服も無事なのに…触手だけが!!?)

それを見た司令部の人々は、

「うおおおお…」

「…嘘だろ?あれをかわすか!?!?」

「音もなく光速で降ってくるレーザーだぞ!?!?」

その状況を見た司令官は、

(なんとという勘の鋭さ。どうりで今までどんな暗殺者を退けてきたわけだ。

だが…それで終わりではない。せつかく助かったんだ。試しに逃げてみる、超生物。その先には…もう一つの兵器が稼働している。)

校舎から急いで離れようとする殺せんせーだったが、あるものを見て急ブレーキをかける。

そこにあつたのは…

「対超生物透過レーザーバリア。通称『地の盾』!!?」

これはあの超生物を殺すものではなく、その場に止めるためのものだ。逃げ場はゼロ。このレーザーは矛と同じで触手以外の様々なものを透過する。つまりレーザーは地中まで透過しているわけだ。

…できればプランAの第一射で仕留めたかった。ここから先のプランBは非常に面倒だからな。

だがこれも想定内。地上部隊を!ケースB—1で緊急配備!!?」

世界が一変した。E組のみんなは何が起こったのかすぐに察して学校へ急ごうとしたけれど…その直後に来たのは…烏間先生の自宅待機指示。

そこには、自宅待機のほかに「仕事」のことを一切話さないように、とも書かれていた。

装甲車両が…山につながる主要な道路を封鎖。

学校へレーザーを発射しているビルはすべて…一夜にして要塞のように生まれ変わり、100メートル以内の進入を禁じられた。

「どーゆうことだよ!!?」

殺せんせーはどーなつてんだ!!?ケータイもつながんねえ!!?」

翌日、E組のみんなは柵ヶ丘の住宅街に集まった。

珍しく声を荒げる前原に、律が答える。

「…教室にある私の本体ともつながりません。山につながる通信及び電源はすべてカットされているようです。」

その時不破が…

「…私の家、クラスの中で一番学校に近いんだけどさ、国から避難命令きてるんだ。兵隊さんがいっぱいいる。多分…この小さな街全体で一人じゃすまないよ。」

渚たちは悟った。甘すぎた、と。E組全員がこれから卒業まで何事も無く終わると思っていた自分に。そして、自分たちの知らない所ですべて準備をしていたそのすさまじさと周到さに。

某朝の情報生番組のニュースキャスターが、閉鎖されている道路で「柵ヶ丘市の丘陵地帯に突如現れた謎のドーム。これから政府が緊急発表があるようです!!?」

しかし…政府が言ったことは国民を始め、僕らの予想もはるかに超えたものだった。

「えー…今回柵ヶ丘に現れたドームにつきましては、現在は国家機密とさせていただきます。」

…簡潔に言うと、あのドームのことについてはまた一週間後にお知らせする。その時に質問に答える…。というものだ。

だが、殺せんせーの暗殺をほめかす内容も言っており、「昨年のも月の爆破に関して。」ということだ。

場所は防衛省。そこでは司令官が天の矛のことを話していた。

『天の矛』にも大きな弱点が三つある。一つは、エネルギーのチャージに時間がかかってしまうこと。フルパワーで撃つのに一週間はかかる。

二つ目は100パーセントまでチャージすると、衛星の場所が丸わかりになる点だ。エネルギーの一部が透過光として発散され、月よりも明るくなってしまふ。だから第一射は出力を20パーセントほどに押さえて…闇の中から校舎に狙いを定めて撃った。だが…それがかわされたからには躊躇はしない。

地の盾で奴を完全に閉じ込めた今、ゆっくり時間をかけて100パーセントまでチャージし、山の全域を覆い尽くすレーザーを発射する!!?

奴の死は決定している。あとは…不穏分子への対策のみだ。」

E組のみんなに烏間先生から送られてきたのは「レーザーの発射予定について」。それによると、発射されるのは三月十二日。

それは地球が減ぶかもしれない日の前日。

「…何勝手に決めていやがるんだ。ふぎけんじゃねえ。」

その寺坂の声と同時に僕ら——E組のみんなは学校へと走っていった。

……7日!!?
中学校生活最後のミッション。殺せんせ。の暗殺期限まで、あと

第17話 正論の時間

E組のみんなは旧校舎に向かっていった。だが、道路はすでに閉鎖されていて、自衛隊の人たちがたくさん立っていた。

E組のみんなに気がついた自衛隊員は、

「!??なんだ君たちは!??」

「通せよ!!?あの校舎の生徒だよ!!?」

「行きたいんです!!?あのバリアの中:殺せんせーの所へ!!?」

自衛隊員の言葉に吉田と原が声を上げた。

突如現れたE組に対し、自衛隊員は乱暴に止めようとした。

そこに、烏間先生が出てくる。

「やめろ!!?生徒に手荒くするな!」

「烏間先生!」

「なんすか、あれ!!?」

「私たち何も聞いてないよ〜!」

烏間先生に口々に言うみんなに、先生は答えた。

「:俺も直前まで知らされなかつた。事前にみんなが知っていれば:奴に計画がバレる恐れがあるからだろう。」

全員揃っているならちようどいい。『何も知らない。』と口裏を合わせるんだ!!?」

そんな烏間先生に片岡が代表して声を上げた。

「納得できません。殺せんせーに会わせてください!!?」

「:いや、ダメだ。行って人質に取られたら国も言い逃れができなくなる。」

「なつ:殺せんせーが人質なんてするわけ:。」

ちようどそのとき、周囲が騒がしくなった。

マスコミのようである。

「ご覧ください!!?あれは、あの校舎の生徒でしょうか!!?」

「少しお話しを聞いてもいいですか!!?」

「あの校舎の生徒として、何かこのことで知っていることがあります

か?」

「一部の報道では今回のことや月の爆破の件は組織ぐるめの犯行であるという見方がありますが、実際にはどうなんでしょうか!?!?」

「その組織の一員があなたがたの校舎に潜入し、脅していたという件については!?!?」

半分正解で、半分大間違い。

そんなマスコミの大迷惑な詮索に、寺坂や村松は、

「るっせえ!!?!? テメーらの知ったことじゃねーよ!!?!?」

「とにかくどけ、コラア!!?!?」

そしてマスコミに対しては、矢田と倉橋が弁解をする。

「わ…私たちのクラスに月の爆破の当事者はいません!!?!? 確かに今年新しく入った先生とかは何人かいますが、それは潜入とは言わないと思います!!?!?」

「それに、脅してたって…私たちの先生はみんないい先生だよ!!?!?」

その倉橋さん言葉にマスコミたちは、

「お?..お?..」

「おい。この子寄りで撮れ。」

「もしかして、その潜入教師にそう言えつて脅されたの? 辛かったでしょう? もう本当のことを言っつていいのよ。」

そんな様子を見た磯貝は、

「みんな、一旦帰ろう!!?!? 警備もマスコミも野次馬もどんどん来てる!!?!? こんな状態じゃ何も言えないし、聞いてくれない!!?!?」

そしてE組のみんなは一旦その場から逃げていった。

少し離れた駐車場に着いたみんなは、そこで相談を始めた。

「で…どーすんだよ、これから。」

吉田の声に、片岡が答える。

「…とにかく状況を把握したいよ。何の情報も知らされていないんだから。」

「よし、じゃあ手分けしてバリアの装置や発生装置を偵察しに行こう。」

それでまた夜に作戦会議だ。

俺もなんて言えばいいのかわかんないけど…このまま終わっていないはずがない。」

磯員の言葉にそこにいたみんなが頷いた。

そしてE組全員が偵察をした。

全員が全員何がしたくて、何がベストなのかはわからなかったが、このまま先生と別れるなんて嫌だ、という気持ちがあった。

一方殺せんせー。なんとかしてバリアから脱出しようと地面を掘っていたが、地中まで覆われていることを知り、

(見事だ。さすがにこれは…無理ですかねえ。)

そして司令部では

「あの生徒たち、あちこち探っているという情報が入った。

…まさかこんなにも早く動くとはな。このままだと面倒な事態になりかねん。」

そしてその言葉にハウジヨウは…

「だから言ったのです。念のために『予防』をしておくべきだ、と。でも安心してください。処置のマニュアルはもう作っています。」

その日の夜。また同じ駐車場にE組全員が集まった。

「みんなの偵察をまとめると、バリアの周りには隙間なく見張りがいるってことだな。」

「野次馬、マスコミ、テロリスト…殺せんせーと外部との接触を避けたいのは確かだろうね。」

そう口々に言う前原と不破の話聞きつつ、竹林が、

「各地の基地でもさらに増援が、集結の準備をしているみたいだ。明日になれば、どうあがいてもバリアの中には入れなくなる。」

「強行突破でしょ。今夜のうちにも。」

竹林の言葉に対し、カルマが言う。

もちろん全員がその意見に賛同した。

そして矢田が、

「そのあとに私たちから世間に今回何があったのか説明しようよ。あ

の先生がどんな先生なのかも……」
そのとき、二台の車がE組全員に近づき、そして去っていった。
そしてそのあとにはみんなの姿はなかった…。

捕らえられたE組は、全員目隠しに手錠の状態ですべて司令部に連れてこられた。

それを見た司令官が、

「迅速な仕事だ。さすがだな、ハウジョウ。」

「はい。全員無事に保護しました。」

そして床に全員降ろされ、みんなの目隠しが取れた。

その中の一人がカルマに、

「数日ぶりだな。弱虫ボーヤ。」

(……いつら……あのときの!!?こんな少人数で、あの一瞬で……俺ら全員拘束してかつさらったのか!)

「……ここは……」

そんな神崎の質問に司令官が答えた。

「今回の暗殺作戦の司令部だ。防衛省の施設を借りている。君たちはここで……暗殺完了まで我々の管理下に置かれることになる。」

その瞬間、全員がその言葉の意味を理解し、全員の顔が青ざめた。

「ちなみに親御さんにはもう連絡済みだ。マスコミの目を背け、全員に平穏と安全を確保させるため……とね。」

「……うそだろ?」

そんな司令官の言葉に、原が声を上げた。

「わ……私たちはそれでいいので、殺せんせーを殺すのを待ってください!!?だって爆発の確率はたったの1パーセントですよ!!?殺す理

由がないじゃないですか!!?」

その言葉に、司令官はやれやれといった様子で答えた。

「子供には分からんだろうが…1パーセントという数字はね、地球を賭けのチップにするには高すぎるんだ。考えてみたまえ。1パーセントは普通に考えても宝くじが当たる確率よりもずっと高い。仮にそのことを国民に言ってみろ。どれだけ大衆が騒ぐことか…。」

それに奴の前世^{過去}…聞く話によればおそろしく残虐な殺し屋だったそうじゃないか。もし生かしておいたら何をするか分からんだろう?少しは殺された人のことも考えたまえよ。つまり、奴が死ぬのは…自業自得というわけさ。」

その言葉にかなりイラつときたのだろう。

寺坂がその司令官の顔を思いつき蹴った。

そして…

「あのタコを…(っ)もつともな正論で語るんじゃない?!?」

第一誰だお前!!?名前も出ねえモブの分際で!!?」

モブという言葉に腹が立ったのだろう。

司令官が「なんだと!!?失敬な!私の名は」

しかしそれにかぶるようにホウジョウが、

「どうやら君たちはあの怪物に完全に洗脳されているようだな。

連れていけ。」

「はい。」

そしてホウジョウは、別室に連れて行かれそうになるE組を横目で見ながら…

「私もここで失礼するよ。君らのような輩が…あのバリアの中に入るのを阻止するのが私の仕事だからね。」

第18話 困惑の時間

E組のみんなが別室に連れて行かれたあと、防衛省に烏間先生が来た。どうやら、みんなが監禁されたことを知ったらしい。

そんな烏間先生を司令官が迎えた。

「ああ、君がMr. 烏間か。直接会って話すのは初めてだな。改めて名乗っておこう。各国から今回の計画の全指揮権を任された私の名は、」

しかしそんな司令官の声を完全無視して、烏間先生は司令官の胸ぐらを掴んで、

「そんなことはどうでもいい！生徒たちを監禁とはどういうことですか!!?」

すると、まるでその質問に答えるかのような声が聞こえてきた。「作戦に支障をきたす。それ以外に理由があるかね。」

烏間先生がその声の方向に振り向くと、そこにはハウジョウとその部下たちがいた。

烏間先生が驚いているのを見て、司令官が、

「驚いたかね。君ほどの実力の男なら…ハウジョウの名は知っていたよう。でもって私の名は…」

しかし烏間先生には司令官の声は聞こえていなかった。その時に思っていたのはただ一つ。

(伝説の殺し屋の次は…伝説の傭兵か!!?)

一方E組のみんなはというと…

「あいつら…私服全員分没取しやがった。」

「武器の持ち込みを用心したんだろ。まるで囚人だな。」

菅谷と杉野が口々に文句を言う。

そして不破も、

「本当に。手抜きに等しい待遇だわ。」

みんなが監禁された部屋はただっ広く、壁に大きなモニターがあった。

そこには今日のニュースが流れている。

「…と生徒たちは組織ぐるめの犯行という見方を否定しているようにも見えますが…。」

「いえ、彼らは嘘をついている可能性が高いですね。」

「それはなぜ。」

「我々は生徒たちに『昨年の月爆破と今回のことは組織ぐるめの犯行である。そしてその組織の一員が教室内に潜入し、脅していた。』と言いました。それに対する生徒たちの回答が、『あの教室の先生はみんないい先生だ。』です。我々はいつその潜入者が先生として来たと言ったでしょうか？もしかしたら生徒のふりをして潜入したかもしれない。にもかかわらず、生徒たちはその潜入者が『先生』と言いつつた。そこから生徒全員がその潜入者に脅され、口裏を合わせているとわかるわけです。」

「はあ、なるほど。」

「何が『なるほど。』だ!!？明らかに詭弁だろーが!!？」

「常識的に考えても『脅された』って言えば『大人に』に決まってるのにね。」

アナウンサーの言葉に、寺坂と狭間が文句を言う。そしてそれはもちろんE組みんなが同じなわけで…

「殺せんせーが当事者なら私たちも当事者じゃん。それなのに私たちはこのことで何にも知らされずに、ただただ殺せんせーが殺られるのをポケーと見てると?」

そんな中村の声をよそに、ニュースが流れ続ける。

「子供達はきつとこの一年で一生心に残る傷を負ったでしょう。早急にケアすることが大切です。」

場面は街頭インタビューに移り…

「ひどい…すごく纯粹だった子供たちを脅すなんて…なんて残酷なことをさせる奴なの?」

「彼らと同年代の子供を持つ親として…いったいどんなことを言われていたのかと考えると辛くて…。」

(…何だ、これ。何で俺らのこともあの教室のことも何にも知らない赤の他人に…俺らかわいそ扱いされてんだ☒)

丁度その時、部屋のドアが開き、烏間先生が何人かの見張りと一緒に入ってきた。

「五分だけですからね!!? 本当はあなたでもだめなんですよ!」

「…烏間先生!!?」

そして渚は烏間先生に、

「…お願いします。ここから出してください。僕らは行きたいんです、学校に。」

「そーっすよ! 烏間先生ならここから俺らを出せるでしょ!!?」

渚とその言葉に賛同した木村を、烏間先生はちらつと見、そして…「いや、君らが焦って動いた結果がこの監禁だ。ここまで行ったらいくら俺でもどうにもできない。

行きたければむしろ待つべきだったな。警備の配置が終わり持ち場が定まれば、人の動きが少なくなりより警備にスキが生まれる。5日目以降…といったところか。そこまで待てばもしかしたら包囲を突破できたかもな。

いや、万が一山の中を突破できても山の中でバリアに入る前に捕まっただろう。山の中を守っているのは、君らを拉致した精鋭部隊だ。『群狼』の名で知れ渡っている傭兵軍団。ゲリラ戦や破壊工作のエキスパートだ。30人にも満たない中で…世界各国の山岳や密林で恐れられてきた彼らには適任だろう。

そしてそんな猛者たちのリーダーが、『神兵』と表されるクレイグ・ハウジョウ。片手でライオンを引きちぎるといふ戦闘力を加え、地球上のあらゆる場所^{戦場}で経験を蓄えた最強の傭兵だ。

さつき初めて直で見たが…あれは異常だ。どう考えても俺の3倍は強い。戦闘で一度奴を本気にさせたら勝ち目は絶対でない。

だから…諦めろ。」

「いやです!!?」

渚は烏間先生に間髪入れずに反抗した。

「殺せんせーと…まだしたいことがたくさんある! 話したいこともた

くさんある！だから…お願いです!!?行かせ…」

瞬間、烏間先生は渚の胸ぐらを掴み、床に叩きつけた。

「出せない。これは国の方針だ。よく聞け、渚君。」

俺を困らせるな。

分かったか！」

渚はその瞬間、はっとした表情を浮かべた。

だが、渚は烏間先生の方を向いていたため彼の表情の変化に気づいた人はほとんどいなかったが。

すると、烏間先生の話聞いた村松や吉田が、

「あんだよ。結局お前も自分が一番大事なんだな。」

「本校舎の先公と一緒にじゃねーか。」

それに烏間先生は反論せず、

「…その通りだ。地位がなければ…肝心なときに誰も助けられない。

…それに…俺の信念に基づいても、やはり奴は殺すべきだと思う。

君らもあと3日ほど頭を冷やして考えるんだな。」

そう言つて烏間先生は出ていった。

それを見た寺坂が、

「…くっそ、烏間の野郎!!?ここ一番で見捨てやがって!!?」

だが…

「ははっ。本トに寺坂つてバカだよねえ。」

「あんだと、カルマ!!?」

「分かんないんだってさ。教えてあげなよ、

渚。」

そのカルマの言葉に促され、渚は口を開いた。

「…寺坂君。さつき烏間先生はつきりと『俺を困らせるな。』つて言つたよ。」

「…っだから何よっ」

「こつも言つた。」

5日目以降は警備にスキが生まれる。

山の中には少人数の精鋭が潜んでて、そのリーダーは烏間先生の3倍は強い。」

そこまで言つて、ようやく寺坂は気づいた。

さらに、

「前に烏間先生言つてたんだ。『もし俺が困ったら、迷わず君らを信頼し、任せるだろう』って。だから『困らせるな。』は、『君らを信頼し、任せる。』って意味だと思う。」

『俺と君らの立場は違う。けど、可能な限り情報はやる。あとは君たちの意見を尊重する。』って。

だからみんな考えて、整理しようよ。僕らがどうしたいのか。僕らに何ができるのか。…殺せんせーが何をするして欲しいのか。」

その頃、殺せんせーは、

(なすすべなし。世界中の誰もがそう思っているでしょう。)

…だがあいにく私はマツハ20の怪物だ。幸いに、いくらでもできることはある。)

そして殺せんせーは…

「どの写真も捨てがたいですねえ。思い切つて増大ページとしますか。」

みんなに…卒業アルバムを作っていた。

第19話 信頼の時間

みんなは話し合った。

まず第一に殺せんせーに心から死んで欲しいと思っっている生徒なんてE組にはいない。…聞くまでもないことだ。

第二にそれでも僕らは殺し屋だ。この一年必死に賭けた思い出を…他人に踏みにじられるのは絶対にいやだ。

「つてことはよ…俺らはまず何がしたいんだ？」

そんな寺坂の質問に、矢田が答えた。

「…決まってるよ。」

多分殺せんせーも…やりたいことは一緒だと思う。」

その頃殺せんせーは、机や窓をピカピカに磨いていた。

「ヌルフフ。肝心の手入れですねぇ。」

殺せんせーは、綺麗になったまどから外を眺め、そして思った。

（超生物である私に、今更恐れるものはない。ただ、一つ願いがかなうなら…また生徒たちに会いたい。）

（…会いたい）

そして同じ頃、E組のみんなも、同じことを思っていた。

（会いたい！会わなきゃ何も終わらない！）

「気持ちを抑えて今は待とうよ。」

『三日ほど頭を冷やして考えるんだな。』つていう烏間先生の言葉の裏をよめば…三日待ってもレーザー発射には十分間に合う。烏間先生もそれまでにきつと手を打ってくれると思う。」

「そうだな…。みんな考えよう。もしここを出れた時に備えて…。あらゆる作戦を立てておくんだ。」

不破と磯貝はそうみんなを促した。

それからみんなは、着々と殺せんせーのところへ行くための準備を始めた。

何やら地図や装備品リスト、警備のタイムテーブルなどを広げる。

「あと三日。」

みんな、監視カメラの位置を確認したり、各自で戦闘訓練をしたりしている。

「あと二日。」

作戦を整理していた磯貝に、カルマが声をかけた。

「磯貝。もし山の中まではいれたら…。そっからは俺にしきらせて。

…頼む。」

いつになく真剣なカルマに、磯貝はいつも通りにこつと笑い…

「ああ…任せた。」

そして…あと一日！

「…どーすんだよ。全く脱出のチャンスなかったぞ。もう今日だぞ、レーザーが発射されんの。」

そんな寺坂の言葉に全員がうつむいた。

とその時、誰かが部屋のドアをノックした。

「いいな。本当に顔を見るだけだぞ。こんなの上にはれたらどうなるか…。」

「わかってるわよ。一目見れば安心だから。」

入ってきたのは…

「はぁーい、E組のみんなあ。心配したわあ。元気だったあ？」

…ビッチ先生である。その違和感でんこ盛りのハイテンションに全員が引く。磯貝にいたっては触角がしおれるほどである。

すると突然、ビッチ先生は竹林にキスをし始めた。

続いて、矢田・三村・神崎・渚に次々としていく。

あらかた終わったあと、

「みんな、元気？」

「ん？ん？」

「元氣ならよーし。じゃ、帰るわ。」

かなり困惑している生徒たちをよそに、ビッチ先生は普通に帰ろうとした。

「おい、もういいだろ。」

「もおーへーきよ。外にも見張りがいるんでしよう？」

「じゃまたね、ガキども。」

…そこにいたほとんどみんなの心の声が一致した。

((何しに来たんだ、あのビッチ!!?))

「な…何しに来たのよ、ビッチ先生!!?」

目の前で渚のキスを目撃し、茅野は怒りを見せていた。

が、渚が口を押さえたまま、表情を変えないのを見て、

「……渚?」

すると、キスをされた生徒の口からコードや筒など、様々なものが出てきた。

それは…

「……!!? 僕の爆薬一式だ。」

そして夜。

E組のみんなは裏口を爆破して脱出した。

そしてそこには、ビッチ先生がいた。

「遅いわよ。私の完璧な脱出マップがありながら。」

ビッチ先生の近くには、27人分…E組全員の靴が用意されていた。

矢田は自分の口に入っていた脱出マップを取り出し、

「ビッチ先生…これ…」

「カラスマから頼まれてね。」

思いの外かかっちゃったわ。E組教師を口実に通い詰めて心開かせて…休憩室で見張り全員が談笑する習慣つけて、あんたらの脱出経路確保するまで。」

…さすがは世界トップクラスのハニートrapper。
だが一つ気になることがある。

「どーやってこんだけの脱出道具口ん中詰め込んだんだ!?!?」
「恐るべし。世界屈指の色仕掛け術…。」

そんな中、ビッチ先生はみんなに伝えた。

「…レーザーの発射時刻は日付が変わる直前ですつてね。
どういう結果になるのかわからないけど…どちみち明日は卒業式
なんでしょ。」

卒業前の最後の授業よ。思う存分受けてきなさい。」

「「「…はい!!?」」」

「逃げたことはすぐにバレる。包囲の警戒が強くなる前に!」

生徒たちが行動しようとするのをジツと見ていたビッチ先生だったが、そんな先生に片岡が声をかけた。

「ビッチ先生!!? 烏間先生と来て!どっちも私の大切な先生だから!!
?」

その言葉に始めはびつくりしたビッチ先生も、笑顔で

「…仕方ないわね。」

E組のみんなは自分の家に超体操着や、武器を取りに戻った。

そんなみんなを出迎えた律は、

「よくご無事で、皆さん!!? お留守の間に空からの偵察は完璧です!!
?」

防衛省から少し離れたビルの上に、ドローンの発着場があった。

それを見た磯貝は、イトナに

「自律ドローン充電発着場か…よくこんな準備してたな、イトナ。」

「本来は対殺せんせーの最終兵器の予定だった。律と組めば、
ドローン^れの力を最大限に発揮できる。だが…どうやら違う相手に使
うことになりそうだ。」

そしてそこで磯貝は最後の確認をする。

「山の周りの警備で突破できそうなのは…この、隣町の山を一つ越え
たルートだけ。一時間後、この入り口に全員集合!!?」

そして一時間後。

全員警備を突破し、E組みんながふもとのビルに集まった。

最後に磯貝がみんなに言う。

「いいか、みんな。時間がない。この潜入が間違いなく最後のチャンスだ。」

その言葉にE組全員集合頷いた。

そして…

「行くぞ。」

そのカルマの声を皮切りに、全員が動き始めた。

——最後の任務は、全員無事に登校すること!!?

殺せんせいの暗殺期限まで…あと3時間!!??

第20話 開花の時間

柵ヶ丘にある山の中…そこで息を切らして逃げている男がいた。
(ば…化け物の集団!!? 聞いていた話と全然違う!!?)

その時、暗闇の中から手が伸びてきて、その男は悲鳴を上げた…。

一方司令部では…

「あのバリアの中に入りたいだど?」

「はい。脱出した生徒たちはおそらくあの校舎へ行くつもりでしょう。追い詰められた奴がやけを起せば大惨事になりかねません。

しかし元同僚だった我々であれば、レーザー発射まで大人しくするように説得できます。」

そう言う烏間先生に司令官は答えた。

「子供が学校へ辿り着けるわけがなからう!!? 二重三重に張った外部警備に加えて…山の中にはハウジョウの部隊。パラシュートの降下まで想定した配置だぞ!」

「ええ、ですから万が一の場合です。その時にはどうかご許可を。」

その言葉に司令官は(どうせ無理だろう。)と思いつつ、

「ああ分かった。もしもの時には君も行け。この私、「ありがとう」ございます。では失礼します。」の名におい…聞けえ!!?」

自分の名前にかぶせるように烏間先生がしゃべり、とても悲しくなった司令官は、近くの部下に

「なあ…君は私の名前を知ってるよな…。」

「え…も、もちろんですとも…司令官!」

その時部下が(なんだったつけ…)と思っていたのは言うまでもない。

一方烏間先生とビッチ先生は、

「…で、突破できるの。ガキどもは。」

「…」

場面は山の中に戻る。

その男：E組のみんなから逃げている外人は、
(悪夢だ!!?・何人いやがるのかわからねえ!!?・それに引き換えに俺らの部隊は全滅だ!!?)

意を決した外人はE組のみんなに銃を構えた。

「なめやが…。」

だがそれを言い終わらないうちに、両サイドから二人の生徒：磯貝と前原が出てきて思いつきり肘打ちをかました。

その男が気絶したのを見て、カルマが木から降りてきた。

「よし、磯貝、前原。ナイス待ち伏せ。」

そして男の顔を見たカルマは：

「あれ?…こいつ知った顔じゃん。」

…E組のみんなからすると不幸の前兆である、あの悪い顔をしていた。

他の場所では、

「…ジエスの隊の通信が途絶えた…。」

「用心しろ。遭遇したらリーダーに伝えるんだ。」

しかし次の瞬間、彼らのうち二人の首に麻酔針が刺さった。

当然倒れる二人。その攻撃を仕掛けたのは誰か：言うまでもない。

それに気づいたリーダーは、

「!!?スナイパーがいる模様!!?前方後方注意されたし!!?場所は…。」

しかしそれを言い終わる前に、彼の上にまあまあ大きい石を抱えた原が落ちてきた。

乗られた外人は顔を岩にぶつけ、ものすごい音がした。

「…おい…今の死んだんじゃね?」

「失礼な。柔らかく包んだだけだよ。」

吉田の言葉に原が少し訂正を入れる。

「……この兵士がのちに全治2カ月になるのは余談である。

気絶した外人らを拘束していた吉田は、カルマに連絡を入れた。

「おい、こつちも片付いたぞ、カルマ。」

「オツケー。律の情報が入り次第また次の指示出すから。」

「そつちの状況は？」

「んー？」

人間エサ作ってる。」

「……そう。その言葉通り、カルマはさつき捕らえたジエスの顔にいつものようないたずらをしていたのである。」

そしてその餌食になったジエスはどうと……

「ぎゃー!!?辛い酸っぱい苦い臭いしみる……きしよーい!!?」

「痛みには強いみたいだけど、他の刺激にはてんで弱いね。」

……そういうカルマの後ろで渚は苦笑いをしていた。

ジエスが

「A h h h h h h h h h h! O h h h h h h h h h h! M y G o d!」

と悲鳴をあげている傍ら、カルマは、

「悲鳴をエサにさらに増援を呼び寄せる。……ここであと2、3人は始末したいよね。」

「いける?律。」

上からドローンで偵察していた律は、

「はい。今尾根つたいに3人ほど接近しています。」

それとモミの木のある高台に固定機銃が設置されています。

スナイパーはとても優秀で、偵察ドローンをもうち落とします。

射程圏内に入らないように行動してください。」

「モミの木に固定機銃ね。オツケー。」

「じゃあヤマブドウの茂みからマテバシイ密集地を抜けるルートは?」

「はい。そちらでしたら大丈夫です。」

「りよーかい。」

じゃあ寺坂。敵を倒して一本松まで進軍して。」

「おうよー」

その瞬間、イトナが煙幕を張った。

そしてその隙に寺坂らは敵を制圧した。

そしてまた別の場所では…

「…今そこにガキが見え…え？」

次の瞬間、その兵士らは仕掛け網で捕らえられた。

そんな兵士らに、

「ちよつとビリビリしますからね。」

…矢田は普段通り朗らかな声でスタンガンを突きつけた。

そこには矢田の他にも岡島や倉橋、三村がいたが。

「普段から罠だらけだもんね、この山。」

「人間を想定して作ったわけじゃねえけどな。」

そういう岡島の手にはエロ本が握られていた。

やられ、拘束された外人は思った。

(な…何という破壊力。まるで…音もなく通り過ぎた暴風雨。)

(完全に侮っていた…。力量を隠すために…あのとき頭を下げたのか

…。畜生…大人じゃねえか…。)

場所は烏間先生とビッチ先生の会話に戻る。

「あの山は彼らのホームグラウンドだ。あそこで一年、奴を狙い続けた。奴と遊び続けた。奴の授業を受け続けた。」

今ではこの山なら…目をつぶっていても動けるだろう。よその山で人間相手に戦ってきたやつらとは…経験値が違う。

生徒たちには用心するように伝えておいたし、反対にやつらには生徒の実力を過少に伝えて油断させた。フッフ…。」

「ほんと、親バカねえ。」

(指揮をとるなら赤羽業が最適だろう。あの悪魔的な頭脳で、利用できるものは何でも使う。まして、双方の戦う動機…『殺る気』の差は明らかだ。あの教室に場所を限れば…彼らは世界最恐の暗殺集団だ!!?)

「だが……ここからが正念場だ。」

（あの男が本気を出せば……戦況は一瞬でひっくり返る!!?）

暗殺の基本を思い出せ!!? さもないと君らは奴に会えずに散るところになる!!?）

おおかたの敵を倒し、拘束したみんなの前に現れたのは……

「……失礼した。君達の力を低く見積もっていたようだ。これより……本当の私を伝授しよう。」

あの……ハウジヨウだった。

第21話 登校の時間

E組のみんなの前に現れたホウジヨウは、眼鏡に手をかけて思った。

(ガキの頃から…眼鏡を外するのが戦闘開始のスイッチだった。

1秒足らずのその儀式ルーティーンが私の蛮性を解き放ち、どんな敵でも本能のままに蹂躪できた。

ここでも…やることは同じだ。)

そんなホウジヨウの死角から、千葉速水のスナイパーコンビが攻撃を仕掛ける。

だがホウジヨウは麻酔針を見ずに、簡単に捕まえてしまった。

「麻酔針か…。私の部下のライフルを使いたまえ。それがないと話しにならないぞ。」

そして再び眼鏡に手をかけ、

「では…いくぞ。」

その瞬間、カルマが背後からホウジヨウに襲いかかった。

しかし…

「…ふん。小賢しい。」

そう言い、ホウジヨウは持っていた銃でカルマを殴り飛ばした。

が、次の瞬間、ホウジヨウの顔に向かって石が飛んできた。

誰が投げたのかを確認しようとした途端、眩しい閃光が放たれた。

そしてホウジヨウの目がくらんだ隙に全員が襲いかかった。

矢継ぎに攻撃を仕掛けるE組に、ホウジヨウは

(…こいつら。俺に戦いを『始めさせない』気か!!?)

「一撃離脱ね。牢屋でみっちり予習やったように。」

先ほど飛ばされたカルマがみんなにそう伝えた。そして思う。

(鳥間先生の3倍強いのなら…逃げてでも絶対追いつかれる。戦いに入れば必ず負ける。

銃に頼らないのは、銃撃『戦』すら避けるためだ。多分…同士討ちを誘う技術も持っている。撃ち合いに持ち込まれたら圧倒的に相手の土俵だ。だから…)

そのとき、誰かがホウジヨウの銃を蹴り落とした。

そしてすぐさま竹林がその銃を爆破させる。

(警戒を怠らずに、みんなで連携してチャンスを待って、標的の態勢が整う前にカタをつける。この1年、ずっと殺せんせー相手にやってきた殺し屋の基本だ!!)

律が操るサイレンサー付きのドローンが背後から針を放った。

その麻酔針は、前方に気を取られていたホウジヨウの首元に刺さる。

「チツ…。」

ホウジヨウは、自分の首に刺さった針を抜きつつ振り向いたが、そこには…

(なっ…いな…)

と、

パアアン

ホウジヨウの目の前、絶妙のタイミングで渚の猫だましが決まった。

その影響で、ホウジヨウは一瞬動きが止まる。

それを見計らい、渚がホウジヨウの頭を掴み…

「カルマ!!??」

呼ばれたカルマは、その声に答えるべくホウジヨウのところへ行き…

ホウジヨウの顔にかかと落としを決めた。

一方の渚もホウジヨウの背中に膝打ちをしていた。

そうしてホウジヨウは倒れた。

息を切らした渚とカルマが無言のハイタッチを交わす。

が、

「ちよっ…まだ動いてる!!」

「!?？」

そういう茅野の言葉通り、ホウジヨウは起き上がろうとしていた。慌ててみんなはトドメを刺す。

「ちやんとトドメさせやクソツタレ!! カッコつけてハイタッチとかしてんじゃねー!!」

寺坂にそう言われ、渚とカルマは顔を赤くした。

E組のみんなによってボコボコにされたホウジヨウは、拘束されて地面に転がされる。

「よし、みんな行くぞ!! バリアの中に入りさえすれば殺せんせーの勢力圏だ!!」

そんな中…

「……」

「…まだ意識あるよこの人。」

「攻撃全部食らったのに化け物すぎんだろ。」

「まともにやってたらゾツとするわ

…つてことで悪りーなオッサン　これが俺等のいつもの殺り方なんだわ。おっとメガネずれてるぜ」

そう言つて菅谷はズレた眼鏡を直して、みんなと一緒にさつと学校へと走って行った。

E組みんなが去り、一人になったホウジヨウは、考えていた。

(全員が全員、銃を使って来なかったがゆえに…俺は彼らを殺すかどうかの判断が遅れた。)

そうこうするうちに…行動の選択肢がどんどん奪われた。

最後まで…俺に戦闘のスイッチを入れさせなかった。

最後まで…俺に本気を出させなかった。

捕まっている間、ありとあらゆる考えを尽くしたんだろう。

…これが暗殺者集団3年E組か。

そしてついにE組のみんなは旧校舎にたどり着いた。

地の盾は人間には全く効かないようで、普通にくぐって侵入できた。

そして森を抜けると、そこには…

「音だけでも…強敵を仕留めたのがわかりました。」

成長しましたね。 皆さん。」

「殺せんせー!!?」

そしてみんなはいつもの笑顔の殺せんせーに飛びついた。

司令部ではそんな様子をモニター越しに見ていた。

そして、山のももとは…

「生徒達が…『地の盾』を突破しバリアの中に入ったそうです。」

「上から話は通してある。俺達も校舎へ行く必要があるからな。」

そう言い、鳥間先生とビッチ先生はバリアに向かって歩いて行った。

「お…お気をつけて…。」

そう見送られつつ、鳥間先生は

(…俺一人ではもうあの28人に太刀打ちできないな。

…生徒の成長とは 嬉しく、また…悔しいもんだ。)

と、微笑んでいた。

一方校舎の方ではみんなが泣きながら笑顔で殺せんせーに銃を撃っていた。

だから…誰も気がつかなかった。バリアの一部が一瞬開いて…また閉じたことに。

バリアをくぐれない何か…侵入してきたことに…。

レーザーの発射まで…殺せんせーの暗殺期限まで…あと、90分。

第22話 次世代の時間

空ではレーザーの光がこぼれ落ちそうなくらい輝いていた。

機員がレーザーの説明をし、それを聞いた殺せんせーは、

「なるほど…。レーザー発射は日付が変わる直前ですか…。」

そして殺せんせーは空を見上げ、思った。

(あの光なら…完全防御形態になっても、貫かれてしまうだろう。)

「殺せんせー…なんとかして逃げようよ！私達…人質にでも何でもなるから！」

E組全員がその倉橋の言葉に同意した。

が、殺せんせーは…

「どんなに人質を取っても…ここまで来たら世界各国はもう発射は止めないでしょう。」

…下手をすれば地球の命がかかってますから。」

その言葉に渚やカルマを始め、みんなが何も言えずにうつむいた。

「…殺せんせーはわかってたの？…こうなること。」

そんな速水の質問に、殺せんせーは答えた。

「もし仮に先生が爆発しなくても…これだけの強い力を持ち、自由に動く怪物を…世界各国が恐れないわけありません。どちらにしても可能な限り息の根を止めてしまいたい…と思うのが妥当でしょう。」

「…私たちがもつと早く来れてれば…捕まったりしなければ、他に打つ手があったかもしれないのに!!？バリアの発生装置を壊すなり…テレビやネットに出まくってちゃんと事情を説明したり!!？」

そんな不破の言葉にも、殺せんせーは異論を唱えた。

「そんな事をすれば…君たちはこれまで以上に危険視されて、より厳重な管理下に置かれたかもしれません。」

先生もね、先生の力が及ぶ範囲で調べたんですが…発生装置の防備も完璧でした。

先生からの投石などにも備え、対空兵器まで配備してある。

おそらく…君たちの今の能力と装備では途中で捕まっていたで

しよう。

それほど…この計画は完璧でした。

全世界の技術や時間、人員が惜しげもなく注ぎ込まれた。

世界中の英知と努力の結晶であるこの暗殺が…先生の能力を上回ったことに敬意を感じ、その標的ターゲットであったことに榮譽すら感じます。」

当然そんな殺せんせーの言葉を渚たちは素直に喜んでは聞けるわけがなかった。

「…じゃあ…私たちの努力は…無駄だったの…？」

そう落ち込む矢田の頭を殺せんせーは優しく撫で、言った。

「無駄な事などあるものですか、矢田さん。」

君たちは…先生の爆発の確率が1%以下であると、宇宙まで行って突き止めてくれた。

先生の話を聞いて暗く沈んでしまったE組にまた明るさが戻り、ここからの1か月は…短かったけど本当に楽しかった。

その過程が…心が大切なのです。

これまでこの教室で習った過程の全てを尽くして君たちは私に会いに来てくれた。

先生としてこれ以上の幸福はありません。」

そこで寺坂が叫んだ。

「…もう時間切れでいいだろ。」

たった1%だぞ!! たったそれだけのリスク、俺等は余裕で飲めんだよ!!?

なんで政府も世間も!1番近くで過ごした俺等の話を聞こうとしねーんだ!!?

このタコ、エロいくらいで何の危険も無えのによ!!」

『どうせガキの言葉だから耳は貸さない。その代わりに哀れんであげる。』

…侮辱に等しいわ」

「納得できるかこんなん…」

「次会ったらあいっらぜってー…」

そういきり立つ寺坂らの頬をペトペト撫で、殺せんせーは落ち着かせようとした。

「寺坂君。」

皆さん。

先生から君たちにアドバイスをあげましょう。

君たちはこの先の人生で：強大な社会の流れに邪魔をされ、望んだ結果が出せない事が必ずあります。

その時に社会に対して原因を求めてはいけません。

社会を否定してはいけません。

それは率直に言って：時間の無駄です。

そういう時は『世の中なんてそんなもんだ。』：と悔しい気持ちをやり過ごしてください。

そしてやり過ごした後で考えるんです。

社会の激流が自分を翻弄するならば：その中で自分はどうやって泳ぐべきかを。

やり方は学んだはずです。

このE組で。

この：暗殺教室で。

いつも正面から立ち向かわなくていい。

もちろん避難しても隠れてもいい。

反則でなければ奇襲もしていい。

常識外れの武器を使ってもいい。

常に殺る気を持ち、焦らずに試行錯誤を繰り返せば：いつか必ず素晴らしい結果がついてきます。」

それを聞いたみんなはいつも授業を受けている時のように黙っていた。

「：ケツ。こんな時まで授業かよ。」

「ヌルフフフ。こんな時だからこそできる授業です。」

教師たるもの、こういう絶好の教育のチャンスはのがしませんよお。

：でもね」

そう言いながら、殺せんせーはカルマや渚…そして寺坂を含めたみんなの頭に触れた。

「君たちが本気で先生を救おうとしてくれた事は…ずっと涙をこらえていたくらい嬉しかった。」

「本当ですよ。」

そんな殺せんせーを見ながら、渚は思った。

（…なんでそんないつもみたいに落ち着いてられるんだよ殺せんせー。）

僕らに教えたこのE組に来なかつたら…きつと普通にどこかで生きれたかもしれないのに。

…僕らは…殺せんせーの…（…）

ひとしきり語ったあと、殺せんせーは中村に問いかけた。

「…ところで中村さん。」

山中の激戦でも君の足音だけはおとなしかったですねえ。

どうやら…甘い匂いもするようですが？」

そう言いながら、殺せんせーはよだれを垂らしていた。

中村は、

「地獄耳で地獄鼻かい…」

と呆れつつ、腰のポケットから箱を取り出した。

「…月が爆発した日から今日でぴったり1年でしょ。」

雪村先生は確か…今日を殺せんせーの誕生日にしたんだよね。」

中身は苺の乗った小さなケーキだった。

「小っちゃいけどブランドもんの高級ケーキだよ。これを崩さず持つて来れた私の体術を褒めて欲しいな…って聞けよ!!?」

話そっちのけで、殺せんせーはケーキに夢中になっていた。

「だって…だって…1週間ぶりのスイーツ!!?」

「ああもうヨダレがたれる!!?皆とつとと歌うよ!!?」

そう言って中村はローソクを取り出した。

「サンハイ!!」

そしてE組のみんなはしつぶ歌い出した。

「ケツくせえ仕込みしやがって……。」

と悪態をつく寺坂の頬を片岡がつねり、歌わしていたりしていた。よだれを垂らす殺せんせーを取り囲み、みんなでハッピーバースデーを歌う。

それを聞きながら、殺せんせーは涙をこらえていた。

(…十分すぎる。)

なんて身に余る…報酬を得たことだろう。)

その時ちようどビツチ先生と烏間も旧校舎に到着し、聞こえて来る誕生日の歌に二人とも頬が緩んだ。

そしていよいよ殺せんせーはローソクの火を消そうと息を吸った。

「オラ吹き消せよ殺せんせー!!? 1本しかねーんだから大事にな!!

？」

緊張の面持ちで息を吸ったその時、

突如現れた『何か』がケーキを粉々に吹き飛ばしてしまった。

それを見た殺せんせーは、かなり衝撃を受ける。

烏間が校舎の屋根を見上げると、そこには……

「ハッピーバースデー。」

「シ……いや……」

「柳沢……!!」

柳沢と二代目死神の姿があった。

そして……

「機は熟した。」

世界一残酷な死をプレゼントしよう。」

その言葉に、二代目死神は拘束着のチャックを脱いだ。

「先生…僕が誰だか分かるよね？」

「…!!」

「子供達にも紹介しよう。

彼がそのタコから…

『死神』の名を奪った男だ。」

拘束着を破って…二代目死神は、真っ黒な触手を現した。

第23話 二代目の時間

ちょうどそのころ司令室では…

「もっと早く行ってくれたら…早くにケリがついたかもしれないのに。」

「なんだかんだ言っただけ引き伸ばして…なぜかレーザー発射の直前だ。」
そういう研究者たちの目の前のモニターには何故か二代目死神や柳沢の画像が写っていた。

どうやら二代目死神と柳沢の行動は各国政府のお墨付きらしい。

(…個人的には気が進まんが…おそらくこれで実験データと標的のデータを回収できる。)

「1匹いれば対テロ戦争もカタがつく…『殺せない』無敵の超生物か…。」

「実用化したいというのがわが国の本音だろうな。」

そしてそのころ…学校では…

二代目死神が殺せんせーの前へと降り立った。

そして…

「死ね。」

「!!?みなさん!!?逃げ…」

殺せんせーが言い終わらないうちに、二代目死神が強烈な一撃を放った。

とつさに逃げた殺せんせーだったが、触手が二本破壊されていた。
その攻撃を見た殺せんせーは…

(は…速い!!?イトナ君や…茅野さんの時以上に!!?)

「気づいたか、モルモット。その男の触手にイトナの時以上の改良を加えた。」

二代目死神は殺せんせーに次々と攻撃を仕掛ける。
そして当然、殺せんせーの意識は全て触手に注がれた。

しかしその瞬間、二代目死神がまた殺せんせーの触手を破壊した。
その手には…あの対先生ナイフが握られている。

「えっ……」

それを見た殺せんせーは思わず驚いた声を上げた。

そして二代目死神は…その瞬間を見逃さなかった。

殺せんせーに触手で攻撃を仕掛けつつ、対先生ナイフを素早く操った。

…まるでE組のみんなを攻撃した時のように。

突然の出来事に殺せんせーは動揺し、また一本触手を失った。

一方生徒たちの方にも動揺が走った。

「ちよ…どういうことよ!!? 触手を使ったら能力が下がるでしょ!?!」

そう言う茅野の言葉に、柳沢が答えた。

「もともと技術は持っている男だからな。そこを消さないように且つ奴を殺れるようにした。」

触手の副作用である『能力低下』をなくし、その代わりに触手の威力を上げた。」

「な…そんな事をしたら…激痛が!!?」

そんなイトナの言葉も、柳沢は一蹴する。

「ふん。そんなもののメンテをしていれば、なんの問題もないな。」

そして何より違う点は…彼が自ら強く望んでこの改造を受けた事だ。

出来ないイトナおまえや義妹いもうととはわけが違う。

想像できるか？

人間の時ですら1人で君たちを圧倒した男が比類なき触手と憎悪を得た…その破壊力を。」

そして二代目死神が、殺せんせーに触手をさつき以上に強烈な一撃を仕掛けた。

が、

「…なんの!!?」

背後から襲い掛かる二代目の触手を殺せんせーは弾いて言った。

「…皆さん…さつきの授業で言い忘れていた事があります。」

いかに巧みに正面戦闘を避けて来た殺し屋でも人生の中では必ず数度 全力を尽くして戦わねばならない時がある。

先生の場合…それは今です!!」

第24話 生徒の時間

先生の言葉によって、殺せんせーと二代目死神との戦いが始まった。

殺せんせーの動き、二代目死神の触手の動きやナイフさばき……それらの動きは速すぎてE組のみんなの目は追いつかなかったが、全員がわかること。

：殺せんせーが圧倒的に押されている。

破壊された触手の再生により体力が削られている殺せんせーは、二代目死神の攻撃にギリギリ対応している程度だった。

そんな中、今までE組のみんなに触手の説明をしていた柳沢が動き出した。

殺せんせーに……あの圧力光線を放ったのだ。

二代目死神の攻撃に集中していた殺せんせーは、その光をまともに浴びた。

一瞬動きが止まった殺せんせーを……二代目死神は見逃さなかった。

二代目死神は……殺せんせーに触手を叩き込んだ。

そんな戦いを、E組のみんなは遠くから見ている。

ビッチ先生もまた、そんな戦いを切ない表情で見ている。

(……捉えられない音速バトル……)

でも……私には見える。

あの2人に暗くたぎった情念が。

この世で最も強い殺意は……愛を巡って産まれた殺意。

自分の愛を踏みにじった標的の心も体も全てズタズタに引き裂く

まで：彼等は絶対に満足しない。）

そして殺せんせーも、初めて二代目死神と話したときのことを思い出していた。

あれは：たしか北欧の大富豪を殺ったとき。

『僕に殺しを教えてください!!?』

幼い二代目死神が、当時の「死神」に頼み込んでいた。

『本気かい？私がさつき殺したのは君の父だよ?』

『関係ないです!!?』

裕福な暮らしで満たされなかったものが何か：父を殺したあなたを見たときにはつきりしました。

僕もあなたの技術スキルが欲しいです!!?たとえ死ぬほど努力しても!!?』

そうやって目を輝かせる少年。

そして2人は夜の闇へと歩き始めた。

…まだ善悪の区別のつかない少年だったが：その目には才能と、彼なりの夢と希望が溢れていた。

(ここに至って 明日と正気を捨てる前に：育て方はあったはずなのに。)

二代目に向かっていく殺せんせーだが、能力が違う二代目にボコボコに反撃される。

文字通り：手も足も出せない状況だった。

E組もそれぞれ武器を構えていたが、千葉が持っていた銃を落とすてしまう。

カルマですら為す術なく固まってしまっている。

そんな戦いを見ながら…渚は思った。

(…次元が違う…)

違いすぎる戦い。

僕らが1年してきた努力が…全て無意味と思えるほどの。

烏間先生ですら手を出せない音速の対決。

ましてや僕等が何かできるわけもない。

逃げる事すらできない足手まとい。

…僕等は

殺せんせーの最大の…)

息を切らし、膝をつく殺せんせーに二代目死神の触手が迫ってくる。

絶体絶命…と思いきや、殺せんせーは自分の触手でうまく攻撃をいなし始めた。

さらに二代目死神の連続攻撃を、殺せんせーは見事にかわした。

「……………かわし…始めてる?」

「フン…ならばこれはどうだ!!?」

殺せんせーは地面に触手を突き刺すと、柳沢の圧力光線の光が届かないよう、地面を蹴って土煙でブロック。

その隙に二代目の懐へ。

襲い来る触手を至近距離で受け止めた。

(最小限の力で攻撃を逸らし、

土を使つて光を防ぎ、

間合いを詰めて威力を殺す。

戦力差を工夫で埋めて示す姿。

…やっぱり先生はどこまでも先生です。)

二代目の触手を掴んで止めている殺せんせー。

「こればかりはっ…年季の差です!!?」

二代目の攻撃を捌ききった殺せんせー。

「道を外れた生徒には…今から教師の私が責任を取ります。

だが柳沢、君は出て行け。

ここは生徒が育つための場所だ 君に立ち入る資格は無い!!?」

その言葉にイラっとくる柳沢。

「…まだ教師などを気取るかモルモット。

…ならば試してやろう。」

柳沢のパチンと鳴らした指を合図に二代目が妙な動きを見せる。

「わからないか?」

我々が何故『この』タイミングを選んで来たのか。」

二代目が生徒達の前に立つ。

そして、触手を振りかざした。

「パワー重視の全開攻撃をかわせない生徒達を標的に、全員死ぬまで操り出し続ける。」

言っておくが、イトナのとときの何倍もの力だ。もし生徒達に当たったら…どうなるだろうな?」

「いけないっ…。」

殺せんせーは、慌てて生徒のところに行った。

「守るんだよな? 先生って奴は。」

襲い来る二代目の触手の前に、殺せんせーは飛び出した。

そして…ドンっと大きな音が鳴り響いた…。

第25話 私の生徒の時間

今の攻撃で『僕等には』ダメージは無かった。

それはつまり…

二代目死神の全力の一撃を全て殺せんせーが…一身に受けたということだ。

二代目死神の一撃を受けた殺せんせーは、ボロボロになっていた。

「殺せんせー!!」

そんな殺せんせーを見たみんなは、大きな声を上げた。

そして、柳沢は…

「教師の鏡だなモルモット!!」

自分一人なら逃げられるだろうこの強撃を…生徒を守るためだけに正面から受けるとは!!?

さあ『二代目』次だ!!?」

その言葉を合図に二代目死神は再び生徒達を取り囲んだ。

「あ…」

とそこで再び殺せんせーが飛び出す。

そして…またズドンツと強烈な一撃が入る。

「次!!?」

殺せんせーは、間髪入れずに繰り返される強烈な攻撃を正面から受け止めていた。

「^{ターゲット}標的と生徒がいつしよにいれば…『こうなる』のは目に見えていた。

不正解だったんだよ!!?今夜校舎^{ここ}に入って来たおまえ等の選択はな!!?」

その言葉に、E組のみんなは衝撃を受けた。

その時…

「やめろ柳沢!!?」

そうやって銃を構えたのは…烏間先生だった。

「これ異常生徒を巻き添えにするな!!?さもなくば…」

しかし…二代目死神の触手で、烏間先生は拳銃ごと弾かれてしまった。

「…く…」

「黙って見てろ国家の犬。」

おまえはもう俺らに勝てはしない。」

そんな様子を渚達は呆然とした様子で見っていた。

そして…思う。

(…ずっと…気づいてた。

気付いてたけど…目を逸らしてた。)

目の前では殺せんせーの体に何本もの触手が突き刺さっている。

「どんな気分だ!!?だ〜い好きな先生の足手まといになって絶望する生徒を見るのは!!?わかったか!!?お前の最大の弱点はな…」

(殺せんせーの最大の弱点…

それは…

僕等)

「なわきやないでしょう!!」

その言葉を、殺せんせーは大声で否定した。

「正解か不正解かなど…そういう問題じゃない!!?」

彼等は命がけで私を救おうとし、強敵を倒してまでこの校舎にまで会いにきてくれた!!?」

その過程が!!?その心が!!?教師にとって最も嬉しい贈り物だ!!?

弱点でも足手まといでもない!!?

生徒です!!?

ここにいる全員が…私の誇れる生徒達です!!?」

殺せんせーは自分に突き刺さっている触手をググつと握る。

「…っそれに…生徒を守るのは…教師の当たり前の義務ですから

…!!?」

「そうかそうか。

だがな、そんなお前の努力もすぐに全て無駄になる。

その義務も今すぐ我々の手で否定しよう。…やれ、『二代目』。」

その言葉を合図に、二代目死神はまた触手を振りかざした。

そしてそれを殺せんせーに突き刺した……

はずだった。

直後に聞こえてきたのは……

「ぐっ……………」

という声。

そしてそれを発したのは……………殺せんせーでなく……

二代目死神だった。

第26話 私の生徒の時間 二時間目

「ぐっ……………」

そう言つて二代目死神は……

頭を押さえて、うずくまった。

動揺が走った。

E組のみんなにも、殺せんせーにも……

そして柳沢にも。

しかし柳沢の顔から、動揺の色はすぐに消え去った。

「ふん…想像以上に早くに来たな。予定よりエネルギーを消費しすぎたか。」

そう言つて柳沢は、背を向けてバリアの外へと歩いていった。

「なっ…………放つて帰るんですか!?!?」

そんな殺せんせーに、柳沢は辛辣に言葉を返した。

「当たり前だろう。使えない奴は切り捨てる。イトナの時もそうだっただろう。」

「使えないって…………。」

「それにどうせお前も『二代目』も…よっぽどのがない限りもうすぐ死ぬ。」

俺は、お前が死ぬことだけが望みだからな。

それに…俺には立ち入る資格がないんだろう? だったらお前で片付けることだな。」

その言葉に殺せんせーは言い返せず、柳沢はそのまま立ち去って

いった。

取り残された二代目死神は…イトナの時と同様に暴走しそうな勢いだ。

そんな二代目死神を見ながら、殺せんせーはある日のことを思い出していた。

『この花は…？』

アジトで新聞を広げる死神がテーブルの上に活けられた花に気付いた。

一方二代目死神はというと、銃の手入れをしていた。

そして答える。

『道端の雑草や花を適当に摘んで飾ってみたんです。和ませる技術も暗殺の役に立つかなって。…邪魔なら片付けますが。』

そう不安そうに答えた二代目死神を見た死神は…

『……………いや このままでいい。良いセンスだよ。私より上手い。』

それを聞いた二代目死神の顔がぱつと明るくなる。

『良かった!!？じゃあこれから毎日飾りますね!!？』

『それも良いけど、毎日するなら化学の勉強だ。今の君の化学レベルじゃ蚊すら殺せない。』

『う…』

(あの笑顔が『見えて』いたら…もつと違う人生に導いていたのだろうか…)

殺せんせーは二代目の触手に潜り、二代目死神の心の声を聴いた。

E組のみんなはそんな様子を固唾を飲んで見守る。

「…………触手が僕に聞いてきた。『どうなりたいのか』を…。

僕は答えた。

あんたに認めて欲しかった。あんたみたいに…なりたかった」

そう言い、二代目死神は触手の仮面の下で涙を流した。

そしてそんな二代目死神に、殺せんせーは言った。

「今なら…君の気持がよくわかります。お互いに同じ間違いをしないように、もう一度勉強し直しましょう。

君はまだ若い。もう一回…やり直してみませんか？私も今度は君のことを…しつかり『見て』いますから。」

それを聞き、二代目死神の目から執着心が抜けた。

それを見計らい、殺せんせーは二代目死神の触手を抜いた。

二代目死神はエネルギーを使い果たしたのか、その後地面に倒れこんだ。

しかし意識は少しとはいえあるようだ。

そんな中、

「…殺せんせーは本当にここからでれないの？」

「？なんで？」

「なんか…さつき柳沢が言ったたじやん。『よっぼどのがない限り』殺せんせーは死ぬって…。」

なーんか引つかかってさ。」

そう言う中村に、カルマが言った。

「…よく聞いてたね。でも、言葉のあやでしょ。」

「…やっぱりそうだよね。」

しかし…

「ありますよ。『先生』が生き残る方法。」

「「「…はい!?」」」

突然そう言った人物に、E組のみんなが突っ込んだ。

「あるんです。僕の情報が確かなら…ほぼ間違いなく、『先生』は助かります。」

そう言ったのは、二代目死神だった。

「…まって。ちよつと整理させて。」

「ええ。でも時間が近づいているので、手短に。」

そんな二代目死神の言葉を、カルマが代表して整理した。

「…まず殺せんせーはさつき『自分の力が及ぶ範囲で色々調べたけど、発生装置の防備も完璧だった。先生からの投石とかにも備えて対空兵器まで配備してある。』みたいなこと言ってたよね。」

「…そんなに覚えていたことにびっくりしてるけど、言ってたね。」

「簡単に言ったら『何もかも完璧だった』ってことでしょ?で…どうい

うこと?」

カルマはそう言って二代目死神に振った。

二代目死神はうーん…と言いながら、言った。

「ええと…説明するにはあのレーザーの仕組みを言った方がいいよね。」

簡単にいうとあのレーザー、中性子の周波数を元にして作られたんだ。

…ここまで言ったらわかる人も多んじゃない? 『先生』もわかったでしょ。」

中性子?

あのほとんどなんでも突き通す?

それがなにか…

…ん?

「「「あー!!?」」」

何人かの生徒がそう声を上げた。そして殺せんせーも驚いた表情を浮かべている。

「あーじゃあプールに行けば…」

「殺せんせーが助かるかもしれない!!?」

「いや、まて!!?話が読めねーよ!!?」

奥田と中村のトントンと進む話に、寺坂が突っ込んだ。

しかし…

「…寺坂って本トにバカだよねえ。」

「ああ!!?」

そんな寺坂に、カルマが言った。

「前にテストに出たじゃん。まず中性子って何?」

「ああん？あれだろ。どんな物も突き通す放射線の…」

「そんな中性子でも突き通せないものがありまーす。それは例えば何？」

「ええと…ああ、あれだ。コンクリートとか…」

そこまで言いかけて、寺坂はハツとした表情になった。

そしてそれによってE組の全員がわかったようだ。

「…確かに殺せんせーの力が及ぶ範囲ではないな。」

「ああ。むしろ弱点だ。」

そして二代目死神は殺せんせーの方を向き、言った。

「確か『先生』…」

水が苦手なんだよね？」

第27話 卒業の時間

ちょうどそのころ、司令室では…

「…柳沢の暗殺計画が失敗したそうだ。」

「では…レーザーに頼るしかないのですね。」

レーザー発射まであと20分を切り、発射の準備が整った。

が……

「!??司令官!!?」

「?なんだ?」

「超生物の…あの怪物の生体反応が……

バリアの外に!!?」

「!??なんだと!!?」

指令室が騒然とした空気になった。

そしてすぐさま全員が、事態の確認に急いだ。

「奴は…どこから出て行った!?？」

「今確認中です!!？」

…えっ…と…プ…プールから!?？」

「なっ……………!?？」

ちょうどその時、

柳沢が指令室に戻ってきた。

「っ柳沢あ!!？お前裏切ったか!?？」

そうそうに司令官が柳沢に詰め寄った。

それを聞いていた部下達が、（ヤバイ!!？）というような表情になる。

「裏切った？…どういうことですか？」

「あれを見る!!？」

そこには…殺せんせーの生体反応のある場所と、バリアの場所が映されていた。

それを見て、柳沢は一目で悟った。

…何が起きたかを…。

そして…

「司令官。なぜ…

私が裏切ったと？」

「決まっているだろう!!？あのバリアの中に入ったやつの中で、レーザーとバリアの三つ目の弱点を知っていたのは君だけだ!!？」

『『二代目』がそれに気づいた可能性は？』

「っ…………。」

「私が奴の暗殺計画に裏切るわけがない。」

「だ…だが…」

「まだ何かありますか？」

その声には未だかつてない怒気が込められていた。
そしてまた、柳沢の目には……………

憎しみに満ちていた。

翌日の朝、某朝の情報番組では…

総理大臣の緊急会見の話題で盛り上がっていた。

内容は、今回のドーム出現について。当たり前だが…………殺せんせー
のことについては全く触れない内容だった。

簡単に言えば、

「あのドームは昨年のも月爆破の原因究明のためのものであった。」

「あれほど嚴重な警備をしたのはその実験に放射線を使用していたた
め。」

「人体に無害であることは確認していたが、念のために。」

…ということだ。

そんなニュースを聞き流しながら渚は……………

E組のみんなは卒業式に向かって行った。

卒業式の呼名……今日は烏間先生だ。

みんなの返事を聞きつつ、渚は考えていた。

（殺せんせーは……E組の制度は間違ってるから変えさせようとか……そういう事は1回も言わなかった。）

「潮田 渚!!？」

「はいー！」

（『理不尽な事が世の中にあるのは当たり前』

『それを恨んだり諦めているヒマがあったら……

楽しんで理不尽と戦おう』

その方法をいくつも教えてくれた。）

そして渚は卒業証書を受け取った。

そんな渚の目を見て、理事長が言った。

「いい目をするようになったね。担任の教育の賜物だ。……卒業おめでとう。」

「……はい。理事長もやりすぎない程度にお元気で。」

そんな渚たちの姿を……体育館の天井にいた殺せんせーも、涙ぐみながら見ていた。

そして……最後の花道。

多分……E組のみんなにとっては、柵ヶ丘の体育館を踏むのもこれが最後だろう。

そんな卒業生達の背中を見ながら……理事長は自分の生徒達を見送った。

全員が出て行ったことを確認した理事長は、自らの携帯電話の電源

を入れた。

するとそこには…2・3件の不在着信があった。

懐かしく、見覚えのあるその名前に、理事長はおもわず笑みを浮かべた。

そして電話をかける。

3コールでその人物は出てきた。…当たり前だ。今日は日曜日なのだから。

そして…

「どうした？電話してくるなんて。」

『よー浅野。久しぶりだな。なんか前会ったときとずいぶん声が変わったか？』

「…相も変わらず鋭いな。」

『そりやどーも。で？なんかあった？』

「そっちこそ。突然電話をかけるなんて、よっほどだろ。」

『こっちは感謝と近況報告だよ。』

「感謝？されるようなことをした覚えはないが？」

『お前の学校からたくさん優秀な生徒達をありがとうってことだよ。全員で27人。』

「ああ、そういえばそうだったか。」

『まあ「彼」が受けたのは意外だったけどな。確かE組の生徒だっけ？なんで落とされたんだよ？』

「…『彼』は君が言ってたほど良い生徒ではなかったよ？…まあ今はそうかもしれないが。」

『またまたあ。君の息子が優秀すぎるんじゃないのか？』

「まさか。あれは…。」

そんなこんなで10分ほど近況報告をして電話を切った。

そして、電話の画面を見た。

そこには…『大石良雄』の文字。

彼は「桐ヶ丘学園」の理事長の大学の同級生であり…

あの「梅宮高校」の理事長だった。

高1の時間 第28話 新しい時間

4月。

それは新しいことが始まる季節。

そしてまた…

元E組のみんなが高校生となる月…。

今日は4月2日。

「梅宮高校」のオリエンテーリングの日だ。

同時にクラス発表もあるらしい。

部屋の番号もクラス分けで変わるそうで、まして三年間クラス替えはない。

クラスは入試の順位が良かった者からC組、B組、A組だそうだ。

元E組のみんなだけでなくその年のほとんどの入学者が、自分が何組になるのか期待に胸を膨らませていた。

渚はその日、柵ヶ丘から30分かかる梅宮駅に着いた。
改札を出ると…

「あつ、渚!!??こつちこつち!!??」

おなじみの4班のメンバーが全員そろっていた。

入試の時に一回行っただけだったので、「不安だから」とカルマにまた案内を頼んだのだ。

卒業式ぶりの再会に、みんな（特に女子たち）は、とてもはしゃいでいた。

とそこで、渚が口を開いた。

「あれっ、茅野髪…」

そう…茅野は梅宮高校を「雪村 あかり」として受けたので、黒い髪になっていたのだ。

「戻したんだ〜」

と説明する茅野を見て、カルマが渚に…

「『かわいいね。』って言わないの?」

「…カルマってやっぱりゲスいね…」

「さあ?でも言わないと伝わらないよ?」

「う…」

そんな渚たちの姿を見て、茅野はもちろん女子3人は不思議そうにこつちを見ている。

覚悟を決めた渚は茅野の方へと歩いて行き…

「茅野、その髪かわいいね」

それを聞いた茅野は、真っ赤な顔をしながら…

「う…うん!ありがとう…」

((…))これは長くなるなあ((…))

そんな渚と茅野の姿を見たカルマと杉野と神崎は同時に思った。

「っそういえば!渚も髪切ったんだね!!?」

「あー…まあね」

そう…渚も中学卒業と同時に髪を切ったのだ。

ただ…

「…なんか…あんまり変わってないな」

「う…」

「髪が長いから女子っぽく見えてたんじゃなくて、もともとの顔が女子っぽいのか…」

「…カルマ君、杉野やめたげて。多分渚それ結構気にしてるから」

そんな話をしながら、渚たちは梅宮高校についた。

入り口のところで各自封筒を渡される。

…どうやらその中にクラスが書かれているようだ。

ただ、「指示があるまで中を見るな」ということだったため、みんなカバンの中にそれをしまった。

オリエンテーリングまでまだ時間があるので、みんな講堂で待っていた。そこでもまた元E組のみんなに会ってはしゃいだり。

「あと30分で始まります。トイレなどは早めに済ませてください」

「あー、トイレか」

そんなアナウンスが流れ、渚がそう呟いた。

「カルマ、トイレってどこ分かる？」

「あー、確か事務室の近くが一番近かったと思うよー」

「ええと、事務室ってどこだっけ？」

そんなわけで、渚はトイレに行ったのだが…

「…そーいやなんでカルマってあんなにこの学校のこと詳しいんだろ…」

そう思いつつ、トイレをすませて講堂に帰ろうとした。

が…

「…どっ？…どっ…」

講堂に戻ろうとしたのはいいが…全く知らない場所に行った。簡単に言えば迷った。

この際だから断っておくが、渚は方向音痴ではない。ただこの学校の仕組みが複雑なだけである。

「カルマも連れて来れば良かった…」

そう思い、カルマにヘルプを求めようとした。

すると…

「あれ？新入生？」

そんな声がして振り返ると、違う学校の制服を着た女子がいた。
多分彼女も新入生なのだろう。

「なんでここに居るの？講堂集合だと思っけど…」

「ああ…迷っちゃって…」

「あー、結構複雑だもんね。この学校」

「ええと…何でここに？」

「私は理事長室に用があつて」

…何で新入生なのに理事長室？

そう思ったけど…なんか野暮な気がしたのでやめといた。

…あれ？なんか大事なことを忘れてるような…

「あ！講堂！」

やばいつ…と慌てていた渚に…

「講堂なら向こうの突き当たりの階段登ったとこだよ」

「…ん？」

「こつちの階段からは講堂行けないんだよ。…まあ普通知らないよね」

(何で知ってるの!?!?君もカルマも!!?!?)

でもあと15分くらいしかないので、急いで行かないと結構やばい。

「ええと、君は行かなくていいの？」

「私はトイレに行くから…」

「うん、わかった！ごめん、ありがと!!?!?また会った時ちゃんとお礼するね!!?!?」

そう言つて渚は走り去つた。

「…すぐに会えるんだけどな…」
そう呟いたその女の子の言葉は、誰も聞いていなかった。

第29話 新しい時間 二時間目

渚が講堂に着いたのは開始10分前だった。

「どーしたの？ずいぶん遅かったじゃん？」

「うん…ちよつと迷つてて…」

そんな渚の言葉に、カルマが…

「あー、確かに複雑だもんね、この学校。着いていけば良かった？」

「いや、違う学校の人が教えてくれたから大丈夫」

「…違う学校？この学校の生徒じゃなくて？」

「うん」

そんな渚の言葉に、カルマが「やつぱり…」と呟いた。

「？やつぱりつて…何が？」

「ん？やあ、こつちの話」

そうこうしているうちにオリエンテーリングが始まった。

この学校の校長らしき人が話始めた。

内容としては思ったほど厚みはなく、「この学校の仕組みついて」と
か「寮での生活について」とか…

とりあえず詳しいことは入学後に説明するようだ。

そしてとうとう…

「ではみなさん。封筒を開けてください」

途端に、ガサガサつと一斉に封筒を開ける音が聞こえた。

「えーB組だ」

とか

「まじか」

とか…いろんな声が聞こえてきた。

多分…A組とかB組とかの人たちの言葉だろう。

一方渚はというと…

「ん？…C組？」

その紙には「あなたはC組です」の文字。

それを見た瞬間はびっくりしたけど、カルマや…ほぼ間違いなく茅野とも三年間同じクラスだということだ。

はつきり言って、すごく嬉しい。

「何組だった？」

という茅野の言葉に、

「C組だったよ」

と返した。

「本当に？？良かった。渚と三年間一緒だよ」

「やっぱり茅野はC組だったんだ」

「うん!!？」

…今考えてみればこの時から少しおかしなところはあったのかもしれない。

「では、A組の人たちから退出してください」

その声で、A組になったみんなが退出していった。

ちょうどそのとき、渚は先ほどの女の子を見つけた。

ついさっきまで壇上に立っていた校長に声をかけられ、彼女はついていった。

(？A組の生徒じゃないのかな？)

そう思いながら渚はそれを見ていた。

そして講堂に目を戻すと、柵ヶ丘の制服を着ている人がたくさんいた。

…というか半分くらい柵ヶ丘の制服だった。

「ねえ、カルマ。A組になった人、柵ヶ丘にいないの？」

「…そうみたいだねえ」

カルマは明らかに不審そうな顔をしていたけど、渚はそのときは何も思わなかった。

そう。そのときは。

「では…B組の人たち。退出してください」

そのときだ。初めて…違和感を感じたのは。

出て行った人たちは全員…違う学校の人たちだった。

逆に言えば、櫛ヶ丘の生徒だけがその場に残っていたのだ。

「…寺坂。お前アルファベットも読めなくなった？」

「うっせえ!!？俺が一番信じられないんだよ!!？」

そういうカルマの言葉に寺坂はイラツとしたようで、クラス分けの紙を見せた。

…確かに「あなたはC組です」と書いてある。

…おかしい。絶対におかしい。

「え、待って。こっわ…」

そう言ったのは…

「いや、中村。お前言ったじゃない。『みんなが同じクラスになったら嬉しくない?』って」

「まさか本当になるとは思わないでしょうが!!？第一私のこの学校の志望理由それじゃないし！」

「いや、それだったら結構問題だろ…」

「では、C組の人たちは退出してください」

そう言われ、渚たちは退出した。

そして外で待っていた先生（と思われる人）に、教室まで案内された。

…すでに身をもつて知っていたけど、かなり複雑だ。次移動する時はカルマと一緒に行動しなきゃ。

そんなことを考えつつ歩いていると、教室に着いた。

全員が教室に入ったのを確認すると、同行していた先生（多分）が、口を開いた。

「では、この席の通りに座ってください。もう少ししたら、担任と副担任が来るので…」

そう言って、教室から立ち去った。

その席順を見た渚たちは…

「「「「はあ!?!?」」」」

岡野 — 前原 — 片岡 — 磯貝 — 倉

橋 — 堀部

神崎 — 木村 — 不破 — 三村 — 矢

田 — 竹林

奥田 — 杉野 — 速水 — 千葉 —

原 — 吉田

雪村 — 潮田 — 中村 — 岡島 — 狭

間 — 村松

〇〇 — 赤羽 — 菅谷 —

〇〇 — 寺坂

「なんだよ!!?この明らか悪意のある席は!!?」

「やあ…悪意はないけど…ずいぶんと固まってるね……」

不安がほほ確信になった瞬間である。

「…とりあえず…席につこつか。みんな」

そんな磯貝の言葉に、みんながしぶしぶ従った。

…ものの5分もしないうちに人が入ってきた。

見たことない人だ。

(((((…ん?))))

知らない人だったからこそ、みんなは違和感を覚えた。

だって…担任が誰かは薄々わかっていたから…。

そしてその人物は、口を開いた。

「皆さん、お久しぶりですね!!?これから三年間副担任『役』の…」

「「「お前か————!!?」」」

声を聞いて全員がわかった。

その人物は…

「いやみんな、最後まで聞いて。僕は君たちの副担任『役』兼体育教師の補佐をします…」

二代目死神こと、アードルフIIアホネンです。

みんなはもうわかっていると思うけど…担任『役』と担任はあの人たちですね」

「ああ…やっぱり?」

「ええ。どうやら担任『役』の方は話があるそうなので…では入っていただきます」

(どーせあのことだろ…)

入ってきたのは…

「みんな、久しぶりだな」

「」「やっぱり烏間先生だ」「」「」

「良かった。ここでビッチ先生とかきたらどうしようかと」

そんな卒業式ぶりの再会に、みんなが楽しそうに話し始めた。

そんな空気の中、烏間先生が口を開く。

「わかっていると思うが…君らに少し依頼がある」

そう言って、ドアに向かって「来い」というジェスチャーを送った。

そして入ってきたのは…

「皆さん。お久しぶりですねえ」

「」「やっぱりな」「」

「ニユア!!? 皆さんひどくないですか!?!?」

やはり、殺せんせーだった。

そんな安心感からか、いつもの先生いびりが始まりそうなほどの、楽しそうな雰囲気。

そんなみんなを見つつ、烏間先生が話し始めた。

「実は、国がまた君らに暗殺依頼を出してきた。受けるも受けないも

君らの自由だが…」

「どちみち私はこの教室で担任をする予定です」

そんな話を聞き、みんなは顔を見合わせた。

そして…

「「「はははは!!?」「」」」

「どっちみち先生担任なんだから」

「だったらせつかくだし暗殺続けたいよね！」

「うんうん」

「てか、どれだけ国はあのタコ殺してえんだよ」

「あつ。それ言ってる」

そんな風に、みんなは暗殺教室の存続を了承した。

「ヌルフフフ。では皆さん。また暗殺教室が始まったところで、新しい仲間を紹介しましょうか」

「え。新しい仲間?」

「はい。皆さんお忘れですか? 『もう1人の特待生』の存在を」

「ああ…そーいやいたな」

「そんなわけが入ってきてください!!?」

そう言われ、その人物が入ってきた。

そして…

「皆さん、初めまして!!? 私は特待二位の柊 佳奈です!これから三年間よろしくね!!?」

そんな彼女を見たみんなは…

(わあ…美人…)

とか

(スタイルいいなく。片岡みたいだな)
とか：結構な高評価だった。

そんな中：渚は驚きの表情を浮かべていた。
なぜなら彼女は：

渚に講堂への行き方を教えてくれた子だったからだ。

第30話 驚きの時間

『終 佳奈』を名乗ったその女の子は…

渚に講堂への行き方を教えてくれた子だった。

渚がびっくりしている中…となりに座っていた茅野がいきなり立ち上がり…

「え!?? 佳奈!?? なんで?」

そんな茅野の言葉に…

「久しぶりく、あかり!」

え? あかり?

「え? 待って? どういう関係!??」

そんな渚の言葉に、カルマが…

「やあ…特待二位はある程度予想できてたけど…

まさか佳奈と茅野ちゃんが知り合いだったとはねく」

「あつ、カルマも久しぶりく。一位カルマだったんだく」

「どーせ気づいてたでしょ」

「あつ、ばれた?」

……………ん?

「「「「はあ!??」」」」 (本日二回目)

突然のみんなの大声に、終とカルマはびっくりしたように体を震わせた。

「…何…突然…」

「元気だねえ。カルマのクラスは」

「で、なんで茅野ちゃんと知り合ったの?」

「「いや、お前らの関係の方が気になるわ!!?」」

カルマと終のトントンと進む会話に、やっとみんなが追いついた。

そして答える。

「…関係って…ただの幼馴染だよ。ねえ」
「うんうん」

そんな言葉に…

「あつ、バレンタインで言ってた…。毎年チョコくれる子だったっけ？」

「あー…あつたね。そんな話も」

そういうカルマに…

「へえ。チョコか」

「…言っとくけど義理ね」

「そう言われればそう言われるほど疑いたくなるのが人間の性でしょーが」

しかし中村の言葉に、カルマがそっけなく返した。

「期待させて悪いけど、俺らにそんな雰囲気ないから。ねえ」

「ないね。絶対にありえない」

そんなすごくドライな対応に、中村は「なくんだ。つまんね」と呟いた。

「で、なんで茅野ちゃんと知り合ったの？」

そんなカルマの言葉に、茅野が答えた。

「中学が一緒でね」

「ん？…あー、そういうこと」

「同じクラスで仲よかったよね」

そんな終の言葉に、茅野が…

「…で…なんでこの学校に？あつちのほうがレベル高いでしょ？」

「ん？だってこの学校特待制があるじゃん。それにあの学校つまんなくなってる」

「いや、どういうこと…」

そのとき…

「ニユア!!?先生も話があるんです!終さんへの質問は後にしなさい!!?」

「ええ…いいじゃん」

「ダメです!重要な話ですから!!?」

「「「「はあい」」」」

そう言っつてしづしぶみんなは席に着いた。

それを確認した烏間先生が、口を開く。

「この理事長には当然このことは説明している。だから全員が同じクラスになったわけなのだが…:理事長から『どうしても譲れない』と言われた点がいくつかあつてな」

「その一つが、終さんのこのクラスへの加入です」

「まあ、そりや特待二位だしな」

「そして二つ目が…」

そう言っつて、殺せんせーは出席簿を取り出して…

「今から行かう委員決めについてです!!?」

「「「へえ」」」」

「ちよつと皆さん!!?先生これに関しては結構理事長と話し合つたんですよ!!?」

「話し合うも何も…:委員長は磯貝で、副委員長は片岡で決まりだろ」

「だから話し合つたんですよ!!?」

「いや、どういふことだよ!!?」

そんな中…

「そーだよ殺せんせー。委員長は磯貝、副委員長は片岡。全員の総意で決まりでよくない?」

そう言うカルマに、殺せんせーが言った。

「…カルマ君?」

「ん?何?」

「知っていますね?」

「なんのこと?」

「委員決めのことですよ!!?知っているでしょう!!?」

「さあ?」

そう飄々と返すカルマに、殺せんせーは諦めて説明を再開した。

「つとりあえず、委員長と副委員長は学校側ですでに決定している
うですー!」

「え、まじで?」

「ええ。これはこの学校の決まりだそうで…」

クラスの中で、最も入試成績が良かった男女1名ずつがなるそう
です!!?」

へえ〜そうなんだ。

確かに磯貝君も片岡さんもトップではないね〜。

えつと…確かこのクラスのトップ2人…は…

.....ん？

んん？

あれ？

「「「はあああああ？」「」「」（本日三回目）

：その日：たぶんこの一年で一番大きく、一番クラス全員のそろった声が：この新しいクラスで響いた。

第31話 質問の時間

「「「はあああああ!?」「」「」」

その日三回目のその声は…

今までで一番大きく、今までで一番揃った声だった。

そして…

「ちよつと待つて!??うちのクラスのトップ二人つて…柊さんとカルマだよね!??」

「カルマが委員長!??待つて!!?ありえないんだけど!??」

その声のあとに、みんなは「ありえない」という言葉に満たされた。

そんな声を聞いた柊は、クスツと笑つて

「やっぱりカルマのクラスは元気だね」

「そりやどーも」

そんな中…

「殺せんせー。もうちよい理事長と話し合つてくれつて」

「ていうか、カルマ絶対委員長の仕事サボるだろ」

「普通にカルマだけは委員長にしたらダメな気がする…」

そう口々に言うみんなを殺せんせーがたしなめた。

「まあ、この学校の決まりだったら仕方ないじゃないですか。そこはもう諦めて…」

「「「できるか!!?」「」」」

「第一当の本人が『やりたくない』つて言つてんだから別にいいじゃんか」

そう口々に言うみんなを見て、殺せんせーは「うーん…。」と考えるような仕草を見せたあとに、こう言つた。

「そうですね…。では来週の登校日に超体操服を持つてきてください。明日から寮入りですし、その頃にはほとんどの方が寮に入っているでしょう?。」

「…何に使うの?。」

「それはその時のおたのしみということだ」

そう言つて、殺せんせーは話を終わらせた。

そして、柊に話しかける。

「あ、柊さん。話が終わったので、席についてください。茅野さんの後ろで」

「かやの……?」

殺せんせーの声で、茅野が柊に「ここだよ」というように手を振つた。

それを見て、柊が

「ああ!あかりの後ろね!」

「ニユア!しつ失礼いたしました!」

「いや?わかつたからいいよ?」

そつかあ。あかりここでは『茅野』って呼ばれてるんだね」

そう言つて、柊は席についた。

それを見て、殺せんせーは

「…では今日話すことはあらかた終わったので…柊さんに質問していいですよ」

その言葉に、みんな(主に女子)は待つてました!とばかりに立ち上がり、柊の席に集まつた。

早速倉橋が話しかける。

「ねえ、佳奈ちゃんつて呼んでいい?」

「うん!もちろん!!?」

「よかつたあゝ。」

あつ、佳奈ちゃんつて中学どこだったの?」

「ああ…白波中学…」

「へえ、白な…え?」

解説しよう!!?」

私立白波中学とは東京都にある全国でもトップ3に入る共学校である!!?そして、神奈川県との県境に位置し、都外からの生徒も多い学校である!!?そしてスポーツも盛んで、文武両道がモットーの中学

校である!!?

「…なるほど…だからさつき茅野ちゃんは『なんで?』って言ったのね」

中村が納得したように、相槌をうった。

「だってあの学校、勉強勉強で全然息つく暇もないんだもん」

「あー、だから『つまらない』…」

「そうそう」

なるほどね。という言葉を皮切りに、色んな質問が飛び交った。

好きな科目とか、好きなこととか…。

と、そこへ…

「そーだ!!? 佳奈ってカルマと幼馴染なんだよね!!?」

カルマって昔どんなんだったの?」

「ちよ…中村!!?」

そんな質問をした中村に、今まで黙って見ていたカルマが思わず声をあげた。

そんなカルマに中村が

「おやおやあ?」

とゲスい顔をした。

「反応するってことは…何かやましいことでもあるの?」

「いや…そうじゃなくてさ」

「じゃあ別にいいじゃん?」

そう言う中村にカルマはイラツとしたのか、中村に言い放った。

「ねえ、中村。俺時と場合によつては女でも殴るよ?」

「やあだ、こわいこわい。佳奈ちゃん助けて〜」

そう言つて全然反省の色が見えないのを見かね、カルマはため息をつき、

「…勝手にすれば?」

と言った。

ラツキー、と呟いて、中村はまた柎に向き合つて、

「で、カルマって昔どんなんだったの?」

そう言う中村の言葉に柎は、うーん…、と考えるそぶりを見せ、言っ

た。

「…多分今とあんまり変わんないと思うよ?」

「…え?」

「私との一対一のゲームに全く手抜きはしないし、ちよつと何か間違えただけで『バーカ』って言うてるし…」

あつ、あと何なら一回カルマに割と本気で頭叩かれたことあるし」

「あれ絶対に俺悪くないよね!?!」

（「悪くない」ってことはガチなんだ…）

カルマの言葉に全員の心が見事にシンクロした。

「ええ。カルマ女子叩いたの?どーなの、男として」

「だから俺絶対に悪くないから!」

「どんな理由であれ、男が女子叩いただけでアウトでしょ」

「そもそもそれ俺らが小4の時の話だからね!?!? 仮に万が一俺が悪かったとしても時効だから!?!」

「…やっぱりカルマが悪いんじゃない?」

「悪くないって!!?」

珍しく余裕がないカルマを見て、渚は思わず笑みをこぼした。

そして柊に、

「あつ、そうだ。柊さん、さっきはありがとう」

「いいよ全然。私もまだ時間に余裕あったし」

そんな会話を交わしている柊と渚を、茅野が不思議そうに見て言った。

「え?2人って会ったことあるの?」

「あー…。オリエンテーションの前にちよつと僕迷っちゃってさ…その時に講堂までの行き方教えてくれたんだ」

「そうそう。正直あの時、『なんで柊ヶ丘の生徒がここにいるんだろう?』って思ったんだよね。」

でも仲良くなるチャンスだし、困ってる感じがしたからさ」

「ん?…もしかしてあの時、僕らと同じクラスになるのわかってた?」
「うん」

「…なんで言わなかったの?」

「殺せんせーに『もしE組の皆さんに会っても黙っててくださいね!!
?びつくりさせたいので!』って言われたから?」

「その時すでに殺せんせーにあってたんだけ?」

その時、渚はちょうど気になっていたことを尋ねた。

「そういえば…なんで柊さんもカルマもこの学校のこと詳しいの?」

「あつ、それ私も思ってた〜」

その渚の質問に、柊は…

「あー。私の家、この学校からすぐ近くてね。頑張れば3分くらい
で着くんだよね〜」

「3分…?」

はつきり言って、ここから駅までが5分くらいだ。

…どういうこと…?」

あれ?ていうか…

「計ったことあるの!?!?」

「うん。だって私たち小学校の時よくここに遊びに来てたし」

「…はい!?!?!?」

「だからこの理事長とも結構前から知り合いなんだよね〜」

「いや待って!色々突っ込ませて!!?!?」

ちょうどその時。

「皆さん。柊さんへの質問は終わりましたか?」

自由解散なので、その辺りは悪しからず」

はい、と言い、みんなは帰る支度を始めた。

カルマ自身も帰る支度をしていた時、

「ねえ、カルマ。

久々に一緒に帰らない?」

柊である。

それにカルマは、

「うん、いいよ〜」

と答えた。

「じゃあね!!? 佳奈、カルマ君!」

「また来週!!?」

「じゃあね」

そう言っつて、柊とカルマは電車を降りて、みんなと別れた。

「で、どうしたの?」

「ん?なにが?」

「なんか話があるから『一緒に帰らない?』って聞いたんじゃないの?」

「そう言うカルマもあるんでしょ?」

「まあね」

そんなことを言いながら、2人は改札を出た。

「佳奈からどうぞ?」

「うん、じゃ…」

そう言っつて、柊はカルマの前に立って…

「カルマ背伸びたね。小学校卒業した時は本当にチビだったのに」

「俺がチビだったんじゃないかって、佳奈が大きかったんでしょ」

で、と言い、カルマは柊に向き合っつて言う。

「本題は?」

「…ごめん」

そう言っつて、柊は本題を話し始めた。

「二つくらいいい?」

「うん」

「じゃあ…カルマってさ、

みんなから『カルマ』って呼ばれてるんだね」

「そりゃ、名前がそうだから？」

「だって小学校の時は…」

「それ以上言ったら怒るよ？」

「…わかった」

「もう一個は？」

「…カルマさ、

なんで私に話しかけてくれたの？」

「…質問の意味がわからないんだけど？」

「だってカルマ言ってたじゃん？」

『……………』って「

その言葉に、カルマと柊は立ち止まった。

そして…

「忘れた」

「…は？」

「俺言っただけ？そんなこと。別の奴じゃないの？」

「えっ…いや…」

そしてカルマは柊に向き合って言う。

「俺からも一個いい？」

「どうぞ？」

そう言つてカルマは柁に質問を投げかけた。

それに柁は、「さあ？」と答えた。

『『さあ？』つて…』

「カルマ頭いいし、すぐにわかるでしょ。」

あつ私家こつちだから」

そう言つて、「じゃあね！」と言い立ち去つた。

しばらくカルマはそこに立ち止まっていたが、

「まあいっか」

と言つて、家に帰つていった。

第32話 登校日の時間

全員が寮に入り、今日は4月10日。
入学前の最後の登校日である。

渚は寮から杉野・茅野・カルマ・柊と一緒に学校に行った。

「ねえ、みんなさすがにもう行き方覚えたでしょ?」

「寮からの登校は初めてだし、学校についても教室までよくわからないし…」

「…教室までは複雑じゃないけどね」

そんな話をしながら、みんなは学校に向かった。

学校の中は複雑なのに、寮から学校までは結構簡単だ。

何よりやつぱり近い。

5分足らずで学校に着いた。

「さてと、俺らが一番か?」

そう言いながら、杉野がドアを開けた。

…たしかにまだ来ている人はいなかった。が…

「…ん?」

見えたのは…柊の席の後ろにあった、見覚えのある黒い大きい箱。

その瞬間、その中央にあったモニターの電源がついた。

そして…

「渚さん!カルマさん!杉野さん!茅野さん!お久しぶりです!!?」

そして柊さん!初めまして!!?私、自律思考固定砲台こと、自律でおのずりつ

す!!?」

「「「律!!?」」」

そう。律である。

みんなの声に、律はこう答えた。

「申し訳ありません。本来なら以前の登校日に来る予定だったので
が…少し調整が遅れてしまいました…」

「いやいや、そんな」

「律がいるだけで心強いって」

そんな話をしていると、どんどんとみんなが登校してきた。

そして、彼女がE組に来た時のように、律の周りに輪ができた。

「律戻ってきたんだ〜」

…というのが主な内容だった。

そんなこんなで時間になったらしく、殺せんせーが教室に入ってきた。

—————

今日行うのは、身体測定と制服受け渡し。

そして…

「なあ、殺せんせー。超体操服使って何するんだよ？」

「ですからその時のお楽しみです」

「そろそろ教えてくださいもいいだろ」

「いいえ！まだです!!？」

そんなわけで、今教室で着替えをしているのだが…

「…渚。そんな落ち込むなって」

「だって…身長…」

…その通り。

渚は去年と身長がほとんど変わっていないなかったのだ。

それに落ち込んでいる渚を、杉野が慰める。

「まあ…高校で伸びるって」

「本当に？」

「…多分」

「中学の時もそう言って伸びなかったけどね!!？」

…渚に身長のこと言わないようにしよう。

そこにいた男子のほとんどが思った。

そんなこんなで全員着替えが終わり、みんなは校舎の裏に集まっ

た。

全員集まったことを確認して、殺せんせーは口を開いた。

「ではみなさん！」

ケイドロをしましょう!!?」

「ん?ケイドロ?」

殺せんせーのケイドロをしたことがない柊を除き、その場にいた全員が黙った。

…頭に怒りマークを付けながら。

「「「「:ぎけんなあ!!!」」」」

「ニユア!?!?なっなん!ですか?」

「つたりめーだろうが!!?」

「そもそもこうなんのわかっててよくやろうと思つたな!!?」

そんな声が飛ぶ中、柊は『今までのケイドロ』を渚やカルマから聞いていた。

そして…

「:そりや、みんな怒るね…」

「でしょ?」

見るからにみんなに同情の目を向けていた。

そんな大ブーイングを聞き、殺せんせーは答える。

「いえいえ。今回は烏間先生は鬼じゃありませんし、先生も皆さんを追いかけません」

「:あえて聞くけど、殺せんせーは何するの?」

「牢屋で皆さんを迎えます」

「「「「いい加減に見張りと言え!!?」」」」

そんな怒号が飛ぶ中、渚が殺せんせーに質問を投げかけた。

「:ええつと?なんでケイドロ?」

「よくぞ聞いてくれました!渚君!!?」

前の登校日に皆さん言ったでしょう? 『委員長を変えて欲しい!』と!」

「…言ったね」

「そのためのケイドロです!!? もし皆さんが勝てば先生も理事長との交渉頑張りますので!」

「…そこは絶対じゃないんだ…」

「ていうかそういう理由なら先生が鬼すればいいじゃん?」

「先生がするって言ったら皆さん怒るでしょう!?!?」

「…そりあ…:…まあ…:…」

そういうやりとりをしたあと、殺せんせーはみんなと向き合って言った。

「そして、肝心の鬼ですが…」

カルマ君と柊さんにやっていたいただきます!!?」

「ああ、委員長と副委員長候補?」

「その通りです!!?」

「え? 待って?」

そう言って止めたのは…

「これ…俺が鬼をするメリツトないよね?」

「ん? どういうこと?」

「だから、勝ち負けって『みんなを全員捕まえるか捕まえないか』でしょ?」

で、みんなが勝ったら俺は委員長ならなくてよくなるかもしれない。い。

反対に俺らが勝ったら委員長にならなきゃいけない。

そして俺は委員長になりたくない。

こういう状況だったらみんなでもサボるでしょ?」

「あー…確かに…:」

しかし…:」

「ヌルフフ。先生がそんな簡単なことを想定してないと思いますか

？

きちんと対策はしていますよお」

「…何？」

嫌な予感しかしないな…。

全員がそんなことを考えていた中、殺せんせーがあるものを取り出した。

「カルマ君。もし本気を出さなかったらこの写真を皆さんに見せませよお」

…ああ、顔がゲスい…。

カルマは殺せんせーが持っていた写真を無言で受け取った。

その写真を見るカルマの顔が固くなったのが見て取れる。

そして…

「ねえ、殺せんせー」

「なんですか？」

「俺さ、この写真破った記憶あるんだけど？」

「写真は破れても、データが残っていたので」

「…へえー。」

なんの写真かはわからないが、破ったのがいつかは暗黙の了解だ。

…ていうか逆にあの時しかないし。

あとカルマ。殺気がここまで伝わってきてるよ。

「あとカルマ君と柊さんが勝ったら、2人のいうことを聞きましょう。」

…あつ、無茶なのはダメですよ？」

「…知ってはいたけどケチいね」

「いいから始めますよ!!？」

場所はこの裏山。制限時間は1時間です!!？」

「「「「「「…はあい」「」「」「」」」」」」

…そんな訳で、今渚たちは裏山にいる。

「やっぱ、カルマが肝だよな」

「うん。だよな」

「ねえ、茅野。柊さんってどれくらい運動神経いいの？」

「ええと…片岡さんくらい？」

「…前言撤回。柊も要注意だな」

「うーん…。でも運動神経が片岡さん並みってだけで、フリーランニングはできないと思うよ？やっぱりまだ訓練受けてないし。これからじゃないかなあ」

「OK、茅野。ありがとう」

そんな感じで程よく情報交換をする。

そんな中、杉野が口を開いた。

「なんか、こんな感じで訓練って久々じゃね？雰囲気的にも最初のケイドロに似てるよな」

「あつ、それなんかわかるかも…」

「あの時は本気で烏間先生が怖かった…」

「あつ、でもカルマ君が考えた『水に潜る』って方法、効きましたよね！」

「ああ…そういやそれ考えたのカルマだったっけ」

「ほんとにそういうの、あいつらしいよな」

そこまで考えて…

「…あれっ？やばくない？」

「？なんでだ？」

「だって…」

そのあとの渚の言葉を聞いた杉野・茅野・奥田は顔を見合わせた。

そして…

「…やばいな」

初めて、自分たちの身の危険を感じたのだった。

一方こちらは岡島・不破・千葉・速水の班。

「こちらもまたケイドロの話をしていた。

「でもよ、いくらカルマでも俺ら全員タッチするのは無理だろ。」

「…そういう油断が今まで早々に殺られてる原因なんじゃ…?」

「私もカルマは警戒すべきだと思う…」

「地味に痛いところを突くな! スナイパーコンビ!!?」

そんな会話を聞いて、不破が口を開いた。

「まあ、はつきり言つて柊さんよりカルマ君警戒の方向かな。

「やっぱり訓練でも上の方だし。柊さんは実力わからないけど…」

「仮に運動神経良くても、柊は訓練受けてないからなあ。やつぱさういうハンデはあるんじゃないかね?」

「うーん…。まあ、そうかな」

そんな会話をしていたからだろうか…。

彼らは、後ろの「ある人物」の存在に気がつかなかった…。

そしてその人物は、まっすぐに彼らのところへ向かっていった。

そして…寺坂・イトナ・村松・吉田の班は…

「…やつぱりカルマ警戒の方向か?」

「うーん。だろうな」

「いや、柊の能力がわからない限り俺は柊の方を警戒したほうがいいと思う」

「ん? そうか?」

「でもよ、よつぽどのがない限り、訓練受けてない柊が俺らをタッチできるか?」

「…寺坂はバカだから黙っておけ。余計にバカがバレる」

「ああ!??」

そんな会話をしていた寺坂たちに、ある人物が向かっていった。

そう…この時、みんなは知らなかった。

「えーと…岡島君、不破さん、千葉君、速水さん…」

柊ヶ丘のあの山が、みんなのホームグラウンドであるのと同じように

…

「寺坂、村松、吉田、イトナ…」

「逮捕ねえ」

「「「「「は？」」」」」」

この山は…カルマと柵のホームグラウンドだということ…。

第33話 ケイドロの時間

「本当だつて！いきなり後ろから柘が来たんだよ!!？」

「いやあ…。どうせお前のことだし、近づいたのに気づかなかつただけじゃねえの?」

「俺の他にも3人いるけどな!!？」

鬼にタツチされ、牢屋へと向かっていた岡島は、三村にそんな電話をかけていた。

「タツチされた俺からのアドバイスだ。…………柘はマジでやべえぞ」「いっつも一番に殺られてるお前が言っても信ぴょう性ゼロだけだな」

「これガチだから!!?そんなこと言ってる間に、お前らの後ろにいるかもしんねえし!」

「いや、まさか…」

すると…

「うわあああああ…」

「三村!?!?三村あ!?!?」

「…悪い……………」

殺られた…

「三村さん、菅谷さん、竹林さん、逮捕く。確保したのは柘さんです!」

そんな律の発言に、茅野を含め、渚たちは固まった。

「さっ…殺戮さつりくの裏山の再来だ…。どンドン殺られてるよ…」

「…確認だけどケイドロだよね?」

茅野の言葉に、渚がさりげなくツツコミをいれる。

そんな空気を吹っ切るように、奥田が口を開いた。

「いや…でも機動力が抜群の人とかもいますし…」

「ああ。木村とか岡野とか…」

そういう杉野に、渚が答える。

「ねえ、杉野。忘れてない？」

鬼はあの…

嫌がらせが大好きなカルマだよ？」

「？は？」

そんな渚たちに答えたのは…

「片岡さん、木村さん、岡野さん、前原さん…逮捕く。確保したのはカルマさんです！」

律の無情な声だけだった…

「…機動隊を全員殺るって…」

「…カルマ、マジで本気出してるねえ…」

そう言ったのは矢田と中村である。

そんな二人のつぶやきに、倉橋が答える。

「カルマ君もそうだけど…思った以上に佳奈ちゃんがすごくない？」

「どんな弱み握られたらこうなのよ…!!？」

そんな話をしていると…

「磯貝さん、原さん、狭間さん、神崎さん、逮捕く。確保したのはカルマさんです！」

「…またあ…!!？」

そこにいた中村・倉橋・矢田の声がシンクロした。

そして矢田が律に尋ねる。

「…律。あと誰が残ってる？」

「はい。残りのメンバーは…中村さん、矢田さん、倉橋さん、渚さん、杉野さん、奥田さん、茅野さんの7名です!!？」

「…残り時間は？」

「はい！あと30分ほどあります！」

「…絶対無理。これ勝てない」

「…だね」

この短時間で20人ほど殺っている。

そして殺せんせーが看守の限り、脱獄は不可能だろう。

…はつきり言って、残り30分逃げ切るなんて…

その時、

「げっ。佳奈だ！」

「「え!?」？」

そんな中村の声に、矢田と倉橋はその場から立ち去ろうとした。

その隙に、柵は中村をタッチする。

その場から立ち去ろうとする矢田と倉橋を見て、柵は木の上から飛び降りた。

が…

「いだっ……」

そう言って、柵は足を押さえてうずくまった。

「っう…。足ひねった…」

……

「大丈夫？」

「…うん。ごめんね。陽菜乃ちゃん」

「ううん。いいよ」

「…本当に大丈夫？」

「…本当にごめんね…。二人とも…」

「いいって。大じ「タッチ」……」

……

しまったあああ!!!!

そうじゃん。佳奈ちゃん鬼じゃん!!?

「本当にごめんね…。二人とも…」

「いや。大丈夫だよ。そういうゲームだし」

「…ひとつ頼みごとがあるんだけど…」

「ん?なに?」

「肩貸して…?」

「ん?」

「中村さん、矢田さん、倉橋さん逮捕く。確保したのは柊さんです!
しかし柊さんは足をくじいてしまったので、ここで離脱となります
!!?」

律が渚たちの班に、そんなメッセージを送った。

それを聞いた杉野は…

「…柊離脱? ってことは、今鬼ってカルマだけ?」

「そういうことだね」

「はあ…よかったあ。佳奈には悪いけど、そうじゃないと逃げ切れな
いもん…」

そんな中、それまで黙っていた奥田が口を開いた。

「あつ。それなら、ばらけた方がいいですよね！」

その方が捕まえにくいと思いますし…」

「…さっすが、奥田さん」

そう言つて、カルマは奥田の頭にポンつと手を置いた。

そして言う。

「それじゃあ、早く行つた方がよくない？茅野ちゃんもそう思うでしょ？」

そう言いながら、カルマは茅野の肩に手を置いて、茅野の顔を覗き込んだ。

そんなカルマの問いに茅野は…

「うーん…まあそうだね」

「じゃあ杉野は向こうで、渚は反対側行つて」

「そーだなー！さっさと逃げね…と？」

杉野は自分の肩に置かれた手を見て、完全に動きが止まった。

…そしてもちろん渚も。

「ん、じゃあ全員確保…と」

……………ん？

……あつ!!!!

「「忘れてな！？」」

そんな渚たちに、

「渚さん、杉野さん、奥田さん、茅野さん逮捕く！確保したのはカルマさんです!!？」

泥棒全員確保!!？よつて警察の勝利です!!？」
律がそう告げた…。

「…なに簡単に捕まってんだよ…渚」

「…ごめん。あれは…正直油断した」

「なんかさ…普段一緒にいる人がああいう感じで近づいてきたら、すごい自然体で気づかなくなるんだね…」

「今回のケイドロでわかったわ…カルマはマジで敵にしたくねえ…」

「…どう捕まったんだ…お前ら…」

渚たちは自分たちが捕まった経緯を説明すると、

「…なるほど」

なんか…同情された。

「でもよく、これでカルマ委員長決定だろ？」

「なんか不安しかない委員長だな…」

「ほんとそれ」

しかし…

「…ケイドロやってる最中に気づいたんだけどさ…

カルマって意外と委員長あつてんじゃない？」

「？渚？なんで？」

「だって…今までいろんな作戦考えてんの、結構カルマでしょ？」

「ん？」

「イトナ君のプールでの作戦とか、初めてケイドロやった時とか…なんなら3月に殺せんせーに会うための戦略立てたのもカルマじゃない？」

「…あー…」

言われてみれば…

「確かにそうかも…」

「まあ、もしサボっても終さんしっかりしてそうだし…大丈夫でしょ」

とどころでさ…と渚はつらやき、

「カルマってどこだろう？」
「「あつ」」

「佳奈って絶対バカでしょ。なんでこの山で足挫くの？」

「…別にいいじゃん。やることやった後なんだから」

「相も変わらずどんくさいよね〜」

「…うっさいなあ…」

カルマたちは今学校内の保健室にいる。

足に関してはケイドロが終わった後殺せんせーが治療してくれた
ようで、今固定されている状態である。

ん？保健室の先生？

これが運がいいことにいなかったんだよ!!？

「そもそも俺前にさ、『もうこの山で変なことすんな』って言ったよね
?」

「起こったものはしなかなたないでしょうが!!？第一今回は事故だし!!
?」

「どうせ防げる事故だったんでしょ？」

「だから！怪我するのを防いって色々無茶だからね！」

「気つけばいいじゃん」

「…：もういい。絶対この会話無限ループだから…」

そう柊が言い、二人の間に静寂が訪れた。

…気まずい

「じゃあ俺もう行くから」

そう言い、カルマは保健室から出ようとした。
が…

「カルマ、ちょっと待って」

そう言つて、柊がカルマを引き止めた。
それにカルマは、

「…なに？」

そして…

「ちよつと…お願いがあるんだけど…」

「…なに？」

「カルマ…」

あの…こと黙つててくれない？」

カルマは一瞬考えて、

「ああ！あのこと？」

「…多分それであつてると思う」

「うーん…まあいいよ。」

不本意だけど、俺佳奈に借りあるし」

「うん…。ありがとう」

「あのこと知つてるのつて他にだれ？茅野ちゃんとか？」

そのカルマの問いに、柊は答えた。

「いや…あかりは知らない」

「え？」

「この学校で知つてるのカルマだけだと思う」

だからさ…そう言つて柊は、

「だれにもあのこと言わないでね？」

そんな柊の真剣な言葉に、

「…わかつてるよ」

そう言つて、カルマは保健室から出て行つた。

第34話 入学の時間

4月11日。

今日は梅宮高校の入学式である。

そして今壇上では校長が熱弁を振るっていた。

「…というわけで、確かに皆さんは入試の成績順に分けられたクラスですが、どのクラスの人も同じくらい1位になり得るんです！」

今N.O. 1じゃなくてもいい。君たちは特別なオンリーワンののです!!?」

A組の皆さんも、C組の皆さんも、この学校でより勉強に励んでください。そして3年後に輝かしい未来を作ってくださいましょう！」

…とまあ校長はどっかで聞いたことがある台詞(セリフ)(某アイドルグループの有名な曲の歌詞)を新高校1年生に言う。

「…ねえ…これ大丈夫なの?」

「さあ…」

そんな声も聞こえてくる中、入学式はどんどん進んでいく。

「それでは、理事長大石良雄より、皆さんに祝辞及びこの学校の方針を伝えようと思います」

そして、理事長が壇上に上がった。

「みなさん、入学おめでとう。この梅宮高校の理事長の大石良雄です。

えー、校長先生のお話が少々長かったようなので、私はちよっと手短かにしますね。

いつものことなので、皆さんもそのうち慣れると思いますよ」

…ずいぶんユーモアがある理事長で…。

何か…浅野理事長とは全然違うタイプだね。あれは。

みんながそう思っている中、理事長が話し始めた。

「今から手短かに、この学校の仕組みについて説明します。

この学校は大きく分けて二つの教育方針から成り立っています。

一つは自立。もう一つは自治です。

自治とは、読んで字のごとく、『自分』自身でこの学校を『治める』
そのため、私たち教師は基本的に生徒に干渉しません。

皆さんも先輩方を見て、『自立』と『自治』を身につけていってください
やう」

待て。全くわからんぞ。理事長先生？

…まあいいや。あとでカルマにでも聞こう…

「やあつと終わった〜！」

「やっぱり校長が話長いわ」

「あれこれからいつもなんだよね…まあ理事長が話短かったからよ
かったかな」

入学式が終わり、みんなは教室に帰った。

そんなみんなの言葉に、カルマが口を開く。

「なんかさ…理事長全く変わんないね…」

「あつ。私もそれ思った」

「そして相も変わらず説明が分かりづらい」

「ほんとそれ。あれ知らない人絶対に伝わんないよね？」

……………

「「「お前らいい加減俺らのことも考えろー!!?」「」「」」

最近よくあるおいてけぼり状態。

なんか…もはや恒例化してる気さえする。

「ああ…そういやカルマと佳奈ってここの理事長と知り合いなんだっ
け?」

「そーだね」

「あれっ、てことはカルマと佳奈ってこの学校のこと詳しいんだよね？」

「ん？…まあそーだね」

「じゃあさ…理事長が言ったことって…どーゆーこと？」

そんな中村の質問に、カルマと柊が答えた。

「だから、理事長が言った通り、生徒^俺たちに先生たちは一切干渉しないの。そこはわかる？」

「さすがに…」

「だから生徒会の仕事として、『生徒間のトラブルの解決』があるの」「…ん？」

「フツの学校はなんかあったら先生が生徒に『停学』とか『退学』とか決めるでしょ？」

この学校はそれを生徒会が決めるわけ」

「…まあ、理事長ってあの性格だからさ…なんていうか…放任主義？」

「…はあ」

ただ単に面倒なだけなんじゃ…？」

カルマや柊の説明に、みんなそう思ったが、それを口にする者は誰もいなかった。

その時、殺せんせーが喋り始めた。

「ではみなさん。本格的に高校生になりましたね！」

正直式を見ている最中、去年の今頃のみなさんを思い出して…先生嬉しくって…」

…はいはい。いつものやつね。

「ええ…。そんなわけで、今から委員決めをしましょう!!?」「」「…」「…」「どういうわけだよ!!!」「」「」

この殺せんせーの言葉には、さすがにみんな突っ込んだ。

そしてそんなみんなの言葉に、(まるで言い訳のように)殺せんせーは答える。

「だって…本来なら昨日委員決めの予定だったんですよ…？でも…思いの外委員長決めが滞ってしまっただけで…」

「…決めたんじゃないかって決まっただけだけどね」

「そこなんです！」

本来委員決めする時間、このクラスはケイドロをしていたのです!!
？」

「まるで俺らが遊んでたみたいない言い方やめろ!!？」

「で、今から委員決めなの!!？」

「もちろんです！」

そして殺せんせーは、委員の説明を始めた。

「今ある委員は、風紀委員・美化委員・体育委員・保健委員・図書委員・文化委員です。任期は1年。まずは立候補です。風紀委員になりたい人！」

……………

「ねえ、殺せんせー。仕事内容は？」

「ニユア!!？こっ…これは失礼。ええと…これには『風紀委員は学校内の風紀を正すとともに、委員長及び副委員長の補佐に努める』ってありますね」

「だったら磯貝と片岡が適任だろ。これって推薦いいよな？」

「ええ。もちろんです」

「じゃあ磯貝と片岡でいいと思うやつ」

その前原の言葉に、(磯貝と片岡以外の)全員が手を挙げた。

「え…。いや、立候補が優先じゃあ…？」

「お前ら差し置いて立候補するやつとかいないだろ」

「本当なら二人に委員長やってほしかったくらいだし」

「私もさんせー」

そんな調子で、委員はどんどん決まっていっていった。

結果、

風紀委員 (男女) …磯貝・片岡

美化委員 (男女) …潮田・雪村

体育委員（男女） ……前原・岡野

保健委員（男女） ……杉野・不破

図書委員（一人） ……狭間

文化委員（一人） ……中村

…となった。

殺せんせーいわく、任期1年と言っても普通は3年やりきるらしい。

この教室で卒業まで共に過ごす仲間たち。

殺せんせーの暗殺教室が…また幕を開いた！

第35話 体育の時間

高校生活最初の授業日。

朝のHRを知らせるチャイム。

殺せんせーはそのチャイムと同時に教室に入ってきた。

そして…

「ではみなさん。HRを始めます。日直の人は号令を」

「起立！」

そのカルマの号令に、全員が立ち、銃を構える。

「気をつけー！れー！」

その声と同時に、発砲が始まる。

そして殺せんせーはいつものようにその発砲を避け始めた。

「みなさんおはようございます。出欠確認をするので、カルマ君お願い

いたします」

そんな殺せんせーの言葉に、

「えーと…磯貝」

「はい！」

「岡島」

「はい！」

「岡野」

「はい！」

「奥田さん」

「はい！」

「えつと…律」

「はい！」

「片岡」

「はい！」

「矢田さん」

「はい！」

「えーと…茅野ちゃん」

「はい！」

「吉田」

「おう。」

ちょうどそれと同時に、発砲も終わった。

そして教卓の前でニヤニヤしている先生にカルマは（ため息を吐きつつ）言った。

「はい、殺せんせー。全員出席」

「ヌルフフ。素晴らしいですねえ。しかし今日の命中弾は0です」
そう言っつて、殺せんせーはあのシマシマの顔になって、

「殺せるといいですねえ。卒業までに」

僕らは殺し屋。ターゲツトは先生。

「おや、1時間目は体育ですねえ。先生ちよつと本場の四川でも食べに行つてきます」

そう言っつて、殺せんせーはいつものように教室から出て行つた。

高校入学初の体育の授業。

しかしそれはE組の時と同様、体育という名の…

訓練である。

今日の訓練で、僕らの前に立っていたのは烏間先生ではなかった。
立っていたのは…

「みんなく前にも登校日の時言つたけど、これから3年間烏間先生と君たちの体育を担当するアードルフ・アホネンです。

僕のごとは好きに呼んで。その方がみんなとなじみやすいと思うし」

……………

大丈夫？そんなこと言つちやつて…

「んー。わかった。じゃあアホせんせー」

…その場にいた（カルマ以外の）全員がずっこけそうになった。てかビッチ先生のときといい、絶対に狙ってるよね？カルマ？自分から言い出したこともあり、何か複雑な表情を浮かべている。

そんな空気を吹っ切るように、磯貝君が口を開いた。

「…というか、烏間先生はどこでしょう？」

「ああ。烏間先生なら、今柊さんについてるよ」

烏間先生はびっくりしていた。

1―1でナイフの勝負をしていたのだが…

（…早いし…的確だな。初心者としてはかなり上手なのでは…）

向き合ってみてわかったのだが、彼女は片岡並みの運動神経を持っていた。

体力・肺活量・体運び…そして…

「ピーーーーー！！」

とそこで、戦闘終了の合図が鳴った。

はあ…と息をついた柊に、烏間先生が言う。

「柊さん。よく動体視力が良いって言われないか？」

「？…ああ、まあ昔卓球やってたんで…」

「なるほどな」

卓球か…

自分自身も卓球で動体視力を鍛えた経験があるので、そういう柊の言葉に納得した。

「ナイフだが、今の柊さんの実力ならおそらく1・2ヶ月でみんなと合流できると思う。射撃は次回の授業で確認させてもらうが…」

「あつ。わかりました」

「あとはフリーランニングだが、以前のケイドロを見るに基礎は出来ていると思う。あとは受け身等の訓練だな」

「了解です」

そして烏間先生は時計を確認した。

まだ十分時間は残っている。

「よし、では今からナイフ術を教える。俺に当てられるようになったら暗殺の成功率も格段に上がるからな」

「はい」

さてその頃元E組のみんなはというと……

「……どうだった？磯貝君、前原君」

「……知ってはいたけど……」

「烏間先生より早ええ……」

見ててほしいわかってはいたが……

「………やっぱり？」

「うん」

もつと言えばそれだけでなく……

「あー、もう少し動き見ないと僕は殺れないよ。はいじゃあ、次の人」

……………

(((((すぐく余裕でいらっしやる!!!)))

「……ぶっちゃけあれ殺せんせー以上!に腹立つ気が……」

「……うん。ある意味最強人間だね」

そんなこんなしているうちに、チャイムが鳴った。

……ちなみに60分授業らしい。

「あー、もうそんな時間か。まだやってない人はまた次の授業でやるからねー」

はい。というみんなの声で、高校生活最初の体育の授業が終わったのだが……

「……で、結局どうするっ……」

「？何が？」

「あの先生の呼び方だよ！」

そう言う杉野の言葉に、僕は「ああ…」とつぶやく。

そこでカルマが…

「いやあ、アホ先生でいいじゃん」

「それがダメだから言ってるんだよ！俺は!!？」

「ん？なんで？」

そのカルマの言葉に、杉野は「うっ…」つと言葉を詰まらせた。

そして…

「…失礼じゃね？」

「そしたらビッチ先生はどうなの？そっちも大概だと思っけど？」

「絶対に来ると思ってたよ！その反論!!？」

「ていうかさ、」

それまで黙って聞いていた僕は口を挟んだ。

「はつきり言ってビッチ先生の呼び方考えたのってカルマだったよね？」

「まあ実質そーだね」

「…：知ってはいたけど…：カルマって嫌がらせの天才だよね」

「ん？ありがとー」

「いや、褒めてない…」

と、そこへ…

「なんの話してるの？」

「あつ、茅野、柊さん」

どうして「一緒に？」という質問に、

「さっきそこで一緒に会ったの？」

そんな茅野の言葉に続けて、柊さんが口を開く。

「で、何の話してたの？」

「ああ、俺らの副担任『役』のせんせーの呼び方。さっきの体育の時間に考えたんだけど…」

「いや…さすがにあれはちよつと…」

「…どんなの考えたの…？」

そう尋ねた柊さんに、カルマが答えた。

「んー？アホ先生」

「いや。それはさすがにダメじゃない？？」

「えー、じゃあ逆になんて呼ぶの？」

「うっ…それは…」

そう言つて、柊さんはそこにいた数人の顔を一巡した。

そして…

「…それはそれでまた考えたらいんじゃない？？」

「だからそれを考えて『アホ先生』はどう？つて聞いてるんじゃない？」

「だって仮にもあの先生元『死神』なんですよ？？なんかすごい殺し屋だったらしいし！つていうかよくそんな人にそんなあだ名つけられるね？？」

「でも、あの先生が『好きに呼んで』つて……ん？？」

あれっ？今さらつとすごいこと言わなかった…？

動きが止まった一同を見て、柊さんが口を開いた。

「…ん？どうしたの、みんな？」

その柊さんの問いに、茅野が答えた。

「え…待って？？佳奈あの先生が元『死神』だったつて…」

「ん？…ああ！先生たちから聞いたんだ」

「「はい？？」」

いや、待って…

どういうこと？？

だつて烏間先生、そういうこと言つたらダメだつて…（入寮の時間参照）

そんな僕たちの反応に気づいていないのかスルーしているのか、柊さんはそのまま話続けた。

「いやー、びっくりした。去年殺せんせー殺ろうとして逆に手入れされたんだつて？…ていうか世界一の殺し屋がやれないのに、私たちが殺れるの？」

（（あつ。そうなつてんだ…））

嘘はつかない程度にいろいろ省いているその説明に、僕らは少し

ほっとした。

ちようどその頃、理事長室にて。

ある女性が理事長と会話を交わしていた。

「ーですから私が彼らの保健医を務めます。

彼らの担任のこともありますし、訓練上彼らが保健室を利用する回数も多いと考えています」

そういう女性の言葉に、理事長は、

「ご自由に。生徒たちに危害がなければ…私はあなた方を咎めませんので」

そしてその女性は、

「では…失礼します」

そう言って立ち去って行った。

残された理事長は…

「あの浅野が認めた先生か…」

「どんな先生と生徒がいるのか…楽しみだな。」

第36話 調理実習の時間

高校の授業が始まってから程なくして、殺せんせーが渚たちに告げた。

「皆さん！今日は調理実習をしましょう!!？」

「……………金欠なのね、殺せんせー。」

当たり前前っちゃ当たり前だろう。だってこの学校でまだ給料もらっていないはずだし。

ぶっちゃけE組の頃にはよくあった光景だから、もはや誰も突っ込まない。

そんなことを言う殺せんせーに、カルマが質問した。

「殺せんせー。ちよつと質問〜」

「?なんですか?」

「調理実習の班ってさ、俺らで決めれるよね?」

「ええ、もちろんいいですよ」

「ん、りよーかい。じゃあ…」

そう言っただけでカルマは終の方を向き、

「佳奈は俺らと同じ班ね〜」

「?うん。わかった」

「ではみなさん。それぞれ役割を決めて調理してください」

そんなわけで、調理実習が始まったのだが…

「今回は俺が指揮とついていい?」

「ええ…カルマ?」

普段こういうことでは完全にサボりを決め込んでいるカルマが指揮を執るって…

なんで?..

しかしそんな考えを吹っ切るように、茅野が口を開いた。

「いいよ！全然!!??ていうかむしろカルマ君が指揮とって!!?」

「え…?茅野まで?」

…この二人の会話のわけは、これから比較的すぐにわかることになる。

結局カルマが指揮を執ることになったのだが…

「渚と奥田さんは野菜を切って。で、杉野と俺がこっちの火見るから、茅野ちゃんと神崎さんはそっち見といて」

「了解〜!」

だが…

「ねえ、カルマ。私は?」

そんな柊の言葉に、カルマは、

「え…と…佳奈は…」

できるまでそこでなにもせず座ってて

「ひどくない!?」

カルマの結構ひどい言葉に、柊が思いつきり突っ込んだ。

しかし…

「…ごめん、佳奈。私もカルマ君と同じ意見…」

「あかりまで!?!」

「うん…。だって…ねえ」

「うんうん」

そしてカルマはこう続けた。

「だって佳奈…」

料理ド下手くそじゃん」

「…はあ!?？」

「『はあ!?』じゃない!!?？」

そんなカルマと柊の話聞きながら、渚は茅野に尋ねた。

「…どれくらい下手なの?」

「…白波中学の伝説になったくらい」

「いや、それだけじゃわからないから!!?？」

そんな渚のツツコミに、茅野が答える。

「えつとね…確かあれは中1の秋…中学入って初めての調理実習でのことなんだけど…出席番号順の班だったから私は食べてないんだけどね…」

佳奈の料理を食べた人全員卒倒したレベル…かな…」

「…はい!?？」

茅野の言葉を聞いた渚と杉野は同時に突っ込んだ。

そしてカルマは…

「…やっぱり中学でもやったか…佳奈は…」

『『中学でも』ってことは小学校のときもやったんだね…』

「佳奈の料理は不味いの域超えて、なんか…才能だからね…」

「…食べたんだ」

「佳奈の料理食べたの小3の時だからね。その時まだ『佳奈の料理は不味い』って知らなかったし」

「ちなみになんで?」

「バレンタインのチョコ。それから絶対に手作りするなって言ったよ」

「…だろうね」

そんなカルマと茅野の会話を聞いて、渚・杉野・奥田・神崎は軽く恐怖を覚えた。

そんな会話を交わす二人に、柊が反論する。

「いやいやいや、私料理できるからね?」

「…それ本気で思ってたら、正直佳奈ってバカだと思う」

「よーよーし!!?じゃあ私作ろうじゃないの!!?作って美味しかったらカルマにここで土下座してもらおうから!!?」

「うん、やめよつか。食べ物がかわいそう」

そんな(かなり)ひどいことを言うカルマに、柊が挑発を仕掛ける。

「あれあれえ?私に負けるかもしれないから怖いんだ」

「…って言ってますが、茅野ちゃんはどう思う?」

「佳奈、ごめん…私もカルマ君と同じ意見…」

「なんでよ!?!?やっぱり二人ともひつつど!!?」

「じゃあさ、サンドイッチなら作っていいよ。それ以上は冗談抜きで食べ物がかわいそうだから」

(((((めっちゃ下に見られてる!!?))))))

どんだけ元がすごいんだよ…

みんなの心の声が揃った気がした。

…カルマがその言葉を『あえて』言ったと知るのは数分後だった…

「はい!できたよ」

そう言っただけが差し出したのは…

「…なんだ。ふつーじゃん」

カルマと茅野があればというからすごいのを想像していたが…

「…っていうか、柊さんの料理食べれたらカルマ土下座だよね…?」

「絶対にしなくて済むから大丈夫」

「これ見てどうして出てくるの…その自信…」

そんな渚の声を聞きながら、カルマは柊からそのサンドイッチを受け取った。

そして…

「ええと…そーだね。寺坂」

「ンあ?」

ちよつとこつち。とカルマは寺坂を手招きする。

そして…

「寺坂。これちよつと食べてみ」

「ああ?!?なんでだよ?!?」

「寺坂って体丈夫じゃん?」

「食いモン食べんのに体の丈夫さいるか?!?普通?!?」

そう言つて、文句を並べる寺坂に、イトナが口を開く。

「どうかサンドイッチを不味く作れるなんて、逆に褒められた才能じゃないか?」

だから行け、というイトナの声に押され、寺坂は柊の作ったサンドイッチを口にした。

結論から言おう。

柊の料理能力は…褒められた才能だった。

サンドイッチを口にした瞬間、寺坂は口を押さえて急いで外へ出て行った。…多分トイレだろう。

その様子を一部始終見ていたみんなは、

(((((…嘘だろ…?))))))

「だから言ったじゃん。佳奈は料理ド下手くそなんだって」

「いや、サンドイッチ不味く作れるなんて絶対にある種の才能だろ!!」

「まるでサ○デーのずっと休載している某農高漫画の主人公の兄の料理みたいね…あつ、それがジャンプで数少ない探偵ものの主人公の母親とか、この間ジャンプで連載終わったばかりの恋愛モノのヒロイ

ンとか…」

「…不破さん？」

不破さんのメタい発言は置いといて、

「…カルマって…佳奈がこんなに料理できないのわかってた？」

「もちろん」

「…どういう経緯で？バレンタインだけでここまでひどいって気付かないよね。普通」

「だって小学校の頃に『やった』から」

「…ん？」

「小学校の頃の佳奈の伝説…行ってた小学校にちなんで『森竹小の七不思議』って呼ばれてただけ…」

そのとき作ったのサンドイッチだったらしい」

「ああ…」

これを聞いた全員が何かを察した。

そして…

「そんなわけでき、みんな

絶対に佳奈には料理作らせないでくれない？」

そんなカルマの言葉に、みんなはすごく納得したのだった…

第37話 バイトの時間

4月も終わりにさしかかった頃、渚、茅野、柊、前原、片岡、岡島は学校から歩いて10分ほどのところにある、喫茶店「KATO」にいた。

「うーん、イケメンだ」

彼らはある人物を見て、そんな声をあげた。

無論磯貝である。

その時、カラカラとお店に人が入ってくる音がした。

「いらつしやいませ、何名様ですか？」

「はい、2人です」

…いかにも磯貝目当ての女子高生である。

「ねえねえ、なんて名前？」

「：磯貝って言います」

「そーなんだ！でさあ、磯貝君ってどこの学校？」

「ええと…梅宮高校です」

「へー！頭いいんだ！」

「ありがとうございます。ご注文が決まりましたらまた呼んでください」

「ええーもうちよい話そうよ」

「申し訳ありませんが、他のお客様がいらつしやるので」

そう言つて、磯貝はあのイケメンスマイルを出した。

そのやり取りを一部始終見ていたみんなは…

「いや、磯貝は何やつてもイケメンだわ」

「だよね、だって私この間磯貝がラブレター貰ってんの見たもん」(b

y 柊)

(((イケメンだ!!?)))

「あつ…私もなんか前に貰ったなあ…女子に」(b y 片岡)

(((イケない恋だ!!?)))

「それにあれ見てよ。あの女子高生の逆ナンを見事にかわしてる！」

(b y 茅野)

(((イケメンだ!!?)))

「え？俺もなーんかめんどくさい子に絡まれたらスルーしてるぞ？」

(b y 前原)

「嘘だね」(b y 茅野)

「嘘だな」(b y 岡島)

「絶対ありえない」(b y 片岡)

「前原が逆ナンスルーとか…明日殺せんせー殺す方が確率高いんじゃない？」(b y 柊)

「怒るぞ！お前ら!!？」

「あつ、それから磯貝君、前に道迷った子供に声かけてたよ。『大丈夫か？』みたいな」(b y 渚)

(((イケメンだ!!?)))

「お？子供なら俺も前助けたぞ？」(b y 岡島)

「岡島…子供に手出したら犯罪だよ？」(b y 柊)

「お前なあ!!？」

と、その時。

「あんまり騒がないでよく。他の人の迷惑になるし」

カルマである。

そんなカルマの言葉に、岡島が、

「…カルマが至極まっとうなこと言ってる…!!？」

「…その言葉、喧嘩売ってるって捉えていいよね…？」

「悪かったって！てか今の冗談の範疇だろ!?!？」

そのやり取りを見ていた前原は、

「岡島…。骨は拾ってやるから…」

「死んでねえからな!?!」

そんなやり取りを横目で見つつ、渚が口を開いた。

「ていうか…本当にカルマよくバイトしようと思ったね…?」

その質問に、カルマは答えた。

「ここ、知り合いの店なの。小学校の時なんか塾の後によくここで集まってたし」

「迷惑じゃあ…?」

「向こうは収入増えるからって喜んでたけどね」

渚の言葉に、次は柊が答えた。

そして柊はカルマに質問を投げかけた。

「そーいやさ、将暉元気そうだった?」

「そりやあもう。この間『久しぶり』みたいなこと言ってたし」

「やっぱり変わんないね。将暉だけは」

「いやあ。あいつは変わる要素ないでしょ」

……………

「誰だよ!それ!!?」

みんなの心の声を、代表して岡島と前原が発した。

「あつ、聞いてた?」

「聞いているぞ!?!?で、誰だよ!!?」

そんな岡島の言葉に、カルマが答えた。

「ああ、幼馴染だよ。佳奈より知り合い歴長い」

「ふーん」

「ほら、噂をすれば」

そう言って、カルマは入り口に目をやった。

そこにいたのは…

「カルマ…お前仕事しろよ…」

「はいはい、ごめんね〜将暉」

「お前な…」

そう言ってため息を吐いた少年…彼がその『将暉』だろう。

…中々整った顔をしている。

クラスの男子で例えると、杉野あたりか。

カルマは、わかってるって、とつぶやき、

「じゃあね〜みんな」

そう言っつて、厨房の中へと入っつていった。

厨房からスタッフルームに行ったカルマと将暉は、中で言葉を交わしていた。

「あれ…お前らの友達？」

「ん？そーだね。おんなじ学校の」

「へーそうか」

ていうかき、と将暉は言葉を続けた。

「正直びっくりしたわ。お前がバイトするとか」

「…本トにみんなそれ言うよね。そんなに意外？」

「あつ、やっぱり言われてたんだな……」

でも、大丈夫か？あそこにいる奴ら、多分これから何回も来るぞ？」

そう言っつて、将暉はある机をちらつと見た。

そんな将暉の言葉に、

「大丈夫だつて。俺自分で『やる』つて決めたことはちゃんとやるし、

何より、自分の選択『間違えたな』つて思っつたの、今まで2回しかないからき」

「…そっか」

ちょうどその時、入り口からカラカラという音が聞こえてきた。

お客さんが来たらしい。

「あー、お客さん来たぞ。行ってこい」

「えー…別に将暉でも良いじゃない?」

「文句言わずに!はい!!?」

はいはい、と言って、カルマは店に戻っていった。

「……変わったな。あいつ」

そのつぶやきを聞いた者は誰もいなかった。

第38話 ビッチの時間

その日の日付を黒板に書いていた渚はふと呟いた。

「…もう1ヶ月か…早いなあ」

黒板に書かれた日付は『5月2日』

入学して、早くも1カ月。

ゴールデンウィークの途中の登校日。

その日はまた新しく高校生活が輝く日でもあった。

朝のHRの前の時間。

柘はまた理事長室に呼ばれた。

「失礼します」

柘が理事長室に入ると、そこには理事長・鳥間先生、そして…1人の女の人があった。

(あの人誰だろ…)

すごい美人…と思っていると、鳥間先生が口を開いた。

「柘さん、何度も呼び出してすまないな。今回はこいつのことなんだが…」

「ちよつとカラスマ!こいつって何よ!!?」

(あれっ…? 私たちよりずっと上だと思ってたけど…意外とあんまり年変わらない…?)

でも、こんなに仲よさげってことは…

「あれっ?もしかしてE組の関係者?」

「…飲み込みが早くて助かる…」

そう言つて、鳥間先生は言葉を続けた。

「こいつ…イリーナ・イエラビッチはこう見えて、元暗殺者だ」

「こう見えてっつて!」

「去年は奴の暗殺のためにあの教室へ英会話の教科担任として来た」

「ちよ…無視しないでよ!」

「今は訳あって防衛省で働くようになった」

「ちよつと！カラスマ〜!!？」

…あの人ちよつとつとつとうるさいかなあ…

一方同席している理事長はというと、下を向いてすごい笑いをこらえているのを見て取れた。

…笑いの沸点低いんだよな、あの人。

烏間先生も我慢の限界がきたようで、その先生の頭を掴んでこう言った。

「イリーナ、お前は黙ってそこに座ることもできないのか？」

「うっ…ええと…」

「そこに座れ。そして黙って待ってる」

…うん…まあまあ怖いね。

そんな烏間先生の言葉に、その先生ーイリーナ先生はすごくしよぼんとした様子で理事長室のソファアに座った。

それを確認して、烏間先生は話を再開した。

「簡単に言うと、5月からE組の頃と同様に英会話の教科担任としてこのクラスに赴任することになった」

なんだかんだ言って、みんなと仲が良かったしな、と続ける。

ふーん、と相槌を打った柊はふと疑問に思った。

「元暗殺者ですか？なんの？」

「ハニートラップだ」

「…はあ」

想像のその字もないところからきた。

てつきり銃とかナイフとかが来ると思ってたよ！

「いや、イリーナは世界で1・2を争うハニートラップパーだ。その技術で何人もの男のところへ潜って暗殺を行った。いわば潜入暗殺のエキスパートだな」

「あー…そうなんだ…」

それともう一つ…

「なんで今？」

「……色々トラブルがあつて手続きが遅れた」

「はあ……」

これは詳しく聞いたらダメな奴かな？

そんな感じで、話が終わりそうな雰囲気を感じたのだろう。

理事長室のソファアに座っていた先生が、柗の方に歩いてきた。

そして、

「あなた、佳奈^{カナ}つて名前だったわよね」

「？ええ、そうですが……？」

そう柗が言うと、その先生は柗の肩を掴んでこう言った。

「いい？私のことは『イリーナ先生』って呼ぶのよ！」

いいわね！と念を押す先生に、

(…なんでこんなに必死なんだ？この人……？)

と思いつつ、

「……はあ。わかりました」

……というか、他にどんな呼び方するんだろ……？

「はい殺せんせー、全員出席」

毎朝恒例の一斉射撃からのそのカルマの言葉にもみんなは慣れた。
なんだかんだ言いつつ、カルマは毎日出席を取っている。

「ヌルフフフ。今日も命中弾はゼロですねえ」

そう言つて、殺せんせーは授業を始める……かと思いきや

「今日は新しく先生が増えます。一応紹介を……」

「あー、はいはいはい」

「どーせビッチ先生だろ？」

「紹介も何もすでに知ってるし……」

「ニユア！そ……そう言わずにい」

(…ん？ビッチ先生？)

そんなことを考えながら、柊は先ほど会った先生が来るのを待っていた。

「はい！では入ってきてください！」

そう言われ、入ってきたのは…

「はい、やっぱりビッチ先生」

「ちよつと！あんたたち！！？」

ひどくない！？？と言う言葉に、みんなが一斉に笑い始めた。

そんな中、柊は前の席の茅野に質問を投げかけた。

「ねえ、あかり。あの人…イリーナ先生ってどんな人？」

「んー？見ての通りだよ？」

本当に幼いんだよなあ、あの人。と呟く茅野を見て、（あつ…やつぱりか…）と思った。

「どんな感じの授業してたの？E組の頃」

「あー…」

さつきと異なり、茅野は言葉を詰まらせた。

そんな様子を見たカルマが代わりに答える。

「うーん、普通の学校だと訴えていくくらいのレベルだったね〜あれは」

「…どんな授業してたの！？？」

「まあ、ビッチ先生って基本痴女だから？」

「は…はあ」

「聞こえてるわよ！そこ！！？」

そんなビッチ先生の言葉を完全に無視して、カルマは言葉を続けた。

「まあ、またどうせ受けるし、その時のお楽しみでいいんじゃない？」

「…全くもって不安しかないんだけどね…」

「あれっ？そういや、なんで佳奈ビッチ先生のことイリーナ先生って呼ぶの？」

そんな茅野の質問が聞こえたのか、ビッチ先生はビクツと肩を震わせた。

一方終はすごく純粹に答える。

「いや……。なんか先生に『私のことイリーナ先生って呼ぶのよ！』って必死に言われて……」

「あー、うん、はい」

すぐにその状況を察した茅野はそう返した。

そんな2人の会話を聞いてたカルマが口を挟む。

「ていうかさ、もうビッチ先生でよくない？渚も磯貝もそう呼んでるしや」

「ふーん……そっか！」

「ちよつとカルマ！何余計なこと吹き込んでんのよ!!？」

そんなビッチ先生のあがきもむなしく、

「でもみんなそう呼んでるでしょ？私1人がイリーナ先生って呼ぶのも変だし!!？」

そして

「よろしくね！『ビッチ先生』!!？」

「キー！せっかく何も知らないことを利用してイリーナ先生って呼ばせようとしたのに!!？」

そんなビッチ先生の言葉に、一連の流れを見ていたみんなが笑った。

ビッチ先生が来て、また前みたいな雰囲気になった。

おかげで本当に楽しい3年間になるだろうな。

第39話 野外活動の時間

ゴールデンウィーク明けの登校日。

1—Cはある話で盛り上がっていた。

「みんなくもうすぐ野外活動だから、班決まったら俺か佳奈に言っ
ね〜」

そんなカルマの言葉に、みんなが反応した。

「野外活動?」

「なんか理事長が言うには『クラスの親睦を深めるため』らしいけど
…」

「ぶっちゃけすでに仲いいよね…」

しかし、なんだかんだ言っただけで高校生活初の宿泊行事だ。

その話でみんなが盛り上がるのに、時間はかからなかった。

カルマが終に野外活動について話していた。

「班?」

「うん。殺せんせーがさ、『班決めは委員長さんにお任せします』って」

「へえ」

「だからさ、俺らの班に入んない?」

「調理実習と同じ班だよね? 入る!!?」

そう言っただけで、俺はカルマの提案に乗った。

こんな中、渚が口を開いた。

「つていうか野外活動での班活動って何するの?」

「ええと…初日がクラス内レクリエーションと肝試し。2日目…」

ここで、カルマの言葉が止まった。

…どうしたんだろ?

「…カルマ? どうしたの?」

「…うん、佳奈俺らの班に誘って大正解だったね」

そう言つて、カルマは持っていたプリントを渚たちに見せた。
理由はすぐに察した。

「あー…」

「このカレー作り？」

「うん、そう」

「……うん…」

カルマナイス。

「…ていうかさ、柊さんが作っても大丈夫な料理ってないの…？」
「ないね」

「そこまできつぱりと…」

「だつてないし。あそこまで料理下手だと逆にすごいってくらい」

「そうなんだ…」

「あ、そーだ。くだんないこと思いついた」

そんなことを言い、カルマはいつもの悪い顔をしていた…

そしてとうとう野外活動当日。

みんなは予定通りに全員が集合場所に集合した。

「あつ。ビッチ先生今回はフツの服だ」

「何よ！悪い!?？」

「いや…むしろいいんじゃない？」

そんな会話をしていたみんなだが、バスに乗り込む頃、ほぼ全員がある人物に視線を集めていた。

「烏間さん。奴のことですが…」

「ああ、今回は実行しない」

「了解しました。あと、これなんです…」

…うん…どうしよう。
すんごい突っ込みたいのに…
これって突っ込んでいいんだろうか…？

そんな空気の中、口を開いた人物がいた。

「ねえ鳥間先生。なんで園川さんいるの？」

（（（言った！カルマ言った！言ってくれた!!?）））

カルマ、マジでサンキュー!!?

全員の心の声が揃った気がした。

そんなカルマの言葉に、鳥間先生が答えた。

「ああ…そういえばまだ言っただけじゃなかったな」

そして、

「園川はこのクラス担当の保険医になった。

訓練の関係から怪我をすることも増えるかもしれないし、だからと言っただけで外部に奴の存在をバラしたくないからな」

「ふーん」

なるほど…とみんなは心の中で思った。

そんな中、口を開く人が1人。

「…ええと…園川さんって誰？」

柘である。

そんな柘の質問に茅野が答えた。

「あー佳奈は知らないよね。」

防衛省の人だね、鳥間先生の部下の人なんだよ」

「へえ〜そうなんだ」

そんな様子の柘を見て、カルマが質問を投げかけた。

「あれっ?今回は佳奈知らなかったの？」

「うん…今回ばかりは何も言われなかったなあ…」

と、そこで

「そうだ！バスの時間結構あるみたいだし、カラオケ大会でもしない

か〜?」

前原である。

「ええ〜カラオケ? 俺あんまり好きじゃないんだけど?」

「いいいいじゃねえか。だってしばらく暇だしさ」

そんなカルマと前原のやり取りの中、イトナが口を開く。

「俺は嫌だな。文字通りのジャイアンがいる」

「ああ!? どういうことだよ、イトナ!!?」

「そのままの意味だ。うちのジャイアンは本物のジャイアンらしくすぐく音痴だしな」

「るっせえ!!?」

イトナと寺坂の（一方的な）言い合いをみんなは見つつ、磯貝が前原の意見に賛成の意を伝えた。

「俺はいいと思うぞ。別にこのクラスでよっぽどな音痴のやつなんていないだろう?…終は大丈夫だよな?」

「ああ、佳奈は大丈夫。むしろ上手いし」

「よし! そうと決めたら歌おうぜ!」

そんなカルマの言葉に、前原がそう言った。

そんなこんなで宿舎に着いた。

荷物を置いて、みんなが行ったのはまあまあ広い部屋。

「ここでクラス内レクリエーションね」

「…何するの?」

「ええと、B組は大嵐やるらしい」

「…はあ」

「それって誰情報?」

という質問に、柊が、

「海野って人。B組の委員長なんだけど」

と返した。

「まあ、普通は『初めまして』の人とレクリエーションするからね。この機会に名前覚えよう！っていうのが目的ってのもあるし」

「なるほどなあ」

「で、なににする？」

「二」「…あつ…」「二」「」

そんなカルマの言葉に、茅野が口を開く。

「大嵐して、鬼に3回なったら歌歌うとか…？」

「古典的だな、おい」

そんなツツコミが寺坂から入りつつ、カルマが答える。

「歌ならバスの中で歌ったじゃん？それに大嵐だったら1人のやつに固まる気がするんだよね」

だから、とカルマは言い、まくら（部屋にあった）を出して言った。

「爆弾ゲームでもしない？二回同じとこ止まったら罰ゲームで」

「二」「…はい!?」「二」「」

そんなことをいうカルマは…

やはりいつものあの顔をしていた…

第40話 野外活動の時間 2時間目

「…は!?? 罰ゲーム!??」

カルマの「爆弾ゲームをして、二回同じところ止まったら罰ゲーム」という提案に、みんなが反対の意を示した。

「いや、待て!!? そもそも何で爆弾ゲームなんだよ!??」

「まこくらがあつたから」

「いや! 色々突つ込ませろ!!?」

そんな声が飛び交う中、声を上げるものがいた。

「ヌルフフ。先生は罰ゲームの内容を知りたいですねえ。内容によつてそれをするかどうか決めましょうか」

……………

「殺せんせー、いたんだ」

「ニユア!?? ひどくないですか!??」

そう…殺せんせーである。

「…ていうかいつきたの…?」

「…べつ、別に給料入ったからコンビニスイーツ買ってたわけじゃないし? 気付いたら集合時間過ぎてたわけじゃないし?」

「二」「嘘つくの下手すぎだろ!!?」「二」

殺せんせーの弱点☒

嘘をつくのが下手

「とつ…とりあえず罰ゲームだったらみなさん均等に分け与えられるゲームがありますよ」

「え? 何?」

「まず最初に人数分の割り箸を用意します」

……………

「次にその割り箸の先に番号を…爆弾ゲームにしよう。みんな「ニユア!??」まだ何も…」

どーせあれだろ…とみんなは心の中で思う。

そんなわけで、全員一致で爆弾ゲームをすることになった。

「じゃあ、律。音楽よろしくね」

「了解しました!」

そして、ちようどまくらを持っていたカルマから、スタートしようとした。

そして流れてきたのは…

『No. 1にならなくてもいい (以下略)』

待て待て待て待て!!?

「ちよつと待て、律!!?なんで曲のセレクトそれなんだ!!?」

そんな三村の言葉に、律がいつも通り朗らかに答えた。

「はい!レコチヨクランキングや今までの曲の売り上げ数、そしてこれから起こるであろうことを分析した結果、こちらの曲が半年以内に売り上げが伸びるといデータができたので!」

「はあ、そうか…じゃなくて!」

そんな見事なノリツツコミをしたのは岡島である。

「他にねえのかよ!!?それとゲ○極はダメだろ!」

「:ていうか律のデータが正しかったら、またS M O Pなんかするってことだよね…」

「次は解散か?」

「こらこら…と心の中でツツコミを入れる数名の人。

そのうちの一人、渚が口を開いた。

「っていうか…別になんでもいいんじゃないかな?…やっぱり問題行動した人とかはともかく」

「俺も別にいいと思うぞ?」

ファ○モンとかはどうだ?あそこ解散してまあまあ長いけどよ」

そんな前原の言葉に、律が答えた。

「了解しました!」

ちなみに、今現在ソロで活動しているファ○キー○藤さんは、週刊○春に近いうちに記事を書かれるようですが?」

そんな律の言葉に、みんなは一斉にざわつき始めた。

「えっ、待て。怖い、それ」

「何をするんだよ…てか何したんだよ!?？」

「後者が正解だろーね。そうじゃないと『奴ら』に嗅ぎ付かれないうし」

「ほんと怖いわ…○春…」

そんな中、カルマが口を開いた。

「ねえ、みんなさく」

…早く爆弾ゲームしない？」

「「「「あ…」」」」」

…結局爆弾ゲームを始めたのは、それからしばらく経ってからだった…

第41話 肝試しの時間

爆弾ゲームは、結局終と殺せんせーに二回止まって終わった。

まあ、殺せんせーに止まった時は二回とも

「えっ…きつ、気のせいじゃないですかねえ…」

みたいにごまかしていたが(そして全員一致で止まったことになったが)

そしてその二人をカルマが「罰ゲームの報告」と評して、先ほど連れ出したところである。

「なあ、渚。次なんだっけ？」

そんな杉野の言葉に、渚が答えた。

「ええと…ああ、肝試しだね」

夜も更け、この野外活動は暑さを増していくように感じた。

「さて、皆さん。集まりましたね？」

それでわあ〜？今から運命のペアくじ引きです！」

そこにいたのは、他クラスの女子である。

どうやらA組の委員長らしい。

ちなみにこの肝試しのルールは…

ー男女ペアを組み、指定されたルートを通るー

だけである。

まあ、シンプルな…

「…っていうかさ、男女ペアってだけでゲスさが増すよね…」

「？…ああ…そういうこと…」

…まあ、当然そんなゲスい目的もあるわけで…

と、そこに

「…ねえ、殺せんせー。私ちよっとお腹痛いから…肝試し休んでいい

かな…?」

「ニユア!?…ひ、柊さん?大丈夫ですか…?」

そう。柊である。

そんな様子を見たカルマが、

「えく?佳奈大丈夫?休んだら?」

……

「「「カルマが珍しく優しい!!?」「」」」

「明日雨降るのか…?うつわ、やだな」

「…あのさ…俺が誰かを心配したらダメなわけ?」

そう口々に言うみんなに、カルマが呆れたような声をあげた。

と、そこに…

「あれっ?でも柊ってさつきまで元気じゃなかったか?」

「いや…腹痛なんて突然くるでしょ」

そういう岡島の言葉に、カルマがすかさず反論する。

いや、まあ、確かにそうなんだが…

と、ここで、とんでも爆弾が投げられた。

「…つていうか、確か佳奈ってこういうの苦手だったよね?」

…茅野である。

………うん。それってつまり………

「…サボりたいんだな…」

「違う!」

「おい、柊。ちよつとそれはフェアじゃねえだろ」

「だからほんとに違うんだって…!」

そんな中、口を開くのは、やっぱりというか…

「ヌルフフ。では皆さん。こちらのくじをどうぞどうぞ!!?あつ、もちろん柊さんもですよ?」

………殺せんせーよ………

((((うん…顔、スゲエゲスいな…)))

そうして、みんなの肝試しが始まろうとしていた。

ペアも決まり、柊は順番を待っていた。

「うー…私暗いところ怖いんだけどなあ…」

そして相手は

「何でよりもよつてイトナ!??絶対いじられんの確定じゃん…!」

そんなわけで、その辺りをウロウロしていた。

と、その時…

「ちよつ!大丈夫か!??」

「うつ…大丈夫…多分」

「それ、大丈夫じゃないって!早く保健の先生のとこ行かなきゃ!!?」

そこにいたのは、お腹を押さえてうずくまっている男の子と、周り

で心配している人2・3人。

全員この肝だめしのお化け役である。

この状況で声をかけるのは…声をかけてしまうのは元々の性格である。

「ええと…どうしたの?」

「あつ!柊さん!いいところだ!!?」

「ちよつとこいつ、腹痛で…」

そう言われ、指を指されたのはA組の男の子だ。(名前は知らない)

「ちよつとヤバくない?もうすぐ肝だめし始まつちやうよ!??」

「え…と…そうだ!代打を…」

そう言い、一斉にその場にいたみんなは柊の方を見た。

途端に危機を察した柊は、完全に言い訳を作る体制を整えた。

「ええと…私暗いところダメで…」

「そこをなんとか!」

「やあ、でも…ね!私もうペアできちゃったし…!!?」

「C組ってしばらく順番こないでしょ!それまでで大丈夫だから!!」

それでもなおおいさがる女の子を見て、

…よし逃げよう。

お化け役は、本当にごめん!

そう思い、逃げる体制をとった。

…が…

「…待とうか？柊サン？」

「…やだ」

「悪いけど、これ他のみんなのためだからさ」

「…ねえ海野」

「ん？何？」

「…手、どけて？」

「ん？却下（ハ）————★」

「待って！？？本当にやだって！」

「ごめんなくこれ他の100人くらいのためだから」

「全く悪いって思っていないよね！？それ！？」

「ん？思ってるよ？はい、じゃあ仕付けお願い」

「待ってよ！ほんとに嫌なんだけど！？」

そんな柊の声虚しく、柊は変わりのお化け役に抜擢されてしまったのだった…

「んーそれじゃああそこで脅かして。はいこれ、懐中電灯」

「うん、ありが…って待って！？私ひとり！？」

「？そうだよ？じゃあよろしく！！？」

「ちよっ、えっ、待って！？」

そんなわけで、今ひとりである。

(…まあ、いっか。懐中電灯あるし)

そして、その電源を入れた。

カチッ

……………

カチ、カチ、カチ、カチ…

(っ……………)

つかない!!?)
なんで!!?)壊れてるの!!?)
終…大ピンチである…

第42話 肝試しの時間 2時間目

「皆さん！ペアはできましたね!!?では今から肝試しをはじめます!!?」

先ほどの女の子がそういうと、最初のペア（A組）の子たちが森の中に進み始めた。

と、そこへ

「おい、お前ら。柘知らないか?」

イトナである。

そんなイトナの質問に、菅谷が

「あー…そういやさつきから見てないなあ」

と、そんな声が聞こえたのか、カルマが口を挟む。

「ああ、佳奈ならさつき『まだ時間あるし、その辺歩いてくる』って言うてたけど?」

「ん?…そうか。分かった」

まだこの辺りは明るいし、佳奈も大丈夫でしょ…とカルマは思っていた。

しかし…

「あつ、ごめん!!?...柘さんこっち帰ってきてない?」

「…ん?」

B組の女の子（後に知ったが、住さんというらしい）が、申し訳なさそうな顔で話しかけてきた。

その子にカルマが尋ねる。

「え?佳奈に用あるの?」

「あーうん。実は柘さんにお化け役の代役頼んでね」

「……………は?」

「それで懐中電灯渡したんだけど…なんか電池が入ってなかったみたいで。だから帰ってないかなあ…って」

そんな女の子の言葉に、前原が答えた。

「やあ…まだ帰ってきてないな。」

まあ、お化け役だし、戻ってくることはねえんじやね?」

「…つていうかあいつ、肝試し嫌で抜け出したな…」

「あのさ、」

そんな微妙な空気の中、カルマが口を開いた。

「それ、佳奈が『やりたい』つて言った?」

「ん?…はい?」

「いいから答えて」

そんな有無も言わないようなカルマの声に、その女の子は

「ええと…私はお化け役じゃないからよく知らないんだよね…海野に聞いてくれないかな…?」

…逃げたな。

その場にいたほとんどみんなが思った。

みんなの気持ちを知ってか知らずか、カルマが口を開いた。

「…まだ俺らの番になるまで時間あるよね?」

「え…?…まあ、今始まったとこだし…」

「探すよ」

「「「「はあ!?!?」「」」」」

そんな突拍子もないことを言ったカルマに、やはりほとんどみんながつつこみを入れた。

そして前原が続ける。

「いや…そんな無理やり呼び出さなくてもいいだろ。ぶつちやけ探すの大変だし、終だって…」

「佳奈は、」

マジな方で暗所恐怖症だよ?」

「「「「……は?」「」」」」

カルマの発言に、カルマ以外のみんながそんな声をあげた。

…ん?カルマ以外のみんな?

「茅野も知らなかったのかよ?!?」

「…いや…今まで佳奈からは『こういう類のやつが苦手なんだ』としか

聞いてなかったから…そっか…暗いところがダメだったんだね…」

うわあ、佳奈に悪いことした…とつぶやく茅野に、

「いや…佳奈もあんまり自分で言うタイプじゃないし…単純な話『そういう所』を避ければいいわけだしさ」

別に仕方ないんじゃない？というカルマに、茅野は少し安堵の表情を浮かべた。

それに、とカルマは続ける。

「律がいるしね。それでどこにいるかくらい…」

「そのことですが…柊さんの携帯電話は旅館の中です」

……………うん

「片っ端から探すか」

「だね」

律の言葉に、カルマや前原が話す。

そんな中、磯貝が口を開いた。

「でもさ…あてはあるのか？探すにしても、場所がわからなかったら探しようがないだろ？」

「…ん？…ああ。それなら大丈夫。佳奈多分歩き回るようなことしないし。」

(⊗⊗)

「どうということ？という表情を浮かべるみんなに、カルマが補足を入れる。

「佳奈って本トに暗いトコ苦手だからさ、連れて行かれたトコにそのままいると思う。だから…」

「あつ、なるほど」

そーいうことね…とつぶやいたのは…

「つまり肝試しのルートのどこかにいるったことだよ？カルマ君」
「そ」

不破である。

あー、そういうことか。と納得するみんな中で、前原が口を開く。

「でもよ、そしたら肝試しの時に探す方が早くならないか？もうすぐ順番も来るし…」

そう言つて、前原はちらつとB組の方を見る。

B組はもう順番が回つてきたようで、着々と進んでいつている。カルマもそんな様子が見えたのだろう。

「んー…そうだね。あとどれくらいで回ってくる?」

「ええと…あと10組くらいかな?」

「…だったら、肝試しの時に探そつか」

最初に方にいたら全然間に合うが…何しろどこにいるのかわからない状態である。

最後の方にいたら間に合わない…

だから…みんな肝試しの時に探すことになった。

柊は真つ暗な森の中、うずくまっていた。

ケータイを持っていたなら助けが呼べるのに…まあ、持っていない。

だからそうやって待つしかないのである。

遠くから悲鳴が聞こえてくるたびに、体がこわばる。

「も…やだあ…」

目からは生理的なそれが出てくる。

(だから嫌なんだよ…やなこととも思い出すし…)

ー何……………うと……………のよ!

ー…っば、せい……………いか……………ち……………ま…ねく

ーどう……………たし……………はみ……………して…ん……………!

(違う!そんなこと……………ないのに…)

「ごめんなさい…」

と、その時、ガサガサつという音が聞こえた。

ビクツと体を震わせる柊。

出てきたのは…

「…うっわ。お化けが号泣してる」

「!カルマ!?」

なんで…とつぶやく柊に、カルマが答える。

「いや…なんでも何も…そのままずっとそこにいるつもり？」

「いや…でも…」

「はい、文句言わずに立っつ」

柎を立たせたあと、カルマはみんなに「見つかった」という旨の話をした。

「つていうか、なんでケータイ持ってないの？持ってたらもつと早く来れたんだけど!?？」

「うっ…すみません…」

「本ト世話の焼ける…」

そう言っつて、カルマは「はい」と手を出し、

「どーせ一人で歩けないでしょ？掴んでていいから」

その手をじつと見ていた柎は

「…ん、ありがと」

と言っつてその手を受け取つた。

第43話 女子の時間

みんな旅館に帰り、渚・茅野・カルマ・柊の四人は一緒に歩いていた。

「ほんとにさ、なんで佳奈は断らなかつたの？」

「断つたよ！いやだつて言つたよ!?でも海野が…」

「あー…あいつね…」

そんなカルマの言葉に、なーんか嫌な予感を感じた渚が、カルマに囁く。

「カルマ…くれぐれもまずいことはしないですよ…？」

「ん？大丈夫大丈夫。する予定はないから。」

……………うん、やっぱり不安だ。

そんな会話をしていると、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あつ三村と…岡島？」

「お！よう！カルマ、渚、茅野、柊」

旅館に大抵ある卓球場である。

そこで岡島が、柊に話しかけた。

「そうだ、確か終つて元卓球部だったっけ？勝負しねえか？」

そんなお誘いに、柊は上の方を向き、うーん…とつぶやいて言った。

「ごめん、今回はパスで」

「へえ、珍しい。なんで？」

「…すごい個人的なんだけど、旅館で卓球するのあんま好きじゃなくて…」

「ふーん」

「ふーん」

そんなカルマと柊の会話に、岡島が

「そっか、じゃあまたの機会にな！」

さて消灯1時間前になり、女子部屋はある種の沈黙に包まれてい

た。

彼女たちの中心にあつたのは…とある紙。

その一番上に踊っていた文字は…「気になる男子ランキング」
結果はこうだ。

1位↓磯貝 4票

2位↓カルマ 3票

3位↓渚・千葉・杉野・前原・吉田 1票

その結果を見て、中村がまず口を開いた。

「うーん…磯貝が1位なのは予想どおりだけど、まさかカルマが磯貝と僅差とは」

「まあ、最近丸くなったしね〜」

「で、誰だ？入れた残りのお二方は？」

その様子から、カルマに入れたうちの一人は中村なのだろう。

そんな中村の質問に、奥田と不破が手を挙げた。

「へえ。奥田ちゃんはカルマと仲良いからわかるけど…不破ちゃんはなんで？」

「ん？だってカルマ君って、一番漫画っぽい人じゃない？」

「…うん、そうだね。不破ちゃんはそんなだった」

中村の結構ゲスい質問に、不破がすごい純粋に答えたため、なんか申し訳ない気持ちになつたらしい。

と、そこに…

「みんなく連絡〜」

「ほうほう、これは佳奈さんじゃないですか」

そんなゲスい顔をした中村を見て、なんか危険な匂いがしたのだから。

「ええと…私ちよつと…ジュースでも買いに行ってくる！」

「逃がすか！」

〜数分後〜

「さあてさあて、大した質問じゃないから」

「そういう目をしてる時って、大概莉桜余計なこと考えてるよね？」
そんな会話を見ている他の女子は苦笑いである。

「簡単だよ。うちのクラスで一番気になる男子はだーれだ？」

「…へ…？」

「なんだ、そんなこと…とでも言いたげな顔である。」

「だから言ったでしょ？大したことじゃないって」

「…やっぱり明日は雨降るのかな…？」

「ん？何か言った？」

「ハイ、ナニモナイデス」

「んー、と、柊は考えるような素振りを見せ、

「ええと…正直なところ、クラスの男子のことまだよく知らないんだよね…そういう理由でカルマ」

「そういう気持ちは？さっきの肝試しといい、助けてもらってたでしよ？」

「ない」

「じゃあカルマ以外だったら誰がいい？」

「うーん…磯貝あたりが無難か…？」

「ウン、デスヨネー」

「収穫なしか…とつぶやく中村に、とんでも爆弾を投げた人がいた。」

「へ？私でっつきり佳奈はカルマ君のこと好きなのかと」

「……………」

「「「「えっ？」「」」」」

「ちよつと茅野ちゃん茅野ちゃん！それ、どういうこと!!？」

「いや、あの…あかりサン？なんでそんな発想になるのかな…？」

「そんな茅野の爆弾発言に、中村、柊と交互に茅野に尋ねた。」

「…もちろん正反対のそれで。」

「いや、だって佳奈言ってたでしょ？『私幼馴染で、好き人いる』…みたいなの」

「ほほう」

「いや…なんでそれがカルマだと!？」

「そんな柊の言葉に、中村が口を挟む。」

「いやあ佳奈の幼馴染はカルマでしょ？」

「誤解があるようだけど、カルマ以外にもいるよ!?!?将暉とかもそう

だし…」

「へえくじやあ将暉なんだあ?」

「いや…それは違うけど」

「まあ他にも共通の?知り合い?で佳奈の幼馴染いたけどね。違うつて全否定してたじゃん」

「いや、その…ね!ユウとカルマはまた別だしさ…」

後半はゴニヨゴニヨ言っていたため、ちゃんと聞き取れたのはおそらく茅野くらいだろう。

まあ、それはともかく…

「で?やっぱりカルマのこと好きなのね?」

「だからなんでそうなるの…」

「そうでしょう?ここまで追い詰められてたらさ」

やー、騙された!と言う中村に、矢田が質問を投げかける。

「佳奈ちゃんはカルマ君のどこが好きになったの?」

「うわあ…みんなが敵だ…」

観念したのか、柘は口を開いた。

「…正直よくわからないんだよね…好きってなんなのか。もしかしたらただ単にずっと一緒にいたからってだけかもしれないしさ」

「ん?」

「それに私に…」

カルマと付き合う資格はないしさ」

☒という表情をみんなが見せる中、中村が口を開く。

「ええく別に誰かと付き合うのに資格とかいらないでしょ」

「…そんなこと」

「つてことはカルマに告らないの?なあんかもったいない気もするけどな」

「…告るつもりはない。今のままの方が全然楽しいし…」

「ふーん」

っていかき、と柊は続けた。

「他のみんなは誰に入れたの？私ばつかに聞いてくるけど」

その言葉に、肩をビクンとさせた人が数名。

そんなこと御構い無しに、柊は続けた。

「みんな？私を散々いじり倒したんだから言ってよ？」

「はい。私はカルマ」

そう言ったのは

「莉桜は…うん、なんとなくなあくわかる」

「でしょ？」

「残りは…奥田さんと…誰？」

「あつ私」

もう言わなくてもわかるだろう。不破である。

そんな不破に、柊が尋ねた。

「え？なんで？」

「だってカルマ君って男子の中で一番漫画っぽくない？」

「…あー…そういう」

そーいや不破さんはそうだ…と呟く柊を、相も変わらず不破は不思議そうに見ていた。

議

そんなこんなでもどかしくなったのか、柊が声を上げた。

「あー！もういいや！これだったら全然いじれない！1票投票した人

攻めるよー！」

「おっいいね」

そんな柊・中村の言葉に、やはり反応するものが数名。

「じゃあ探るぞお」

と、その時

「あんたたちももうすぐ消灯時間よ」

ビッチ先生である。

(ナイスなタイミング！)

と思った数名の人たち。

しかし、彼女たちの希望はすぐに打ち破られることになる。

柊・中村とビッチ先生にすごく訴えかける目をしていた。

それを見たビッチ先生は…

「…ま、どーせあんたたちは消灯の後も喋るんでしょ」

「分かっているくビッチ先生」

そんな中、ビッチ先生はみんなの真ん中にあつた結果用紙に目をつけた。

「ん？…イソガイの1位はわかるけど…なんでカルマも1位なのよ？」

「あつそれ入れたの私と奥田ちゃんと不破ちゃんと…」

そう言つて、中村は柊の手を引いて

「最後に佳奈でーす」

「あら、リオとマナミは仲良いから？」

「そ」

「で、ユヅキはなんでよ？」

「もうその質問3回目…」

そう言う不破が変わつて、矢田が代弁した。

「あーなんかカルマ君が一番漫画っぽいからだつて」

「…そう…ユヅキらしいじゃない」

そんな言葉に、ビッチ先生はそんな言葉をあげた。

で、とビッチ先生は続けた。

「カナがカルマのこと好きなんて意外ね。なんかきっかけがあつたの？」

「なぜよりもよつて私がカルマのこと好きだと!?!？」

「それは大人の勘よ」

「待つて！怖い!!?！」

物の見事に当てられた柊は、ビッチ先生に初めて恐怖を覚えた。

そんな中、中村が話題を変える。

「で、今は誰が誰に入れたのかを模索中つてわけ」

「あーなるほどね。…カナ、当ててみなさい」

「いいけど…なぜに？」

「この一ヶ月でどれくらいこのクラスのことをわかったかの…テスト？」

「意味わからない…」

そう言いつつ、柗は結果用紙を手に取り、

「えー…まず渚はあかりでしょ？」

「え…なんで!?!?」

「なんとなく」

「ま、茅野ちゃんはわかりやすいからね。気づいてないの本人くらいじゃない?」

「うわ…」

恥ずかしい…とつぶやき、茅野は真っ赤になった。

そんな中、柗は続ける。

「で、千葉は凜香」

「…なんで!?!?」

「千葉に関しては、他が見当たらない」

「うつ…」

「で、杉野は…神崎さんかな?」

「うん、そうだね」

「(うわあ…これ他意ないな…ドンマイ杉野)で、前原はひなた」

「本当になんで!?!? 佳奈も十分怖いよ!?!?」

「ここは千葉と一緒にだね。他が見当たらない」

「いや…でもあいつ!顔だけはいいいじゃんか!?!?」

「前原がチャラ男だつてこと一ヶ月も見てたらわかるし…なんなら私、このクラス来てから一週間くらいで声かけられたし」

「…ふーん、そう」

「…すぐにきつぱりとふつたからね?大丈夫だよ?」

「(…(違う、佳奈(ちゃん)そこじゃない)(…))」

岡野が怒っている様子だったのをフォローした柗を見て、ほとんどみんなが心の中で突っ込んだ。

そして柗は最後にこう言った。

「ちなみに…1票投票じゃないけど、職員はメグでしょ?」

「…へ!?？」

「正直吉田はわかんないなあ…ちなみに誰？」

「いや、それより前に！なんで私が磯貝君に投票したって…！」

「勘」

「やっぱり佳奈も怖いよ!?？」

「いやあそんなのビッチ先生に比べたら、」

「いや、怖い」

「あーでも吉田は消去法でいけるか。残ってるのは、桃花と陽菜乃ちちゃんと狭間さんと…原さん？ってことは狭間さんか原さんか…」

「ちなみに私だよ」

そういったのは…

「あゝ原さんか」

「そ」

「ふーん意外。なんで？」

「私たち、家が近くてね。幼なじみなんだよ」

「あーなるほど」

と、そこに、

『ブーブー』

「ひなた、ケータイ鳴ってるよ」

「ん？…あつ。ほんとだ」

そういつて、岡野は電話を取った。

「もしもし？どーしたの？珍しい…ん？いいよ。何？」

…うん…うん…うん…うん…うん…うん…うん…うん…うん…うん…うん」

そんな感じで、岡野はひらすら相づちを打っていた。

と、突然、

「あー、

それ、私だ」

「『…はっ』」

いや、何が?!?というツツコミが、みんなの心の中で起こる。そんなことを知ってか知らずか、岡野は

「うん。そうそう。……うん?いや、いいよ。全然。」

やー、うん。あー、じゃあ」

そう言つて、電話を切った。

その瞬間

「ちよつと!今の誰から?!?」

「は?…え?!?」

「何が『私』なの?!?」

「どんな感じの電話だった?!?」

「待つて!ちよつと待つて!!?」

そしてみんなが落ち着いた頃、岡野が口を開いた。

「ええとね…さっきの電話はカルマからで…」

「え?カルマからひなたに?」

「うん。珍しいよね」

「へえくで、肝心の内容は?」

「…それは…ちよつと…」

「ええく?!?なんで?」

「すごい個人的なやつだから…ね」

「個人的な話をカルマと?」

「ん…まあ」

えく気になるく

しかし、岡野はどれだけみんなが言つても、口を割ろうとはしなかった。

…それだけ言いたくないのだろう。

そして、柘が口を開いた。

「とりあえず、この結果は女子だけの秘密ね。知られたくない人も多いだろうし」

「まあ、そーだろーね」

「だから、ビッチ先生以外の人には絶対に…」

そう言っていた柊は、目をやった方向に、あるものを見つけた。

…殺せんせーである。

殺せんせーは結果用紙を見て、持参のノートに結果を書いて…

「メモって逃げた！殺すよ!!?」

「え、嘘！マジで!!?」

「ちよつと殺せんせー！何、人のプライベートおかしてんのよ!!?」

「ヌルフフ。先生のこの速さはこういう情報を集めるためにあるのです」

「絶対に違う!!?」

そんなことをしていると、遠くから声が聞こえてきた。

「クツソ！どこだ!!?あの下世話タコ!!?」

…どうやら男子部屋でも何かをしたらしい。

消灯間近の時間に、その旅館では、みんなの殺る気に満ちた声が聞

こえたという…

第44話 男子の時間

1日目のプログラムが終わり、消灯まで後1時間弱。
その時、男子大部屋は…

「「「「……………」」」」

「ある種の沈黙に包まれていた。」

そして、

「「「「……………」よし。」

「王様だーれだ!!?」「「「「」

「よっしああー俺だ!!?」

「じゃあ2番と10番はクラスで一番気になる子言え!!?」(by前原)

「うっ…茅野…」(↑2番 渚)

「…俺は速水…」(↑10番 千葉)

「…まあ、予想通りだな」

「ここまで見ていたらわかるだろう。」

「これは王様ゲームである。」

「こうなったのは、大体10分ほど前に遡る…」

「みんな王様ゲームやろうぜ!」

「…なんでだ?前原?」

「それは前原の一言から始まった。」

「そんな言葉に、磯貝が尋ねる。」

それに前原は、

「一年ずつと一緒に行ったこのメンツがまた一緒に部屋で一夜を過ごす！そしたら盛り上がるしかねえだろ！」

「…で、なんで王様ゲーム？」

「ここには女子がない…だからそんな変な命令はできない…だがしかあし！」

ここで前原が床をバンバンと叩いた。

……………前原ってこんなキャラだったっけ…？

そんなみんなの疑問をよそに、前原は言葉を続けた。

「女子がないからこそできる話もあるだろう!?？だったらこの機会にしようと思わないか？」

そんな前原の言葉に、岡島が答えた。

「いいじゃんか。おもしろそーだし」

「だろ!?？岡島!!？」

…まあ、王様ゲームくらいなら…女子もいないし。

「んー…じゃあ俺も」

「俺も」

「僕も…しよっかな？」

「…みんながやるんだったら俺も」

岡島の声を皮切りに、みんなもやる、と言い始めた。

そして…今に至るわけだが…

「「王様だーれだ!!？」」「」」

「あ、僕だ」

(())()やっともなものが来た!!?()(())

言わずもがな、渚である。そして命令は…

「えっと…じゃあ12番の人は、一階の購買まで行ってなんかみんなでつめるもの買ってきて」

「あつ、そっち系？」

「あー…分かった。買ってくるわ。」(↑12番 木村)

「いや、木村かよ!?？」

「ここであんなで木村が来るんだ…とみんなが嘆いてる間に木村が帰ってきた…って」

「はえーな、おい！」

「いや、なんでだよ!?？」

と、そこへ…

「みんなく業務連ら…ん？なんかおもしろそうなのやってんじゃん」
カルマである。

「お、カルマおかえり」

「え？何？王様ゲーム？」

「そうだけど…お前もするか？」

「あつたりまえじゃん」

…この時点でほとんどみんなが

((…わぁ…カルマか…))

嫌あな予感はしていたのだ…

「王様だーれだ！」

「あつ、俺だ」(byカルマ)

((…(ゲツ!!?)…))

「んーじゃあ2番と5番と10番と12番の人はこのサンドイッチ
どーぞー」

…なんでそんなに準備よくサンドイッチがあるのか不思議だが、何
しろ王様の命令は絶対だ。

2番と5番と10番と12番だった4人…渚、岡島、寺坂、前原
はそのサンドイッチに手を伸ばした。

と、そこでカルマが口を開く。

「ちなみにこの中の一つに佳奈が作ったやつあるから」
………

ピタっと4人の動きが止まった。

そんな微妙な空気の中、渚が口を開く。

「ええと…カルマ？気のせいかな？今『この中に一つ柘さんが作ったサンドイッチがある』って聞こえたんだけど…」

「うーん、残念だけど気のせいじゃないね」

……………うん

((どれだ!?どれが柘(さん)が作ったやつだ!?))(

((よかった!番号当たらずで!!))(

思い思いに、みんなはその状況を見ていた。

その様子を、カルマは楽しそうに眺めている。

「いやあ。みんな必死だね」

「まあ、生死かかっているしな…」

「生死って…」

確認だけど、これ王様ゲームだよな…と番号が当たらなかったみんなは思った。

「よし。俺はこれに決めた」

そう言つて、寺坂は一つのサンドイッチを手にとった。

それを皮切りに、岡島、渚、前原と順にサンドイッチを取つていった。

「よし。じゃあ『セーの』で行こうか」

「OK。じゃ、セーの」

その声で、四人は手にしたサンドイッチを口にした。

瞬間。トイレに走るものが一人。

……………寺坂。ご愁傷様……………」

((よかった!本当に!!))(

そんなことを考えつつ、岡島が

「つていうか…不味いの来ること覚悟で行ったからさ…このサンドイッチうめえ…」

その言葉に、他の二人も無言で頷く。

そして、渚がカルマに質問を投げかける。

「…ちなみに誰が作ったの？」

「ん?俺」

「カルマかよ…」

「いいじゃん佳奈の料理食べるよりは」

「そうだな（断言）」

※ちなみにそれから寺坂は、しばらくトイレから出てくることはなかったようです。

「王様だーれだ!」

「よつつつしあ!!?俺の時代が来たぞ!俺の時代が!!?」(by岡島)

「岡島、うるさい」

「いいだろーが!よし、じゃあ5番は好きな奴の名前言え!!?」

「いない。次」(↑5番 カルマ)

「なんだ、カル…つて嘘つけえ!!?」

そんな岡島に、カルマは訝しい表情を見せた。

「はあ?嘘じゃないけど?」

「ふふん。俺はわかってるぞ、カルマ。」

お前、柊のこと好きだろ?」

「あつ、それ俺も気になってた」

そんな岡島と前原の言葉に、カルマは

「…どこをどうやったらそんなバカみたいな考えが出てくるか気になるよね…:なんならもう一回サンドイッチ食べる?次は佳奈特製のやつ」

「…あつ、うん…:スミマセン…:」

男子全員が、絶対にこの二人をいじってはいけないと悟った瞬間である。

「王様だーれだ!!?」

「あつ。俺だ」(byカルマ)

((((またかよ!!?)))

実質3連続である。

そんなことを御構い無しに、カルマは命令を続けた。

「はい、じゃあ13番の人は、初恋のエピソード言って」

「初恋か」

ここに来て、王様ゲームの王道が来た。

と、そこへ…

「なあ、カルマ。俺ちよつとトイレ行ってくるわ」

前原である。

そんな前原の言葉にカルマは、

「ん、どーぞー」。

って言うと思う?。」

今にも部屋から出ようとしていた前原は、ピタッと足を止めた。

それを確認して、カルマが言葉を続ける。

「ねえ、前原。トイレは行っていいから、その前に番号見せよつか?」

……………

一瞬の沈黙のあと、前原は全力疾走で部屋から出て行った。

それを見たカルマは、

「木村」

「オーケー」

のちに渚が語るには、この時のカルマはみんなにとっては不幸の前兆でしかないあの顔をしていたという…

〜数分後〜

「はい、確保」

「さつすが木村。仕事が早い」

「あんまり広い旅館じゃないしな」

「お前らあ!」

そんな様子の前原に、カルマが話しかける。

「はい、じゃあ前原。どーぞ」

「いや…別に俺13番じゃねえし…」

「だったら逃げる必要ないよね？」

「…今まで初恋とかしたことないし…」

「初恋がまだの人間があんなに全力疾走で逃げたりしない」

「お…覚えてねえんだよ！いつが初恋だったかとか…ほら、俺自分で言うのもなんだけどチャラ男だし？」

「繰り返し言うよ？」

初恋覚えてないと、普通あんなに全力疾走で逃げない」

完全論破である。いや…この場合は自爆したという表現の方が正しいか…？

「ほら、早く言っつて」

「却下断る」

「王様の命令はー？」

「絶対じゃねえぞ！フランス革命だって、王様の命令に逆らったからできたことで…」

「それは現実こっちはゲーム」

「ゲームが現実よりシビアであつてたまるか!!？」

「そもそもこれ始めたの前原なんだよね？言い出しっぺが何ゲームに逆らつてんの？」

「別に…何がダメなんだよ！」

「ダメに決まつてるでしょ？はい、早く言っつて」

「断固断る」

「へえ〜そつかそつか。じゃあ…」

そういつたかと思うと、カルマは別の人に視線を変えた。

「磯貝、教えて」

「了解。えっと、確か中1の時だっけ？」

「ちよ…磯貝!?!？」

まさか磯貝までもが乗ってくるとは思わなかったのだろう。

そんな焦りの声が聞こえてきた。

「へえ〜詳しく」

「確か振られたんだっけ？その女の子から」

「待て！俺は振られてねえ！」

「でも実質振られたようなもんだろ。だって目の前でさ……」

「だー!!？わかった!!？自分で言うから、磯貝ちよつと黙れ!!？」

そんな前原の言葉に、

「磯貝。ナイス」

カルマは磯貝に親指を立てていた。

第45話 初恋の時間

「あっ！前原君！明日新体操部、見に来てくれない？」

確かあれは…中1の夏だったと思う。

クラスの女子に、そんな頼みを受けた。

フツーに可愛い女子だったと記憶している。

名前は…確か『ミナ』ちゃん。

たまたま次の日は部活が早くに終わる日だった。

「新体操」というものに興味もあつたし、当時チャラ男じゃないにしろ『女の子の誘いを断ること』は正直頭の片隅にもなかった。（多分姉貴たちの影響）

だから部活が終わった後、何気なく…本当に何気なく新体操部の部屋にふらつと立ち寄った。

どうやら大会が近かったようで、何人も練習をしている人がいた。

団地で練習している人。個人で練習している人。

…少し見ただけで、個人でやっている人は入って間もない一年生

（つまり同級生）が多いことがわかった。

（へー新体操って言っても以外といろんな道具使ってたんだな。リボンだけだと思ってた）

少し挨拶したら帰ろうか…そう考えて、『ミナ』ちゃんを探した。

と、その時。

ちょうど目線の先で、今にも演技をしそうな、リボンを持っていた女の子がいた。

個人みたいだったから、多分同級生だろう。

次の瞬間、

その女の子が、リボンを空中に投げた。

それも演技の一部なのだろう。

その女の子は、一回周ってさっき投げたリボンに手を伸ばした。

しかし、すんでのところで落ちてしまう。

その女の子はその時、悔しそうな表情を浮かべた。

その時、俺が思っていたのは「あー惜しい……」とかではなく……

「……すげえー！」

思ったことが思わず声に出してしまった。

女の子が気づいてこつちを向くほどに。

でも俺はそんなことも御構い無しに、言葉を続けた。

「すげえ綺麗だった！新体操って初めて見たけど、こんなに綺麗なんだな!!？」

今考えてみると、その子はかなりびっくりした表情を浮かべていたように思う。

その後、『ミナ』ちゃんに連れられ、こう言われた。

「そうだ！前原君さ……この日曜日って予定ある？」

「ん？特にないけど？」

「そうなんだ！よかった！だったら日曜日の大会見に来てくれないかなあ……？」

日曜日か……と思った。

正直一週間に一度の休みだ。

本当なら家でダラダラしてたいのだが……

多分あの子も出るよな……

そんな思いから、

「うんいいよ」

そんな言葉が口から出てきた。

~~~~~

そして迎えた大会の日。

どうやら一年でも新体操を入学前からやっている子も多かったよ  
うで、柗ヶ丘からと個人での入賞が多かった。

そして個人の部で優勝したのは…『ミナ』ちゃんだった。  
表彰式のあと、『ミナ』ちゃんは俺の方に駆け寄ってきた。

「ねえ！前原君!!？見てた？」

「うん？ああ、見てたよ」

「ほんと！うれしい!!？」

そんなことを話していると、あの女の子と目が合った。

その子は…その子のことはずっと見ていたが、残念ながら入賞の出  
来なかった。

失敗はしていなかったと思うんだけどな…

そんだけ新体操って厳しいのか…と思っていたところだった。

すると、その子がこちらに歩いてきて…

そしてこう言った。

「前原君。」

……………ミナちゃんをよろしくね」

「そんでそのあと『ミナ』ちゃんに告られて、断りづらくなったから付  
き合うようになった…って感じだよ。なんかある？」

自分の初恋話を終えた前原は、そんな質問をした。

それに、岡島が言う。

「その子の名前は？」

「知らない…ってか聞くの忘れてた」

「おいおい…で、どんな子だったんだよ？」

「ええと…団子頭だったな。まあ、新体操してるからだろうけど」

「顔は？」

「んーと…結構可愛かったと…」

「へえ」

「っていうか、そこまで印象残ってんだったら普通、学校であった時に気づくだろう」

そんなことを言った吉田に、前原が答えた。

「それが会わなかったんだよ。それから。あとで新体操部行ったんだけど、その時やめててさ…」

「ふーん」

そんな中、

「要は誤解されたってことでしょ？その子に『誤解だ』って言えばよかったって思うの俺だけ？」

そんな質問をしたのは…

「…じゃあ逆にカルマはできるのかよ…」

「俺はできるよ。っていうかするね」

「絶対に嘘だ。思ってるより難しいぞ。その状況でいうの」

「っていうかさ、純粹に聞いたらいんじやない？知ってそうな人に」

「ん？…やあ、俺知ってそうな子、誰も知らないし…」

「いるじゃん一人。新体操部とつながりありそうで、知り合い多そうな奴」

「は？誰だよ？」

「待って〜今から電話する」

（カルマが番号知ってるってことは、絶対にうちのクラスの子だな…）

それに気づいたのは何人いるのか。

そして、カルマは「ある人物」に電話をかけた。

「あ、もしもし？」

岡野？」

「ちよっ？！？カルマ!!!？」

「実はさ〜ちよっと今岡野に聞きたいことあるんだけど、」

「カルマ！マジでやめろ!!？今すぐやめろ!!？」

「あーごめん。ちよつと待ってて」

そして、

「磯貝、木村。ちよつとそこのうるさい人抑えててくれる？」

「りよーかい」

「なんでだよ!?!?」

そんな前原の声虚しく、カルマはそのまま話を続けた。

「やあ〜ごめんごめん。でさ、ちよつと岡野に聞きたいことあるんだけどさ、実はこつちで王様ゲームやってて、俺が王様になったわけ。

それで『初恋のエピソード言つて』つて言つただけけどさ、当たつたのが前原で、あいつ『覚えてない』つて言つてさ」

((あ…前原死んだな…))

まあ、確かに本当のことは話せないけどさ…と、みんなは思う。

とりあえずドンマイ、前原。

「それで命令変えたの。『じゃあお前の初めての彼女のエピソード言つて』つて。そしたら話してくれたんだけど、なんか二人がくつつかの手伝つてくれた女の子がいたらしくつて。『その女の子と仲良くね』みたいにな?で後日お礼言いたくて後でその子の部活行つたけど、もうやめちやつてみたいで。

ちなみに新体操部だつたらしいんだけどさ、なんかその子について知らない?元体操部として」

そのあと、少しカルマは黙つた。

そして…

「ふーん。そうなんだ。やあ、ごめんねー。こんなこと聞いて。

…うん、じゃあまた明日ね〜」

そしてカルマは電話を切り、

「わからないつてさ」

「あつ…そうか…」

そう言つて、前原は少しほつとした表情を浮かべた。

そんな中、カルマが口を開く。

「…前原はさ、初恋の女の子わかったら、その子のこと好きになるの？」

「……は？」

意味わかんね…という表情を浮かべる前原に、カルマは「早く答えて」と促す。

「やあ、別に…俺的にはもう終わった話だし、『また会えたらいいなく』くらいにしかな思ってたねえよ」

「ふーん、そっか」

まっ、とカルマはつぶやく。

「それ以上の詮索はやめとくよ。金欠タコのノートのページ減っちゃうし」

「………ん？」

その瞬間、みんなは一斉に襖の方に振り向いた。

そこでみんなが見たのは…

静かに襖を閉める…殺せんせーの姿だった…

「………」

そんな短い沈黙のあと、

「おい、みんな。ちよつと殺りに行くぞ」

「いや…被害者前原だけだろ？」

だったらなあ…と呟くみんなに、カルマが言う。

「ちなみにさ、

俺がこの部屋入る前からあのせんせーいたから」

「………うん。」

「突っ込みたいことはいろいろあるが、とりあえず今はあのタコ追うぞ!!?」

「あつー!こんなとこにいた!」

「こつちにいたぞ!殺れ!!?」

「ニユア!!?はさみ打ちに!!?」



「……結局は暗殺になるんだね…」

「…うん…だね」

そんな様子を見た渚と茅野が呟いた。

「いや〜っていうかまだ1日目だけど楽しかった〜今から明日のカレー作り楽しみだもん」

「うん、そうだね」

「佳奈にはちゃんと別のことしてもらおうしね」

そんなカルマの言葉に、渚が問いかける。

「…違うことって?」

「ん?それは明日のお楽しみで」

「怖いよ!?!?さっきのサンドイッチもあつたし!!?」

「ああ、そこは大丈夫。みんなには多分被害ないから」

「その多分ちよつと怖いかな?!」

しっかし、とカルマはつぶやいた。

「なんだかんだ言つて、やっぱり楽しいよね。気兼ねなくいろんなことできるしや」

「…何でだろうね。カルマが言うと、別の意味に聞こえる…」

「ん?気のせいじゃない?」

「あー…うん。そう…」

(絶対に違う…)

という思いは心の中にとどめた。

「まあ、なんだかんだ言つて、またみんなと一緒に旅行?みたいなのが出てくるわけだしさ。このメンバーで旅行とか、フツーに楽しいじゃない?」

「うん、そうだね」

そんな空気の中、みんなの野外活動1日目は幕を閉じたのだった…

## 第46話 野外活動の時間 3時間目

野外活動2日目。

今日やることは…

「では今から、カレー作りをしまーす。

A組は宿舎うら、B組はこちら、C組は…ちよつと離れてるけどその坂ちよつとあったところで作って下さ〜い」

そんなわけで、みんなはそちらの飯ごう炊さん場所へと移動した。

「…つていうかき、俺らがこんなに離されてるの、絶対に殺せんせーがいるつてのもあると思うんだけど…?」

「ま、そーだろーね」

そんな会話をしながら、移動していた中、(こういう行事で一番の問題児である) 柊が、口を開いた。

「つていうかき、私カレー作るの小学生以来だよ。それ以来機会すらなかったし」

「…だろーねー」

「わー…楽しみ〜!」

いやいやいや…と言いたところだが、みんなはあえて突っ込むことはしなかった。

そしていよいよ、

「えー、ではみなさん、作り始めてください。私はその間ちよつと本場の紅茶でも買ってきますが、くれぐれも先生の分のカレーも作っておくように!」

そう言つて、紅茶の本場…イギリスへと旅立っていった。

「…つうか、カレーを紅茶で食うつもりか?あのタコ…」

「…で、どうするよ?あのタコのカレー?」

「ああ、俺らの班で作るよ」

そう言つたのは…

「…カルマの班はその料理音痴で手一杯だろーが」

「…ちよつと?寺坂?」

「ああ、佳奈なら大丈夫。ちゃんとした処置はするから」  
(((??)))

そんな空気の中、カルマが口を開く。

「ちなみにみんな。俺は今ちよつとした計画を立てていまーす」

「…嫌な予感しかしねえ…」

「この計画は昨日の夜にLIEを通じて原さんにも許可を頂きました」

「…ん？」

「そんなわけで、今から殺せんせーの暗殺計画を発表したいと思いまーす」

「…は…はあ…」

「そんなわけでさ…」

佳奈には殺せんせー用のカレーを作る許可を出しまーす」

「二…すげえ悪質な嫌がらせじゃねーか!!」

あまりにもひどい計画に、思わずほとんどの男子が突っ込んだ。

そんな男子たちに、カルマがこう言った。

「まあ、大丈夫でしょ。そんな込んだ計画じゃないし」

計画はこうだ。

1：終がカレーを作る

2：原が殺せんせーにそのカレーを渡す

3：弱ったところで暗殺開始

「なかなかひどい計画だな！おい!!？」

「殺り方が完全に嫌がらせの領域だ…」

「つうか、なんで原はそんな計画にOKしたんだよ!!？」

「んー：最初はね、食材が…みたいな感じで断っただけど、カルマ君が『大丈夫。殺せんせーには意地でも完食してもらおうから』って言ったからね。断る理由がないじゃない」

「…ごもつともすぎて何もいえねえ…」

「ちよつと待って。誰も突っ込んでないけどさ、『ちよつと食材が…』のくだりがよくわかんないんだけど?」

そんな柘の質問は全員完全無視して話を続ける。

「まあそんなわけでき、計画はそんな感じだから」

「っていうか、サンドイッチであれだぞ…?カレーとか作ったら冗談抜きで…あのタコヤバくね?」

「んー、ヤバいかもね。まあ一応『ここにある食材しか使うな』とは言っておくけど」

「私も今ここにいるからね?伝わってるから!」

((((…どうして大した材料ないのにあれほどの料理を作れんだ…?)))

ちなみにそこにある材料は…

- 1 : ジャガイモ
  - 2 : にんじん
  - 3 : 玉ねぎ
  - 4 : 牛肉
  - 5 : コンソメ
  - 6 : カレールー
- だけである。

「…今し、この材料のカレーなんて幼稚園児でもちよつとは作れるぞ…?」

「だね。少なくとも将暉は作れた」

「…確認だが味は?」

「ん?フツーに美味しかったと…」

「うん…なんとなくわかった」

まあ、そんなこんなで結局柘が殺せんせー用のカレーを作ることになったのだが…

ここで、柘の料理力のなさが露見されることとなった…

「さて問題です。みんなはカレーを作るときにまず何をする？」

「ん？…野菜の皮むきじゃねえの…？」

「もしくは牛肉の解凍とかだけど…それはすでにされてるし…」

「正解です。ではあちらを見てください」

そう言われ、見た方向には…

(切ってるな)

(何切りだ？あれ？)

(にんじんを輪切りしてんぞ？あいつ)

(皮むきは？)

(…してると思うか？)

(…でしょーね)

スタートから思いつきりアウトである。

にんじんはまだいい。まだ(超ギリギリオーダーラインで)殺せん

せーにはばれないだろう。

でも…

「ごめん、佳奈。野菜とか切るのは俺らがするから」

「は…？…えっ？…なんか違う？」

「違う。この先が不安だからとりあえず材料貸して」

ー5分後ー

「はい、じゃあ再開して」

「ん、ありがと〜」

野菜・牛肉を切り分け終えた。

…本当に素晴らしい料理力だな。おい。

「では第2問。この次、みんななら何する？」

「野菜と牛肉炒める」

「だよね。じゃあ、あちらをどうぞ」

終がしていたのは…

(…さっきの野菜と牛肉全部鍋に入れた)

(…水いれた)

(…オチが見えたな。これ)

(茹でに入っただぞ。あいつ…)

(…これ牛肉しゃぶしゃぶと化したな)

(…なんかこの料理のオチが大体読めてきて悲しいわ)

「では第3問。この後みんなはどうする?」

「どうするも何も…間違ってるし。いろいろ…」

「っていうかこの流れも面白い…」

「じゃあ問題を変えよう。」

野菜・牛肉を炒め終わって水を入れて煮込みます。次にみんなはどうする?」

「アク抜きした後コンソメ入れてからルー入れる」

「さすがにそれは…って言いたいけど、すでに色々やってるからなあ…」

「はい、ではあちらをどうぞ」

(ん?…もう1個鍋用意した?)

(……水捨てたぞ、あいつ…)

(もう1個の鍋に水捨てた…)

(で、どうする?)

(…ルー入れた…あいつコンソメの存在忘れてんぞ…)

(…確認だが…あいつアク抜きは?)

(したと思うか?)

(そのコメントは差し控えさせていただきます)

(あつ、コンソメに気づいた。入れるか?)

(俺は入れるに500円)

(俺も)

(俺も)

(入れない選択肢はないのね…って入れたし)

(…あいつの料理力、もはや才能の域だろ…)

(で、さっきの茹でた野菜と牛肉は?)

(ルーに入れるか、ルーが戻されるか…)

(俺ならルーを戻すが…)

(いや、そもそもこうならねーだろ…)

(確かに)

※結局ルーは元の鍋に戻されました。

そして、

「できたよ〜」

「とりあえず、5・6ヶ所は突っ込ませろ!!?」「」

ここまで思ったの、殺せんせー来てからだわ!!?…というツツコミが入った。

そんなみんなの言葉に、柊は

「え?なんか変だった?」

「お前はとりあえず料理本を見返せ!話はそれからだ!!?」

そんな村松の言葉に、カルマが口を挟んだ。

「まあ…一番の問題は味だね。ん…じゃあ味見は…」

…ごめん、岡島

「なんでだよ!?!?」

「一瞬寺坂も考えたけど、何しろ2回連続でしょ?…いくら寺坂でも不憫すぎる…」

「カルマが寺坂に同情したぞ…」

「どんだけなんだよ…柊の料理って…」

そんな言葉をかわす磯貝と前原はともかく、こちらではちよつとした戦争が始まっていた。

「いや、っていうかそもそも味見とかいらねーだろ!」

「…ちゃんと暗殺道具として役に立つかの…実験?」

「だからそれがいらねーんだよ!!?」

「まあ、もしも万が一、絶対にありえないけど万が一のためだからさ」「仮にしなければいけないとしよう!俺と寺坂とでその料理を食う負担が大きく違うだろ!絶対に!!?」

「は?…なんで?」

「寺坂はまずいっつってもサンドイッチだろ?俺は火通してるから!

サンドイッチ以上に手え込んでるから！」

「なんだかんだ言つて、寺坂はあのサンドイッチ完食した。反対にこっちは一口でいい。負担は一緒。むしろ岡島の方が負担小さい」

「絶対に違う!!? っていうか寺坂体力あるだろ!!? こんな時こそ使うべきだつて！」

「寺坂は…さつき言ったじゃん? いくらなんでも不憫だつて…」

「じゃあお前が食えよ!!? 嫌なこと人に押し付けやがって！」

「…ねえ、岡島?」

この瞬間、みんなが悟った。

…岡島が今、言つてはいけないことを言ってしまったと…

「さつきさ、お前が自分で言つたよね?

負担がどうこうつて。」

「…? 言つたけど…?」

「じゃあさ、

俺の負担つてどんぐらいだと思う? ねえ?」

「え……と……?」

「おれが佳奈の料理食べたの…つてか食べさせられたの俺が覚えてるだけで3回はあるよ?」

要はさ、とカルマは続けた。

「このクラスで一番負担大きいのは、多分…つていうか絶対に俺なんだよね。それでもまだ俺に食べさせる気?」

「ええ…と…」

「はい、決定ね。岡島どーぞ」

そんなわけで、岡島が生贄となった。

「…私が食べればいいつて思うの私だけ?」

「佳奈が一番向いてないんだよ!!?」

そんなことを言う終を、茅野が突っ込んだ。

そして…いぎ、試食(という名の処刑)!

岡島はルーの方を一口食べた。



その瞬間、

ボタン／＼

.....

「岡島…お前のことは忘れないからな…」

そのあと、柊もカレーを食べて、

「えー？別に美味しいじゃん？」

「絶対にありえない」

「なんでよ!?!?」

「みなさん、できましたか？」

そんなことを言って、殺せんせーは紅茶を持って帰ってきた。

そんな言葉に、みんなが「できたよー」といった言葉を述べた。

「ヌルフッフ、それはそれは。」

ちなみに先生のカレーは誰が作ったのでしょうか？」

「あつ、私」

そう言って、原が手を挙げた。

そして、よそったカレーを持って、

「どうぞ、殺せんせー」

「ありがとうございます！原さんのカレーですか」

そう言って殺せんせーは、嬉々とした表情でそのカレーを口にしました。

瞬間、殺せんせーは無言で買ってきた紅茶を一气飲みました。

そして尋ねる。

「これ…本当に原さんが作りました？」

「ん？作ってたよ？」

そんなカルマの言葉に、みんなが苦笑いをする。

そんな中、殺せんせーが口を開いた。

「ええと…先生お茶も無くなりましたし、もう結構ですので…」

「先生ー？せっかく原さんが作ってくれたカレー残すなんて、もった

いないよね？PTAに言ったらどうなんのかなあ？」

「ニユ：ニユアアアアアア！」

(言えるわけねえじゃん：国家機密に：)

本当にチキンだな…。みんなはそんなことを思った。

そして：その素晴らし(くまず)いカレーを、殺せんせーは完食した。：とかさせられた。

まるで乗り物に酔った時のように今にも死にそうな表情の殺せんせーに、みんなは攻撃を仕掛ける。

まあ、すべて躲されたが：

そして、岡島：

お前のことは忘れないよ：

## 第47話 入部の時間

野外活動が終わり、みんなは学校に向かっていた。

「今日から平常授業か。野外活動で色々あっただけに、ちよつと寂しい気もするな」

「色々…ね…」

「その『色々』って、ほとんど原因佳奈だけどね」

「本人いないところで言うなよ、それを…」

そんなことを話していたカルマ・杉野・渚に、

「あつ！ねえ君たち！うちの部活に興味ない？」

「写真部は伝統のある部活です！」

「野球部は最近春の甲子園に出場しました〜！」

そんな言葉が飛び交う中、カルマが呟いた。

「あー…そっか。もうすぐ入部か…」

「全員入部？」

HR前の教室で、片岡がそんな言葉を発した。

そんな彼女は色んな部活にもものすごく勧誘されたい…

そんな片岡の言葉に、柊が答える。

「そつ。この学校、全員入部が絶対条件でさ。梅宮高校で絶対に守らなきゃいけない数少ない校則？みたいなの？」

「へー」

「しかも野外活動終わったら本入部まで一週間くらい勧誘解禁だからね。チーム競技とかだと多いほどいいし」

だから片岡とかは優良株でしょ、とカルマが言った。

そんなカルマの言葉に、柊が補足を加える。

「ま、兼部してる人とかも多いけどね。研究部・同好会・委員会の人には兼部の義務あるし」

「え？…そうなの？」

「うん。それに部活もバイト持ちの人のために大会前とかじゃない限

り5:00くらいには終わるところも多いはずだし。そんなに重く考えなくてもいいと思うよ?」

そんな終の言葉に、カルマが無言で頷いた。

「渚は何部入るか決めた?」

そんな茅野の言葉に、渚はこう答えた。

「うん。ESSに入ろっかなって思ってた」

「あー渚英語得意だから」

「うん。茅野こそ何入るか決めた?」

「うーん…まだ未定かな。色んな部活回ってから決めようと思って」

「あー、なるほど」

「…あれで付き合っていないんだよなあ…」

そんなつぶやきを漏らすのは、

「まあいいじゃん、カルマ。あかりも渚のこと好きになったのつい最近なんでしょ?」

「…最近…なのかな?少なくとも去年末からだってのは知ってるけど?」

「あかり、本当に全然好きになったきっかけ教えてくれなくてさ。どーいう経緯で?」

「…本人言いたくないこと俺が言ったらダメでしょ」

「うっ…正論…」

(実際のところは『言わない』んじゃないかって『言えない』んだけど…やっぱりそれ言ったら殺せんせーの過去も言わなきゃ不自然だし)

そんなことを考えつつ、カルマは終にこう言った。

「ちなみに佳奈はさ、何部入るか決めた?やっぱり卓球?」

「いや…ここの卓球部はなあ…」

「…やめようか。そんなこと言うの」

「です、はい。」

…カルマは何部入るの?」

そんな柁の問いにカルマは、「うーん…」と言いつつ、答えた。

「まだ未定かな?ま、運動部になるんじゃない?」

「……そっか」

と、そこへ

「お?カルマまだ部活決めてないのか?だったらサッカー部とか…」

「却下」

「だよな…って返事はっや!!!」

前原である。

そんな前原に、カルマは

「ごめんね、前原。サッカー部だけは入る予定ないんだよ」

「…なんで?」

「えー?理由いる?」

「どうせそんなことかと思っただけだな!!」

だったら聞かなきゃいいじゃん?と言うカルマに、

「んー…まあ、そうだけど…本当に無理か?」

「無理だね。本トに入るつもりないし」

「あー…うん。わかった」

以上会話終了である。

しかし…誰がこの話が続きと思っただろうか…

「カルマ!マジでサッカー部入んねえか!」

「だから入らないって」

「そこをなんとか!な!!」

「しつこい」

次の日渚が学校に来ると、前原とカルマがそんなやり取りをしていた。

「ええと…どういう状況?」

渚が茅野に問いかける。それに答えた。

「あー…前原君が部活の先輩に言われたんだって。『できるだけクラスノやつ連れてこい』って…」

「……………なんでそれでカルマ?」

「運動神経良くてまだ入る部活決めてない人、カルマ君だけなんだってさ」

「ああ…なるほどね…」

「なっ!今は見学だけでもいいから!ほんとに来るだけ来てくんね!?!」

「行ったら勧誘が激しくなるじゃん。だから行かない」

「だったら……………そうだ!なんでも1個お前のいうこと聞くっていうのでどうだい!だから部活見学だけでも……………」

「……………ほんとになんでもいいわけ?」

「いいから!」

「んー…じゃあちよつと考えとく」

「( )( )( ) (なんて危険なことを言うんだよ!前原は! )( )( )( )」

前原の死亡フラグが立った瞬間である。

放課後、前原とカルマはサッカー部の見学に来ていた。

まあ…(ほぼ)強制連行されたカルマは全く乗り気ではないが…

「やっぱり先輩つえーわ。俺あんなドリブルできねーし」

かくいうサッカー部は、練習の一環として4ー4のミニゲームをしていた。

そんなことを呟いた前原に、カルマが口を開く。

「そんなに強い?」

「つえーよ。逆に何が悪いんだよ?」

「…白チームのキーパー下手だよね」

「…は?」

「だからディフェンス徹底しなきゃダメなはずなのに、攻め中心になってる。やっぱりキーパーを信用してないんだよね…これ絶対に赤チームが勝つよ」

「……………ええと?カルマ?」

「ん?なに?」

「お前さ……………」

「サッカー経験ある？」

そんな前原の言葉に、カルマは一瞬……………本当に一瞬だけ表情を固くした。

そして

「帰る」

「はあ!!?なんでだよ!？」

「そもそも強制的にここ連れてこられたんだよね。いつ帰っても俺の勝手でしょ?」

「いや、だったら質問に答えろよ!」

その時、2人が言い争う後ろでワツという声が聞こえてきた。

案の定赤チームが勝つたらしい。

そんな声はよそこに、

「はあ?別にいいじゃんか。それとも何?経験ある部活に入らなきゃダメなわけ?」

「……………正論だけど!」

「だから帰る。来ただけ来たじゃん?」

「うっ…:そうだけど…:」

「じゃ、また明日ね」

(引き込めなかったか…:)

そう思っ、前原は少し悔しい表情を浮かべる。

と、その時、

「あれ?赤羽?」

2人の背中にそんな声がかかった。

その言葉に、2人は振り向く。

そこに立っていたのは…

1年先輩の和泉だった……………

## 第48話 入部の時間 2時間目

「あれ？赤羽？」

そう言ったのは、1年先輩の和泉だった。

そんな沈黙を破ったのは――先輩の言葉。

「やっぱり赤羽じゃねーか！え？なんだ？入ってくれるのか？」

そう言つて、満面の笑みを浮かべる部長に、前原が（ほぼ無意識に）  
「え？なんで？」

と尋ねる。

そんな前原の言葉に、

「なんでつてー！こいつ小学生の時、スゲエやつだったんだぞ！」

最近あまり見なかったけど、まだ続けてんだろ？」

そう言つて、興奮している和泉に、カルマが言う。

「いや、昔の話だからさ。正直今はやってないんだよね。」

あつ。俺バイトあるからそろそろ」

「えー？そうなのか？」

また来いよとカルマを見送る和泉に、前原が尋ねる。

「ええと…？カルマと知り合いなんすか？」

「んー？そうだな！小学校の頃に少年サッカーで一緒だったしな！」

「…どんな感じで……？」

「いや、あいつすげーんだぞ？」

どんなにマークされてても抜くし、何よりもシュート率はチームの  
中でもダントツだったしな！」

だからさ、と前置きし、

「な！前原！頼んだ！」

そう言つて前原の肩を叩いた。

次の日、前原はカルマの部屋の前にいた。

ちなみにただいまの時刻は6：00。



律に確認したところ、(当たり前だが)カルマは部屋にいる。

(部長は『意地でも、入るように説得しろ』って言ってたけど…なんか腑に落ちないんだよね…)

前原も、昨日の晩ずっと考えていた。

なんでカルマはあんなにもサッカー部に入るのを拒むのか…?

はつきり言つてE組時代にも「暗殺サッカー」なるものはやっていった。もちろんカルマも参加していた記憶がある。

その時カルマは嫌々やつてたか…?

そんなわけがない。

カルマの性格上やりたくないことをするわけがないのだ。

だつたらなぜ?

一瞬出たのが『あのサッカー部に嫌な奴がいる』

しかしそんな考えはすぐに消された。

(もしそうだとしても…中学のサッカー部には入つてははずだよな…  
櫛ヶ丘のサッカー部つてフツーに強かつたし…)

それに…カルマの言うことが本当なら、櫛ヶ丘にカルマの小学校までの知り合いはいないはずだ。

そう考えると、当然のことながら中学のサッカー部に嫌な奴がいたことはないだろう。

だつたら…小6から中学入るまでになんかあつた…?

ここで前原の思考はストップしたのだ。

わからないから本人に聞こう。というかなり安直な考えだが…

正直これしか方法がないのだ。

(カルマのことだし…口を割ってくれたらいいけどなあ…)

そう思いつつ、前原は部屋のインターホンを押す。

少し間が空いてドアが開いた。

「ん…?だ…れ?」

制服姿(いつものカーデイガンはまだ着てない)で出てきたことから察するに、着替え中だったか…

(…なんか間が悪い時に来た感じ?)と思いつつ、前原は「よっ」と手をあげた。

…1，2秒の沈黙の後、カルマは何事も無かったかのようにドアを閉めようとした。

その動きをあらかじめ予想していた前原は、全力で阻止する。

「待とうか、カルマ？」

「…そつちこそドア壊れるからやめてくんない？」

「いや？ちよつと話があつてさ」

「俺はない」

「俺はあるんだよ！とりあえず話したいから中入れてくんね？」

「新聞などの勧誘はお引き取り願いまーす」

「勧誘じゃねえから!!」

その前原の言葉に、カルマのドアにかけてた力が弱まった。

そして…

「…じゃあ何の用？」

「…カルマに質問があるから」

『…なんでサッカー部入りたくないんだ？』以外でね」

「…わかつてるのかよ…」

そりゃね、と呟くカルマに前原は続ける。

「でも…教えてくれないと納得いかねーんだよ。なんでカルマがそんなにサッカー部入りたくないのか」

「…簡単な話だよ。サッカーが楽しくなくなったからで」

「でも暗殺サッカーはしてた」

「それは殺せんせーがいたから」

「はつきり言つて」

そんなので殺せんせー殺せるなんて…1ミリも思つてないだろ？」

そんな前原の言葉に、カルマは黙った。

数秒の沈黙のあと、カルマは言葉を発する。

「じゃあもし前原が監督だとして…」

「ゴール入れれない選手つている？」

「…はっ？」

どうゆうことだ？という表情を浮かべる前原に、カルマは言葉を続ける。

「いらぬいよねそんな選手。だから俺はサッカーをやらぬい。」

合理的でしょ？」

そう言つて、カルマは悪びれもなく笑つた。

「なるほどね…だから私のところに泣きついてきたんだ」

「泣きついてきたんじゃない。カルマにできなかつた質問の延長だ」

朝ごはんを食べるために賑わう寮の食堂。

そこで前原は…

柘と話をしていた。

「前原の話をまとめると、『なんでカルマはそんなことを言うんだ？根拠はあるのか？』つてところでしょう？」

「そーだよ。お前ならわかるだろ」

「わかるけどさあ…カルマが言いたくないこと、私が言つたらダメでしよ」

「正論言つてる場合じゃねーんだよ!!」

「…前原、声大きい…」

そんな柘の言葉に、前原はハツとして周りを見た。

…前原の大きい声に、こちらの方を見ている人がほとんどだった…そんな様子を見て、前原は小声でカルマに話しかけた。

「で、なんでカルマはサッカーやめたんだよ？」

「…前原が聞いたら『なんだそんなこと』つて言うよ。絶対に」

「…逆に『なんだそんなこと』レベルの話なのかよ…」

「それは違うよ？でもそれ以上は言えないもん」

「いや…なにそれ？」

「それに、カルマがサッカーやめたの…」

私のせいでもあるからさ」

「は……………」

意味わかんね…という表情を浮かべる前原に、柊が言う。

「言っとくけどカルマだって人間なんだからさ、嫌なこと辛いこともあるんだよ？」

カルマはあんまり表に出さないけどね、と呟く柊に前原が言う。

「…それはわかるけどさあ…やっぱりどーしても納得できねえんだよな…元々いい選手なんだろう？それを『俺はボールをゴールに入れれないから』で諦めんのもなあ…って思うし」

何よりも、と前原は続ける。

「あいつ…絶対にサッカーやりたいと思うんだよな。少なくとも暗殺サッカーは楽しそうにしてたし…」

そんな前原の言葉に、柊は黙ってお茶を飲んだ。

朝ごはんを食べ終えたらしい。

お茶を飲み終え、柊は少し息をついた。

そして……

「ねえ、前原。今何時？」

そんな柊の突拍子のない言葉に、前原は目を点にした。

そんな前原に、柊は「ほら、早く」と催促する。

「ええと…6時半…だけど？」

「…だったら間に合うよね？」

「いや、何に!？」

「だから前原…声大きいって…」

そんな柊の言葉に、前原は小声で喋る。

「で…何に間に合うんだよ…？」

「…授業始まるのって、8時半からだよね？」

「ん？…そうだっけ？」

「で、校門が閉まるのが8時20分。寮こしから学校までが大体15分」

「…ええと？」

「つまり…遅くて8時くらいにここ出たらいいってことか…」

そこまで言って、柊はこう言った。

「前原、場所変えよう。ここだったら他に聞いちやう人いるかもだしさ」

「へ?どこに?」

「学校行く用意全部持って、7時までには寮の裏集合!」

「はあ、うん…了解?」

そう言つて、柘はそそくさと片付けをして、食堂を立ち去つた。

残された前原は…柘の言つた言葉の意味がようやくわかり、急いで残っているご飯を口にかけて込んだ。

---

そしてそれから20分後。

「…早く来たね。前原」

「ほとんど準備は終わつてたしな」

「なんで私が前原のことをここに呼んだのかは、分かつてるよね?」

「もちろん分かつてる。」

だから……………

こんな茶番の前に、さつきと教えろ!!!」

早々に茶番に突入しかけていたのを察した前原は、即座にツツコミを入れる。

そんな前原のツツコミを軽く聞き流し、柘は近くの壁に腰掛ける。

そして柘は一息をつき、こう尋ねた。

「前原が知りたいのつて、カルマがなんであそこまでサッカーをするのを嫌うかだよね?」

「…というか、カルマの言葉の根拠な」

「りよーかい。じゃあ前原は今から三つのことを約束して」

「…おう」

「まず一つ目は…他言厳禁。絶対に誰にもこの話はしないつて誓つて」

そんな柘の言葉に、前原は(なんでだろう…)と疑問を覚えたが、反

射で「うん」と言う。

柊は続ける。

「次は、この話でカルマを攻めない、カルマの弱みを握るようなことをしない」

「OK、わかった」

「最後に三つ目は…」

これから私の言うことは、なんでも必ず実行すること」

「うん、りょーか……………は？」

頷きかけて、思わずとどまった。

今優位にたっているのは、紛れもなく柊だ。

頷いたら間違いなく死亡フラグだが…

(……………仕方ないか…柊に聞くしか方法ねえし…)

そう思い、前原は思い口を開けた。

「…わかった。なんでも言うこと聞く…でもせめて1個にしてくんね？」

そんな前原の訴えに、柊は少し黙った後にため息をついた。

(やっぱダメか…?)

と思った時

「……………仕方ないな…いいよ。」

じゃあ1個だけ私の言うことを実行する…で」

そう言っつて、柊は前原に向き合う。

「じゃあ…言うよ。」

あれは小5の秋…

## 第49話 入部の時間 3時間目

小五の秋

その日は少年サッカーの県大会の決勝戦だった。

その日は：最初から違和感があった。

いつものカルマと：：：何かが違う。

だから試合が始まる前に、思わず声をかけた。

「：ねえカルマ。大丈夫？：顔色悪いけど：」

そんな私の言葉に、カルマは

「？何言ってるの？大丈夫だよ。全然いつもどーりじゃん？」

意味わかんない、というような

なんともないような

そんな表情で、カルマは確かにそう答えた。

考えすぎか：

ちようどその時、訳あつて心配症になっていた私は、そんなカルマを：

ただの勘違いで終わらせてしまった。

なんであの時：：意地でも止めなかったんだろう。

試合は進んで後半に入った。

2―1で負けていたカルマたちのチームに：PKのチャンスが与えられた。

相手チームがファウルをしたのだ。

負け越したところでのPK

それは、カルマがいたチームに安堵をもたらした。

だつて：チームの中には、絶対に外さない人がいたから：  
それは、カルマだった。

元々のシュート率が高い上、PKを外したところは…チーム内のメンバーの何人が見たことがあるのか。

当然のことながら、ボールはカルマに託された。

カルマがシュートをする直前

カルマは…自分のTシャツのえりを、強く握った。

まるで…いつもはしないはずの緊張を、ごまかすように。

それは一瞬のようで…永久に続く時間のようにも感じた。

——やっぱりおかしい

いつものカルマじゃない。

その状態のまま、カルマは2・3回、息をついたように見えた。

私はその時考えていたことは…ただ一つ。

——お願い…！カルマ蹴らないで！

——蹴る人を替えて!!

そんな願いも虚しく…

カルマはボールを蹴った。

カルマが蹴ったボールは…素人目からもわかるくらい、『外した』とわかる軌道だった。

そして…その試合は、点差が縮まらずに終わった。

つまり…カルマたちのチームの負けだ。

試合後チームメイトの中では、カルマの失敗は『プレッシャーから』と片付けられた。

そしてもちろんカルマ自身も、「緊張したから」と言っていた。

でも…私は直感で分かった。

——違う。

カルマがプレッシャーを感じるわけないし、感じててもそんなものに負けるわけがない。

なんで…私はあの時止めなかった？



こうなることくらい、予想できたはずなのに…！

…っていう話だよ。カルマは多分その日から…ボールを持つのが怖くなった…っていうか『ゴールに入れれない』って感じるようになったんだと思う」

そんな柊の話の聞き、前原は「んー…」と呟いたあと、こう言った。「要はさ…カルマその日体調悪かったかなんかってことだろう？」

それで外して…それを後々まで引きずるやつか？カルマって…」

「…体調で終わる話なら…どれだけよかったか…」

そんな感じの言葉を意味深に言う柊に、前原は(??)と思いつつも、感じ取る。

(あー…これ、これ以上触ったらダメなやつだ…)

そう思った前原は、

「…でもさ、柊が責任感することなくね？」

つてか正直俺は、柊の言葉を素直に聞かなかったカルマが悪いと思うけどな…」

「…聞かなかったんじゃないかって、聞けなかつただけだね…」

ボソツと言われたその言葉は前原の耳に届かなかったようで、前原は思わず「ん？なんて？」と聞き返す。

そんな前原の言葉はお構いしに、「とりあえず、」と柊はつぶやいた。「私も…カルマにはまたサッカーやってほしいと思ってる。」

前原の言う通り、私もやっぱりカルマがサッカーしないのもったいないって思うし。それに…ちようど私も前原と同じこと考えてたからさ。

だから…協力して。前原」

そんな柊の言葉に、前原は1、2秒その言葉の意味を考え…

そして言った。

「…あつたりまえだろ！」

『作戦は簡単。前原はカルマとサッカーで勝負して。可能ならPKで』

あとは私でやるから、とと言われた前原は、その時はその言葉に頷いたものの…

(…これ…下手すれば一番ムズクね?)

なんせ相手はカルマである。

ちよつとやさつとで話を聞き入れてくれるかどうか…

(…カルマには悪いけど…あれ使うしかねーよな…)

前原は心の中でカルマに謝罪をしながら、殺せんせーの元へ歩いていった…。

そして放課後。

前原は渚や杉野と談笑しているカルマのところへ行つて、

「なあ、カルマ。ちよつといいか?」

「ん?なに?前原」

とりあえず逃げられなかったことにホツとし、前原は言葉が続けた。

「カルマさ…入る部活決めた?」

「また勧誘?前原って本トに懲りないね」

「懲りねえよ。どー考えたってカルマがサッカーやらねえのもつたいないし」

「…で、用事は?ないなら帰るけど?」

そんなカルマの質問に、前原は

「…カルマ。俺と勝負しようぜ。もちろんサッカーで」

「却下」

「つて来ると思ったから、俺は俺で考えたからなく」

そう言つて前原はケータイを取り出し、LINEを開く。

と、ほぼほぼ同時にカルマのケータイが鳴った。

慣れた手順でケータイを開いたカルマは、前原から送られてきた

メッセージ…というか写真を見た瞬間に表情が固まった。  
「もし来なかったら…」  
それ、クラスのグループに貼るけど？」

## 第50話 入部の時間 4時間目

「ねえ、前原。これって絶対に脅迫だよね？」

「でもこうでもしないと来ねーだろ。お前は。」

「ま、俺への脅迫写真がなかったのが運の尽きだな」

絶対に磯貝から黒歴史聞いてやる…とかいう物騒な言葉は聞こえなかったというだけで。

ちなみに前原に写真で脅されたカルマは今…

サッカー部部室で着替えていた。

既に入部した前原は普通に体操服で、カルマは先輩の体操服を借りて着替えている状況である。

「しつかしさあ…ほんと先輩って器大きいわ！ここまで無理難題言っても協力してくれるしなくどつかのタコとは大違い!!」

「本つと『無駄に』器大きいよね」

『無駄に』と部分をかかなり強調させて言ったカルマは、

「で、なんの勝負？大事などこ聞かされてないんだけど？」

…そう。まだカルマには『サッカーの勝負』としか言っていない。

(勝負の中身言ったら…あいつ写真で脅しても逃げるだろーしな…)

しかし、流石に限界だろう。

質問されたからには答えなきやな…と思い、

「ん〜？PK戦」

「……………は？」

前原の言葉に、カルマは思わずそんな声をあげた。

そんなカルマに前原は「なんだよ？」と聞く。

そんな前原の言葉にカルマは

「前原さ…今朝の俺の言葉忘れたの？」

「覚えてるぞ？確か『俺ボールを入れれないから』だっけ？」

「だったらなんでかな？」

そう言いながらため息をつくカルマの顔にはいらだちが見える。

しかし前原はそんなことはお構い無しに、

「カルマさ、なんでまだ部活に入んねーの？」

「……………はっ！」

「フツーここまで勧誘されたら形だけでもほかの部活に逃げるだろ。本当にサッカーしたくないならなおさら」

「しつこく勧誘し始めてから俺のこと逃がそうとしないのそっちじゃん。昨日も今日もこーやって放課後まで時間使ってさあ」

「今日は強制だったから分かる。でも昨日は…」

「前原はさ…結局何言いたいわけ？」

そう言っ頭を抑えるカルマに前原は

「カルマ……」

本当はサッカーしたいんだろ？」

思っていたよりも鋭く出たその言葉がカルマに届いた。

その言葉で、部室の空気が一瞬凍った……………気がした。

まずかったか…？

質問してから2・3秒後。

カルマは大きなため息をつく。

そして前原の方へと歩きながら、

「…分かった。要は勝負受ければいいんでしょ？じゃ、俺先行って練習でもしとくから」

「…は…？カルマ…？」

そう言っ、カルマは部室を出て行った。

カルマの、ありがたく意外で……………しかし冷たい響きを持った言葉に、前原は妙な胸騒ぎを覚えた…。

前原が部室を出た時、

「前原〜！」

その言葉に前原は振り向く。

そこにいたのは…

「…なんだ。柊か」

「なんだとはひつどい言い草」

「えーと…で、そこで大丈夫か？」

「んー…ちよつと見えにくいかも。でもいいや。もしかしたら中にも入ると思うし」

そんな柘の言葉に「そうか」と答える。

一方カルマは、宣言通りPKの練習をしていた。

まだキーパーはいないが…遠目で見てもカルマのボールが入っているのは明らかだった。

そんなカルマを見て前原は、

「…別にふつーに入ってるじゃんか」

「そりやあの状態で入らなかつたら私カルマのサッカーセンス疑うよ。キーパーいないし、何よりリラックスした状態じゃん？」

「んー？…そんなもんか？」

「やあ、そーでしょ。前原だつて本命相手だつたら緊張してチキンになるんじゃないの？」

「いや、俺好きになつた子基本みんな本命だけど？」

「……そーゆーところじゃないのかなあ……」

柘の言葉に、前原は頭に？を浮かべつつも、完全にスルー一手に走った。

と、そこに

「おーい前原！準備できたんなら早くこっちに来いよー!!」

柘と話していた前原に、和泉先輩からそんな言葉が飛んだ。

はーい、と返事をして、前原は柘に振り返る。

「じゃ、ちよつと行ってくるわ」

「んーいつてらっしやい」

そう言つて走り去つた前原を、柘は黙つて見ていた。

「んー、じゃあ勝負の自分は…つと」

ルールはかんたんである。

10回蹴り、より多くのゴールを決めた人の勝ち。

「で、勝った方にはなんかあんのか？」

「……負けた人間に一つ命令が言える……とか？」

「よし、採用」

「……………え」

まじかよ……とつぶやく前原を、その場にいた全員（主に先輩）がスルーした。

「よし、じゃあ始めるか。どっちが先攻？」

「…カルマで」

「え？俺？」

ま、いいけどさ。とつぶやき、カルマはペナルティーマークについた。

そして前原はベンチで順番を待つ。

すると、

「やつほ、前原」

「柀。そこからは見えるか？」

「見える見える。少なくともPK見るには十分」

「そっか…」

でも……と前原はぼやく。

「これでほんとにカルマはトラウマ治るんだよな……？」

「そんなのやってみなきゃわかんないって」

「…そこはそうなんだ！」

「そうだよ。はつきり言って私が考えれる限界だしさ。この方法が」

「なるほど……だからカルマ君と前原君がサッカー勝負ですか。これは結果が楽しみですねえ」

「真剣にやってんのにそーゆーのは………ってなんでいるんだよ!!!」

すぐくナチュラルに会話に入ってきたのは、かつらを被り、スーツを着た殺せんせーである。

前原の言葉に、「ちよっと耳に挟んだので」と答える。

「…つうか来るんならちゃんとう変装しろって………なんのコスプレ？」

「烏間先生です」

「クオリティひつつく!!!」

「相も変わらずひつつくい再現度だな!!!普通にバレてるから!!!」

「まさかあ、大丈夫ですよ。ちゃんと溶け込んでますし」

いや、バレてっからー!という言葉は飲み込む。

殺せんせーよ…向こうで先輩達がひそひそ話してんだよ。こつちをむいて。

「それは置いといて…カルマ君は随分らしくないですねえ。彼もあんなに緊張するんですね」

そんな殺せんせーの言葉に、前原は首を傾げる。

「へ?別にいつも通りじゃね?」

「いいえ。いつもにもなく緊張してますよ?柊さんならわかると思いますが」

そんな殺せんせーの言葉に、柊は黙って頷く。

「やっぱり最後があれだからさ。嫌な記憶ほど残りやすいって言うし…」

「…まあ、それだけなら簡単でしょう。」

本当にそれだけならねえ」

そんな殺せんせーの言葉に、前原は首を傾げる。

一方の柊も、ほぼ表情に変化は見られない。

……………なんだよ……………変なの…

そう思いつつ、前原はカルマの方へと視線を移す。

カルマはボールを受け取り、額を拭っていた。

……………なんだろう……………

違和感を感じる。

そのままカルマは、流れるようにボールを蹴る。

そして結果は……………

「あ…外した」



サッカー経験者でなくても分かるくらいにボールを外していた。

「…カルマの言ってたことはこれか…」

「そーだねー」

そんなこちらの会話はいざ知らず、カルマはキーパーからボールを受け取り、息をついた……ように見えた。

……やっぱり…なにかがおかしい…？

と、その時

「タイム!!」

コート中にそんな言葉が響いた。

その言葉を発したのは…前原の後ろから。

3年の先輩がその声の主…柘に歩み寄り、

「なんだ？関係ないだろ？ちよつと口を挟むのは…」

「関係あります。カルマと話をさせてください」

「いや、でもね…」

「……ふうん……」

私が行ったらカルマがサッカー部<sup>こ</sup>に入る確率上がるかもものに？」

最後の柘の言葉は、前原や先輩に聞こえるのがギリツギリの大きさだった。

だからカルマには多分聞こえてないだろう。

そんな柘の言葉に、その先輩はグツと言葉を詰ませた。

そのまま柘は「じゃ」と言っ、カルマの方へと走っていった。

そんな中、

「…なあ殺せんせー。先生ってどこまで知ってたんだ？」

「カルマ君がサッカーの大会でPKを外した…というところまでで

す。先生も聞いていたので」

「ふーん………つていたのかよ!!!」

なんのことでしよう?とすつとぼける殺せんせーを見て、前原は深くため息をつく。

そんな前原の様子を知ってか知らずか、殺せんせーの方は、

「でも、あの役は柊さんが適任でしょう。なぜカルマ君がその時ゴールを外したかを知ってるみたいですし。」

なんでカルマ君がゴールを入れれなくなったかまでは先生もわからないので」

「別に……今でも外した時のことがフラッシュバックするからじゃねえの?重要な大会だったみたいだし」

「もう一つ可能性はありますよ。むしろ先生はそっちの可能性ではないかと考えていますし」

そっちってなんだよ……と思ったが、それは胸に留めておく。

「しっかしあいつら……いつまで話してんだろ?」

「ニユ?……というと?」

「だってアドバイスクらいなら、ちよつと言つてすぐに帰つてこれんだろ。随分とまあ時間かかんなあ……と思つて」

「まあ、いいじゃないですか。ちゃんと2人で話し合うことも大切ですよ。」

「どつからどー見てもケンカだけどな!」

そう……殺せんせーと前原の2人が話している間、カルマと柊の2人は(声を張り上げてこそないものの)明らかに険悪な雰囲気に含まれていた。

まあ……多分内容は……

「なんで俺に言ったのか………だろーな……」

「でしようねえ」

すると次の瞬間、

柊はカルマのシャツの襟を引っ張り、

「カルマ……」

絶対に負けないこと！わかった？」

そんな柊の言葉に、カルマの表情が少し変わった……ように見える。

そんなカルマの変化を見てか、柊はカルマから背を向けて戻ってきた。

…なんだ今のは…

そう考えていた前原に、

「…前原君」

「ん？何？」

「……残念でしたね…」

「…は？」

と、その時。

「よっし、入ったー」

……………ん？

そんな柊の言葉に、前原は急いで殺せんせーからカルマの方へと視線を変える。

見たのは…小さくガッツポーズをとるカルマの姿だった。

「何が『俺はゴール入らない』だよ！思っきり入ってたじゃねえか!!!」

「ごめんっつゝおれもまさか勝つなんて思ってたし」

「っつか柊のあれなんなんだよ！あそこまで変わるなんかあったっ  
てことか!!!」

「んー？さあ？」

その通り。

このPK勝負はカルマが勝利を収めた。

でも、とカルマは続ける。

「前原もそんな大した被害ないでしょ？」

「あるわ!!」

まあ…そのことで、前原の死亡フラグはより濃厚になったのだが…でもさあ、あれ考えたの前原じゃん？自業自得。」

「俺もそれが採用されるとか考えてなかったんだよ!!!」

「ま、いいけどね。その時のためにとつとくから」

「嫌な予感しかしねえ……」

そう言いながら、2人は部屋をあとにする。

と、そこには柵と殺せんせーが立っていた。

「げ………殺せんせーいたんだ」

「ずっといましたよお。前原君に順番変わってからは場所変えました  
が」

なにそれ…とため息をつくカルマに、殺せんせーが語りかける。

「カルマ君は後悔していますか？今日サッカーの勝負を受けたことを」

「ん？…別に…？」

「そうでしょう？」

君は今日、何年も持っていたトラウマを克服できたんですから」

そう言っつて殺せんせーは、カルマの頭にポンツと触手を置く。

「1度失敗してもいい。それがトラウマになってもいい。

大事なのは、それを乗り越える力です。

骨は折れたら、前よりも強くなります。

それと同じく……失敗やトラウマを乗り越えれば、前よりもずっと強くなれるんです」

そう言う殺せんせーに、カルマは

「…ようは今回もせんせーの授業だったってわけ」

「ヌルフフフ。当たり前ですよ。こんな絶好の機会ですから」

それを聞いたカルマは、先ほど殺せんせーが触手を乗せたところに手を置いた。

「さてカルマ君。何か忘れてることがありませんか？」

そんな唐突な殺せんせーの言葉にカルマは、

「…ん？なに？」

「簡単な話です。野外活動が終わってから1週間経過しました。そろそろ勧誘期間も終わりです」

そう言っつて殺せんせーはある紙を見せ、

「入部届これの提出…」

明日の朝までですよ？」

ちなみにカルマ君以外全員が提出を終えています、という殺せんせーの言葉に、カルマは

「…ここで決めろと？」

「まあ、そういうことです」

そう言われたカルマは、しばらく殺せんせーの持つ紙を見ていた。

そして…

「…殺せんせー、それと何か書けるやつちよーだい」

「ええ、どうぞ？」

そう言っつて殺せんせーはカルマにペンを渡す。

カルマは入部届けに文字をさらさらと綴り、

「はい。これでいい？」

入部届けを受け取った殺せんせーは、

「ほう…カルマ君はサッカー部に入るんですか？」

「んー？まあ」

「ですが…なぜでしょうか？あれほど言っていたのに」

いつも見たくニヤニヤしながら言う殺せんせーに

「ぶつちやけ断る理由もなくなつたしね〜」

それに、とカルマは続ける。

「こんなしつこい勧誘がこれから来られても困るし。だったら最初からここに入るよ」

そんなカルマの言葉に、前原と柊はホツとした表情ん浮かべる。

一方の殺せんせーも、うんうん、と静かに頷いた。

「じゃあさあみんな。帰りに将暉ん家来なよ。なんか奢るから」

「え！ほんとに!?行く行く!」

そう言つて、カルマは手に持つている財布をポンポンと上に投げる。

一方の殺せんせーは、カルマの持つてる財布に妙なデジヤブを感じて…

「…ニユアアアア!?そ…それ!先生の財布!!!」

「ん?…ああ!落ちてたからいいかなあと思つて」

「嘘いいなさい!ずっと服の中に入れていたのに!!」

「え?じゃあ返して欲しい?」

「当たり前です!」

「んー、じゃあどーぞ」

そう言つてカルマは殺せんせーに財布を投げる。

それを受け取つた殺せんせーは、真つ先に中身を確認しようとし…

「…あの…カルマ君?」

「ん?なに?」

「その…中身が抜かれてるんですが…」

「ああ!はした金だと思つて募金しちゃつた」

「ニユア!この不良慈善者!」

「てかさ、そうでなくてもあのお金の量はまずいでしょ」

「仕方ないでしょう!!月末なんですから!!」

そんなカルマと殺せんせーのやり取りを見て、

「前原」

柊は前原に手を掲げる。

そして、

「…おうー!」

パチン!と2人はハイタッチを交わした。

## 第51話 親戚の時間

「「「では、始めましょう」「」」」

「……………うん？」

「…ええと…殺せんせー？何を？」

それを尋ねたのは…

「ああそうですね、柊さんは初めてですから。

ちなみに柊さん。みなさんの入部も終わり、次に迎える行事はなんですか？」

「…中間テスト？」

「そのとおり！中間テストを二週間後に控えた今！先生は生徒一人一人にマンツーマンで主に苦手教科を教えます！」

「だから殺せんせー分身してんだ!!？」

そう突っ込む柊を横目に、渚は黒板の端を見る。

今日は5月29日。

もう少しで高校生活2ヶ月目を迎えようとしていた。

「あー…なんでカルマはこんなに頭いいのよ!？」

「…それは元からだろ…」

「まあ佳奈の言いたいこともわかるけどね…」

「でも！私中学カルマよりもずっといいところなんだよ!?!?なのになんでカルマと差ができるの…」

「まあ…でも相手カルマ君だからなあ…何しろ全国1位に1回だけとはいえ勝ってるし…」

「…そうなんだ…やっぱりあいつスゲー…」

「にしてもでしょ!!」

「…1ついいよな？佳奈」

「言うことわかってるからいらない」

「いや、言わせてもらう。

…それをわざわざ俺の店で愚痴りに来んな!!それになんで今日は

こんなに集まってんだよ!？」

そう：今柗たちがいるのは、将暉の店である。

そんな将暉の言葉に、前原が答える。

「はは、わりーな将暉。」

でも近場でだべれて勉強できる涼しいところがここしかねえんだよ」

「いや、そもそもだべろうとする時点で勉強する気ねえだろ！お前ら!!」

「」「それはない」「」

「てか：図書館！あそこ行きやいいだろ！参考書とか揃ってるし！」

「行っただけ埋まってたんだよね。ごめんごめん」

「お前らそれ思ってたねえだろ!!」

と、そこに

「まあ、いいじゃないじゃん。ここの収入は増えるし、得しかないでしょ」

「居座るだろ！ほかの人が入れなくなるから！」

「悪いけど見逃してくんない？うちの担任テストにはやる気だからさあ」

「あー！もうわかった。今回はいいから、お前は自分の仕事しろ！」

「仕事も何も：何すればいいわけ？」

「：自分で考えろ！」

「うっわ丸投げ」

そう言いつつ、カルマはみんなとアイコンタクトをとった。

……………カルマ、ナイス。

どーも。

「ていうかさ、私達以外に誰も客来てないんだし、いいじゃん。

だから：将暉数学おーしーえーてー!!」

「普段はんな事言わないくせしてなんで今このタイミングでそれ言うんだよ!?!新手的嫌がらせか!!!」

「…というか、将暉君は何が得意なの？」

そんな渚の言葉に、柗は

「んー？家庭科？」



「……怒るぞ…佳奈」

「ごめんなさい。それだけはマジで勘弁…」

ところで、と柘はつぶやき、

「将暉は将来なんか決めてんの？このクラス、ほとんどみんな決めるからさあ…」

「それは……………人それぞれじゃね？ちなみに俺は考えたことないけど…」

「あー…そっか。将暉は将来決まってるんだ。高校は大学付属だし、就職も2つに1つだし」

「いや、ないようなもんだろ。確かに大学は内部進学だけど…」

「なんで？おばさんちの会社継ぐんじゃないの？」

「それはお前だろ…ってか継がないの？」

「私血繋がってないしさあ。でも将暉は繋がってるじゃん」

「でも佳奈は次期社長の娘だろ？フツーに考えたらそっちだって」

「いや、私は……………そーだ！間とって将暉のお姉ちゃんとかは？」

「いやもうあいつ働いてるし。ましてやあれが継ぐと思うか？社会人なってから1回も家に帰ってこないあの万年反抗期が」

「あー…ないね」

ん？

は…？

「「「「はあああああ!」「」」」」

完全に2人の世界に入っていたためか、将暉と柘はびっくりした表情でみんなを見る。

そんなことお構い無しで、

「え?…まって…?どーゆー事?」

「話についていけねえ……………」

そういう中村と岡島に、

「ああ、それね。結構めんどくさい話だ」

「え?……………どーゆー事だ?カルマ」

「えつとね…『H o l l y』って会社知ってる?」

「あー…聞いたことある。」

「確か日本有数の商社じゃなかったか？」

「そういう磯貝に、カルマは「そうそう」と言う。」

「で、その社長の娘が将暉のお母さんで、息子が佳奈のお父さん」

「「「「……………えっ。」」」」」

「それはつまり……」

「佳奈と将暉君って…いいところ？」

「書類上ではね」

「そんな柊の言葉に、みんなは(???)という表情を浮かべる。」

「それを見たカルマが代弁した。」

「ああ、佳奈の家のおばさんバツイチなんだよ。確か佳奈が生まれて結構早くに離婚したんだっけ？」

「そ。で、私が小学校入るくらいに再婚したの。それが将暉のおかーさんのお兄ちゃん？」

「…だな」

「あー…なるほど…」

「そんなカルマの言葉に、そこにいたみんなが納得した。」

「で、さつきから気になってたんだが…」

「そして将暉はカルマを指さして言った。」

「お前、仕事は!?何ナチュラルに話に入ってたんだよ!!!」

「…なんで俺だけにいうかな。磯貝だって勉強してるじゃん？」

「だからだよ！磯貝は勉強してるけど、お前は喋ってるだけだろ!!!」

「えー？なにそれ？」

「ま、とカルマは呟く。」

「別にいいじゃん。1人『お客さん』呼んだし」

「…クラスの奴か？」

「いや？だってさつき将暉迷惑そうだったでしょ？」

「つまりクラスの奴ではない…と。で、

「だいたいわかるけど…誰だ？」

「ん〜？ソラ？」

「お前なあ!!!」

ニコツ、という音が聞こえるくらいの満面の笑みで答えたカルマに、将暉が突っかかった。

「…ねえ、佳奈。『ソラ』って誰？」

そんな中村の言葉に、柊が答える。

「んー…だいたい将暉と同じ感じの関係かな？」

「あつ、幼なじみ？」

「そだね。」

ついでにいえば将暉のカノジヨ」

「へ〜」

それはそれは…と中村はニヤニヤした表情を浮かべる。

と、その時。

喫茶店のドアが開く。

そして中をキョロキョロする女の子が1人。

…なかなか可愛い子である。

すると、柊は唐突に席を立ち、

「ソラー!!!久しぶりー!!!」

そんな柊の声に、その女の子——ソラは振り向く。

そしてこっちの方へ歩いてきて…

「佳奈もいたんだ。久しぶり！」

「いたよ？いつぶりだろ？卒業してから会ってなかったっけ？」

「そうだね。私中学は公立組だったから…」

そう言っって笑うソラを見ているみんなはと言うと

(やつつつつべえ！想像してた以上に可愛い！)

(うっわ！あんな可愛い子と付き合える将暉が本気で羨ましい!!!くっ

そ!!!)

(ってか…初対面でわかるくらい性格も可愛いぞあれ！あの3人の組み合わせで、どーなったらなんか子ができるんだ!?)

そうみんなが考えてることもいざ知らず、

「つていうか、カルマとソラに繋がりがあつたのにびつくり！中学入ってから会ったことあるの？」

「ん？いや？この間佳奈がいない時に来ててさ。その時」

「あーなるほどね」

そんな話をしていると、茅野が口を開いた。

「ねえねえ、『ソラ』つてどう書くの？結構珍しい名前だよな？」

「あついや…ソラつて苗字なんだよね。『曾良野』だから『ソラ』で…名前は『優』なんだ」

「ん？…あー！『ゆう』だとダブるから？」

「そうそう」

そんな茅野とソラの会話に、ほとんどみんなが頭の上に？を浮かべていた。

「え？…：ダブるつて…何が？」

「大した話じゃないから」

みんなの気持ちを代弁した前原に、あんまり気にしなくても大丈夫、とカルマはつぶやく。

「つていうか…いまさらだけど、将暉の学校つて校則厳しいトコじゃなかった？バイトとかセーフなの？」

「アウトだね」

「…：思っきりアウトだな…：うん」

「え？見つかったらやばくない??」

ノーマルトーンで（むしろいつもの笑顔すら浮かべながら）そういうカルマに、将暉は

「…：俺がやってんのは家の手伝いだから。給料は1銭ももらつて…」

「るよね？見たよ。俺は」

「見つかったらそー言えばいいんだよ！んなもんバレるか!!!」

うわー、とからかうカルマを横目で見ながら、渚はソラに声をかける。

「ええと…ちなみにソラ…さん？はさ…」

「ソラでいいよ。さん付けされんの慣れてないし」

「あ…そう？じゃあ…ソラ…はさ、得意科目とかって…？」

「英語とか得意かな？私将暉と逆で文系でさ」

「あっ、一緒だ」

「ほんと？」

で、とソラはつぶやき、

「ごめん、2つ質問いい？」

その子…見覚えあるんだけど…私だけかな？」

そう言っつてソラが指さしたのは、渚の隣。

言わずもがな、茅野である。

そんなソラの発言に、その場にいた全員が「あー…」とつぶやく。

と、そこに

「あー、私昔はよくテレビに出ててね。磨瀬榛名って名前だったんだけど」

(((((まさかの本人がぶっちゃけた!!!)))

茅野本人がそれをぶっちゃけたことに、みんながびっくりする。

そしてソラはと言うと…

「え…磨瀬榛名？え？…あの有名子役の??」

「そうだね」

「そうだな」

「俺らも初めて知った時びっくりした」

「俺も今初めて知ってびっくりしてるわ…」

そんな将暉の言葉に

「そーいや言っつてなかったね！将暉には!!」

「なんでそんな朗らかに言うんだよ、佳奈！」

「だって私、あかりと中学一緒だもん。その時から知ってるし」

「は!?!なんだそれ!?!」

そんな感じでワイワイ言っつている2人を見て、

「……二つ目聞いていい?」

「いいよいいよ!」

「じゃあ…」

みんな……名前教えてくれない…?」

そんなソラの言葉に、みんなの思考が少し止まる。

そして…

「いいよ!もちろん!!」

「みんなで自己紹介しよーぜ!」

茅野や前原を筆頭に、自己紹介が始まる。

それをカルマと将暉は遠くから見ている。

「……やっぱり勉強になんねえじゃねえか…」

「まあいいんじゃない?」

「……お前らなあ…仮にもあの学校のC組だろ?」

入学してすぐだからって怠けてたら、すぐに抜かれんぞ!」

そんな将暉の言葉に、カルマは思考が止まる。

「え?……どーゆー事?」

「どういうって…」

お前ら入試の成績よかった奴らの集まりだろ?」

そんな将暉の言葉に、カルマは

「…そーいやそーだった」

「ん?何か言ったか?」

「別に?将暉も今度はソラ守れるよーにねー」

「……お前な」

「さーて、俺も混ざろつと」

そう言いながら、カルマもみんなの輪の中に入る。

結論・喫茶店での大人数勉強会は、全く勉強にならなかった!」

ω・・・) ココ重要!

## 第52話 テスト前の時間

テスト1週間前。

ある人物が理事長室を訪れていた。

「随分久しぶりだね。君もここに入るのは小学生以来じゃないか？」

「んー…そーかもね。理事長センセ？」

「で…なんの用だ？君だって意味もなくここに来るほど暇ではないだろう？」

「そりやそうでしょ。仮にもテスト前だし。でも…つい最近すごい大事なこと思い出してさ」

「……というと？」

「ちよつと理事長センセーに見せて欲しいものがあつてね。それで」

「他出厳禁のものじゃなければいいよ」

「いや、簡単だよ？」

「そう言つて、その人物は……『見せて欲しいもの』の正体を打ち明けた…」

「で……カルマはさつきからなにを見てんの？」

4時間目が終わった昼休み。

渚はカルマに尋ねた。

「そう聞いた渚にカルマは、」

「ん？これ？」

「そうそう。休み時間の度に見てたから…」

「あー…これ今朝理事長センセーからもらったやつなんだよね」

「見る？というカルマの言葉に、渚は「え？いいの？」と答える。

「いーよ。どーせ後でみんなに見せるつもりだったし」

「そう言つて渡された紙を見た。」

と、目に飛び込んだのは…

2：柊 佳奈（495）

3：磯貝 悠馬（487）

それを見た渚は、静かに紙を裏返した。

そして…

「……………一つ聞いてもいい？」

「ん？いいよ？」

「なんでこんなの持ってるの!？」

「だから今朝理事長センサーからもらった」

「……………なんで？」

「頼んだから」

「簡単に貰えるもんなの!?!?こういうの!?!？」

「こっちはちゃんとした理由あるし？理事長も『てっきり担任がそう  
言ってくると思ってた』って言ってたし」

「……………やっぱりここの理事長先生って……………なんていうか……………す  
ごいね」

「あれっ？今更？」

「いや……………改めてすごいなって思った……………うん……………すごい」

「そんなのわかってることじゃん？ねえ、佳奈？」

「なんでそこで私に振る!？」

ちやうど茅野・奥田・神崎と話していた柊は、思わずカルマに突っ  
込んだ。

それをカルマは完全に無視し、

「佳奈も見なよ」

「あ……………うん。ありがと…」

そして柊も、渡された紙を見る。

しばらくじっと見た後、渚同様持っていたそれを裏返す。

そして第一声

「うん……………海野すごいね」



「うん。俺も思った」

「あの理事長のことだし、渚みたいに『どうやって手に入れたか』は聞かないけど……とりあえずかなり『予定』とは違ってた、ってわかった」

「俺も前将暉に聞いて思い出した」

勘の鋭い方はわかったであろう。

彼らが見ていたのは……

「まあいいじゃんか。この学年だけ異常なんだって。学力別でのクラス分けじゃないし。そのための資料？みたいななんだよ。入試順位表は。」

「そもそもそんなのがあったことにびっくりなんだけど……僕は」

「……右に同じく」

「そりやなかったらクラス分けできないじゃん。いつもならクラス分けした後はシユレッダーにかけるみたいだけど……」

「殺せんせーの件があったから残しておいた……と？」

「そーそー」

「なるほど……だから私が行ってもそれをいただけなかったわけですか」

「ふーん……って殺せんせー!?!」

そんな殺せんせーに、カルマが

「やっぱり殺せんせーも行ったんだ。理事長センセーのどこ」

「そりや行きますよ。このクラスの担任ですし、当たり前でしょう？」

だから、とつぶやき、

「預かっておきますね。放課後に手書きのコピーで皆さんにも渡しますのです」

「…なにが『だから』なんだか……」

まあいいけど、と言いながら、カルマはそれ——入試順位表を殺せんせーに渡した。

そして放課後。

「ではみなさん。帰る前に少し配りものがあります」

この学校、このクラスでは昼休みに教室にいる人間は極わずか。

理由は単純に食堂利用率が高いからで…

だから昼休みにカルマたちが入試順位表の話をしていたのを知っているのも、いつものメンツである。

だからほとんどの人はそれと初対面なわけで…

配られた瞬間、教室の空気は一瞬…ほんの一瞬だけ止まった。

そして前原が一言

「殺せんせー…なんでこんなもん持ってた…？」

「あれ、デジャヴ」

「お前かよー！」

そして順位は…

〈前略〉

4：海野 弘樹 (486)

5：中村 莉桜 (483)

6：竹林 考太郎 (479)

・

・

・

95：近衛 野々 (253)

96：寺坂 竜馬 (240)

97：廣瀬 晴人 (246)

……まあ、何が言いたいかわれれば…

「寺坂って本トバカだよね」

「っせえ!!」

しかしここで疑問。

「……薄々思ってたけど…ここって100人合格できるんじゃないか？」

「…一応ここ私立だからさ『だいたい100になるように』してるんだろ…」

そんな磯貝の言葉に、全員が「なるほど」と納得する。

「で、みんな忘れているかもですが！」

ここで殺せんせーが口を開く。

「この学校、通常はクラス分けが成績順なんですよ！」

そんな殺せんせーの言葉に、全員の動きがピタツと止まった。

そして中村が、

「えつと…じゃあさ、C組このくみって建前上、上位狙わなきゃまじでバレルの時間の問題…？」

「いや？そうでもないみたいだよ。合格したあとに気を抜いて順位がガタ落ちつてのものもあるみたいだし」

「ま、真ん中より上だったらセーフでしょ」

「なるほどね…要は…」

最低でも全員50位以内…か」

そんな前原の言葉に、全員が顔を見合わせる。

そして…

「柗ヶ丘の時よりずっとむずくね…？」

「なんせ…ビリ2に寺坂がなあ…」

「やっぱり…寺坂がね…」

「俺かよ!!!」

大事なことなので何回も言おう。

寺坂はぶっちゃけ梅宮高校に受かって進学した人の中ではほぼ最下位。

そして忘れていている人もいるかもしれないが、梅宮高校は柗ヶ丘のと比べて遜色ない学校であり…

生徒の人数は、柗ヶ丘の半分以下である。

## 第53話 テストの時間

6月の初め――

この日は梅宮高校の一学期中間テストの日である。

それはまた：1―Cの人も同じで。

渚はちらつと前に立っている人を見る。

1―Bの担任であるその先生は、自らの腕時計に目をやっていた。

そして：

「始め！」

その言葉で、みんなは問題用紙を表に向けた――

---

時は遡り1週間前――

「やっぱり寺坂がなあ……」

「でもさ……寺坂に限らず、ふつーにやばいやつもいるだろ」

「……確かに」

「それも含めて全員で97人中50位以内……」

「いや、この表に律も入るから全員で98人だけど」

「なぜさらに不安を煽ることを言うんだよ!?!」

みんな、そんな不安をつぶやく。

それはそうだろう。

下手すれば柵ヶ丘よりも厳しい条件である。

と、そこに

「ヌルフッフ。皆さんそんなことで悩んでいるんですかあ？」

………そんなこと？

今「そんなこと」って言いましたか、殺せんせー？

みんなの心の声が一致した。

そんなみんなの声を知ってか知らずか、殺せんせーは口を開く。

「そんな皆さんに、先生からアドバイスです。」

成功した勉強方法は、繰り返し行うのも一手ですよ」

……………うん？

そんなみんなの様子を知ってか知らずか、殺せんせーは

「ではそれも踏まえて、明日以降も引き続きマンツーマン授業を行いますよ。

あ、あと皆さん1週間前だから部活はありませんよね？

何人かには『放課後ヌルヌル強化勉強会』をしますので、残っててくださいねえ」

「ま、殺せんせーのおかげでテスト範囲の内容はわかったけどな。」

「まーね。でも……………」

問題…：すごく強いよね…」

二時間目に差し掛かり、数学ⅠA。

すると後ろから柊が来て、問スターを倒す。

そして…

「そっちの方式使うんじゃないくて、こっちの方が使わないと。

ちゃんと角度出す殺り方は部屋会で教えたでしょ？」

「佳奈は中学の時どんな勉強してたの？」

学校帰りに殺せんせーのアドバイスを踏まえて茅野が言った言葉である。

それに柊は

「んー…別にフツーだと思っうよ？」

課題とかやって、テスト前には教科書とかノートとか読んで…みたいな」

「そっか」

ていうか、と渚つぶやき、

「殺せんせーが言ってた『成功した勉強法』って…去年の2学期末のこ  
とじゃないかな？あれでみんなの成績上がったし…」

「あー…ってことは…勉強会？」

そんな2人に柊は「そんなことしてたんだ。みんな」と言う。

「だったら今日私の部屋でやる？4班のみんなで」

「佳奈が大丈夫なら全然大丈夫！何時からにする？」

「えっとじゃあ…」

「いやあ…やっぱりあの勉強法はほんとに良いよね」

「説明する側の理解も深まるし…殺せんせーも好きそう」

しかしやっぱり進学校。

どの教科も難しいし、複雑だ。

でも、とつぶやき、

「いつも通り行くよー」

「…もちろん！」

そして…

「やめー」

高校生活初のテストは終わりを迎えた。

数日後――

「皆さん、テスト返却を行います」

そう言っただけで殺せんせーはテストの結果が書かれた紙を見て、  
「ではまず、このクラスの…」

総合1位は…」

「「いやそこ割とどうでもいい!!」」

「ニユア!? 皆さん気になりませんか？」

「ならねえよ!! どーせカルマだろ!!!」

「違いますよ!? カルマ君と柊さん同率です!」

「」「だからどうでもいいわ!!!」

「そーだよ。俺の順位どーでもいいからさ、早く寺坂の順位教えてくれない?」

「俺がクラス最下位前提かよ!!」

そんな言葉が飛び交う中で、

「ああ、寺坂君は大丈夫でしたよ。48位でした」

そんな殺せんせーの言葉に、クラスの中にあつた緊張がほぐれた。

「それ…:クラス全員50位以内に入ってるよね…?」

「ええ、もちろんですよ」

「よかったああ…」

「やー、まあ寺坂が1番不安だったけど?」

「カルマてめえ!」

6月。梅雨に差し掛かる前に、みんなは無事に高校生活初のテストを終わらせることが出来たのだった。

## 第54話 犬の時間

「…また?」

テストが終わりつた6月半ば。

その日は月一で行われる委員会議の日である。

冒頭の言葉はC組の誰の言葉でもない。

委員長・副委員長会議が行われる会議室。

その言葉を発したのは1―Bの委員長である海野弘樹の言葉である。

簡単な話、1―Bの副委員長である住若菜がクラスの出金伝票を忘れたのである。

彼女自身、少し…いや、かなりのうっかり屋のようで、筆記用具や何やらを忘れてくるわけなんだが…

それを見た担当の先生は

「まあ…今回の会議でそんなに大事なものじゃないし。また明日生徒会の人に直接渡せばいいから」

その言葉に、住は小さく「すみません」と謝る。

委員会議を始めてまだ少しだが、この流れは少しずつ恒例になりつつある。

それを見ているカルマと柊は

「飽きないねえ、海野も」

「まあね…でもそこまで怒ることでもないだろうに」

「イライラしてんじゃない?最近雨多いし」

「あー…そっか…」

梅雨。

ジメジメした空気は人の心もジメジメさせるようで…

「ねえ将暉君。明日の朝までこの子お願いできるかな?」

時と場所が変わり、放課後の喫茶店「KATO」

そこには珍しく倉橋と岡野が来ていた。



その腕にはタオルに包まれた子犬が1匹。  
どういう経緯か2人とも雨に打たれてびしょ濡れである。  
それを見た将暉は

「……………お前ら……………」

なんで喫茶店に動物持ち込むんだよ!!!」

「ええええ?!?違っ……」

なぜか唐突に怒った将暉に磯貝とカルマは

「まあまあ将暉は一旦落ち着いて。」

倉橋も岡野もびしょ濡れじゃなか。このタオル使って。

俺今日委員会議だったし雨で部活なかったしで使ってないから」

「犬は一回俺が持つとくね。はい。俺も今日タオルつかってないから」

そんなテキパキ動く二人を見て前原は

「…磯貝がイケメンなのはいつもの事だけど…俺今初めてカルマのこ  
とイケメンだ、って思ったわ」

「カルマとかがイケメンって言うよりも将暉が心狭いよ。別に厨房の  
中入ってる訳じゃないし、お客さんもうちら以外ないんだから…あ  
れくらいいいのにな」

「お前ら…全部聞こえてるから…」

こんな将暉の言葉を完全スルーして、中村は

「ところで陽菜乃はなんでここに犬を?」

「…ちようど帰り道に捨ててあって。学校戻って飼育館に入れること  
も考えたんだけど…この子すごく濡れてたから、どっかあったかい所  
行こうかなって」

「でも寮はやっぱ常識的にダメかなってなってさ。やっぱ鳴き声と  
かもあるし」

「なるほど…で、この辺で家知ってるの将暉くらいだから」

そんな柘の言葉に、ふたりは頷いた。

その話の最中、将暉はというと……

「…で、なにやっつてんだよ」

「優に電話かけよう」と

「……なんで？」

「……優の家って犬飼ってて。この家置いててもご飯もなにもないし。だから……」

「将暉」

カルマに呼ばれて、将暉は反射的にそちらを向く。

と、そこで見えたのは犬の顔で――

瞬時に他の6人の耳に悲鳴が入ってきた。

パツと見てみると、犬を抱えてケラケラ笑ってるカルマと……

「お前マジでふざけんな!!! やること小学生かよ!!! マジでこの店クビにすんぞゴラア!!!」

「いやいやごめんねえ将暉 w w w」

「笑いながら言うんじゃない!!!」

それを見たみんなの頭に浮かんできたのは…一つの可能性。

それを代表して中村が口にする。

「ねえ佳奈……もしかして将暉ってさあ……」

犬、苦手だったりする?」

「するね。多分私の暗所恐怖症並だと思うけど…」

「相当だね…」

「…で、カルマはそれを知っててやっってる訳だ」

「趣味悪い…さつきあいつの事『イケメン』とか言った俺をぶん殴りたいわ」

みんながそう口々に言う中、岡野が終に「きっかけとかあるの?」と尋ねる。

「んー…ソラの家って昔柴飼ってて。小三くらいまで生きてたっけ…」

「ん?」

「小学校行く前くらいの時期かな? ソラの家で遊んでたらその子が将

暉に襲いかかって……今考えてみたらその子はじやれてるつもりだったんだろうなあって思うけど……」

「あ、はい」

そんな話をしている柊たちに、将暉は

「つたり前だろーが!!!逆になんでみんなが触れるのかが不思議だわ! そんなのに噛まれたら死ぬだろ!!」

「死にはしなないと思うぞ、死には」

「ワンちゃんはそんなに噛むことないから大丈夫だよ」

『『思う』とか『そんなに』とか100%大丈夫って根拠がねえことよく言うよなお前らは!!』

いや、それもう色んな意味で詰んでない?

「やあ……なんて言うか……完全に拒否してるね」

「でもソラは犬好きなんですよ?」

「それとこれとは別だからねえ……」

女子たちがそう話してる間、こちらでは

「ま、ごめんって。じゃあ将暉ん家のドライヤー貸して。乾かしたいから」

「自分で取ってけよ……場所分かんたろ」

そんな将暉の言葉に、カルマは真顔かつ黙って持ってた犬を持ち上げ――

「よし分かった。だから犬持ち上げんな!」

よろしく〜と言ってた将暉を送るカルマに、全員が「趣味わつる」と思った訳なんだが……

「ところで……陽菜乃はこの子の犬種って分かる?」

「んー雑種だね。見た感じはビーグルちゃんだけど……毛がくるくるしてるから……もう一方はプードルちゃんだと思うよ〜」

「……ビーグルって聞いたことあるけど……イメージつかないなあ……」

「スヌーピーって言ったら分かるかな?あの子がビーグルちゃん」

「マジで!?!でもスヌーピーみたく白くねえよな……?」

「まれにいるんだよ。真っ白で生まれてくる子。普通は茶色か黒と

白の2色になるんだけどね」

「へえ…」

と、そんな説明をしていると、店のドアが開いた。  
入ってきたのは……

「ごめん。将暉のヘルプできた！」

「あーソラ。久しぶり……ってほど会ってないか…？」

「噂の子は!？」

「カルマが持つてる」

それを聞いたソラは、一瞬動きを止め……  
カルマに言う。

「ねえカルマ君…」

「ん？何？」

「カルマ君さ…将暉になんかした？」

バレっバレじゃねえか!!!

そんなツツコミをみんなは心の中で留める。

とカルマは

「うん、した」

「悪びれもなく言ったぞこいつ!!!」

さすがに前原はこのツツコミは止められなかったらしい。

ソラもカルマのあまりの悪びれのなさに怒る気力も失くしたよう  
で……

その時

「はい、ドライヤーどぞー!」

「んーありがと〜。で、なんでそんなに怒ってんの?」

「誰のせいだよ!？」

そんな将暉をスルーして、カルマは柵に犬とドライヤーを渡す。

そして柵は犬を乾かしながら大体の話をする。

「つまり……1日この子を預かってほしい……と」

「そうそう」

「んー……1日くらいならお母さんにもバレずに過ごせると思うから

良いけど…明日どう渡せばいいかな?」

「ソラの家ってここから近い?もしそうならソラの家かここかで」

「うん。じゃあここでいいかな?」

「OK!」

そんな話をしている女子達に将暉は

「あー…じゃあ用事終わったら犬連れて帰って」

「……彼女が来ててそれはないんじゃないの?将暉くん?」

「うっせえ!エセカルマ!!!」

「将暉は女子に優しくねえなあ。何なら俺が教えようか?その辺のすごいサル以外の女子は結構——」

「前原、お前ゆつつくり後ろ向いてみ?」

前原が後ろを向くと……

「げ…岡野…」

「前原?覚悟は出来てるんだよね?」

そして岡野は前原にドロップキックをする。

そして前原は岡野の手によって天に召されていった——

……

「いや、死んでねえよ!!!」

カルマ、磯貝のバイトが終わり、みんなは寮へと帰路につく。

と、その時前原が一言。

「そーいえばだけど……将暉ってキレたら怖いんじゃないかねえの?こんなにいじって大丈夫なのかよ……」

そんな前原の言葉にカルマは

「ん?へーキへーキ。将暉はこんな事でガチギレしないから」

「?……ああそう……?」

「そうそう。大声出して怒ったりつつこんだりするうちは全然大丈

夫」

「あー…そうなんだ」

ガチギレしたら静かに怒るタイプの人間かな…とか思ったり。

「ま、そんな訳で前原もそろそろ一途になったら？」

……は？

「いやいやいやいや！どーゆー理由だよ!？」

カルマの言葉に前原がそう言う。

「まあ前原ってなんだかんだ言って馬鹿みたいに鈍感だからねえ…」

「は？俺鈍感じゃねえし。むしろそーいうの鋭いぞ？」

「カルマじゃないけど俺からも言わせてもらう。前原は鈍い」

「どこが!？」

「どこがって…：…うーん…」

「ま、その時に痛いほど身にしみるでしょ」

そんなカルマ・磯貝の言葉に、前原は首を傾げた。

## 第55話 球技大会の時間

「さあみなさん！梅雨も終わり、夏に差し掛かります！熱中症に気を付けつつ、そしていい汗をかいて夏を乗り切りましょう!!」

梅雨が明けて暑くなつた頃、殺せんせーがウキウキした顔でみんなに言った。

まあ…そんなウキウキ顔には訳があつて……

「そんな訳で体育委員の前原君おと岡野さんたは司会をお願いします！」

「せんせーがすればいいじゃん」

「ニユア！そんな事言わずに！この球技大会も重要な高校行事じゃないですか!!!」

そう、球技大会である。

こういう学生っぽいイベントに、殺せんせーはすごく興奮していた。

殺せんせーの指名により、前原と岡野が前に立ち、説明する。

「競技はサッカー・テニス・卓球・バスケの4つな。人数は、サッカーは男女8人ずつ。テニスは男女混合チーム3組……あ、卓球も。バスケは男女とも5人ずつ」

「私たちのクラスは男子が15人女子が14人だから2つの競技出る人がいるよ。あと、自分の所属してる部活の競技は出場禁止ね」

「じゃあみんな、この中からやりたいやつ選んで。早いモン勝ちで」

そんな前原、岡野の説明を聞き、真っ先に柊が声を上げる。

「はい！私卓球した」「絶対にダメ」ってなんでよ!?!」

その言葉を遮つたのは…茅野とカルマ。

「絶対言うと思つたけどねえ」

「私も思つた」

そう苦笑する二人に、岡島が疑問を吹っかける。

「え、でも終つて確か中学ん時卓球部だろ?」

「うん、そうだね」

「じゃあよくね?今別に卓球部入ってるわけじゃねえし」

「……それが良くないんだよねえ……」

そんな茅野の言葉に、みんなは顔を見合わせて

「…弱いのか？」

「いや、むしろ強い。強すぎるくらい」

「じやいいじやんか。何が問題なんだよ？」

「あーもうそれは実践しないと分かんないと思うよ？」

そんなカルマの言葉に、岡島を始め全員が不審そうな顔をした。

え？じやあさ……

「……やってみてもいい？」

「やめなよ。トラウマになって二度と卓球できなくなるよ」

「いや、それはいくらなんでも盛りすぎでしょ……」

そんな岡野の言葉に、カルマは「さあ？」と真意の読めない笑顔で言い放った。

「よーし、柊！勝負だ！放課後でいいよな？」

「……いいの!?？じやあ私の実家の近所に卓球場あるからそこでいい？」

「おう！本気で来い!!？」

そう言う岡島に、カルマ・茅野の二人は神妙な顔で眺めていた。

——放課後

バイトがある数名以外のほぼ全員が柊が通い詰めてるらしい卓球場に集結した。

岡島は学校指定の体操服。一方の柊は……

「ん？ユニフォーム？」

「うん、中学の時のやつがまだ残っててさあ。着れるもんだね〜意外と」

どうやらわざわざ実家に一旦帰って取りに戻ったらしい。

うん、柊って近いもんな。実家。

「で、ルールどーする？何ゲーム先取とか…」

「規定と一緒にいいんじゃない？11点で1ゲーム先取の3ゲーム先取で」

「あ、規定ってそうなんだ」

そんな矢田の言葉に、「うん、そーだよー」と快く答える。



「そーいや柎って野外活動の時卓球しなかったよな？卓球好きなのになんでだ？」

岡島は思い出したかのように、柎に質問を投げかけた。

それに柎は

「えー？当たり前前じゃん？旅館でやる卓球なんて……」

ただのピンポンゲームでしょ？」

「……………は？」

そんな柎の珍しいガチトーンに、全員柎の方に振り向く。

そして柎はいつものような笑顔を……………正確に言えばいつもより怖いオーラを放った笑顔を向けた。

【10分後】

結果から言うと岡島は惨敗した。

圧巻のストレート負けである。

メンタルをズタボロにされた岡島は卓球場のシミでひたすらいじける。

そんな岡島を見て、

「……………柎ってさ」

「うん」

「……………ぶっちゃけどんくらい強いわけ？」

そんな三村の質問に茅野は

「…白波高校ってさ…文武両道って言うけど、実際のところスポーツ科と分かれてるの」

「……………だろーな」

「だから運動部とかは大会ではスポーツ科が優先的に出されるし、キャプテンとかもほとんどスポーツ科なんだよね」

「うん」

「佳奈はもちろん普通科だったんだけど……………まあ色々あってスポーツ科の子と戦う機会が出来てね。簡単に言うと……………そこで佳奈がぼろ

勝ちした」

「……はい？」

茅野の言葉に、全員が絶句する。

そんな茅野の言葉が続けるように、カルマは

「まあそんなもんだろうーね。俺も佳奈が卓球で負けたことある相手一人しか知らないし」

「逆に1人いんのかよ!?!」

「つかほんとになんで白波高校に内部進学しなかったんだよ!?!ぶっちゃけここの卓球部って…」

「寺坂、ストップ」

その言葉に、柊は

「そうだよ。だからここの卓球部入らなかつたんじゃない?」

「……気になんのはそこじゃなくて、なんでわざわざ外部受験したのかわかんだけだよ…俺らみたく必須なわけじゃねえだろ?」

「それについては言ったじゃん。白波高校に行くのが息苦しくて嫌だったの」

あー…そうだったな…、と寺坂はボヤク。

「とりあえず柊は卓球はやめろ。相手の戦意削ぐから」

「え? 良いじゃん! それで勝てるんだよ?」

「柊はもはや良くないレベルで強いから却下」

えー…と訴える柊には申し訳ないが、これは柊以外の全員の総意だ。

「じゃあさ、球技大会で卓球することになった人は佳奈と練習する…って言うのは? それくらいならいいと思うけど?」

「……あー…それでいいか?」

そんな茅野の提案に、何人かが同意した。

……その提案が数日後激しく後悔することとなるのは、誰も知らない。

## 第56話 球技大会の時間 2時間目

球技大会当日。

最初の全校集会にて体育委員長が全体のルール説明をする。

「この球技大会は縦割りで行います。他学年の足引っ張らないように」

言い方あ……とみな心の中で呟く。

そんな中、カルマは前に立つ生徒——生徒会執行部と思われる——の人数に違和感を覚えた。

委員長も合わせて12人いるはずの執行部員が足りない。

そんなことを考えながらも全校集会は終わり、球技大会が始まった。

競技会場の一つであるサッカーグラウンドで、ある試合が終わった。

1—B女子 vs 1—C女子である。

どうやらC組が勝ったらしく、応援のメンバーと一緒に担当の生徒（サッカー部員）に結果を言いに行った。

「よかったね！途中ちよつと焦ったけど勝てたし！」

「決勝ゴールって佳奈だったよね？さすが」

「いやいや、あれはメグがいいアシストくれたからだよ。ありがとね、メグ」

「でも聞いたところによるとB組って運動神経いい子多いみたいね。サッカーとバスケにまとめてるみたいだけど」

「へえ、道理で手強かったわけだ」

なるほど……と穆が呟く。

そーいえば、と一呼吸置き、

「次C組ってどこで試合あるっけ？」

「第二体育館で卓球……じゃなかったっけ？」

「あー……佳奈が猛特訓したやつね……」

「そんなに本気でやってないって…ん？」

そんな話をしていると、1人こちらに駆け寄る人がいた。

「前原？どうしたの？」

そう、前原である。

柘の言葉に前原が応える。

「ああ、俺しばらく審判の仕事入ってないから試合見に行こうと思っ  
て。次どこでなんの競技か分かるか？」

「第二体育館で卓球」

「……っていうかなんで把握してないのよ体育委員が…」

「んなもんいちいち把握出来るわけないだろ!？」

「ん？…そうかなあ……？」

そんな話をしながら第二体育館へ到着。

ちようど進行役をしていた生徒会執行部がルール説明をしている  
所だった。

男女混合のダブルスで、球は交互に打つこと

11点で1ゲーム先取の3ゲーム先取したチームの勝ち

その他サーブの決まりや得点の入り方など

「っていうか球技大会って本来のルールより緩くなってるんだね。  
ちよつとビックリ」

「そりやそうだろ。その競技やってなかったら理解しにくいルールと  
かあるし……サッカーだとオフサイドとか」

「うん、野球派の作者さんもオフサイドあまり理解してないらしいし  
ね」

「不破さん？」

そんな話をしていると…

「みんなもう来たんだ」

「あつカルマか」

そう、カルマである。

「そーいやカルマこれに出るんだっけ？」

「そーだね。くじ引きでそうなったから」

説明しよう。

クラス内で競技を決める際、卓球は希望者が少なく、結果くじ引きで決定したのだ。

「そうは言っても昔から柊の卓球に付き合ってきたんだろ？それなりに出来るんじゃない？……？」

「中学入ってから一回もやってなかったからね。多分人並みだとは思うよ。だからさすがに佳奈のあの猛特訓には異常だって思ったかな」  
そしてカルマが言う通り、卓球の選手は柊（時々殺せんせー）からの猛特訓を受けたのだ。

「それではそろそろ始めます。出場する方は準備をしてください」

そんな執行部の言葉に押されて、

「あーそろそろ行っていくる」

「うん、じゃあ頑張って」

そうして試合が始まった。

---

結論から言おう。

その勝負は得点係をしていた彼らの同級生を圧倒し、当然ながらA組相手に完勝した。

……少なくとも次彼らと戦うB組の生徒が戦意喪失になるのに十分なくらいには。

「おつかれ〜」

「で、どうだった」

「そうだね〜佳奈よりずっと弱かった」

「いやそれ比較対象おかしい」

カルマの言葉に茅野がツツコミを入れる。

そんな中柊が

「次の競技なんだっけ？」

それに片岡が

「第一体育館でバスケットじゃなかった？男子の」

「あれっ？俺2試合連続なんだっけ？」

「そーだね頑張れ〜」

「はいはい行ってくるよ」

そう言つてカルマは第一体育館へ向かう。

C組男子バスケット代表は

赤羽 業

磯貝 悠馬

木村 正義

杉野 友人

前原 陽斗

対してB組男子バスケット代表

運動神経がいい生徒で取り揃えた5名のメンバー。

それを取り仕切る2人の男子がいた。

「さっきのA組とのサッカーの試合結構大変だったぞ？お前いないから」

B組委員長、海野 弘樹

「そう言われても……俺サッカー部だし」

B組男子風紀委員、高橋 浩

B組男子を取り仕切るリーダーだ。